御所市文化財調査報告書　第52集

奈良県御所市

玉　手　遺　跡

－京奈和自動車道建設に係る発掘調査報告－

〈第1分冊〉

平成29年（2017）2月
御 所 市 教 育 委 員 会

御所市文化財調査報告書　第52集

奈良県御所（ごせ）市

玉　手　遺　跡

－京奈和自動車道建設に係る発掘調査報告－

〈第1分冊〉

平成29年（2017）2月
御 所 市 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は、京奈和自動車道大和御所道路（御所区間）の建設に先立って、御所市教育委員会が実施した玉手遺跡の発掘調査報告書である。

　なお、御所市教育委員会では、平成 19 年度以来実施している同事業による発掘調査の調査区について、遺跡ごとにＡ～Ｆ地区と呼称し、既刊の概要報告でもその名称を用いている。玉手遺跡は、概要報告ではＤ地区とした遺跡である。

2．今次調査の調査次数は、玉手遺跡の第 4 次調査および第 5 次調査に当たる。第 4 次調査はさらに面的な調査範囲や掘削深さを決定するためのトレンチ調査（第４－１次調査）と、それを受けた面的な発掘調査（第４－２次調査）に区分した。第 5 次調査は、調査対象地によって、新池部分（第５－１次調査）と大月池部分（第５－２次調査）に区分した。

3．現地調査は、濵　慎一・岡田圭司・西村慈子・奥田智子・井ノ上佳美（以上、御所市教育委員会　嘱託職員　当時）が各地区を担当し、木許　守（御所市教育委員会　技術職員）が全体を総括した。

4．各調査区の調査期間および担当者は以下のとおりである。

第４－１次調査　平成 20 年 9 月 16 日から平成 21 年 1 月 28 日（濵 慎一）

第４－２次調査

北１～３区（第１期）：平成 21 年 4 月 6 日から平成 21 年 11 月 27 日（濵 慎一）

北１～３区（第２期）：平成 21 年 11 月 30 日から平成 22 年 3 月 1 日（濵 慎一）

南１・２区：平成 21 年 10 月 5 日から平成 22 年 3 月 1 日（西村慈子）

南３区：平成 22 年 10 月 12 日から平成 23 年 3 月 18 日（岡田圭司）

南４区：平成 23 年 7 月 5 日から平成 23 年 12 月 2 日（奥田智子・西村慈子）

第５－１次調査　平成 25 年 2 月 12 日から平成 25 年 3 月 4 日（奥田智子）

第５－２次調査　平成 25 年 6 月 17 日から平成 25 年 7 月 23 日（井ノ上佳美・奥田智子）

5．本書の執筆は、木許・井ノ上・村島有紀（御所市教育委員会　嘱託職員　当時）・小泉翔太・妹尾裕介（以上、京都大学大学院　当時）・影山美智与・中野裕太・市田英介（以上、地域文化財研究所）が担当した。執筆担当箇所は目次に記した。また、大下明氏（学校法人　雲雀丘学園中学校・高等学校　教諭）・上峯篤史氏（京都大学白眉センター／人文科学研究所　特任助教）には、各遺構・遺物についての考察として玉稿を頂いた。それらは第 7 章に掲載している。

6．別表の作成担当者は別表の冒頭（中扉）に記した。特に、別表 3 に記した石器・石製品の石材の同定には、山村陽子氏（学校法人　雲雀丘学園小学校　教諭）のご教示を得た。

7．第 5 章第 1 節～第 7 節における遺物に関する記述では、以下の文献をそれぞれ参照し、指標とした。

弥生土器：『弥生土器集成』（小林編 1968）

庄内式土器・布留式土器：『矢部遺跡』（寺沢編 1986）

須恵器：『陶邑古窯址群Ⅰ』（田辺 1966）・『須恵器大成』（田辺 1981）

土師器：『古代の土器１　都城の土器集成』（古代の土器研究会編 1992）

中世土器：『概説　中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編 1995）

8．参考文献は本文末尾に一括して掲げたが、第 7 章「考察」に限っては各節末尾に記している。

9．本書の編集は、木許・小泉・村島が担当した。

10．本書に先立って『御所市文化財調査報告書』第 35 集・第 37 集・第 40 集・第 42 集として、概要報告書を刊行しているが、遺構名称について概報刊行後に整理作業を進める過程で変更している。また、それ以外の内容についても本書との齟齬がある場合には、本書をもって訂正とする。

目 次

例言

本文目次

〈第１分冊〉

第１章　位置・環境と既往の調査……(小泉)……1
　第１節　位置と環境……1
　第２節　既往の調査……5
第２章　調査の契機と経過……(木許)……7
　第１節　契機と経過……7
　第２節　調査次数と調査区名称……8
第３章 基本層序……(村島・木許)……10
第４章 第４－１次（トレンチ調査）の成果……(木許・村島)……30
　第１節　北１区……30
　　１．１トレンチ
　　２．２トレンチ
　　３．３トレンチ
　　４．４トレンチ
　　５．５トレンチ
　　６．６トレンチ
　　７．７トレンチ
　第２節　北２区……40
　　１．１トレンチ
　　２．２トレンチ
　第３節　北３区……45
　　１．１トレンチ
　　２．２トレンチ
　第４節　南１区……48
　　１．１トレンチ
　　２．２トレンチ
　第５節　南３区……53
　　１．１トレンチ
　第６節　まとめ……55
第５章　第４－２次調査の成果……57
　第１節　第１遺構面……57
　　１．中世以降の遺構……(木許・村島)…57
　　（１）井戸（南４区）
　　（２）素掘溝
　　２．古墳時代の遺構……(木許・村島)…63
　　（１）掘立柱建物
　　①掘立柱建物１（北１区）
　　②掘立柱建物２（北１区）
　　（２）ピット群（北１区）
　　（３）土坑
　　①土坑１（北１区）
　　②土坑２（北１区）
　　③土坑３（北１区）

④土坑４（北１区）
⑤土坑５（北１区）
（４）溝
①溝１（北１区）
②溝２（北１区）
③溝３（北１区）
④溝４（北１区）
⑤溝５（北１区）
⑥溝６（北１区）
⑦溝７（北１区）
⑧溝８（北１区）
⑨溝９（南１・３・４区）
（５）流路
①流路１（南１～４区）
②流路２（南４区）
３．遺物----------104
（１）土器・土製品----------（中野・影山）----104
（２）石器----------（影山）---152
（３）木製品----------（木許）----153
第２節　第２遺構面----------156
１．遺構----------（木許・村島）---156
（１）水田（北１区）
（２）流路
①流路３（北１区）
２．遺物----------（影山）---160
（１）土器
第３節　第３遺構面----------161
１．遺構----------（木許・村島）---161
（１）水田（北１区・北３区・南１～４区）
（２）溝
①溝10（北１区）
②溝11（北１区）
③溝12（北１区）
④溝13（北２区）
⑤溝14（北２区）
⑥溝15（北３区）
⑦溝16（南１区）
⑧溝17（南３区）
⑨溝18（南３区）
⑩溝19（南３・４区）
⑪溝20（南４区）
（３）流路
①流路３（北１・２区）
（４）土坑
①土坑６（南１区）
②土坑７（南１区）
③土坑８（南１区）
２．遺物----------206
（１）土器----------（市田・影山）---206

（２）石器……（影山）…237
（３）木器・木製品……（木許）…238
第４節　第４遺構面……252
１．遺構……（木許・村島）…252
（１）流路
①流路４（南４区）
２．遺物……（影山）…256
（１）土器
（２）石製品
第５節　第５遺構面……258
１．遺構……（木許・村島）…258
（１）水田（北１～３区・南１・３・４区）
（２）溝
①溝 21（北３区）
②溝 22（南１区）
③溝 23（南４区）
④溝 24（南４区）
（３）流路
①流路４（南４区）
②流路５（南３区）
③流路６（南３区）
（４）ピット（北２区）
２．遺物……276
（１）土器……（影山）…276
（２）石器……（影山）…277
（３）木製品……（木許）…277
第６節　第６遺構面……279
１．遺構……（木許・村島）…279
（１）水田（北２区）
（２）溝
①溝 25（北１区）
②溝 26（北２区）
２．遺物……（影山）…285
（１）土器
第７節　第７遺構面……286
１．遺構……（木許・村島）…286
（１）水田（北１～３区・南１～４区）
（２）溝
①溝 27（北１区）
②溝 28（北２区）
③溝 29（南１区）
（３）流路
①流路４（南４区）
２．遺物……（影山）…307
（１）土器
（２）石器

〈第２分冊〉

第８節　第８遺構面……1
１．遺構面直上の遺物分布状況……(木許)---7
２．遺構……(木許・村島)---10
（１）建物とピット
①建物１（北１区）
②建物２（北２区）
③建物３（北２区）
④建物４・建物５（北３区）
⑤ピット（北２・３区）
（２）焼土
①焼土３（北１区）
②焼土４（北２区）
③焼土５（北２区）
④焼土６（北２区）
⑤焼土７（北２区）
（３）土器棺墓
①土器棺墓１（北２区）
②土器棺墓２（北２区）
③土器棺墓３（北２区）
④土器棺墓４（北２区）
⑤土器棺墓５（北２区）
⑥土器棺墓６（北２区）
⑦土器棺墓７（北２区）
⑧土器棺墓８（北２区）
⑨土器棺墓９（北２区）
⑩土器棺墓 10（北２区）
⑪土器棺墓 11（北３区）
⑫土器棺墓 12（北３区）
⑬土器棺墓 13（北３区）
⑭土器棺墓 14（北３区）
⑮土器棺墓 15（北３区）
⑯土器棺墓 16（北３区）
⑰土器棺墓 17（北３区）
⑱土器棺墓 18（北３区）
⑲土器棺墓 19（北３区）
⑳土器棺墓 20（北３区）
㉑土器棺墓 21（北３区）
（４）土壙墓
①土壙墓１（北２区）
②土壙墓２（北２区）
③土壙墓３（北２区）
④土壙墓４（北２区）
⑤土壙墓５（北３区）
⑥土壙墓６（北３区）
⑦土壙墓７（北３区）
⑧土壙墓８（北３区）
⑨土壙墓９（北３区）
⑩土壙墓 10（北３区）

（５）サヌカイト集積土坑（北２区）
（６）土坑
①土坑９（北１区）
②土坑 10（北２区）
③土坑 11（北２区）
④土坑 12（北２区）
⑤土坑 13（北２区）
⑥土坑 14（北３区）
⑦土坑 15（北３区）
⑧土坑 16（北３区）
⑨土坑 17（北３区）
⑩土坑 18（北３区）
⑪土坑 19（北３区）
⑫土坑 20（北３区）
⑬土坑 21（北３区）
⑭土坑 22（北３区）
⑮土坑 23（北３区）
２．遺物----59
（１）土器----（妹尾）-----59
①遺構面上出土土器
②建物・ピット群出土土器
③焼土出土土器
④土器棺
⑤土壙墓出土土器
⑥土坑出土土器
（２）土製品----（井ノ上）---100
（３）石器・石製品----（影山）---106
（４）木製品----（木許）---115
（５）漆塗り製品　赤漆塗り糸玉----（小泉）---115
第９節　第９遺構面----116
１．遺構----（小泉）---116
（１）遺構面直上の遺物分布状況
（２）埋設土器
①埋設土器１（南１区）
（３）石囲遺構
①石囲遺構（南１区）
（４）土坑
①土坑 24（南１区）
②土坑 25（南１区）
③土坑 26（南１区）
④土坑 27（南１区）
⑤土坑 28（南１区）
⑥土坑 29（南１区）
⑦土坑 30（南１区）
⑧土坑 31（南１区）
⑨土坑 32（南１区）
⑩土坑 33（南１区）
⑪土坑 34（南１区）
⑫土坑 35（南１区）

⑬土坑 36（南１区）
⑭土坑 37（南１区）
⑮土坑 38（南１区）
⑯土坑 39（南１区）
⑰土坑 40（南１区）
⑱土坑 41（南１区）
⑲土坑 42（南１区）
⑳土坑 43（南１区）
㉑土坑 44（南１区）
㉒土坑 45（南１区）
㉓土坑 46（南３区）
㉔土坑 47（南３区）
（５）流路
①流路７（南１区）
２．遺物----------137
（１）土器・土製品----------(小泉)---137
①中期末～後期初頭の土器の分類
②遺構面出土の土器・土製品
③遺構出土の土器・土製品
（２）石器・石製品----------(影山)---184
第 10 節　第 10 遺構面----------(小泉)---194
１．遺構----------194
（１）遺物の分布状況
（２）炭溜まり（南４区）
２．遺物----------194
第６章　第５－１・２次調査（南５区（新池）・南６区（大月池））の成果--(小泉)----------200
第１節　第５－１次調査の成果----------200
１．層序と遺構・遺物の検出状況----------200
２．遺構----------208
（１）足跡
①足跡
（２）埋設土器
①埋設土器２
（３）土坑
①土坑 48
（４）流路
①流路８
３．遺物----------211
（１）土器・土製品
（２）石器
（３）木製品
第２節　第５－２次調査の成果----------215
１．層序と遺構・遺物の検出状況----------215
２．遺構----------222
（１）杭列
①杭列１
②杭列２
３．遺物----------222
（１）土器

第７章　考察
　第１節　第８遺構面　サヌカイト集積土坑の石器……(大下)…224
　第２節　赤色顔料付着遺物の蛍光Ｘ線分析……(上峯)…242
第８章　まとめ……(木許)…244
参考文献……247

別表１　放射性炭素年代測定結果　一覧表
別表２
　１．第４次調査第１～７遺構面出土土器　観察表
　２．第４次調査第８遺構面出土土器　観察表
　３．第４次調査第８遺構面土器棺　細部の観察結果一覧表
　４．第４次調査第９・10遺構面・第５次調査出土土器　観察表
　５．第４次調査第８遺構面出土土製品　観察表
別表３　第４次調査出土石器・石製品　観察表
別表４　第４次調査出土木製品・木片等　一覧表

挿図目次

〈第１分冊〉

図１　御所市の位置……1
図２　周辺の主要遺跡分布図（Ｓ．＝1/50,000）……3
図３　玉手遺跡　今次調査地と既往の調査地　位置図（Ｓ．＝1/5,000）……6
図４　第４次調査地　全体図・上層断面柱状概念図位置（Ｓ．＝1/1,700）……9
図５　第４次調査地　南北方向　上層断面柱状概念図（１）（Ｓ．＝1/25）……12
図６　第４次調査地　南北方向　上層断面柱状概念図（２）（Ｓ．＝1/25）……13
図７　南４区　東壁　上層断面図（１）（Ｓ．＝1/80）……17
図８　南４区　東壁　上層断面図（２）（Ｓ．＝1/80）……18
図９　南１区　西壁　上層断面図（１）（Ｓ．＝1/80）……19
図10　南１区　西壁　上層断面図（２）（Ｓ．＝1/80）……20
図11　南１区　西壁　上層断面図（３）（Ｓ．＝1/80）……21
図12　北３区　東壁　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……22
図13　北２区　東壁　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……23
図14　北１区　東壁　上層断面図（１）（Ｓ．＝1/80）……24
図15　北１区　東壁　上層断面図（２）（Ｓ．＝1/80）……25
図16　下層確認トレンチ２・３・８（北３区）　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……26
図17　下層確認トレンチ５・６（北２区）　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……27
図18　下層確認トレンチ９～12（南１・３区）　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……28
図19　下層確認トレンチ13・14（南４区）　上層断面図（Ｓ．＝1/80）……29
図20　北１区　１トレンチ　平面図（１）・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……31
図21　北１区　１トレンチ　平面図（２）（Ｓ．＝1/170）……32
図22　北１区　２トレンチ　平面図（Ｓ．＝1/170）・上層断面柱状概念図（Ｓ．＝1/25）……33
図23　北１区　３トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……35
図24　北１区　４トレンチ　平面図（Ｓ．＝1/170）・上層断面柱状概念図（Ｓ．＝1/25）……36
図25　北１区　５トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……37
図26　北１区　６トレンチ　平面図（Ｓ．＝1/170）・上層断面柱状概念図（Ｓ．＝1/25）……38
図27　北１区　７トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……39
図28　北２区　１トレンチ　平面図（１）・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……41
図29　北２区　１トレンチ　平面図（２）（Ｓ．＝1/170）……42
図30　北２区　２トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……44
図31　北３区　１トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……46
図32　北３区　２トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……47
図33　南１区　１トレンチ　平面図（１）（Ｓ．＝1/250）・上層断面柱状概念図（Ｓ．＝1/25）……50
図34　南１区　１トレンチ　平面図（２）（Ｓ．＝1/250）……51
図35　南１区　２トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/250）……52
図36　南３区　１トレンチ　平面図・上層断面図（Ｓ．＝1/170）……54

図 37　第 1 遺構面　全体図　（S．＝ 1/1,700）…… 58
図 38　第 1 遺構面　北 1 区の遺構　平面図　（S．＝ 1/500）…… 59
図 39　第 1 遺構面　南 1・2 区の遺構　平面図　（S．＝ 1/500）…… 60
図 40　第 1 遺構面　南 3・4 区の遺構　平面図　（S．＝ 1/500）…… 61
図 41　第 1 遺構面　南 4 区　井戸　平面・立面・断面図　（S．＝ 1/40）…… 62
図 42　第 1 遺構面　北 1 区　平面図（1）（S．＝ 1/200）…… 65
図 43　第 1 遺構面　北 1 区　平面図（2）（S．＝ 1/200）…… 66
図 44　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 1　平面図　（S．＝ 1/100）…… 67
図 45　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 1　ピット（1）（S．＝ 1/40）…… 67
図 46　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 1　ピット（2）（S．＝ 1/40）…… 68
図 47　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 2　平面図　（S．＝ 1/100）…… 69
図 48　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 2　ピット（1）（S．＝ 1/40）…… 70
図 49　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 2　ピット（2）（S．＝ 1/40）…… 71
図 50　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 25 ～ 37　（S．＝ 1/40）…… 74
図 51　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 38 ～ 47　（S．＝ 1/40）…… 75
図 52　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 48 ～ 59　（S．＝ 1/40）…… 76
図 53　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 60 ～ 71　（S．＝ 1/40）…… 77
図 54　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 72 ～ 83　（S．＝ 1/40）…… 78
図 55　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 84 ～ 95　（S．＝ 1/40）…… 79
図 56　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 96 ～ 106　（S．＝ 1/40）…… 80
図 57　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 107 ～ 117　（S．＝ 1/40）…… 81
図 58　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 118 ～ 128　（S．＝ 1/40）…… 82
図 59　第 1 遺構面　北 1 区　土坑 1　平面・断面図　（S．＝ 1/40）…… 83
図 60　第 1 遺構面　北 1 区　土坑 2・3　平面・断面図　（S．＝ 1/40）…… 83
図 61　第 1 遺構面　北 1 区　土坑 4・5　平面・断面図　（S．＝ 1/40）…… 84
図 62　第 1 遺構面　北 1 区　溝 1・3・8　断面図　（S．＝ 1/40）…… 85
図 63　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　遺物分布状況　（S．＝ 1/200）…… 87
図 64　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（1）（S．＝ 1/40）…… 88
図 65　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（2）（S．＝ 1/40）…… 89
図 66　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（3）（S．＝ 1/40）…… 90
図 67　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（4）（S．＝ 1/40）…… 91
図 68　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（5）（S．＝ 1/40）…… 92
図 69　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（6）（S．＝ 1/40）…… 93
図 70　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（7）（S．＝ 1/40）…… 94
図 71　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　立面・断面図（1）（S．＝ 1/40）…… 95
図 72　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　立面・断面図（2）（S．＝ 1/40）…… 96
図 73　第 1 遺構面　南 1 ～ 4 区　溝 9　断面図　（S．＝ 1/60）…… 98
図 74　第 1 遺構面　南 3・4 区　流路 1　断面図　（S．＝ 1/80）…… 100
図 75　第 1 遺構面　南 1 区　流路 1　堰 1　平面・立面図　（S．＝ 1/40）…… 101
図 76　第 1 遺構面　南 1 区　流路 1　堰 2　平面・立面図　（S．＝ 1/40）…… 102
図 77　第 1 遺構面　南 1 区　流路 1　杭列 1　平面・立面図　（S．＝ 1/40）…… 103
図 78　第 1 遺構面　南 4 区　流路 1　杭列 2　（S．＝ 1/40）…… 103
図 79　第 1 遺構面　南 4 区　流路 2　断面図　（S．＝ 1/80）…… 104
図 80　第 1 遺構面　遺構面上・素掘溝・ピット・土坑　出土土器・土製品　（S．＝ 1/3）…… 124
図 81　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（1）（S．＝ 1/3）…… 125
図 82　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（2）（S．＝ 1/3）…… 126
図 83　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（3）（S．＝ 1/3）…… 127
図 84　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（4）（S．＝ 1/3）…… 128
図 85　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（5）（S．＝ 1/3）…… 129
図 86　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（6）（S．＝ 1/3）…… 130
図 87　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（7）・2 区　出土土器（1）（S．＝ 1/3）…… 131
図 88　第 1 遺構面　溝 2　2 区　出土土器（2）（S．＝ 1/3）…… 132
図 89　第 1 遺構面　溝 2　2 区　出土土器（3）（S．＝ 1/3）…… 133
図 90　第 1 遺構面　溝 2　2 区　出土土器（4）（S．＝ 1/3）…… 134
図 91　第 1 遺構面　溝 2　2 区　出土土器（5）（S．＝ 1/3）…… 135
図 92　第 1 遺構面　溝 2　2 区　出土土器（6）（S．＝ 1/3）…… 136
図 93　第 1 遺構面　溝 2　3 区　出土土器（1）（S．＝ 1/3）…… 137
図 94　第 1 遺構面　溝 2　3 区　出土土器（2）（S．＝ 1/3）…… 138
図 95　第 1 遺構面　溝 2　4 区　出土土器（1）（S．＝ 1/3）…… 139

図96　第1遺構面　溝2　4区　出土土器（2）（S.＝1/3）……140
図97　第1遺構面　溝2　4区　出土土器（3）（S.＝1/3）……141
図98　第1遺構面　溝2　5区　出土土器（1）（S.＝1/3）……142
図99　第1遺構面　溝2　5区　出土土器（2）・6区　出土土器（1）（S.＝1/3）……143
図100　第1遺構面　溝2　6区　出土土器（2）（S.＝1/3）……144
図101　第1遺構面　溝2　6区　出土土器（3）・7区　出土土器（1）（S.＝1/3）……145
図102　第1遺構面　溝2　7区　出土土器（2）（S.＝1/3）……146
図103　第1遺構面　溝2　7区　出土土器（3）（S.＝1/3）……147
図104　第1遺構面　溝2　8・9・10・11区　出土土器（S.＝1/3）……148
図105　第1遺構面　溝9　出土土器（S.＝1/3）……149
図106　第1遺構面　流路1　出土土器（1）（S.＝1/3）……149
図107　第1遺構面　流路1　出土土器（2）（S.＝1/3）……150
図108　第1遺構面　流路1　出土土器（3）（S.＝1/3）……151
図109　第1遺構面　流路2　出土土器（S.＝1/3）……152
図110　第1遺構面　溝2　4区　出土石製品（S.＝1/3）……153
図111　第1遺構面　流路1（堰1・堰2）出土木製品（S.＝1/5）……154
図112　第1遺構面　流路1（杭列2）出土木製品（8・9；S.＝1/5，10；S.＝1/8）……155
図113　第2遺構面　全体図（S.＝1/1,700）……157
図114　第2遺構面　北1区の遺構　平面図（S.＝1/500）……158
図115　第2遺構面　北1区　水田遺構　平面図（S.＝1/200）……159
図116　第2遺構面　北1区　水田遺構　畦畔　断面図（S.＝1/40）……159
図117　第2遺構面　北1区　遺構面上　出土土器（S.＝1/3）……160
図118　第3遺構面　全体図（S.＝1/1,700）……162
図119　第3遺構面　北1区の遺構　平面図（S.＝1/500）……163
図120　第3遺構面　北2・3区の遺構　平面図（S.＝1/500）……164
図121　第3遺構面　南1・2区の遺構　平面図（S.＝1/500）……165
図122　第3遺構面　南3・4区の遺構　平面図（S.＝1/500）……166
図123　第3遺構面　北1区　水田遺構　平面図（S.＝1/200）……167
図124　第3遺構面　北1区　水田遺構　畦畔　断面図（S.＝1/40）……168
図125　第3遺構面　北3区　水田遺構　平面図（S.＝1/200）……169
図126　第3遺構面　北3区　水田遺構　畦畔　断面図（S.＝1/40）……169
図127　第3遺構面　南1区　水田遺構　平面図（1）（S.＝1/200）……170
図128　第3遺構面　南1区　水田遺構　平面図（2）（S.＝1/200）……171
図129　第3遺構面　南1区　水田遺構　畦畔　断面図（1）（S.＝1/40）……172
図130　第3遺構面　南1区　水田遺構　畦畔　断面図（2）（S.＝1/40）……173
図131　第3遺構面　南3区　足跡　平面図（S.＝1/200）……173
図132　第3遺構面　北1区　溝10　断面図（S.＝1/40）……175
図133　第3遺構面　北1区　溝11　断面図（S.＝1/40）……176
図134　第3遺構面　北1区　溝11・12　断面図（S.＝1/80）……177
図135　第3遺構面　北1区　溝10・11・12　導水施設・護岸杭　平面図（S.＝1/80）……178
図136　第3遺構面　北1区　溝11　導水施設　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……179
図137　第3遺構面　北1区　導水施設　断面復原図（S.＝1/30）……180
図138　第3遺構面　北1区 溝11　護岸杭列　平面図（S.＝1/40）……180
図139　第3遺構面　北1区　溝12　断面図（S.＝1/40）……181
図140　第3遺構面　北1区　溝12　堰　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……182
図141　第3遺構面　北2・3区　溝13・14・15　断面図（S.＝1/40）……184
図142　第3遺構面　南1区　溝16　堰1・杭列　平面・立面図（S.＝1/40）……186
図143　第3遺構面　南1区　溝16　堰2　平面・立面図（S.＝1/40）……187
図144　第3遺構面　南3・4区　溝17・18・19・20　断面図（S.＝1/40）……188
図145　第3遺構面　北1区　流路3　断面図（1）（S.＝1/60）……189
図146　第3遺構面　北1区　流路3　断面図（2）（S.＝1/60）……190
図147　第3遺構面　北1区　流路3　断面図（3）（S.＝1/60）……191
図148　第3遺構面　北2区　流路3　断面図（4）（S.＝1/40）……191
図149　第3遺構面　北1区　流路3　木樋　平面・立面図（S.＝1/20）……193
図150　第3遺構面　北1区　流路3　堰1・2　平面図（S.＝1/100）……195
図151　第3遺構面　北1区　流路3　堰1　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……195
図152　第3遺構面　北1区　流路3　堰2　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……197
図153　第3遺構面　北1区　流路3　堰2　断面図（S.＝1/40）……198
図154　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　全体図（S.＝1/80）……198

図155　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　断面図（S.＝1/40）……199
図156　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　北杭列　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……200
図157　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　南杭列（1）　平面・立面図（S.＝1/40）……201
図158　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　南杭列（2）　平面・断面・立面図（S.＝1/40）……202
図159　第3遺構面　北2区　流路3　堰4　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……203
図160　第3遺構面　北2区　流路3　堰4　西壁　上層断面図（S.＝1/80）……203
図161　第3遺構面　北1区　流路3　護岸杭列　平面・立面・断面図（S.＝1/40）……204
図162　第3遺構面　南1区　土坑6・7・8　平面・断面図（S.＝1/40）……205
図163　第3遺構面　遺構面上・溝16　出土土器（S.＝1/3）……217
図164　第3遺構面　流路3　出土土器（1）（S.＝1/3）……218
図165　第3遺構面　流路3　出土土器（2）（S.＝1/3）……219
図166　第3遺構面　流路3　出土土器（3）（S.＝1/3）……220
図167　第3遺構面　流路3　出土土器（4）（S.＝1/3）……221
図168　第3遺構面　流路3　出土土器（5）（S.＝1/3）……222
図169　第3遺構面　流路3　出土土器（6）（S.＝1/3）……223
図170　第3遺構面　流路3　出土土器（7）（S.＝1/3）……224
図171　第3遺構面　流路3　出土土器（8）（S.＝1/3）……225
図172　第3遺構面　流路3　出土土器（9）（S.＝1/3）……226
図173　第3遺構面　流路3　出土土器（10）（S.＝1/3）……227
図174　第3遺構面　流路3　出土土器（11）（S.＝1/3）……228
図175　第3遺構面　流路3　出土土器（12）（S.＝1/3）……229
図176　第3遺構面　流路3　出土土器（13）（S.＝1/3）……230
図177　第3遺構面　流路3　出土土器（14）（S.＝1/3）……231
図178　第3遺構面　流路3　出土土器（15）（S.＝1/3）……232
図179　第3遺構面　流路3　出土土器（16）（S.＝1/3）……233
図180　第3遺構面　流路3　出土土器（17）（S.＝1/3）……234
図181　第3遺構面　流路3　出土土器（18）（S.＝1/3）……235
図182　第3遺構面　流路3　出土土器（19）（S.＝1/3）……236
図183　第3遺構面　北2区遺構面上・溝10・流路3　出土石製品（S.＝2/3）……237
図184　第3遺構面　溝11（導水施設（1））　出土木製品（S.＝1/8）……239
図185　第3遺構面　溝11（導水施設（2））　出土木製品（S.＝1/5）……240
図186　第3遺構面　溝11（導水施設（3）・護岸杭）　出土木製品（S.＝1/5）……241
図187　第3遺構面　溝12　出土木製品（S.＝1/5）……242
図188　第3遺構面　溝16（堰1・2）　出土木製品（S.＝1/5）……243
図189　第3遺構面　流路3（木樋（1））　出土木製品（S.＝1/6）……244
図190　第3遺構面　流路3（木樋（2））　出土木製品（S.＝1/5）……245
図191　第3遺構面　流路3（堰2・護岸杭列）　出土木製品（S.＝1/5）……246
図192　第3遺構面　流路3（堰3・4）　出土木製品（S.＝1/5）……247
図193　第3遺構面　流路3　出土木製品（1）（S.＝1/5）……248
図194　第3遺構面　流路3　出土木製品（2）（S.＝1/5）……249
図195　第3遺構面　流路3　出土木製品（3）（S.＝1/5）……250
図196　第4遺構面　全体図（S.＝1/1,700）……253
図197　第4遺構面　南3・4区の遺構　平面図（S.＝1/500）……254
図198　第4遺構面　南4区　流路4　断面図（S.＝1/60）……255
図199　第4遺構面　遺構面上・流路4下層　出土土器（S.＝1/3）……257
図200　第4遺構面　遺構面上　出土石器（S.＝1/3）……257
図201　第5遺構面　全体図（S.＝1/1,700）……259
図202　第5遺構面　北1区の遺構　平面図（S.＝1/500）……260
図203　第5遺構面　北2・3区の遺構　平面図（S.＝1/500）……261
図204　第5遺構面　南1・2区の遺構　平面図（S.＝1/500）……262
図205　第5遺構面　南3・4区の遺構　平面図（S.＝1/500）……263
図206　第5遺構面　北2区　水田遺構　足跡　平面図（S.＝1/200）……264
図207　第5遺構面　北2区　水田遺構　畦畔　断面図（S.＝1/40）……265
図208　第5遺構面　北3区　水田遺構　平面図（1）（S.＝1/200）……266
図209　第5遺構面　北3区　水田遺構　平面図（2）（S.＝1/200）……267
図210　第5遺構面　北3区　水田遺構　畦畔　断面図（1）（S.＝1/40）……268
図211　第5遺構面　北3区　水田遺構　畦畔　断面図（2）（S.＝1/40）……269
図212　第5遺構面　南1区　水田遺構　平面図（S.＝1/200）……270
図213　第5遺構面　南1区　水田遺構　畦畔　断面図（S.＝1/40）……271

図214　第5遺構面　南4区　水田遺構　平面図（S．＝1/200）……272
図215　第5遺構面　南4区　水田遺構　畦畔　断面図（S．＝1/40）……273
図216　第5遺構面　北3区・南1・4区　溝21・22・23・24　断面図（S．＝1/40）……273
図217　第5遺構面　南3区　流路5　平面・立面・断面図（S．＝1/50）……275
図218　第5遺構面　南3区　流路6　断面図（S．＝1/40）……276
図219　第5遺構面　北2区　ピット201・202・203・204　平面・断面図（S．＝1/40）……277
図220　第5遺構面　溝22　出土土器（S．＝1/3）……277
図221　第5遺構面　遺構面上　出土石製品（S．＝2/3）……278
図222　第5遺構面　流路5（a－a'・b－b'）出土木製品（S．＝1/5）……278
図223　第6遺構面　全体図（S．＝1/1700）……280
図224　第6遺構面　北1区の遺構　平面図（S．＝1/500）……281
図225　第6遺構面　北2・3区の遺構　平面図（S．＝1/500）……282
図226　第6遺構面　北2区　水田遺構　平面図（S．＝1/200）……283
図227　第6遺構面　北2区　水田遺構　畦畔　断面図（S．＝1/40）……283
図228　第6遺構面　北1区　溝25　断面図（S．＝1/40）……284
図229　第6遺構面　北2区　溝26　断面図（S．＝1/40）……285
図230　第6遺構面　遺構面上　出土土器（S．＝1/3）……285
図231　第7遺構面　全体図（S．＝1/1,700）……287
図232　第7遺構面　北1区の遺構　平面図（S．＝1/500）……288
図233　第7遺構面　北2・3区の遺構　平面図（S．＝1/500）……289
図234　第7遺構面　南1・2区の遺構　平面図（S．＝1/500）……290
図235　第7遺構面　南3・4区の遺構　平面図（S．＝1/500）……291
図236　第7遺構面　北1区　水田遺構　平面図（S．＝1/200）……292
図237　第7遺構面　北1区　水田遺構　畦畔　断面図（1）（S．＝1/40）……294
図238　第7遺構面　北1区　水田遺構　畦畔　断面図（2）（S．＝1/40）……295
図239　第7遺構面　北2区　水田遺構　平面図（S．＝1/200）……296
図240　第7遺構面　北2区　水田遺構　畦畔　断面図（S．＝1/40）……297
図241　第7遺構面　南1区　水田遺構　平面図（1）（S．＝1/200）……298
図242　第7遺構面　南1区　水田遺構　平面図（2）（S．＝1/200）……299
図243　第7遺構面　南1区　水田遺構　畦畔　断面図（1）（S．＝1/40）……300
図244　第7遺構面　南1区　水田遺構　畦畔　断面図（2）（S．＝1/40）……301
図245　第7遺構面　南3区　水田遺構・足跡　平面図（S．＝1/200）……301
図246　第7遺構面　南4区　水田遺構　平面図（1）（S．＝1/200）……302
図247　第7遺構面　南4区　水田遺構　平面図（2）（S．＝1/200）……303
図248　第7遺構面　南4区　水田遺構　畦畔　断面図（1）（S．＝1/40）……303
図249　第7遺構面　南4区　水田遺構　畦畔　断面図（2）（S．＝1/40）……304
図250　第7遺構面　北1区　溝27　平面・断面図（S．＝1/40）……305
図251　第7遺構面　北2区　溝28　断面図（S．＝1/40）……306
図252　第7遺構面　南1区　溝29　断面図（S．＝1/20）……306
図253　第7遺構面　遺構面上・溝29　出土土器（S．＝1/3）……308
図254　第7遺構面　遺構面上　出土石製品（1・2・3・4・5：S．＝2/3，6・7・8：S．＝1/3）……309

〈第2分冊〉

図255　第8遺構面　全体図（S．＝1/1,700）……2
図256　第8遺構面　北1区の遺構　平面図（S．＝1/500）……3
図257　第8遺構面　北2・3区の遺構　平面図（S．＝1/500）……4
図258　第8遺構面　北2区　平面図（S．＝1/200）……5
図259　第8遺構面　北3区　平面図（S．＝1/200）……6
図260　第8遺構面　北2区　遺物分布状況（S．＝1/60）……8
図261　第8遺構面　北2区　(333-1) 出土状況（S．＝1/5）……8
図262　第8遺構面　北1区　赤漆塗糸玉出土状況　平面図（S．＝1/2）……9
図263　第8遺構面　北1区　建物1　平面図（S．＝1/80）……11
図264　第8遺構面　北1区　建物1　ピット（1）（S．＝1/40）……11
図265　第8遺構面　北1区　建物1　ピット（2）（S．＝1/40）……12
図266　第8遺構面　北2区　建物2　平面図（S．＝1/80）……13
図267　第8遺構面　北2区　建物2　ピット（S．＝1/40）……14
図268　第8遺構面　北2区　焼土1　平面・断面図（S．＝1/20）……15
図269　第8遺構面　北2区　建物3　平面図（S．＝1/80）……16
図270　第8遺構面　北2区　建物3　ピット（S．＝1/40）……16

図 271　第８遺構面　北２区　焼土２　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……17
図 272　第８遺構面　北３区　建物４・５　平面図　（Ｓ．＝ 1/80）……17
図 273　第８遺構面　北３区　建物４　ピット　（Ｓ．＝ 1/40）……18
図 274　第８遺構面　北３区　建物５　ピット　（Ｓ．＝ 1/40）……19
図 275　第８遺構面　北２・３区　ピット 425 ～ 429、448 ～ 454　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/40）……20
図 276　第８遺構面　北１区　焼土３　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……22
図 277　第８遺構面　北２区　焼土４・５・７　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……24
図 278　第８遺構面　北２区　焼土６　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……25
図 279　第８遺構面　北２区　土器棺墓１・２・３　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……27
図 280　第８遺構面　北２区　土器棺墓４・５・６・７　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……29
図 281　第８遺構面　北２区　土器棺墓８・９・10　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……32
図 282　第８遺構面　北３区　土器棺墓 11・12・13　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……34
図 283　第８遺構面　北３区　土器棺墓 14・15・16　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……37
図 284　第８遺構面　北３区　土器棺墓 17・18・19・20・21　平面・立面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……39
図 285　第８遺構面　北２区　土壙墓１　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……42
図 286　第８遺構面　北２・３区　土壙墓２・３・４　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……44
図 287　第８遺構面　北３区　土壙墓５・６・７　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……45
図 288　第８遺構面　北３区　土壙墓８・９・10　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……47
図 289　第８遺構面　北２区　サヌカイト集積土坑　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/5）……48
図 290　第８遺構面　北１・２区　土坑９・10・11・12　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……50
図 291　第８遺構面　北２・３区　土坑 13・14・15　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……52
図 292　第８遺構面　北３区　土坑 16・17・18　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……54
図 293　第８遺構面　北３区　土坑 19・20　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……56
図 294　第８遺構面　北３区　土坑 21・22・23　平面・断面図　（Ｓ．＝ 1/20）……58
図 295　第８遺構面　遺構面上　出土土器（１）（Ｓ．＝ 1/3）……60
図 296　第８遺構面　遺構面上　出土土器（２）（Ｓ．＝ 1/3）……61
図 297　第８遺構面　遺構面上　出土土器（３）（Ｓ．＝ 1/3）……62
図 298　第８遺構面　遺構面上　出土土器（４）（Ｓ．＝ 1/3）……63
図 299　第８遺構面　遺構面上　出土土器（５）（Ｓ．＝ 1/3）……64
図 300　第８遺構面　遺構面上　出土土器（６）（Ｓ．＝ 1/3）……65
図 301　第８遺構面　遺構面上　出土土器（７）（Ｓ．＝ 1/3）……66
図 302　第８遺構面　遺構面上　出土土器（８）（Ｓ．＝ 1/3）……67
図 303　第８遺構面　遺構面上　出土土器（９）（Ｓ．＝ 1/3）……68
図 304　第８遺構面　遺構面上　出土土器（10）（Ｓ．＝ 1/3）……69
図 305　第８遺構面　遺構面上　出土土器（11）（Ｓ．＝ 1/3）……70
図 306　第８遺構面　遺構面上　出土土器（12）（Ｓ．＝ 1/3）……71
図 307　第８遺構面　建物・焼土　出土土器　（Ｓ．＝ 1/3）……73
図 308　第８遺構面　土器棺１　（Ｓ．＝ 1/3）……74
図 309　第８遺構面　土器棺２　（Ｓ．＝ 1/3）……75
図 310　第８遺構面　土器棺３　（Ｓ．＝ 1/3）……76
図 311　第８遺構面　土器棺４　（Ｓ．＝ 1/3）……77
図 312　第８遺構面　土器棺５－１　（Ｓ．＝ 1/3）……78
図 313　第８遺構面　土器棺５－２　（Ｓ．＝ 1/3）……79
図 314　第８遺構面　土器棺６　（Ｓ．＝ 1/3）……80
図 315　第８遺構面　土器棺７－１　（Ｓ．＝ 1/3）……81
図 316　第８遺構面　土器棺７－２　（Ｓ．＝ 1/3）……82
図 317　第８遺構面　土器棺８　（Ｓ．＝ 1/3）……83
図 318　第８遺構面　土器棺９　（Ｓ．＝ 1/3）……84
図 319　第８遺構面　土器棺 10　（Ｓ．＝ 1/3）……85
図 320　第８遺構面　土器棺 11　（Ｓ．＝ 1/3）……87
図 321　第８遺構面　土器棺 12　（Ｓ．＝ 1/3）……88
図 322　第８遺構面　土器棺 13　（Ｓ．＝ 1/3）……89
図 323　第８遺構面　土器棺 14　（Ｓ．＝ 1/3）……90
図 324　第８遺構面　土器棺 15　（Ｓ．＝ 1/3）……91
図 325　第８遺構面　土器棺 16　（Ｓ．＝ 1/3）……92
図 326　第８遺構面　土器棺 17・18・19　（Ｓ．＝ 1/3）……93
図 327　第８遺構面　土器棺 20　（Ｓ．＝ 1/3）……94
図 328　第８遺構面　土器棺 21　（Ｓ．＝ 1/3）……95
図 329　第８遺構面　土壙墓１・２・10　出土土器（Ｓ．＝ 1/3）……96

図330　第8遺構面　土坑9　出土土器　（S．＝1/3）……97
図331　第8遺構面　土坑11・12・15・18　出土土器　（S．＝1/3）……98
図332　第8遺構面　土坑19・20　出土土器　（S．＝1/3）……99
図333　第8遺構面　遺構面上　出土土製品（1）　（S．＝1/3）……102
図334　第8遺構面　遺構面上　出土土製品（2）・土器棺墓18　出土土製品　（S．＝1/3・1/1）……103
図335　第8遺構面　遺構面上　出土石器（1）　（1～6；S．＝2/3，7～9；S．＝1/3）……109
図336　第8遺構面　遺構面上　出土石器（2）　（S．＝1/3）……110
図337　第8遺構面　遺構面上　出土石器（3）　（S．＝1/3）……111
図338　第8遺構面　遺構面上　出土石器（4）　（S．＝1/3）……112
図339　第8遺構面　遺構面上　出土石器（5）　（S．＝1/3）……113
図340　第8遺構面　焼土6・土器棺墓21・土坑9・土坑23　出土石器（1・2；S．＝2/3，3～5；S．＝1/3）…114
図341　第8遺構面　土坑16　出土木製品　（S．＝1/5）……115
図342　第9遺構面　全体図　（S．＝1/1,700）……117
図343　第9遺構面　北2・3区の遺構　平面図　（S．＝1/500）……118
図344　第9遺構面　南1・2区の遺構　平面図　（S．＝1/500）……119
図345　第9遺構面　南3・4区の遺構　平面図　（S．＝1/500）……120
図346　第9遺構面　南1区　遺物分布状況（1）　（S．＝1/150）……121
図347　第9遺構面　南1区　遺物分布状況（2）　（S．＝1/80）……122
図348　第9遺構面　南3区　遺物分布状況　（S．＝1/100）……123
図349　第9遺構面　南4区　遺物分布状況　（S．＝1/100）……124
図350　第9遺構面　南1区　埋設土器1　平面・立面・断面図　（S．＝1/20）……125
図351　第9遺構面　南1区　石囲遺構　平面・立面・断面図　（S．＝1/10）……126
図352　第9遺構面　南1区　土坑24・25・26・27　平面・断面図　（S．＝1/40）……129
図353　第9遺構面　南1区　土坑28・29・30・31・32　平面・断面図　（S．＝1/40）……130
図354　第9遺構面　南1区　土坑33　平面・断面図　（S．＝1/50）……131
図355　第9遺構面　南1区　土坑33　北端部　礫出土状況　平面・立面図　（S．＝1/20）……132
図356　第9遺構面　南1区　土坑34・35・36・37・38・39・41　平面・断面図　（S．＝1/40）……133
図357　第9遺構面　南1区　土坑40・42・43・44・45　平面・断面図　（S．＝1/40）……135
図358　第9遺構面　南3区　土坑46　平面・断面図　（S．＝1/80）……136
図359　第9遺構面　南3区　土坑47　平面・断面図　（S．＝1/20）……136
図360　第9遺構面　南1区　流路7　断面図　（S．＝1/50）……137
図361　第9遺構面　遺構面上　出土土器（1）　（S．＝1/3）……140
図362　第9遺構面　遺構面上　出土土器（2）　（S．＝1/3）……141
図363　第9遺構面　遺構面上　出土土器（3）　（S．＝1/3）……142
図364　第9遺構面　遺構面上　出土土器（4）　（S．＝1/3）……144
図365　第9遺構面　遺構面上　出土土器（5）　（S．＝1/3）……145
図366　第9遺構面　遺構面上　出土土器（6）　（S．＝1/3）……146
図367　第9遺構面　遺構面上　出土土器（7）　（S．＝1/3）……147
図368　第9遺構面　遺構面上　出土土器（8）　（S．＝1/3）……148
図369　第9遺構面　遺構面上　出土土器（9）　（S．＝1/3）……149
図370　第9遺構面　遺構面上　出土土器（10）　（S．＝1/3）……151
図371　第9遺構面　遺構面上　出土土器（11）　（S．＝1/3）……152
図372　第9遺構面　遺構面上　出土土器（12）　（S．＝1/3）……153
図373　第9遺構面　遺構面上　出土土器（13）　（S．＝1/3）……154
図374　第9遺構面　遺構面上　出土土器（14）　（S．＝1/3）……155
図375　第9遺構面　遺構面上　出土土器（15）　（S．＝1/3）……156
図376　第9遺構面　遺構面上　出土土器（16）　（S．＝1/3）……157
図377　第9遺構面　遺構面上　出土土器（17）　（S．＝1/3）……158
図378　第9遺構面　遺構面上　出土土器（18）　（S．＝1/3）……159
図379　第9遺構面　遺構面上　出土土器（19）　（S．＝1/3）……161
図380　第9遺構面　遺構面上　出土土器（20）　（S．＝1/3）……162
図381　第9遺構面　遺構面上　出土土器（21）　（S．＝1/3）……163
図382　第9遺構面　遺構面上　出土土器（22）　（S．＝1/3）……165
図383　第9遺構面　遺構面上　出土土器（23）　（S．＝1/3）……167
図384　第9遺構面　遺構面上　出土土器（24）　（S．＝1/3）……168
図385　第9遺構面　遺構面上　出土土器（25）　（S．＝1/3）……169
図386　第9遺構面　遺構面上　出土土器（26）　（S．＝1/3）・土製品　（S．＝1/2）……170
図387　第9遺構面　埋設土器1　（S．＝1/3）……171
図388　第9遺構面　石囲遺構　出土土器　（S．＝1/3）……173

図 389　第９遺構面　土坑 30　出土土器　（S．= 1/3）……173
図 390　第９遺構面　土坑 32・34・35・36・38・40　出土土器　（S．= 1/3）……174
図 391　第９遺構面　土坑 33　出土土器（１）（S．= 1/3）……175
図 392　第９遺構面　土坑 33　出土土器（２）（S．= 1/3）……176
図 393　第９遺構面　土坑 33　出土土器（３）（S．= 1/3）……177
図 394　第９遺構面　土坑 33　出土土器（４）（S．= 1/3）……178
図 395　第９遺構面　土坑 39　出土土器　（S．= 1/3）……181
図 396　第９遺構面　土坑 41・42・43　出土土器　（S．= 1/3）……183
図 397　第９遺構面　土坑 45・47　出土土器・土製品　（S．= 1/3）……184
図 398　第９遺構面　遺構面上　出土石器（１）（S．= 2/3）……187
図 399　第９遺構面　遺構面上　出土石器（２）（S．= 1/3）……188
図 400　第９遺構面　遺構面上　出土石器（３）（S．= 1/3）……189
図 401　第９遺構面　遺構面上　出土石器（４）（S．= 1/3）……190
図 402　第９遺構面　遺構面上　出土石器（５）（S．= 1/3）……191
図 403　第９遺構面　土坑 28・41・42・45　出土石器　（１～４；S．= 1/3，５；S．= 1/6）……192
図 404　第９遺構面　土坑 33　出土石器　（１；S．= 1/8，２・３；S．= 1/3）……193
図 405　第 10 遺構面　全体図　（S．= 1/1,700）……195
図 406　第 10 遺構面　南３・４区の遺構　平面図　（S．= 1/500）……196
図 407　第 10 遺構面　南４区　遺物分布状況　（S．= 1/100）……197
図 408　第 10 遺構面　南４区　土器集中部　（S．= 1/10）……198
図 409　第 10 遺構面　南４区　炭溜まり　（S．= 1/20）……198
図 410　第 10 遺構面　遺構面上　出土土器（１）（S．= 1/3）……199
図 411　第 10 遺構面　遺構面上　出土土器（２）（S．= 1/3）……198
図 412　第５次調査　南５・６区　全体図　（S．= 1/1,500）……201
図 413　南５区　１トレンチ　３層上面・４層上面　（S．= 1/150）……202
図 414　南５区　１トレンチ　北西壁・北東壁　土層断面図　（S．= 1/80）……203
図 415　南５区　１トレンチ　南西壁・南東壁　土層断面図　（S．= 1/80）……204
図 416　南５区　２トレンチ　平面図　（S．= 1/150）……205
図 417　南５区　２トレンチ　北西壁・北東壁　土層断面図　（S．= 1/80）……206
図 418　南５区　２トレンチ　南西壁・南東壁　（S．= 1/80）……207
図 419　南５区　１トレンチ　埋設土器２　平面・立面・断面図　（S．= 1/10）……209
図 420　南５区　２トレンチ　土坑 48　平面・断面図　（S．= 1/20）……210
図 421　南５区　１トレンチ　流路８　断面図　（S．= 1/40）……210
図 422　南５区　埋設土器２　（S．= 1/3）……211
図 423　南５区　出土土器　（S．= 1/3）・出土土製品　（S．= 1/2）……212
図 424　南５区　２トレンチ　出土石器　（S．= 1/3）……214
図 425　南５区　１トレンチ　出土木製品（S．= 1／５）……425
図 426　南６区　１トレンチ　平面図　（S．= 1/150）……216
図 427　南６区　１トレンチ　北西壁・北東壁　土層断面図　（S．= 1/80）……217
図 428　南６区　２トレンチ　平面図　（S．= 1/150）……218
図 429　南６区　２トレンチ　北西壁・北東壁　土層断面図　（S．= 1/80）……219
図 430　南６区　１トレンチ　杭列１　平面・断面図　（S．= 1/10）……220
図 431　南６区　１トレンチ　杭列２　平面・断面図　（S．= 1/10）……221
図 432　南６区　出土土器　（S．= 1/3）……223
図 433　サヌカイト集積土坑　遺物出土状態と接合関係　（S．= 1/8）……234
図 434　サヌカイト集積土坑　接合資料①　（S．= 2/3）……235
図 435　サヌカイト集積土坑　接合資料②　（S．= 2/3）……236
図 436　サヌカイト集積土坑　接合資料③　（S．= 2/3）……237
図 437　サヌカイト集積土坑　接合資料④・⑤　（S．= 2/3）……238
図 438　サヌカイト集積土坑　接合資料⑥　（S．= 2/3）……239
図 439　サヌカイト集積土坑　接合資料⑦　（S．= 2/3）……240
図 440　サヌカイト集積土坑　接合資料⑧　（S．= 2/3）……241
図 441　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果……243

図版目次〈第３分冊〉

原色図版１　第７遺構面　南３区　水田区画
　　第７遺構面に残された足跡
原色図版２　第８遺構面　北２区　全景　南西から
　　第８遺構面　北２区　土偶（333-1）出土状況
原色図版３　第８遺構面　北１区　漆塗り糸玉検出状況
　　第８遺構面　北１区　漆塗り糸玉保存処理後

図版１　北１区１トレンチ　７層上面　流路３　北から
　　北１区１トレンチ　７層上面　流路３　堰１　北西から
図版２　北１区２トレンチ　５層上面　南から
　　北１区２トレンチ　５層上面　溝２　遺物出土状況　西から
図版３　北１区３トレンチ　４層上面　北から
　　北１区３トレンチ　７層上面　流路３　埋土上面　遺物出土状況
図版４　北１区４トレンチ　10層上面　溝25　西から
　　同　10層上面　北から
　　同　10層上面　溝25　杭検出状況
　　同　４層上面　北から
　　同　７層上面　北から
図版５　北１区５トレンチ　７層上面　流路３　堰３　南から
　　北１区５トレンチ　７層上面　流路３　堰３　北杭列　西から
図版６　北１区６トレンチ　４－１層上面　北から
　　北１区７トレンチ　４層上面　西から
図版７　北２区１トレンチ　７層上面　流路３　堰４　北から
　　北２区１トレンチ　12層上面　東から
図版８　北２区２トレンチ　４層上面　北から
　　北２区２トレンチ　12層上面　南から
図版９　北３区１トレンチ　11層上面　南から
　　北３区１トレンチ　11層上面　畦畔・足跡　西から
図版10　北３区２トレンチ　４層上面　北から
　　北３区２トレンチ　９層上面　南から
図版11　南１区１トレンチ北端部　５層上面　杭検出状況　西から
　　南１区１トレンチ北端部　７層上面　南から
図版12　南１区１トレンチ南端部　11層上面　北から
　　南１区１トレンチ南端部　11層上面　足跡　西から
図版13　南１区２トレンチ　７層上面　南から
　　南１区２トレンチ拡張部　７層上面　大畦畔　東から
図版14　南３区１トレンチ　４層上面　東から
　　南３区１トレンチ　７層上面　足跡　北から
図版15　第１遺構面　北１区　北東から
　　第１遺構面　北１区　南西から
図版16　第１遺構面　南３区東半　南西から
　　第１遺構面　南３区西半　南西から
図版17　第１遺構面　南４区　北から
　　第１遺構面　南４区　井戸　南から
図版18　第１遺構面　北１区　掘立柱建物１　北西から
　　第１遺構面　北１区　掘立柱建物２　西から
図版19　第１遺構面　北１区　土坑３　南から
　　同　土坑３　土器検出状況
　　同　ピット29　柱材出土状況　南から
　　同　ピット63　南から
　　同　ピット119　南から
図版20　第１遺構面　北１区　溝１・２　北東から
　　第１遺構面　北１区　溝２　２区　東から
図版21　第１遺構面　北１区　溝２　６区　南西から
　　第１遺構面　北１区　溝２　６区　南から
図版22　第１遺構面　北１区　溝２　遺物出土状況（１）
　　同　溝２　遺物出土状況（２）
　　同　溝２　遺物出土状況（３）
　　同　溝２　遺物出土状況（４）
　　同　溝２　遺物出土状況（５）
図版23　第１遺構面　南４区　溝９　北東から
　　第１遺構面　南４区　流路１　西から
図版24　第１遺構面　南３区遺構面直上、素掘溝、ピット、土坑出土土器・土製品（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版25　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版26　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
図版27　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（４）（S. ≒1/3）
図版28　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（５）（S. ≒1/3）
図版29　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（６）（S. ≒1/3）
図版30　第１遺構面　溝２　１区　出土土器（７）（S. ≒1/3）
図版31　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版32　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版33　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
図版34　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（４）（S. ≒1/3）
図版35　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（５）（S. ≒1/3）
図版36　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（６）（S. ≒1/3）
図版37　第１遺構面　溝２　２区　出土土器（７）（S. ≒1/3）
図版38　第１遺構面　溝２　３区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版39　第１遺構面　溝２　３区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版40　第１遺構面　溝２　３区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　４区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版41　第１遺構面　溝２　４区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版42　第１遺構面　溝２　４区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
図版43　第１遺構面　溝２　４区　出土土器（４）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　５区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版44　第１遺構面　溝２　５区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版45　第１遺構面　溝２　５区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　６区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版46　第１遺構面　溝２　６区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版47　第１遺構面　溝２　６区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　７区　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版48　第１遺構面　溝２　７区　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版49　第１遺構面　溝２　７区　出土土器（３）（S. ≒1/3）
図版50　第１遺構面　溝２　７区　出土土器（４）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　８区　出土土器（S. ≒1/3）
図版51　第１遺構面　溝２　９区　出土土器（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　10区　出土土器（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　溝２　11区　出土土器（S. ≒1/3）
図版52　第１遺構面　溝９　出土土器（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　流路１　出土土器（１）（S. ≒1/3）
図版53　第１遺構面　流路１　出土土器（２）（S. ≒1/3）
図版54　第１遺構面　流路１　出土土器（３）（S. ≒1/3）
図版55　第１遺構面　流路１　出土土器（４）（S. ≒1/3）
　　第１遺構面　流路２　出土土器・石器（S. ≒1/3）
図版56　第１遺構面　流路１　出土木製品（S. ≒1/5但し112-10はS. ≒1/8）
図版57　第２遺構面　北１区　水田遺構　北から
　　同　畦畔断面c-c′　南東から
　　同　畦畔断面h-h′　東から

第2遺構面　北1区　遺構面上　出土土器（S．≒1/3）
図版58　第3遺構面　北1区　全景　南西から
第3遺構面　北3区　全景　西から
図版59　第3遺構面　南3区西半　全景　南西から
第3遺構面　南3区東半　全景　北から
図版60　第3遺構面　南4区南半　全景　南西から
第3遺構面　南4区北半　全景　南から
図版61　第3遺構面　北1区　水田遺構　南西から
第3遺構面　北1区　水田遺構　北東から
図版62　第3遺構面　北1区　水田遺構（1）　南から
同　水田遺構（2）　南から
同　畦畔断面c-c′北西から
同　畦畔断面d-d′北東から
同　畦畔断面f-f′北東から
図版63　第3遺構面　北3区　水田遺構　西から
第3遺構面　南1区西半　水田遺構　北から
図版64　第3遺構面　南1区　畦畔断面a-a′南から
同　畦畔断面b-b′南東から
同　畦畔断面e-e′南西から
同　畦畔断面i-i′南西から
同　畦畔断面l-l′南から
同　畦畔断面o-o′南から
同　畦畔断面r-r′南西から
同　東端付近　畦畔断面　東から
図版65　第3遺構面東半　南3区　水田遺構　南西から
第3遺構面北半　南4区　足跡遺構　北東から
図版66　第3遺構面　北3区　溝10・11　南西から
第3遺構面　北1区　溝11・12　導水施設周辺　南東から
図版67　第3遺構面　北1区　溝11　導水施設　北から
同　導水施設　南から
同　導水施設　導水管取上後　南から
同　導水管取り上げ状況
同　導水施設　西から
図版68　第3遺構面　北1区　溝12　堰　東から
第3遺構面　北1区　溝12　堰　南から
図版69　第3遺構面　北3区　溝15　東から
第3遺構面　北3区　溝15　L－L′断面　西から
図版70　第3遺構面　南3区　溝19　南から
第3遺構面　南3区　溝20　南西から
図版71　第3遺構面　北1区　流路3　木樋　西から
第3遺構面　北1区　流路3　木樋　南から
図版72　第3遺構面　北1区　流路3　堰2（1）　東から
同　流路3　堰2（2）　東から
図版73　第3遺構面　北1区　流路3　堰2　南から
同　流路3　護岸杭列　北西から
図版74　第3遺構面　北1区　流路3　堰3　全景（1）　西から
第3遺構面　北1区　流路3　堰3　全景（2）　南から
図版75　第3遺構面　北1区　流路3　堰3北杭列　西から
同　堰3南杭列　南から
同　堰3北杭列　西から
同　堰3南杭列　南東から
同　堰3南杭列　木樋出土状況　東から
図版76　第3遺構面　遺構面上　出土土器（S．≒1/3）
第3遺構面　溝16　出土土器（S．≒1/3）
第3遺構面　流路3　出土土器（1）（S．≒1/3）
図版77　第3遺構面　流路3　出土土器（2）（S．≒1/3）
図版78　第3遺構面　流路3　出土土器（3）（S．≒1/3）
図版79　第3遺構面　流路3　出土土器（4）（S．≒1/3）
図版80　第3遺構面　流路3　出土土器（5）（S．≒1/3）
図版81　第3遺構面　流路3　出土土器（6）（S．≒1/3）
図版82　第3遺構面　流路3　出土土器（7）（S．≒1/3）
図版83　第3遺構面　流路3　出土土器（8）（S．≒1/3）
図版84　第3遺構面　流路3　出土土器（9）（S．≒1/3）
図版85　第3遺構面　流路3　出土土器（10）（S．≒1/3）
図版86　第3遺構面　流路3　出土土器（11）（S．≒1/3）
図版87　第3遺構面　流路3　出土土器（12）（S．≒1/3）
図版88　第3遺構面　流路3　出土土器（13）（S．≒1/3）
図版89　第3遺構面　流路3　出土土器（14）（S．≒1/3）
図版90　第3遺構面　流路3　出土土器（15）（S．≒1/3）
図版91　第3遺構面　流路3　出土土器（16）（S．≒1/3）
図版92　第3遺構面　流路3　出土土器（17）（S．≒1/3）
図版93　第3遺構面　流路3　出土土器（18）（S．≒1/3）
図版94　第3遺構面　流路3　出土土器（19）（S．≒1/3）
図版95　第3遺構面　流路3　出土土器（20）（S．≒1/3）
図版96　第3遺構面　流路3　出土土器（21）（S．≒1/3）
第3遺構面　北2区遺構面上、溝10、流路3　出土石製品（S．≒2/3）
図版97　第3遺構面　溝11　出土木製品（1）（S．≒1/5但し184-1はS．≒1/8）
図版98　第3遺構面　溝11　出土木製品（2）（S．≒1/5）
第3遺構面　溝12　出土木製品（S．≒1/5）
第3遺構面　溝16　出土木製品（1）（S．≒1/5）
図版99　第3遺構面　溝16　出土木製品（2）（S．≒1/5）
第3遺構面　流路3　出土木製品（1）（S．≒1/6）
図版100　第3遺構面　流路3　出土木製品（2）（S．≒1/5）
図版101　第3遺構面　流路3　出土木製品（3）（S．≒1/5）
図版102　第3遺構面　流路3　出土木製品（4）（S．≒1/5）
図版103　第3遺構面　流路3　出土木製品（5）（S．≒1/5）
図版104　第4遺構面　南4区南半　南から
第4遺構面　遺構面上、流路4下層　出土土器（S．≒1/3）
第4遺構面　遺構面上　出土石器（S．≒1/3）
図版105　第5遺構面　1区　南西から
第5遺構面　北2区　北東から
図版106　第5遺構面　北3区　北東から
第5遺構面　南1区　北東から
図版107　第5遺構面西半　南3区　北東から
第5遺構面南半　南4区　南西から
図版108　第5遺構面　北1区　畦畔　南から
第5遺構面　北2区　大畦畔　南から
図版109　第5遺構面　北2区　大畦畔　東から
第5遺構面　北2区　足跡遺構
図版110　第5遺構面　北3区　大畦畔付近　北西から
第5遺構面　北3区　中央付近　北東から
図版111　第5遺構面　南1区　水田遺構　南から
同　畦畔断面c-c′南から
同　畦畔断面d-d′南から
同　畦畔断面f-f′東から
同　畦畔断面j-j′北西から
図版112　第5遺構面　南4区　水田遺構　北東から
同　畦畔断面c-c′南東から
同　畦畔断面d-d′南西から
同　畦畔断面f-f′南西から
同　畦畔断面g-g′南東から
図版113　第5遺構面　南4区　流路4　北から
第5遺構面　南3区　流路5　東から
図版114　第5遺構面　溝22　出土土器（S．≒1/3）
第5遺構面　遺構面上　出土石製品（S．≒2/3）

第5遺構面　流路5（a-a'・b-b'）　出土木製品（S. ≒1/5）
図版115　第6遺構面　北2区　全景　南西から
同　畦畔断面b－b'　西から
同　畦畔断面g－g'　西から
第6遺構面　遺構面上　出土土器（S. ≒1/3）
図版116　第7遺構面　北1区北半　西から
第7遺構面　北1区中央部　西から
図版117　第7遺構面　北1区南半　南東から
第7遺構面　北2区　全景　西から
図版118　第7遺構面　北3区　全景　東から
第7遺構面　北3区　西から
図版119　第7遺構面　南1区東半　南から
第7遺構面　南1区西半　南西から
図版120　第7遺構面　南3区東半　西から
第7遺構面　南3区西半　南西から
図版121　第7遺構面　南4区北半　全景　南から
第7遺構面　南4区南半　全景　南西から
図版122　第7遺構面　北1区　足跡検出状況
同　北1区　畦畔検出状況
同　北2区　畦畔断面a-a'　北西から
同　北2区　畦畔断面k-k'　南西から
同　南3区　足跡検出状況
同　南3区　畦畔断面　南東から
同　南3区　畦畔断面　南東から
同　南4区　畦畔断面o-o'　南東から
図版123　第7遺構面　北1区　溝27　南東から
第7遺構面　北1区　溝27東堤　小枝状の繊維質
図版124　第7遺構面　南1区　溝29と土器(253-19)出土状況
第7遺構面　遺構面上　出土土器（1）（S. ≒1/3）
図版125　第7遺構面　遺構面上　出土土器（2）（S. ≒1/3）
第7遺構面　溝29　出土土器（S. ≒1/3）
第7遺構面　遺構面上　出土石器・石製品（253-1～5；S. ≒2/3,253-6～8；S. ≒1/3）
図版126　第8遺構面　北2区　全景　南西から
第8遺構面　北2区　全景　北東から
図版127　第8遺構面　北3区　全景　北西から
第8遺構面　北3区　全景　北東から
図版128　第8遺構面　北2区　遺物散布状況（1）　南東から
第8遺構面　北2区　遺物散布状況（2）　西から
図版129　第8遺構面　北2区　土偶（333-1）出土状況
同　土偶（333-5）出土状況
同　土偶（333-6）出土状況
同　土偶（333-4）出土状況
同　土偶（333-4）・焼土6検出状況　北西から
図版130　第8遺構面　北1区　建物1　北西から
同　建物1　ピット407
同　建物1　ピット408
同　建物1　ピット409
同　建物1　ピット410
図版131　第8遺構面　北2区　建物2　北から
同　焼土2　南西から
同　建物2　ピット420
同　建物2　ピット421
同　建物2　ピット423
図版132　第8遺構面　北2区　建物3　南から
同　建物3　ピット430
同　建物3　ピット431
同　建物3　ピット432
同　建物3　ピット434
図版133　第8遺構面　北3区　建物4・建物5　北西から
第8遺構面　北1区　焼土3　南から
図版134　第8遺構面　北2区　土器棺墓1　北から
第8遺構面　北2区　土器棺墓1　埋土の状況　北から
図版135　第8遺構面　北2区　土器棺墓2　東から
同　土器棺墓2　南から
同　土器棺墓2　検出状況　北から
同　土器棺墓2　埋土の状況　北から
同　土器棺墓2　完掘
図版136　第8遺構面　北2区　土器棺墓3　西から
第8遺構面　北2区　土器棺墓3　北から
図版137　第8遺構面　北2区　土器棺墓3　東から
第8遺構面　土器棺墓3（左）と焼土4（右）　北から
図版138　第8遺構面　北2区　土器棺墓4　南東から
同　土器棺墓4　南西から
同　土器棺墓4　検出状況　東から
同　土器棺墓4　埋土の状況　南東から
同　土器棺墓4　完掘　東から
図版139　第8遺構面　北2区　土器棺墓5　東から
同　土器棺墓5　埋土除去前の状況　東から
同　土器棺墓5　埋土の状況　北から
同　土器棺墓5　北から
同　土器棺墓5　墓壙底骨片出土状況　東から
図版140　第8遺構面　北2区　土器棺墓5　上部土器片取り上げ後　東から
第8遺構面　北2区　土器棺墓5　南から
図版141　第8遺構面　北2区　土器棺墓6　南から
同　土器棺墓6　南西から
同　土器棺墓6　埋土の状況　南から
同　土器棺墓6　棺内赤色顔料　南から
同　土器棺墓6　棺内赤色顔料　近影
図版142　第8遺構面　北2区　土器棺墓7　南から
同　土器棺墓7　埋土除去前の状況　南東から
同　土器棺墓7　南から
同　土器棺墓7　埋土の状況　北から
同　土器棺墓7　墓壙内土玉出土状況
図版143　第8遺構面　北2区　土器棺墓8　東から
同　土器棺墓8　埋土除去前の状況　東から
同　土器棺墓8　埋土の状況　東から
同　土器棺墓8　南から
同　土器棺墓7・土器棺墓8　北東から
図版144　第8遺構面　北2区　土器棺墓9　南から
同　土器棺墓9　埋土除去前の状況　北から
同　土器棺墓9　埋土の状況　北から
同　土器棺墓9　西から
同　土器棺墓9　東から
図版145　第8遺構面　北2区　土器棺墓10　南から
同　土器棺墓10　上部土器取り上げ後の状況　北から
図版146　第8遺構面　北3区　土器棺墓11　南から
第8遺構面　北3区　土器棺墓11　埋土除去後の状況　南から
図版147　第8遺構面　北3区　土器棺墓12　南から
第8遺構面　北3区　土器棺墓12　南西から
図版148　第8遺構面　北3区　土器棺墓13　南東から
第8遺構面　北3区　土器棺墓13周辺　南東から
図版149　第8遺構面　北3区　土器棺墓14　西から
同　土器棺墓14　北から
同　土器棺墓14　埋土の状況　西から
同　土器棺墓14　埋土除去後の状況　西から
同　土器棺墓14　完掘　北から

図版150　第８遺構面　北３区　土器棺墓15　東から
同　土器棺墓15　北から
同　土器棺墓15　埋土の状況　東から
同　土器棺墓15　南から
同　土器棺墓15　完掘　北から
図版151　第８遺構面　北３区　土器棺墓16　東から
同　土器棺墓16　埋土除去後の状況　北から
図版152　第８遺構面　北３区　土器棺墓17　南西から
第８遺構面　北３区　土器棺墓18　東から
図版153　第８遺構面　北３区　土器棺墓19　南から
第８遺構面　北３区　土器棺墓19　南東から
図版154　第８遺構面　北３区　土器棺墓20　南東から
第８遺構面　北３区　土器棺墓20　埋土の状況　南東から
図版155　第８遺構面　北３区　土器棺墓21　南西から
同　土器棺墓21　埋土除去前の状況　南から
同　土器棺墓21　埋土の状況　北東から
同　土器棺墓21　北西から
同　土器棺墓21　完掘　南西から
図版156　第８遺構面　北２区　土壙墓１　埋土の状況　北東から
第８遺構面　北２区　土壙墓１　完掘状態　北東から
図版157　第８遺構面　北２区　土壙墓２　北西から
第８遺構面　北２区　土壙墓２　骨片出土状況
図版158　第８遺構面　北２区　土壙墓３　西から
第８遺構面　北３区　土壙墓４　北西から
図版159　第８遺構面　北３区　土壙墓10　西から
第８遺構面　北３区　土壙墓10（左）・土坑19（右前）・20（右奥）　北から
図版160　第８遺構面　北２区　サヌカイト集積土坑　堆積状況　東から
第８遺構面　北２区　サヌカイト集積土坑　２層目　西から
図版161　第８遺構面　北２区サヌカイト集積土坑　１層目　東から
同　サヌカイト集積土坑　３層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　４層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　５層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　６層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　７層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　８層目　西から
同　サヌカイト集積土坑　完掘　西から
図版162　第８遺構面　北１区　土坑９　西から
同　土坑９　北西から
同　土坑９　埋土の状況　北西から
同　土坑９　土坑上半堆積土器片取上げ後　南東から
同　土坑９　出土土器片　近影
図版163　第８遺構面　北２区　土坑11　南から
同　土坑11　上層堆積土器片取り上げ後　南西から
図版164　第８遺構面　北２区　土坑12　西から
第８遺構面　北２区　土坑13　埋土の状況　北から
図版165　第８遺構面　北３区　土坑15　西から
第８遺構面　北３区　土坑15　出土遺物
図版166　第８遺構面　北３区　土坑16　南西から
第８遺構面　北３区　土坑16　北東から
図版167　第８遺構面　北３区　土坑19　北から
第８遺構面　北３区　土坑20　南東から
図版168　北３区　下層確認トレンチ２　北東から
北３区　下層確認トレンチ３　北東から
図版169　第８遺構面　遺構面上　出土土器（１）（S．≒1/3）
図版170　第８遺構面　遺構面上　出土土器（２）（S．≒1/3）
図版171　第８遺構面　遺構面上　出土土器（３）（S．≒1/3）
図版172　第８遺構面　遺構面上　出土土器（４）（S．≒1/3）
図版173　第８遺構面　遺構面上　出土土器（５）（S．≒1/3）
図版174　第８遺構面　遺構面上　出土土器（６）（S．≒1/3）
図版175　第８遺構面　遺構面上　出土土器（７）（S．≒1/3）
第８遺構面　建物　出土土器（S．≒1/3）
図版176　第８遺構面　焼土　出土土器（S．≒1/3）
第８遺構面　土器棺１（S．≒1/3）
図版177　第８遺構面　土器棺２（S．≒1/3）
図版178　第８遺構面　土器棺３（S．≒1/3）
図版179　第８遺構面　土器棺４（S．≒1/3）
図版180　第８遺構面　土器棺５－１（S．≒1/3）
第８遺構面　土器棺５－２（S．≒1/3）
図版181　第８遺構面　土器棺６（S．≒1/3）
図版182　第８遺構面　土器棺７－１（S．≒1/3）
図版183　第８遺構面　土器棺７－２（S．≒1/3）
図版184　第８遺構面　土器棺８（S．≒1/3）
図版185　第８遺構面　土器棺９（S．≒1/3）
図版186　第８遺構面　土器棺10（S．≒1/3）
図版187　第８遺構面　土器棺11（S．≒1/3）
図版188　第８遺構面　土器棺12（S．≒1/3）
図版189　第８遺構面　土器棺13（S．≒1/3）
図版190　第８遺構面　土器棺14（S．≒1/3）
図版191　第８遺構面　土器棺15（S．≒1/3）
図版192　第８遺構面　土器棺16（S．≒1/3）
図版193　第８遺構面　土器棺17・18・19（S．≒1/3）
図版194　第８遺構面　土器棺20（S．≒1/3）
図版195　第８遺構面　土器棺21（S．≒1/3）
図版196　第８遺構面　土壙墓１・２・10　出土土器（S.≒1/3）
第８遺構面　土坑９・12・18　出土土器（S．≒1/3）
図版197　第８遺構面　土坑11・15・19・20　出土土器（S．≒1/3）
図版198　第８遺構面　遺構面上　出土土製品・土器棺墓18出土土製品（S．≒1/3但し334-15はS．≒1/1）
第８遺構面　遺構面上　出土石器（１）（335-1～6；S．≒2/3　335-7～9；S．≒1/3）
図版199　第８遺構面　遺構面上　出土石器（２）（S．≒1/3）
図版200　第８遺構面　遺構面上　出土石器（３）（S．≒1/3）
第８遺構面　出土石器　焼土6・土器棺墓21・土坑9・土坑23　出土石器(340-1～2；S．≒2/3、340-3～5；S．≒1/3）
第８遺構面　土坑16　出土木製品　（S．≒1/5）
図版201　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（１）（S．≒1/3）
図版202　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（２）（S．≒1/3）
図版203　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（３）（S．≒1/3）
図版204　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（４）（S．≒1/3）
図版205　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（５）（S．≒1/3）
図版206　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（６）（S．≒1/3）
図版207　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（７）（S．≒1/3）
図版208　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（８）（S．≒1/3）
図版209　第８遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（９）（S．≒1/3）

図版210　第8遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（10）（S．≒1/3）
図版211　第8遺構面　サヌカイト集積土坑　出土石器（11）（S．≒1/3）
図版212　第9遺構面　南1区西半　南東から
第9遺構面　南1区東半　南西から
図版213　第9遺構面　南3区東半　東から
第9遺構面　南3区　土坑47周辺　南西から
図版214　第9遺構面　南4区北半　南西から
第9遺構面　南4区南半　北から
図版215　第9遺構面　南1区　遺構面上散布遺物（1）　東から
第9遺構面　南1区　遺構面上散布遺物（2）　東から
図版216　第9遺構面　南1区　土器埋設遺構　西から
同　土器埋設遺構　南西から
同　土器埋設遺構　埋設状態上半部　南西から
同　土器埋設遺構　埋土除去前の状況　南西から
同　土器埋設遺構　底部片出土状況　東から
図版217　第9遺構面　南1区　石囲遺構　北から
第9遺構面　南1区　石囲遺構　土器片堆積状況　南西から
図版218　第9遺構面　南1区　土坑24　南から
同　土坑25　南から
同　土坑26（前）・土坑27（奥）　南から
同　土坑28　東から
同　土坑29　東から
同　土坑31（右）・土坑32（左）　東から
同　土坑30　東から
同　土坑30　土坑底出土土器
図版219　第9遺構面　南1区　土坑33　南から
同　土坑33　埋土除去後の状況　南西から
同　土坑33　棒状礫出土状況　西から
同　土坑33　棒状礫検出状況　北から
同　土坑33　土器片出土状況
図版220　第9遺構面　南1区　土坑34　東から
同　土坑35　東から
同　土坑36　南から
同　土坑37　南から
同　土坑38　東から
同　土坑39　東から
同　土坑41　北から
同　土坑42　南西から
図版221　第9遺構面　南1区　土坑40　東から
同　土坑43　北から
同　土坑44　南から
同　土坑45　南から
同　土坑46　北東から
図版222　第9遺構面　南3区　土坑47　南から
第9遺構面　南3区　土坑47　土器出土状況　南から
図版223　第9遺構面　北2区　下層確認トレンチ5　南東から
第9遺構面　北2区　下層確認トレンチ6　北西から
図版224　第9遺構面　北3区　下層確認トレンチ8　北東から
第9遺構面　北3区　下層確認トレンチ8　土器出土状況
図版225　第9遺構面　遺構面上　出土土器（1）（S．≒1/3）
図版226　第9遺構面　遺構面上　出土土器（2）（S．≒1/3）
図版227　第9遺構面　遺構面上　出土土器（3）（S．≒1/3）
図版228　第9遺構面　遺構面上　出土土器（4）（S．≒1/3）
図版229　第9遺構面　遺構面上　出土土器（5）（S．≒1/3）
図版230　第9遺構面　遺構面上　出土土器（6）（S．≒1/3）
図版231　第9遺構面　遺構面上　出土土器（7）（S．≒1/3）
図版232　第9遺構面　遺構面上　出土土器（8）（S．≒1/3）
図版233　第9遺構面　遺構面上　出土土器（9）（S．≒1/3）
図版234　第9遺構面　遺構面上　出土土器（10）（S．≒1/3）
図版235　第9遺構面　遺構面上　出土土器（11）（S．≒1/3）
図版236　第9遺構面　遺構面上　出土土器（12）（S．≒1/3）
図版237　第9遺構面　遺構面上　出土土器（13）（S．≒1/3）
図版238　第9遺構面　遺構面上　出土土器（14）（S．≒1/3）
図版239　第9遺構面　遺構面上　出土土器（15）（S．≒1/3）
図版240　第9遺構面　遺構面上　出土土器（16）（S．≒1/3）
図版241　第9遺構面　遺構面上　出土土器（17）（S．≒1/3）
図版242　第9遺構面　遺構面上　出土土器（18）（S．≒1/3）
図版243　第9遺構面　遺構面上　出土土器（19）（S．≒1/3但し386-208・209はS．≒1/2）
図版244　第9遺構面　埋設土器（S．≒1/3）
図版245　第9遺構面　石囲遺構　出土土器（S．≒1/3）
第9遺構面　土坑30　出土土器（S．≒1/3）
図版246　第9遺構面　土坑32・34・35・36・38・40　出土土器（S．≒1/3）
図版247　第9遺構面　土坑33　出土土器（1）（S．≒1/3）
図版248　第9遺構面　土坑33　出土土器（2）（S．≒1/3）
図版249　第9遺構面　土坑33　出土土器（3）（S．≒1/3）
図版250　第9遺構面　遺構面上　土坑39　出土土器（S．≒1/3）
図版251　第9遺構面　遺構面上　土坑41・42　出土土器（S．≒1/3）
図版252　第9遺構面　遺構面上　土坑43・45・47　出土土器（S．≒1/3）
図版253　第9遺構面　遺構面上　出土石器（1）（S．≒1/3但し398-1～3はS．≒2/3）
図版254　第9遺構面　遺構面上　出土石器（2）（S．≒1/3）
図版255　第9遺構面　遺構面上　出土石器（3）（S．≒1/3）
図版256　第9遺構面　遺構面上　出土石器（4）（S．≒1/3但し403-5はS．≒1/6、404-1はS．≒1/8）
図版257　第10遺構面　南4区　北から
第10遺構面　南4区　土器集中部　南から
図版258　第10遺構面　南4区　炭溜まり　南から
第10遺構面　南4区　下層確認トレンチ14　南東から
図版259　第10遺構面　出土遺物（S．≒1/3）
図版260　南5区　1トレンチ　遺構検出状況　南東から
南5区　1トレンチ　4層上面　南東から
図版261　南5区　2トレンチ　改良土除去後　南東から
南5区　2トレンチ　下層確認　南東から
南5区　流路　南から
南5区　2トレンチ　土坑　南東から
南5区　埋設土器　検出状況　南西から
図版262　南5区　埋設土器　埋土の状況　西から
南5区　埋設土器（S．≒1/3）
図版263　南5区　出土土器（S．≒1/3）
南5区　出土土製品（S．≒1/3）
南5区　2トレンチ　出土石器（S．≒1/3）
南5区　1トレンチ　出土木製品（S．≒1/5）
図版264　南6区　1トレンチ　改良土除去後　南東から
南6区　1トレンチ　掘削状況　南西から
南6区　2トレンチ　改良土除去後　南西から
南6区　2トレンチ　掘削状況　南西から
南6区　杭列1検出状況　南東から
南6区　杭列1　断面　南東から
南6区　杭列2検出状況　南東から
南6区　杭列2　断面　南から
図版265　南6区　出土土器（S．≒1/3）

本　文

第１章　位置・環境と既往の調査

第１節　位置と環境

玉手遺跡の所在する御所市は、奈良盆地の南西部に位置する（図１）。市域の西側は、葛城山・金剛山を境界として大阪府と接しており、両峰のあいだの水越峠を越えると大阪府千早赤坂村へ達する。東南部から東部にかけては、巨勢山丘陵や国見山といった、竜門山地に連なる山塊が占めている。西南部の巨勢山丘陵と金剛山に挟まれた風の森峠を越えると、五條市に至る。このやや南側に中央構造線がはしっており、吉野川を通じて吉野・和歌山へと至る。北西部は、葛城川・曽我川を起源とする扇状地形に基づく平坦な沖積地が広がっており、奈良盆地の平野部の一角を占めている。

図１　御所市の位置

このように御所市の地形は起伏に富み、それを反映するように、生活文化や風習においてもまた、吉野山地と奈良盆地平野部との漸移・連結地帯をなしている。また、大阪・和歌山・吉野方面と奈良盆地平野部を結ぶ交通の要衝としての性格もそなえている。

本書で報告する玉手遺跡は御所市北東の平地部に位置し、葛城川の形成する扇状地上に立地している（図２）。京奈和自動車道の建設にともなう調査を契機として、玉手遺跡を含む御所市北東部の沖積地を中心に、数多くの重要な調査成果が蓄積されている。

御所市内では旧石器時代～縄文早期にかけての明確な資料は乏しく、観音寺本馬遺跡第５次調査（観音寺Ⅲ区）では、草創期とみられる有茎尖頭器の破片が確認されたとの報告がある程度である（岡田雅編 2013）。

縄文前期～中期後葉は、遺物は得られているもののその量は少なく、遺構の検出もない。観音寺本馬遺跡および玉手遺跡で、前期初頭～中期中葉の土器片が出土している（松田 1997、平岩 2012、岡田雅編 2013）。櫛羅遺跡では中期後葉・船元Ⅳ式・里木Ⅱ式の土器片 40 点程度と石鏃などが採集されている（松並 1939）。

当地域で生活の痕跡が明確になるのは縄文中期末葉以降である。小林遺跡では自然流路およびピット群の周辺から中期末～後期初頭および晩期前半の土器片が出土した。それとともに、石核や剥片の多数出土する地点が見つかっており、石器製作に関わる遺跡と考えられている（藤田 1986）。また、玉手遺跡１次調査や下茶屋地蔵谷遺跡においては、遺構はほとんど確認されなかったものの、中期末葉～後期前葉を中心とした多量の遺物が出土している（伊藤 1986、坂編 2000）。本書で報告する玉手遺跡第４次調査では、中期末葉～後期初頭にかけての土坑など遺構群

と、多量の遺物が検出され、奈良盆地南西部における当該期の集落の様相を具体的にあらわす資料が得られた。このほか、観音寺本馬遺跡では中期末葉～後期初頭に位置づけられる炉址などが検出されている（鈴木編 2014）。これらの遺跡は近接して営まれており、遺跡間関係や集落動態の分析が課題となろう。

後期後半では、伏見遺跡で埋没谷から後期中葉の遺物がまとまって出土した（廣岡・十文字 2005）。また、観音寺本間遺跡では後期後葉・元住吉山Ⅱ式期の竪穴建物跡、後期末～晩期初頭の水場遺構が検出されている（平岩 2012）。

縄文時代晩期については、京奈和自動車道の建設にともなう観音寺本馬遺跡の一連の調査や玉手遺跡第４次調査を中心とした調査成果によって、具体的な集落の様相が明らかになってきた（本村 2009、平岩 2012、岡田雅編 2013、木許・西村編 2015）。この時期は、学史的にも著名な橿原遺跡や竹内遺跡の盛期でもあり、活動の活発化が広範に認められる。また、橿原市曲川遺跡では後期後半から晩期後半にかけての長期にわたって居住の痕跡が認められ、特に土器棺墓は 80 基以上と西日本でも突出した数である（平岩ほか 2004）。

観音寺本馬遺跡では、晩期中葉・篠原式期に比定される土器棺墓・土廣墓群や平地式住居（掘立柱建物）が多数検出されただけでなく、水場遺構や栽培・管理されたとみられるクリの埋没林など水利･生産活動に関わる痕跡も発見された。加えて、北陸地方との関連を示唆するクリの半裁柱や、東北地方の亀ヶ岡文化に由来する土器・土製品・漆製品などが報告されており、広域かつ多様な交流関係をうかがうことができる。観音寺本馬遺跡での調査成果が、縄文晩期の集落構造や生活様式、地域間関係の解明に資する部分は大きい。

観音寺本馬遺跡は晩期中葉以降、生活痕跡がほとんど見られなくなる。その後に位置づけられる遺跡として、本書で報告する玉手遺跡第４次調査で検出した縄文晩期後葉･凸帯文土器（口酒井期）の土器棺墓・土廣墓群と、掘立柱建物跡がある。ただし、土器編年研究上の成果に則せば、両遺跡間には時間的間隙がみとめられるため、現状ではたんに集落の移動では説明しきれない。また、玉手遺跡は集落の継続時期は短く、晩期末・長原式期にはほとんど活動の痕跡は見られなくなる。

弥生時代については、近年の調査によって弥生時代の全期を通じて広大な水田が展開していたことが判明した。秋津遺跡・中西遺跡をはじめとして、京奈和自動車道建設にともなう発掘調査のほぼすべての調査区で水田址や灌漑水路などが検出されており、その規模は全国でも突出している（松岡 2011、岡田・松岡 2012 ほか）。水田は、低い畦畔によって区画された約 10 ～ 15㎡程度の小区画水田が地形に沿ってならぶ。これらの広大な水田が、どの程度の割合で同時に機能していたかは議論の余地があるものの、この地域が稲作普及の比較的早い段階から重要な穀倉地帯であったことは間違いない。さらに、こうした水田址に加えて中西遺跡では水田に隣接して埋没林がみつかり、樹木の伐採痕や足跡など、農耕にとどまらない弥生時代の生産活動や集落景観復元に大きく寄与する成果となった。

1．玉手遺跡　2．観音寺本馬遺跡　3．伏見遺跡　4．南郷遺跡　5．鴨都波遺跡　6．巨勢山塚谷遺跡
7．巨勢山中谷遺跡　8．巨勢山八伏遺跡　9．名柄遺跡　10．名柄銅鐸・銅鏡出土地　11．蛇穴遺跡　12．今出遺跡
14．秋津遺跡　15．茅原中ノ坊遺跡　15．中西遺跡　16．鴨都波１号墳　17．西浦古墳　18．オサカケ古墳　19．楠原遺跡
20．室宮山古墳　21．ネコ塚古墳　22．掖上鑓子塚古墳　23．みやす塚古墳　24．極楽寺ヒビキ遺跡　25．鴨神遺跡
26．権現堂古墳　27．新宮山古墳　28．水泥北古墳　29．水泥南古墳　30．條ウル神古墳　31．巨勢寺　32．二光寺廃寺
33．朝妻廃寺　34．高宮廃寺跡　35．朝町鍋山遺跡
A．巨勢山古墳群　B．石光山古墳群　C．小林古墳群　D．石川古墳群　E．吐田平古墳群　F．北窪古墳群
G．ドンド垣内古墳群

図２　周辺の主要遺跡分布図　（S．＝1/50,000）

弥生時代の集落遺跡としては、鴨都波遺跡が著名である。鴨都波遺跡は弥生時代を通じて営まれた集落遺跡で、当地における拠点的集落と目される（木許編 1992、藤田編 1992 ほか）。ただし、水田の検出された中西遺跡・秋津遺跡や玉手遺跡までは直線距離で約 1.5 ～ 2.0km 程度あり、両者の関連の有無については検討の必要がある。水田に近接する集落痕跡は、玉手遺跡第２次調査で検出された弥生前期末葉の遺構群と遺物が挙げられる（寺沢・林部 1988）。弥生後期に至ると、巨勢山丘陵上に高地性集落が営まれるようになり、巨勢山境谷遺跡、巨勢山中谷遺跡、巨勢山八伏遺跡などが確認されている。墓域については、観音寺本馬遺跡で 40 基ほどを数える大規模な方形周溝墓群が確認されている（鈴木編 2014）。

古墳時代に入ると、沖積地の水田群は規模をかなり縮小または廃絶し、居住域としての性格が強まる。各遺跡の堆積状況からみると、河川の氾濫など洪水の影響が減じたとみられ、それが要因で土地利用が変化したと考えられる。

秋津遺跡・中西遺跡では、先述の水田遺構群の上層で、古墳時代前期の大規模な集落址が確認された。特に、溝･柵によって囲まれた方形区画施設と独立棟持柱建物で構成される「祭祀空間」と、竪穴建物・土坑・井戸・溝などで構成される「居住空間」が分かれており、計画的に配置された集落構造をもつことが明らかとなった（米川・菊井 2014、岡田・松岡 2012、橿考研 2015）。

鴨都波遺跡では弥生時代から継続して集落が営まれており、住居址やピット群、井戸などが検出されている。また、鴨都波遺跡 15 次調査地では方墳（鴨都波１号墳）や木棺墓が確認され（藤田･木許編 2001）、この周囲が墓域としての機能をもっていたことが判明している。鴨都波１号墳はこの地域の前期古墳として最も充実している。依存状態が良好な上、副葬品の内容も三角縁神獣鏡４面が出土するなど豊富である。このほかに前期古墳としては、西浦古墳（梅原 1922）、オサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが知られている。

古墳時代中期前半には、葛城地域最大となる墳長 238m を誇る前方後円墳・室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959 ほか）。後円部の南北に並んだ２基の竪穴式石室のうち、南側の石室には長持形石棺が納められており、かつ埋葬施設を取り囲むように家形や靱形などの形象埴輪群が樹立されていた。さらに、周堤北側にはネコ塚古墳と呼ばれる陪冢が造られている。この地の地名にも残る葛城氏との関連がうかがわれる一方で、秋津遺跡などで明らかとなった前期における当地の支配者層とのつながりについても検討が待たれる。

室宮山古墳の築造にやや遅れて、南郷遺跡群での活動痕跡が顕著となる（坂編 1996、北中編 2007 ほか）。南郷遺跡群は、金剛山と巨勢山丘陵に挟まれた葛城川の扇状地上に展開する遺跡群である。その特徴は、居住域や墓域のみならず、「高殿」とも称される大型掘立柱建物や、導水施設と祭祀痕跡、鍛冶や玉作り、製塩など手工業生産の場が複合する点である。また、韓式系土器や大壁建物など、渡来系要素が強く見出される。こうした遺跡群のあり方から、葛城氏の支配拠点であると目されている。そのほか、同時期の注目される遺構として、長柄遺跡の首長居館（藤田

1991）や、鳴神遺跡の道路遺構（近江 1993）がある。

室宮山古墳に後続する首長墓としては、掖上鑵子塚古墳（楠本編 1978 ほか）が挙げられる。墳長は 149m を測り、築造時期は 5 世紀中葉から後葉とされている。埋葬施設の発掘調査は実施されていないが、家形埴輪の破片や金銅製垂飾金具や帯金具が知られている。

古墳後期に至っても、南郷遺跡群や鴨都波遺跡で住居址をはじめとした居住関連遺構が確認でき、集落が継続していたことが判明している。ただし、南郷遺跡群では中期に比べて集落規模の縮小が著しい。鴨都波遺跡では集落規模や実態などは不明な部分がおおく、今後の調査に期待される。

こうした集落遺跡の展開とは対照的に、古墳の築造は後期にピークを迎える。なかでも巨勢山古墳群は総数 800 基を超える規模で、この周囲が墓域としての性格を強く有していたことがうかがえる。このほかにも、金剛・葛城山東麓およびその周囲の独立丘陵上には、石光山古墳群（川上ほか編 1976）、小林古墳群（藤田 1987）など、後期を中心に数多くの群集墳が展開する。未だ未調査の古墳が多いため、古墳群の実態や背景については今後の調査・検討による部分が大きい。

一方、大型古墳は、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。代表的なものとして、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961 ほか）、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教委 1980 ほか）が挙げられる。これらは、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。また、近年の調査によって、條ウル神古墳が墳長 70m前後の前方後円墳であることが判明した。石室の規模が大きく、かつ巨勢谷の石室型式と類似しており、当古墳の位置づけについて注目される（御所市教委編 2003、金澤 2015）。

第２節　既往の調査

玉手遺跡では本書で報告する京奈和自動車道建設に伴う調査以前に、奈良県立橿原考古学研究所によって３次にわたる調査がおこなわれている（図３）。

第１次調査は県立高校の建設に先だって行われた。主として縄文時代の遺物が確認され、特に後期前葉・北白川上層式に比定されるものが主体となるようである。また、遺構は確認されなかったものの、ほぼ同一平面上に粗密をもって分布する状況が確認されている。なお、このうち縄文中期末葉～後期初頭に位置づけられる土器群については、当該期の資料が多く出土した下茶屋地蔵谷遺跡の報告にあわせて紹介されている（伊藤 1986、坂編 2000）。

第２次調査は県道の敷設にともなう調査で、道路に沿って南北に細長い調査区が設定された（寺沢・林部 1988）。ここでは主に弥生時代前期末葉に位置づけられる土坑群と土器・石器が出土しており、先述のとおり第４次調査で検出した弥生前期の水田址との関連が想定される。

第３次調査は県立高校の施設増築にともなう調査で、第１次調査区と近接する位置に調査区が設けられた（平松 2005）。ここでは造成土が表土下深くまで認められ、遺構面に達することなく調査は終了した。

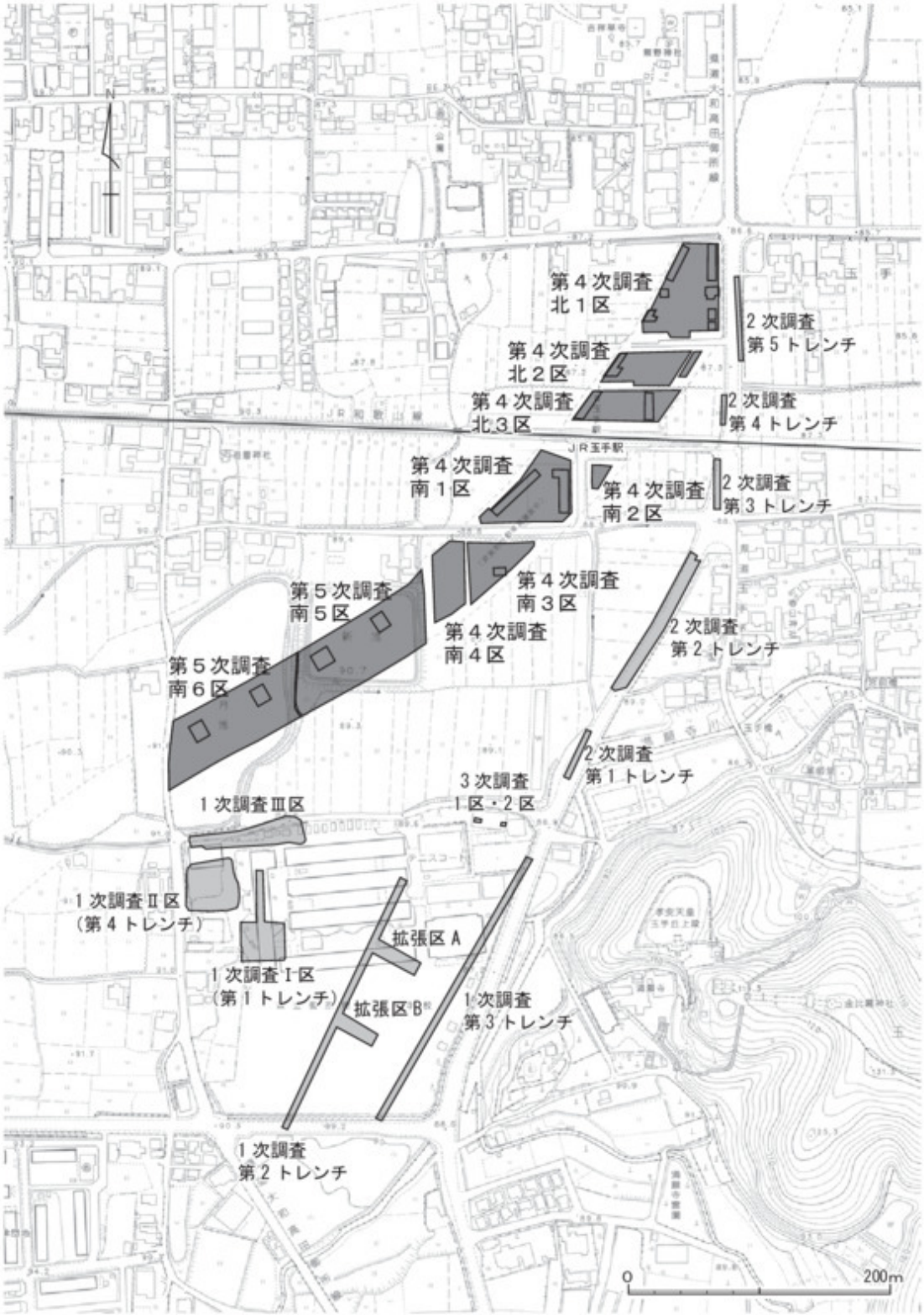


図３　玉手遺跡　今次調査地と既往の調査地　位置図（S．=1/5,000）

第２章　調査の契機と経過

第１節　契機と経過

京奈和自動車道は、京都から和歌山を結ぶ全長 120km の高規格幹線道路として計画された自動車専用道路である。このうち、大和郡山市伊豆七条町から五條市居伝町までは大和御所道路とされ、御所市はこのうちの「御所区間」が該当している。大和御所道路は、平成４年度に事業化がなされ、以降、用地買収・建設工事等が進められてきた。そして、この事業と併行して、工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査も奈良県立橿原考古学研究所を中心として、多くの地点で実施されている。

こうした状況にあって、平成 19 年４月に、国土交通省近畿地方整備局　奈良国道事務所長から、御所市教育委員会に対して、「御所区間」について、埋蔵文化財発掘調査業務にかかる「委託申込書」が提出された。

各種公共事業のうち国・県が行う事業に伴う発掘調査は奈良県が行うという取り決めがある。したがって、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査は奈良県が行うべきであるが、事業の早期完成とそれによる地元の利便性向上など様々な条件を考慮すると、御所市内における文化財調査については、御所市も一定の役割を担うべきであると判断された。しかし、御所市がこの事業を実施するには、調査員の人数が絶対的に不足するという問題があった。そこで当市教育委員会は、この「委託申込書」の提出に前後して、事業自体の受託の可否をも含めて内部調整を行いつつ、調査の方法や体制について奈良県教育委員会文化財保存課および奈良県立橿原考古学研究所と協議を重ねた。そして最終的に事業受託の方針を固め、同年４月に申込者に対して、「埋蔵文化財発掘調査受託承諾書」を発行した。調査体制については、最大の問題であった調査員は事業嘱託を新たに雇用して対応することや、技術職員１名をほぼ専従させて全体を総括すること、各種事務手続きなどに文化財係職員が当たることなどを決め、その整備に努めた。

各発掘調査担当地区については、奈良県および橿原考古学研究所と協議し、御所市の調査担当地区は、道路建設予定地のうち御所インター建設予定地の南端の一部から玉手遺跡（御所市玉手所在の新池より北側）までの範囲と、国道 309 号線から巨勢山丘陵のトンネル抗口までの範囲、および南部丘陵地の朝町におけるトンネル抗口部の工事により掘削が行われる範囲とした。これらの範囲にはそれぞれ遺跡が所在しているが、遺物散布地として認識されている地点があることや、実際の遺跡の広がりが面的な調査の結果次第では変更もありうる状況であったので、まずは便宜上各地区をアルファベットの地区名で呼称した。玉手遺跡はＤ地区とし、現地作業や先に刊行した概要報告（御所市教委 2009・2010・2011・2012）ではこれを用いた。また、各地区は、現状での土地利用による区画によりさらに小地区を設定した。玉手遺跡における小地区名称は次節で述べる。

さて、玉手遺跡における当市教育委員会の調査担当範囲はＪＲ玉手駅を挟む南北の地区と定められ、これを玉手遺跡第４次調査地とした。当該地の南西側には新池および大月池と呼ばれる溜め池

が存在しているが、この池底部分についてはこの時点では奈良県が調査担当することとなった。

このような計画に基づいて、当市教育委員会は、第４次調査を平成20年９月から着手した。調査は、まず、遺構等の分布範囲および遺構面の数や深さを知る目的で、トレンチ調査を実施することから始めた。これを第４－１次調査とした。第４－１次調査は平成21年１月までに終了し、この成果を踏まえて、第４－２次調査を実施した場合の期間や費用などを積算した。第４－２次調査は、平成21年４月に着手し、途中幾たびかの中断期間を挟みつつ、平成23年12月に終了した。

こうして、平成24年度以降は整理作業の体制をとったが、平成24年９月に至り、新池・大月池部分について、奈良県教育委員会教育長から当市教育長に宛て、発掘調査についての依頼文書が提出された。その内容は、新池・大月池部分については奈良県の調査担当予定地であったが、用地問題等の解決が遅れていたために当該年度は調査対象計画地から除外していた。ところが、今般、用地問題が解決し、事業者側から発掘調査を直ちに実施してもらいたい旨の要請があった。しかし、奈良県においてはすでにほかの地点での調査予定が詰まっていて余裕がないので、御所市で調査担当されたく依頼したいという趣旨であった。御所市でも、絶対的な調査員の不足のなか今回事業に対応してきたので余裕がないのは同様であるが、事業の早期完成を望む地元要望などに鑑みて、最終的にこれを受諾するとの結論が出された。これを受けて、当該調査を第５次調査とし、新池部分を南５区として平成25年２～３月に、大月池部分を南６区として平成25年６～７月に発掘調査を実施した。南５区と南６区においては、橋脚等の工事によって遺構面が破壊される地点に対する重点的な調査とし、結果的に当面必要なものとして、各２箇所の計４箇所のトレンチ調査とした。

各調査区の調査期間および調査担当者は例言に記したので、参照されたい。

第２節　調査次数と調査区名称

前節でのべたように、本書では、現ＪＲ玉手駅の南北に隣接する地区を第４次調査地とし、それに南接する新池・大月池地区を第５次調査地とする。

第４次調査地は、幅約60ｍ、長さ約350ｍの北東－南西方向に長い区画である。しかし、この区画を横断する現生活道や鉄道が幾つも存在している。それら自体については、今回の調査対象地から除外し、このような鉄道や道路によって区画される地区を小地区として、調査区名称を付けた。

その配置は、図４に示したとおりで、北区を北１～３区に、南区を南１～４区に区分した。各調査区の面積は、北１区は2,900㎡、北２区は1,350㎡、北３区は1,540㎡、南１区は2,200㎡、南２区は200㎡、南３区は1,250㎡、南４区は2,400㎡である。

第５次調査地は、第４次調査地に南接する新池・大月池部分を対象としたもので、その位置および調査区名称を図３に示したように、南５区と南６区に区分した。各２箇所のトレンチ調査とした。調査面積は、南５区は計320㎡、南６区は計300㎡になった。

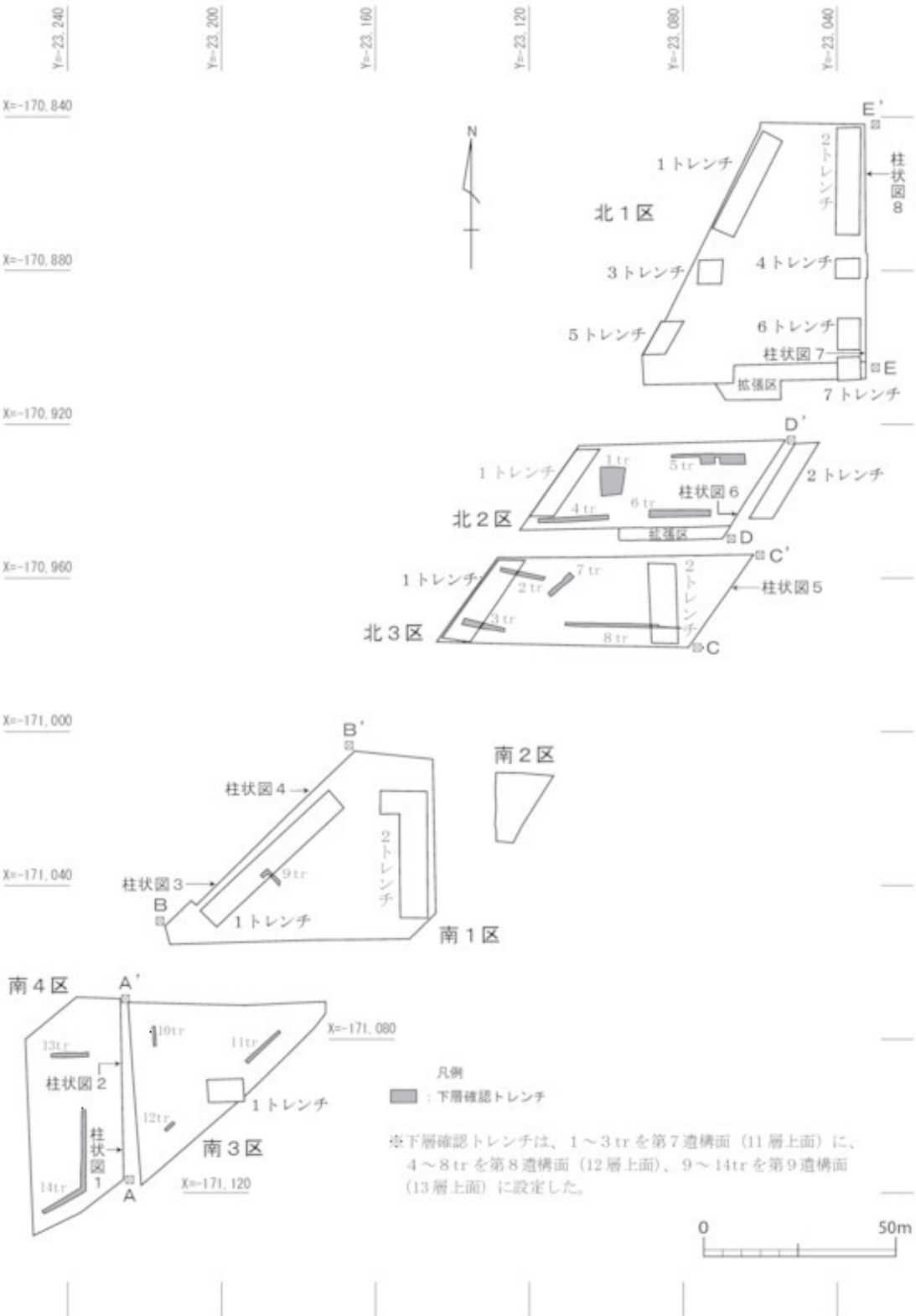


図4　第4次調査地　全体図・土層断面柱状概念図位置　（S.＝1/1,700）

第３章　基本層序

今次発掘調査においては、まず第４－１次調査として、調査区全体にできるだけ満遍なくトレンチを設定して発掘調査を実施した。第４－１次調査の目的は、対象地における遺構の偏在等を確認して調査範囲を確定すること、層位を確認して上下に重複する遺構面の数を確定することであった。

結果的に、この調査によって遺構の存在する範囲は対象地の全体にわたることがわかった。また、遺構面については、第４－１次調査のほか、面的に調査区を拡張して精査した第４－２次調査によって、最上層に中・近世の素堀溝のみが存在する遺構面のほか、縄文時代から古墳時代までの遺構面が少なくとも 10 面あって、合計 11 面以上の遺構面が存在することがわかった。もちろん、このような遺構面と層位の認識は、現地調査の全期間を通じて一定の見通しを立てつつ土層断面の確認を繰り返すことで得られたものである。ここでは、その過程の詳細は記さないが、最終的に得られた基本層序に関する認識を総括して報告する。

さて、発掘調査における調査区の層位の把握は、第４－１次調査では、トレンチの掘削を進めつつ、遺構面の面的把握と壁面の土層観察を繰り返しながら行った。ただし、土層図の作成は、各トレンチの、基本的に東西の壁面に当たる２面で作成した。これは、各トレンチは、図４に示したように南西－北東方向に細長い道路建設予定地の形状に合わせて敷地の長辺に沿うように設定したものであるから、各トレンチでは長辺となる壁面の土層図を作成することで、調査区全体の長軸方向の土層の把握を目指したものである。なお、後述するように、当該調査地の微地形が南西から北東方向へ傾斜するごく緩やかな斜面になっていることから、トレンチでの土層図作成を行った壁面の方向は、等高線に対しておおむね直交する方向にもなっている。

また、面的な拡張を行った第４－２～５次調査では各調査区の外周となる壁面すべての土層断面図を作成することとした。その際に、第４－１次調査で設定したトレンチの壁面が各調査区の壁面に一致する場合も少なくなったが、必要に応じて再度精査を行った後に図面を再作成することもあった。また、第４－１次調査におけるトレンチ調査は、２次調査以降として面的な拡張を行うことを前提にしていたので、遺構が存在する場合には、あえてそれを壊してまで下層確認を行わない場合があった。そのような場合には、２次調査以降の段階で、１次調査で作成したトレンチの壁面土層図に加えて下層に至るまで図を補足するなどの作業を行った。

このようにして作成された土層図の原図を見ると、調査区各壁面の土層堆積状況は、砂粒の大きさ・質・土色等によって、詳細な分層がなされていた。その一方で、図面作成時にも、例えば流路などの遺構の断面の外郭となるラインや、調査区全体を通じて広範囲に見られる一種の鍵層などの認識、あるいは調査区を越えての土層の対応関係などを図面に反映することが意識されており、そのことがそれぞれに註記されていた。今次調査においては、現地調査担当者と整理作業担当者が異なるという体制的な制約があったが、整理段階においては、調査区毎の土層の整合性について、こ

のようにして記録された土層断面実測図に加えて、現地調査当時の各調査員のメモや調査日誌などを総合して検討して、基本層序として把握した。

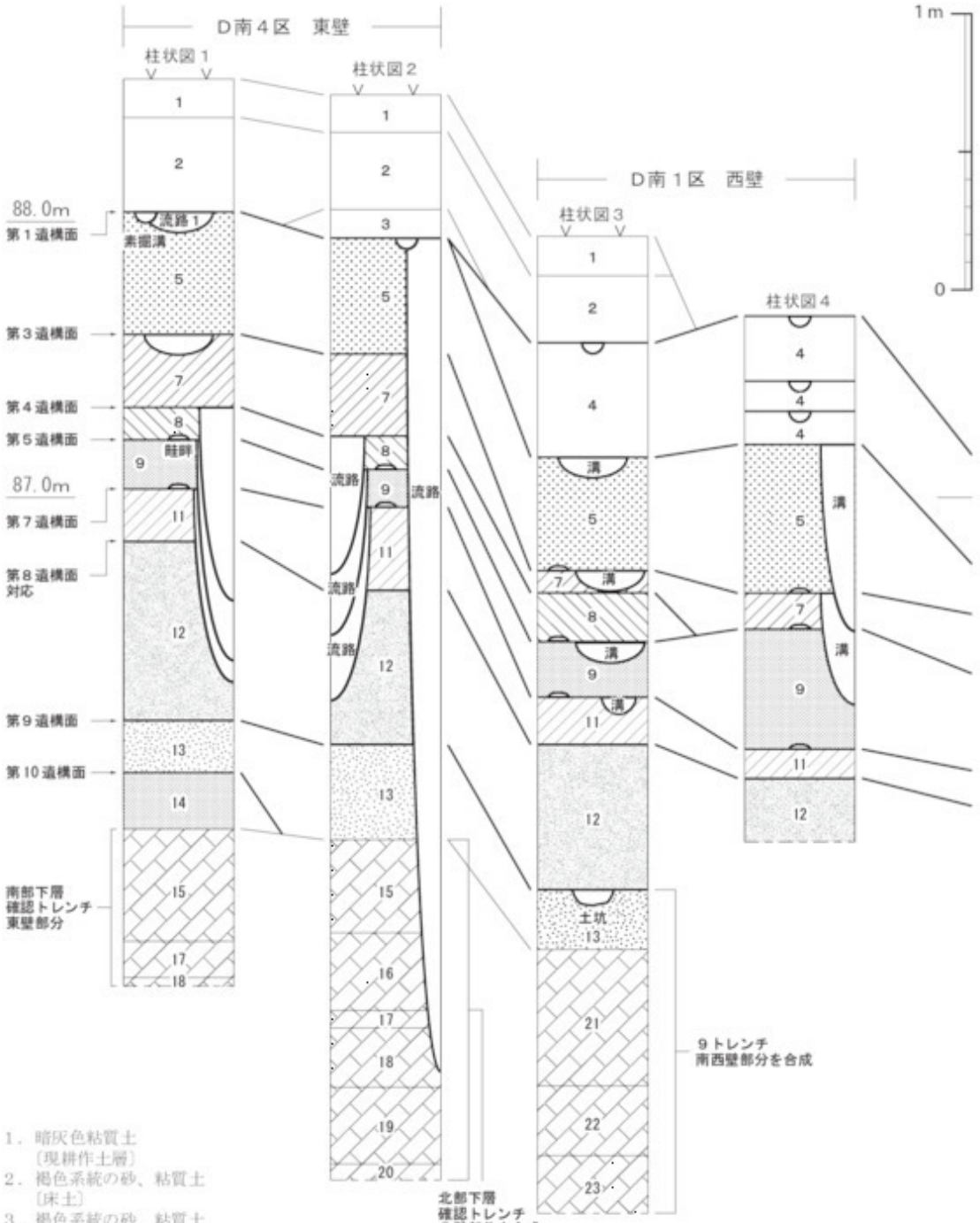
その結果として、基本層序は14層および無遺物層となる地山に大別し、図5・6として、土層断面柱状概念図を示した。その際の基礎資料とした土層断面実測図の一部は、図7～19として掲げた。また、原図において特に下層の土層が記録されていない部分などは、やや離れた地点に設けた下層確認トレンチによって得られた資料を合成して、概念図として仕上げた。とはいえ、同図はあくまでも実測図を基に作成したもので、縦方向すなわち深さの縮尺は1/25に統一するなど、実際の土層堆積状況と乖離したものではない。また、柱状図に層序を反映させた各地点は、図4の平面図および図7～19の土層実測図に明記した。下層の状況について、下層確認トレンチで得た資料で補った場合も、図5・6の該当箇所にその旨を記している。

今次調査地は、現地表面を見ると南西が高く北東が低い地形になっている。南4区の南端から北1区までは直線距離で約350 mあり、御所市発行の都市計画図で見ると、その比高差は約2 m程ある。ほぼ平坦であると言える程の比高であるが、微地形では北東方向に傾斜するごく緩やかな斜面地に遺跡は立地していることになる。もちろん、この状況は遺跡の各遺構面についても言える。発掘調査によって、後述するように縄文時代から中・近世に至る各遺構面を検出したが、それらの高さも現状に見えるこの高低差におおむね一致して、南西が高く北東が低くなっていた。

このような地形にあって、土砂が堆積する要因は、基本的には洪水堆積であると考えられる。実際、後述するように今次調査において最も下層に位置する縄文時代中期末から後期初頭の遺構面から、現状の表土である水田耕作土の上面までは、約2.4 mの厚さの堆積土があった。その土質を見ると、粗砂・砂・砂質土・細砂・シルト・粘土などが互層になって堆積している状況である。この間に幾面もの遺構形成面が存在しているのが、今次調査地の実態である。

これは、要するに、遺構面すなわち当時の生活面が形成されては洪水堆積によってそれが埋没し、一定の期間を経てその埋没土の上面が乾燥して改めて遺構面が形成されるという状況が繰り返されているということである。そこで、今次調査の報告に際して、当該調査地の層序の把握として、基本的に、このような洪水堆積土と遺構面の形成を一つの単位として捉えた。つまり、土層断面柱状概念図では、現地調査時に細分層された各土層を、図5・6の註に記したように、例えば5層については「第1遺構面の基盤層　洪水堆積層」などとして大別したのである。この例で言えば、第1遺構面の下位に当たる第2遺構面までの堆積土を一括して扱っているのであるが、厳密には、これを一時に堆積した土層と考えているわけではない。同層は、幾たびかの洪水によって堆積した可能性も考えられるが、「第2遺構面を覆って後に第1遺構面の基盤となる土層」という意味で、便宜的に一括したものである。

このようにして大別した土層には、図5・6の土層断面柱状概念図と、図7～19の土層断面図とでは、土層番号および各層ごとのトーンの記号を統一して示した。また、このトーンの記号は、



1．暗灰色粘質土
〔現耕作土層〕
2．褐色系統の砂、粘質土
〔床土〕
3．褐色系統の砂、粘質土
〔洪水堆積層〕
4．褐色ないし灰色系統の砂、シルト、粘質土
〔中世の耕作遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
5．灰色ないし褐色系統の砂、粘質土、一部礫、シルト、粘土
〔第１遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
6．褐色ないし灰色系統の砂、粘土、または明灰色シルト
〔第２遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
7．橙褐色、褐色ないし灰色系統の砂、粘質土、粘土
〔第３遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕

図５　第４次調査地　南北方向　土層断面柱状概念図（１）（S.＝1/25）

8．淡茶灰色シルト、一部淡灰色礫砂
〔第４遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
9．暗灰色ないし暗褐色系統の砂、粘質土、粘土、一部シルト
〔第５遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
10．明褐色、黒褐色の粘質土、または灰色系統の砂、シルト
〔第６遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
11．黒褐色、黒灰色系統の粘質土、粘土、一部砂、シルト
〔第７遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
12．灰黒色ないし暗緑灰色系統の砂、シルト、粘質土、粘土
一部礫
〔第８遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
13．暗青灰色ないし緑灰色系統のシルト、
粘質土、砂礫、一部粘土
〔第９遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
14．青灰色粘質土
〔第10遺構面基盤層〕
〔洪水堆積層〕
15．暗灰色粘質土〔地山〕
16．暗灰色礫〔地山〕
17．青灰色礫〔地山〕
18．暗青色粘質土〔地山〕
19．淡灰色粘質土〔地山〕
20．暗青色シルト〔地山〕
21．灰白色ないし青灰色砂礫〔地山〕
22．暗緑灰色砂礫混じり粘土〔地山〕
23．緑灰色砂礫混じり粘質土〔地山〕

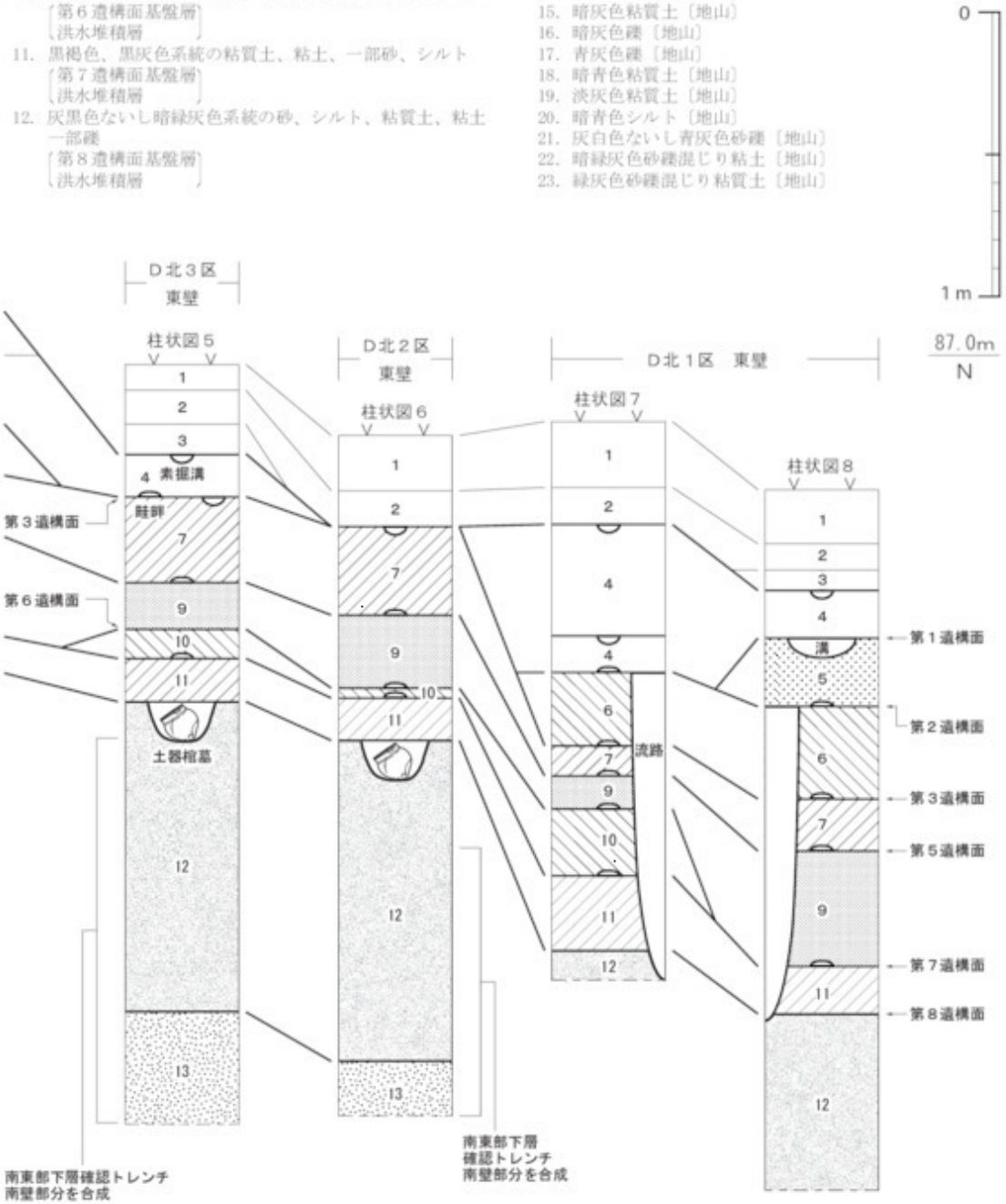


図６　第４次調査地　南北方向　土層断面柱状概念図（２）（S.＝1/25）

後述する各遺構の個別図面においても断面図を提示する際には、同じ記号を用いて遺構面と遺構の関係をわかりやすくするように努めた。

以下に、図５・６の土層断面柱状概念図に基づいて今次調査地の基本層序について述べる。

調査地の現状は、一部の例外を除き水田耕作地であった。したがって、各地点の最上層は、１層の現耕作土層、その下層の２層は耕作床土である。これより下層は、上述のように、基本的には洪水堆積層で、その大別した各層の上面に遺構面が形成されている。大別した各層の土色および土質は、類似するものが多く、灰色ないしは褐色系統の砂や粘質土、シルトなどを基本としている。ここでは、特に特徴的な土色や土質でない場合は記述を省略するので、適宜、図５・６および図７～19の註記を参照されたい。

次に、具体的に各土層について見ていく。

３層は４層上面を覆う洪水堆積層である。南４区と北区など部分的に認められた。

４層上面は中世以降の素堀溝のみが検出される耕作遺構面である。素堀溝は、基本的には調査区全体の４層の上面で検出されたのであるが、北１区・南１区・南２区などでは、４層を細分した土層の上面で、さらに２面の素堀溝の形成面がある地点があった。上記した土層の大別の原則に従えば、これらの細分層は、遺構面として独立させて整理するべきである。しかし、第４－１次調査のトレンチにおいて、中世以降の素堀溝のみが検出される面は拡張しての発掘調査は行わない、という当初からの調査方針に基づいて、これらの遺構面は、第４－２次調査以降では調査対象としていない。したがって、これらの検出状況は「第４章 第４－１次調査（トレンチ調査）の成果」で後述することとし、ここでの層位としては一括して取り扱った。

５層上面は古墳時代および中世以降の遺構の複合面である。上記のように、これより上層に存在する中世以降の素堀溝のみが検出される面は第４－２次調査の対象としなかったので、古墳時代の遺構が検出された当該遺構面を本書では第１遺構面と呼称した。

古墳時代の遺構としては、南区では流路を検出し、北１区ではピットのほか前期の土器が大量に出土した溝などを検出した。また、南３区・４区では古墳時代の流路の埋土に対して切り合い関係のある中世以降の素堀溝を検出している。

なお、第１遺構面の基盤層となる５層は、南区全体と北１区で認められるが、北２区・北３区では洪水等による攪乱・削平があったらしく、認められなかった。

６層・７層は弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面である。いずれの遺構面でも水田遺構などが検出されている。ただし、それらは調査区全体に安定的に存在するのではない。特に６層は北１区にのみ認められる土層である。このような状況からみても、遺構面の上面が幾分かは削平を受けていると考えられる。このため本来は、弥生時代後期の遺構面の上層に堆積した土層の上面に形成された古墳時代前期の遺構が、同一面で検出されるという状況があったとみられる。

６層上面を第２遺構面と呼称する。北１区の北部で水田遺構をわずかに検出したのみである。６

層自体も、北１区で確認できたのみで、これより以南では認められなかった。

７層上面を第３遺構面と呼称する。調査区全体で水田遺構を検出した。第３遺構面の基盤層となる７層は、比較的安定的に調査区の全体に存在している。

なお、北２区・北３区では、この第３遺構面で、中世以降の素堀溝が同一面で検出されている。基本的な層序としては、一部に乱れがあるものの第３遺構面の上層には弥生時代後期の第２遺構面と、古墳時代の遺構が形成される第１遺構面が存在するのであるが、特に北２区については、第３遺構面の直上に現耕作床土がみられ、それらの遺構面が存在しなかった。上記のように、当該地の土層の堆積は基本的に洪水堆積によるとみられることから、一旦形成された遺構面も様々な要因によって乱れが生じる場合があったと考えられる。

８層上面を第４遺構面と呼称する。南４区で流路を検出した。８層は、南４区・南１区の南半で確認したが他の地区では認められない。

９層上面は、弥生時代中期の遺構面である。この面を第５遺構面と呼称する。調査区全体で残存状態が比較的良好な水田遺構を検出した。

10 層・11 層上面は弥生時代前期の遺構面である。

10 層上面を第６遺構面と呼称する。北２区で水田遺構を、北１区で溝を検出した。第６遺構面の基盤層となる 10 層は北区でのみ認められ、南区では認められなかった。

11 層上面を第７遺構面と呼称する。調査区全体で残存状態が比較的良好な水田遺構を検出した。第７遺構面の基盤層となる 11 層は、土色が黒褐色ないし黒灰色を呈し、土質も粘質土または粘土を基本としてる。上層までの各層が、明褐色や灰色系統の土である状況にあって、11 層の黒褐色土は特徴的で比較的容易に識別することができた。また層厚も 40cm 程度と安定的で全調査区で認められた。このように、11 層は、比較的識別が容易な土層であり、かつ調査区全体に拡がることから、一種の鍵層として認識した。調査区を越えての層位の対応関係や層序の把握にも大いに役立つものであった。

12 層上面は縄文時代晩期後葉の遺構面である。この面を第８遺構面と呼称する。遺構の存在は北２区・北３区で顕著であり、土器片等の遺物がその遺構面上に分布している状況も部分的にではあるが確認できている。

第８遺構面の基盤層となる 12 層は、南４区の南端や北２区、北３区で粗砂が混じるところがあるが、基本的に暗青灰色から灰色系統の粘土または粘質土からなっている。ただし、12 層中でも上位にあたる遺構面近くは、ある程度土壌化が進行していて、黒褐色や暗褐色を呈している場合も多い。特に遺構が比較的多く存在した北２区や北３区ではこの傾向が顕著であった。このような土壌化による土色の変色は、遺構の検出そのものを困難にしている。結果的に、多くの遺構が本来の遺構形成面よりやや下がった高さで検出されることになった。一方で、偶然にも条件が整ったために本来の遺構面のレベルで遺構検出ができたものもあった。後述するように、同じ第８遺構面上で

検出した遺構であっても、検出面のレベルに差があるのは、このような事情による。

また、この12層は、本遺跡の北1kmの地点に存在する観音寺本馬遺跡の発掘調査報告書（木許・西村編2015）で報告した、14層に対応するとみられる。観音寺本馬遺跡の14層は灰色系統の粘土層として把握されており、その上面で、縄文晩期中葉の土器片等の遺物分布のほか土器棺や建物跡など、豊富な遺構・遺物が検出された。ただし、観音寺本馬遺跡の14層上面の遺構・遺物のあり方には粗密があって、調査区全体にそれが満遍なく存在したのではない。それでも、土質や土色が特徴的な14層は、調査対象地の至るところで見い出され、調査当時は「縄文対応層」などとも呼び、一種の鍵層のようにして調査区を超えた場合の各土層の対応関係などを把握するためにも役立てていた。

観音寺本馬遺跡の同層は、玉手遺跡の12層と土質や土色が似ている。また、このような土層は玉手遺跡に北接する茅原中ノ坊遺跡においても、部分的には存在することが確認されている。ただし、玉手遺跡のこの遺構面の形成時期は後述するように縄文晩期後葉であり、観音寺本馬遺跡のそれとは時期差があり新しい。しかし、その土質や層位的位置からみれば、この12層は、観音寺本馬遺跡の縄文時代晩期の遺構基盤層と同一層もしくは対応層と考えられるのである。すなわち、上記の調査報告書の15頁で、「縄文時代晩期の比較的長い期間において、観音寺本馬遺跡の周囲の広い範囲に上面を露出していた」とした土層が、玉手遺跡周辺ではこの12層に当たるとみられる。

12層の下層には、南区において、縄文時代中期末から後期初頭の遺構面の存在を確認した。13層および14層の上面がそれに当たる。層位的な理解によれば13層と14層は重層的に存在し、それぞれの上面が形成された時期にはやや時期差がある。

13層上面を第9遺構面と呼称する。南1区・南2区・南3区では土器埋設遺構、土坑等の遺構が検出された。南4区では遺構は見られなかったが、多量の遺物がその上面に分布することを確認した。第9遺構面の基盤層となる13層は、主として暗青灰色の粘質土からなり一部に粗砂などが混じる土層である。層厚は南1区で70cm前後と分厚いがこれより南では15cm前後の厚さになって、南区全体で確認することができる。なお北2区・北3区では調査区の一部で下層にこの13層を確認したが、これらの地点では遺構・遺物は認められなった。

14層上面を第10遺構面と呼称する。南4区で、上面での炭溜まりと土器等の遺物の分布を確認した。第10遺構面の遺構基盤層となる14層は主として青灰色粘質土からなる。同層自体が南4区の南半で認められるのみで、調査区全体には拡がらない。また、第4次調査においては、この14層に遺物が包含される兆候は認められなかったのであるが、南4区の南西隣接地にあたる新池の池底を発掘調査した第5－1次調査において、この14層に対応する層中に微量ながらも遺物が確認された。

これより下層は、おおむね青灰色を呈する粘質土、シルト、砂礫などの堆積となり、遺構、遺物等は確認されない。

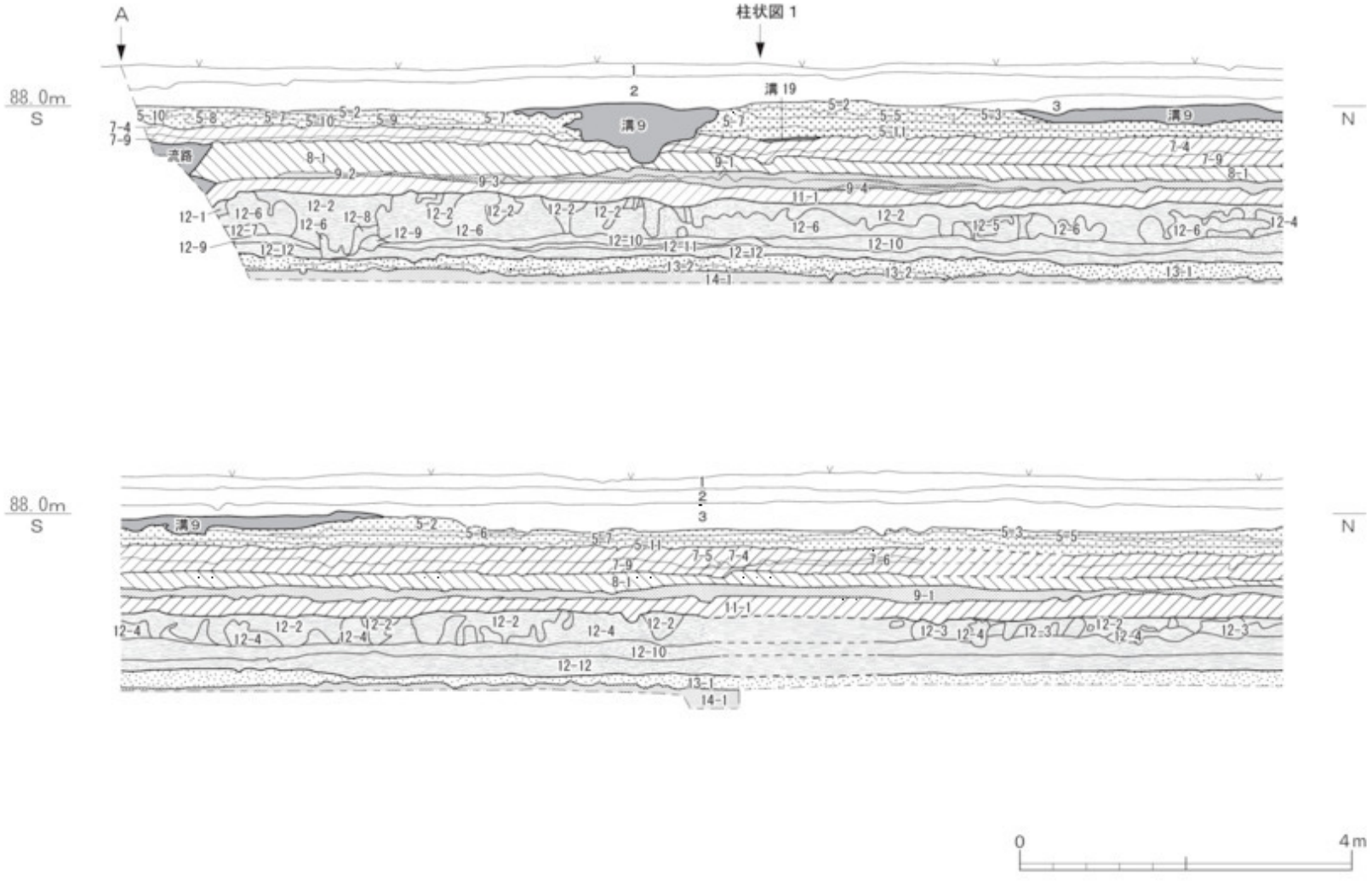


図7　南4区　東壁　土層断面図（1）（S.＝1/80）

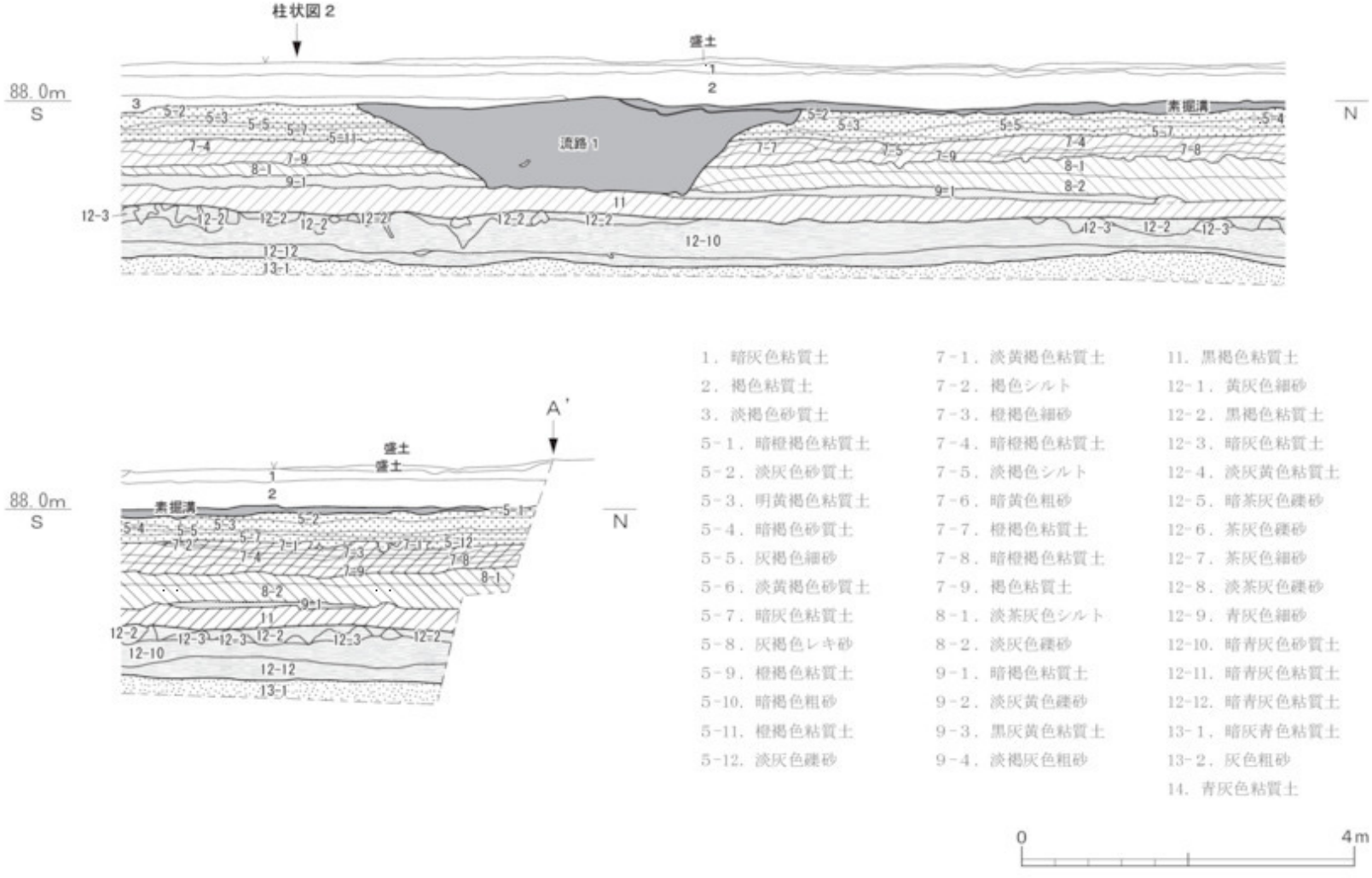


図8　南4区　東壁　土層断面図（2）（S.=1/80）

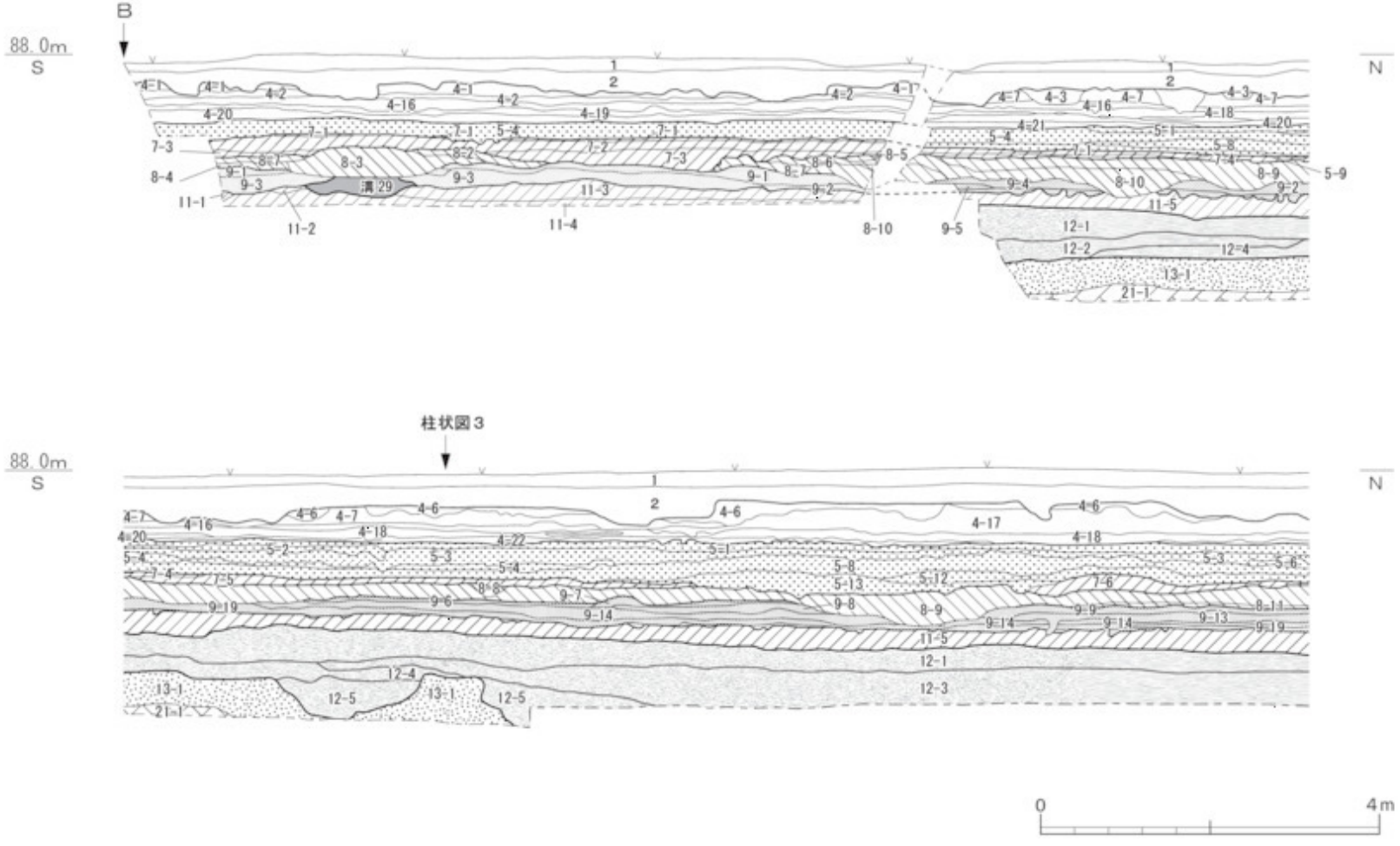
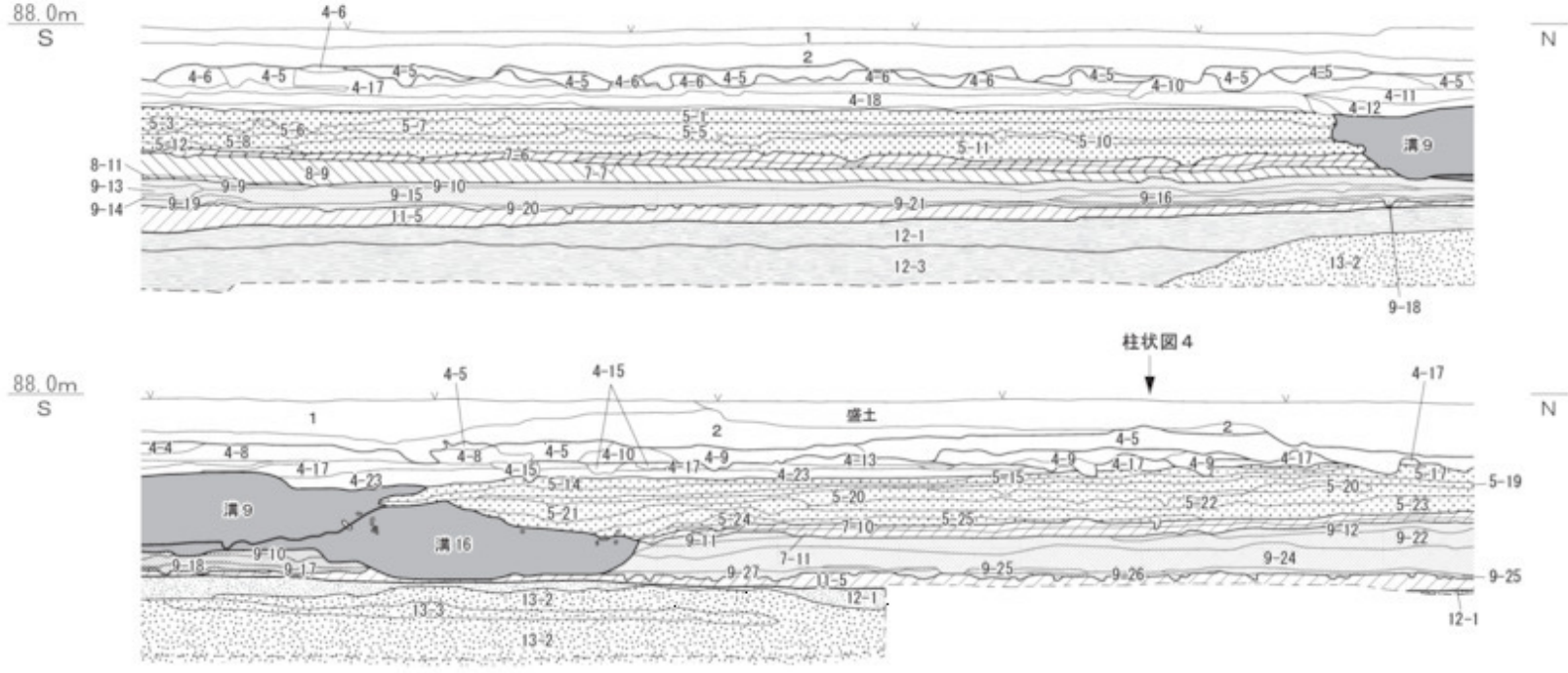
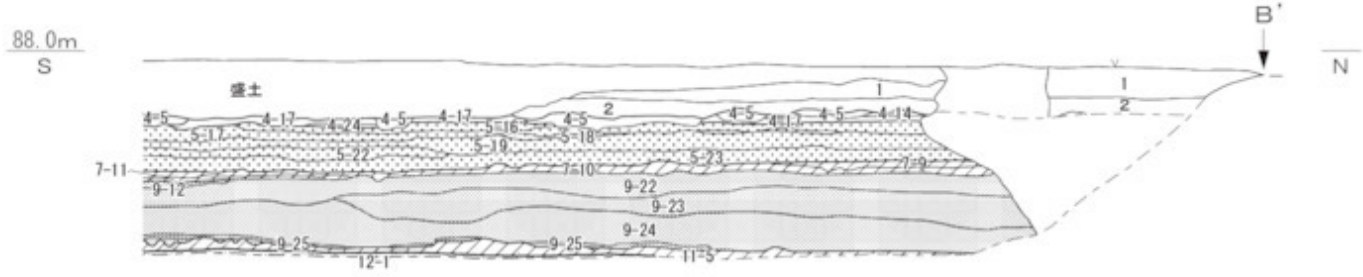


図9　南1区　西壁　土層断面図（1）（S.=1/80）



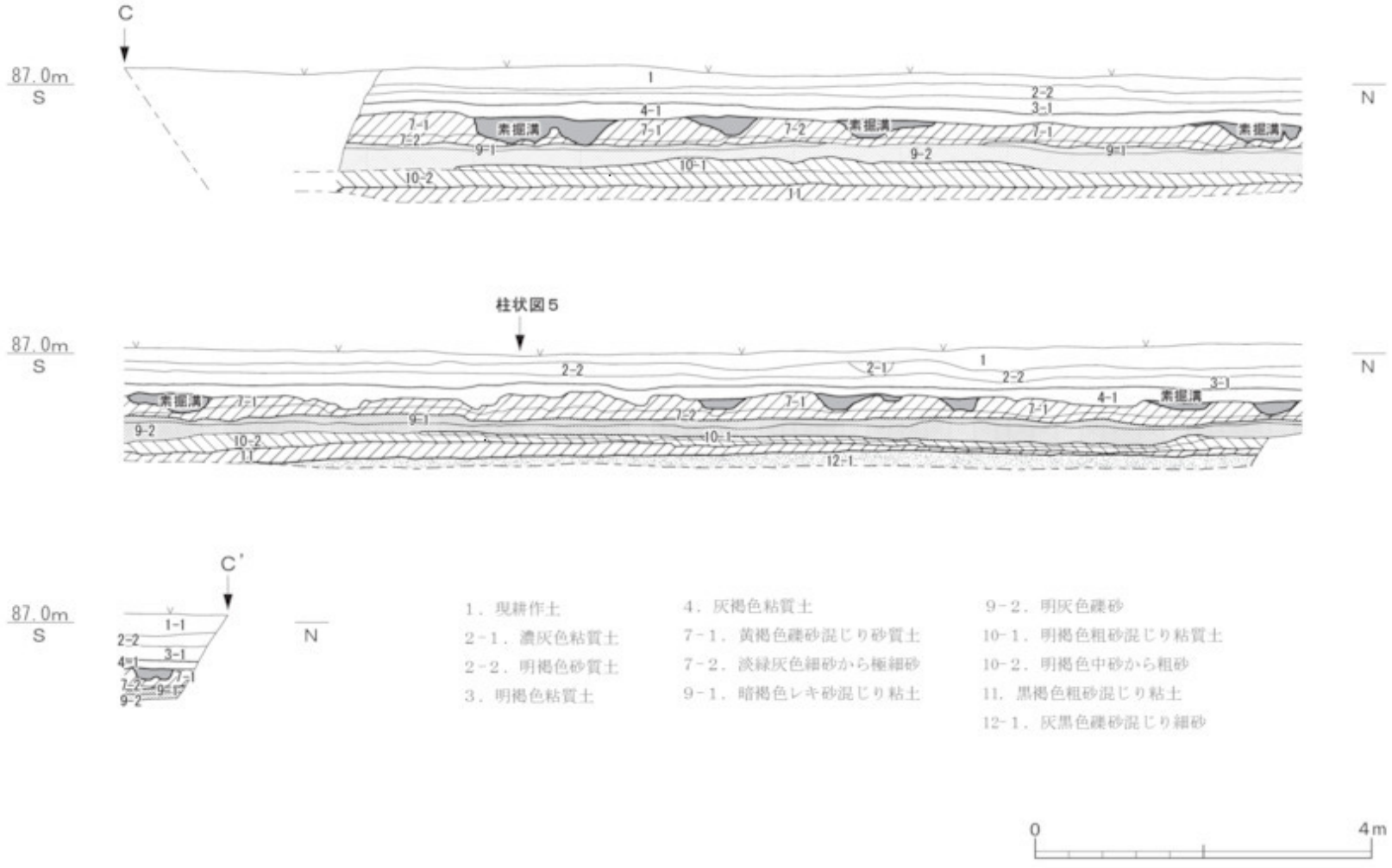
1．現耕作土
2．褐色砂質土
4-1．淡乳茶灰色微砂、シルト
4-2．緑灰色シルト
4-3．淡明褐色粘質土（Fe 沈）
4-4．明褐色砂質土
4-5．茶褐色砂質土
4-6．暗灰緑色粘質土
4-7．淡乳明褐色細砂から微砂（Fe 沈）
4-8．赤褐色砂礫
4-9．淡乳褐色砂質土
4-10．赤明褐色シルト（Fe 多量沈着）
4-11．明茶褐色砂礫
4-12．明茶褐色粗砂
4-13．茶褐色砂質土
4-14．黄白色粘質土
4-15．淡乳褐色砂質土
4-16．暗淡灰色細砂（Fe 沈）
4-17．淡黄色細砂から微砂（Fe 沈）
4-18．暗灰赤色粘土（Fe 沈）
4-19．淡乳褐色細砂から微砂
4-20．淡乳灰色粘土
4-21．褐灰色砂質土
4-22．淡黄色細砂から微砂（Fe 沈）
4-23．淡灰色細砂から微砂（Fe 沈）
4-24．淡黄色細砂から微砂と淡赤褐色粘土の混在層（Fe 沈）
5-1．茶褐色砂質土
5-2．灰色粘質土
5-3．褐色砂礫
5-4．緑灰色細砂混じり粘土
5-5．緑灰色細砂
5-6．褐色砂質土
5-7．灰色オリーブ砂礫
5-8．灰色細砂から中砂
5-9．灰色砂質土
5-10．暗灰色細砂と灰色オリーブ砂礫の混在層
5-11．暗灰色細砂
5-12．明褐色砂質土
5-13．明褐色砂礫
5-14．明淡灰色細砂から微砂

図10　南1区　西壁　土層断面図（2）（S.＝1/80）



5-15. 暗灰色細砂
5-16. 淡赤褐色粘土(Fe沈)
5-17. 淡黄灰色粘土
5-18. 明黄灰色粘土
5-19. 淡灰茶色砂質土
5-20. 灰色粘質土
5-21. 暗灰色粘質土
5-22. 暗灰緑色細砂(Fe沈)
5-23. 暗黄灰色細砂から微砂
5-24. 暗灰色細砂
5-25. 暗灰色細砂と暗黄灰色細砂～微砂の混在層
5-26. 灰緑色細砂～微砂
7-1. 灰色砂礫混じり粘質土
7-2. 暗茶灰色粘質土
7-3. 暗青灰色砂礫混じり粘質土
7-4. 暗灰色砂礫混じり粘質土
7-5. 灰色粘土
7-6. 暗緑褐色砂質土
7-7. 暗灰白色砂質土
7-8. 明灰色粘土
7-9. 暗赤灰色粘質土(Fe沈)
7-10. 明灰色粘土
7-11. 灰色粘土
8-1. 暗灰色微砂
8-2. 明灰色砂質土
8-3. 灰色砂礫
8-4. 明灰色砂質土と灰色砂礫の混在層
8-5. 灰色砂礫
8-6. 灰色砂礫とシルトの混在層
8-7. 灰色砂礫とシルトの混在層
8-8. 暗灰色砂礫混粘質土(しまり悪い)
8-9. 緑黄灰色細砂と砂礫
8-10. 明灰色細砂
8-11. 緑黄灰色細砂と砂礫
9-1. 暗灰色粘土
9-2. 灰色砂礫
9-3. 黒色砂礫混じり粘質土
9-4. 淡紫黒色粘土
9-5. 淡紫黒色粘土(青灰色細砂混入)
9-6. 淡赤黒色砂礫混じり粘土
9-7. 暗茶灰色砂質土
9-8. 黒褐色砂礫混粘土
9-9. 暗灰色砂礫混じり粘質土
9-10. 暗紫黒色粘土
9-11. 暗灰色砂礫混じり粘質土
9-12. 緑灰色細砂から微砂
9-13. 灰白色砂礫
9-14. 黒色粘土
9-15. 青灰色細砂
9-16. 青灰色粗砂
9-17. 青灰色細砂
9-18. 青白色砂礫
9-19. 濃茶色粘土(有機物堆積層)
9-20. 青灰色細砂
9-21. 青灰色シルト
9-22. 暗紫赤灰色砂礫混じり粘質土と青灰色細砂との互層
9-23. 黄灰色砂礫
9-24. 褐灰色砂礫
9-25. 青灰色細砂
9-26. 黄褐色粗砂
9-27. 青灰色粗砂
11-1. 灰白色砂礫
11-2. 灰色砂礫混じり粘質土と黒色砂礫混じり粘質土の混在層
11-3. 暗青灰色粘土
11-4. 黒色砂礫混じり粘質土
11-5. 黒色砂礫混じり粘質土
12-1. 暗青灰色細砂から微砂
12-2. 青灰色微砂混じり粘土
12-3. 暗青灰色砂礫混じり粘土
12-4. 青灰色粘質土
12-5. 青灰色微砂混じり粘土
13-1. 暗青灰色粘質土
13-2. 青灰色砂礫混じり粘質土
13-3. 青灰色粘土
21-1. 灰白色砂礫

図11　南1区　西壁　土層断面図（3）（S.＝1/80）



1．現耕作土
2-1．濃灰色粘質土
2-2．明褐色砂質土
3．明褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
7-1．黄褐色礫砂混じり砂質土
7-2．淡緑灰色細砂から極細砂
9-1．暗褐色レキ砂混じり粘土
9-2．明灰色礫砂
10-1．明褐色粗砂混じり粘質土
10-2．明褐色中砂から粗砂
11．黒褐色粗砂混じり粘土
12-1．灰黒色礫砂混じり細砂

0　4m

図12　北3区　東壁　土層断面図　（S.=1/80）

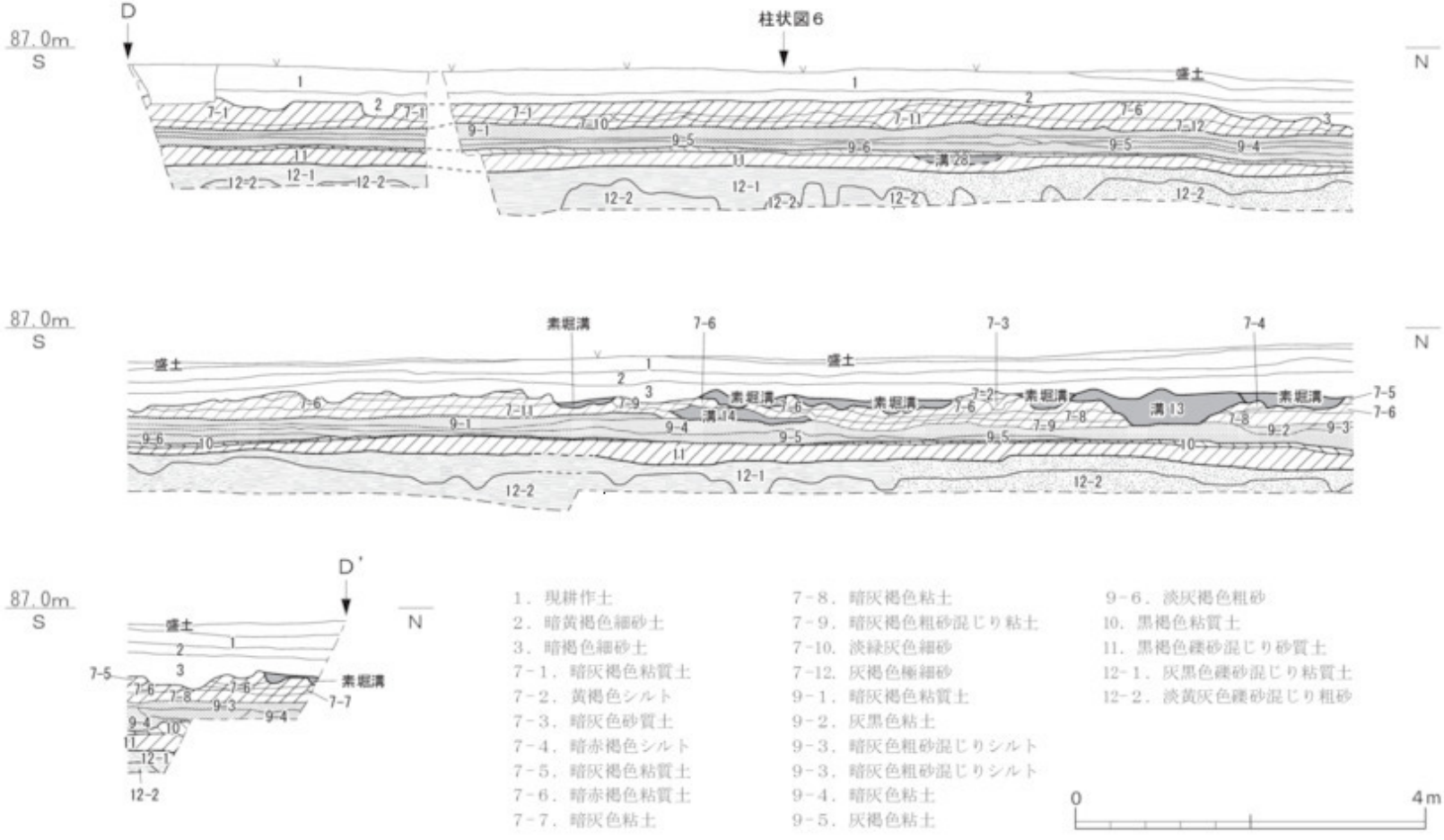


図13　北２区　東壁　土層断面図　（S.＝1/80）

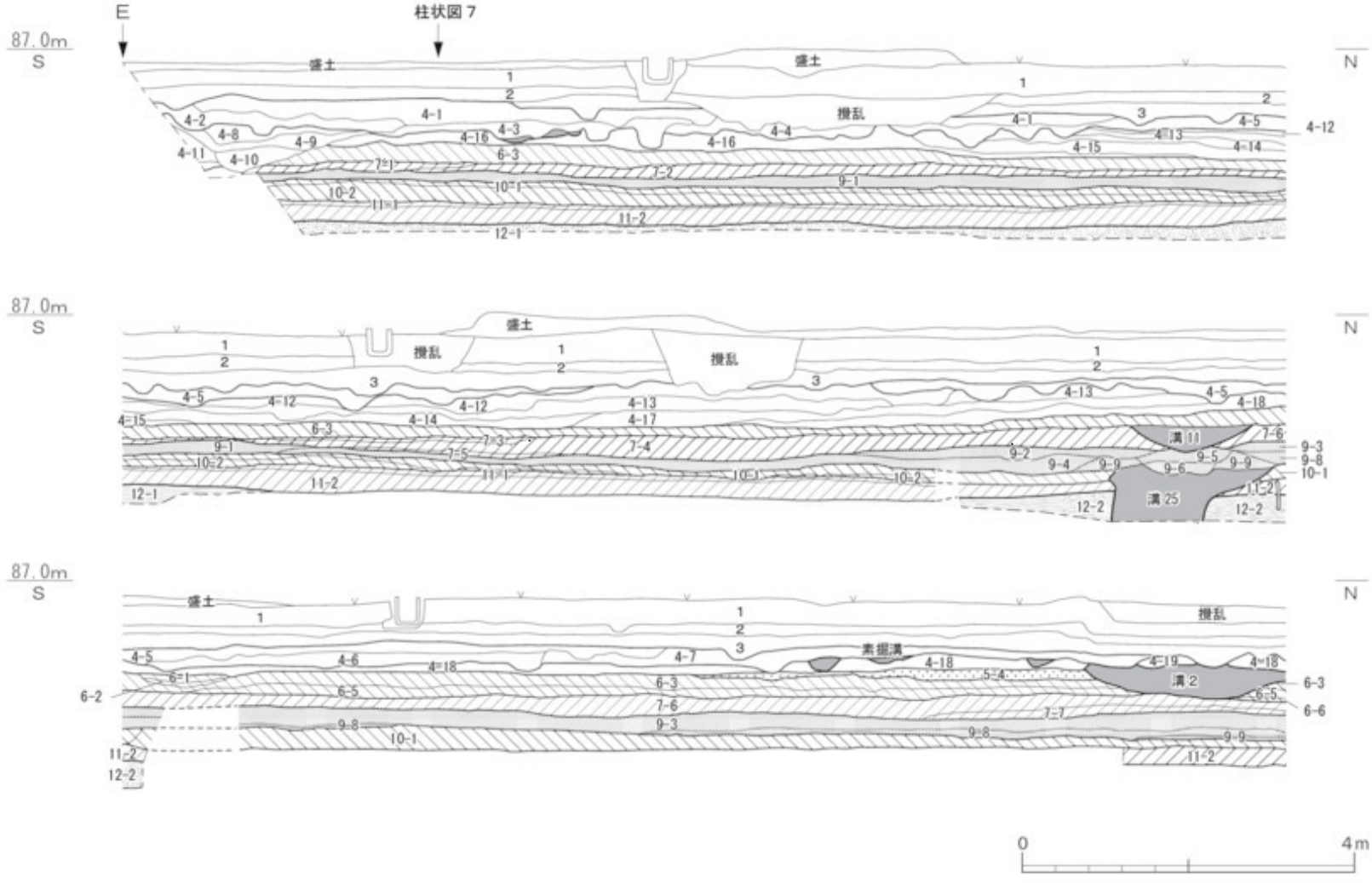
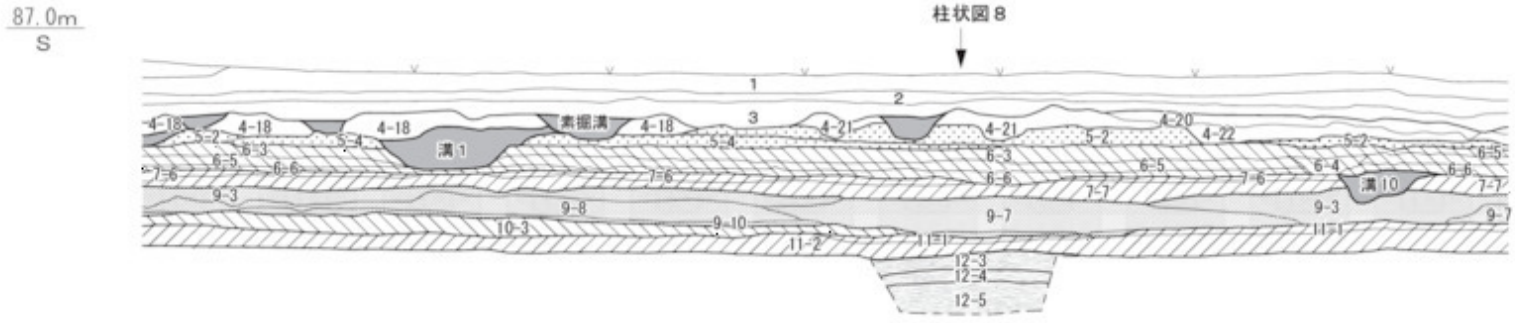
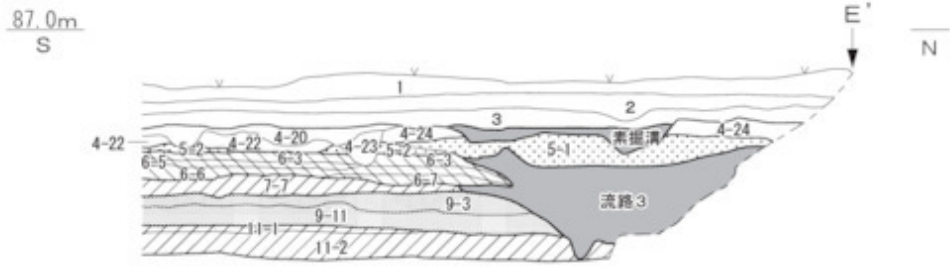


図 14　北 1 区　東壁　土層断面図（1）（S.＝1/80）

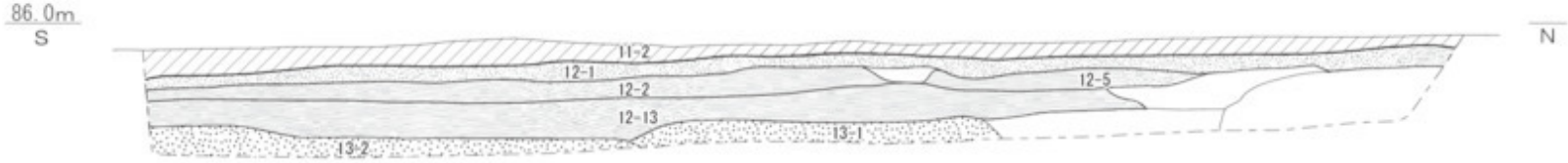




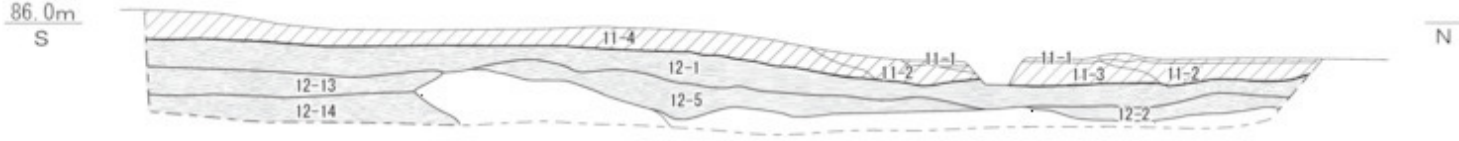
1．現耕作土
2．明褐色砂質土
3．明褐色粘質土
4-1．明褐色粘質土
4-2．灰褐色粘質土
4-3．灰黄色粘質土
4-4．暗黄褐色粘質土
4-5．淡黄褐色細砂土
4-6．黒褐色細砂混じりシルト
4-7．明褐色粘質土
4-8．灰黄色粘質土
4-9．暗灰色礫砂
4-10．灰黄色粘質土
4-11．灰黄色粘質土
4-12．暗黄褐色粘性土
4-13．橙褐色砂質土
4-14．明黄灰色シルト
4-15．淡褐色礫砂
4-16．暗褐色粘質土
4-17．灰黄色粘質土
4-18．淡褐色砂質土
4-19．灰黄色粘質土
4-20．暗褐色細砂土
4-21．暗褐色礫砂混じり細砂土
4-22．黄褐色シルト
4-23．灰黄色粘質土
4-24．灰黄色粘質土
5-1．暗赤褐色礫砂
5-2．暗赤色粗砂
5-3．灰褐色細砂
5-4．黄褐色極細砂からシルト
6-1．明黄褐色細砂
6-2．暗灰褐色シルト
6-3．暗褐色粘土
6-4．明褐色細砂土
6-5．淡褐色極細砂
6-6．暗灰褐色粘土
6-7．明黄褐色シルト
7-1．明灰色細砂
7-2．暗褐色粗砂
7-3．淡褐色極細砂
7-4．暗褐色礫混じり粘土
7-5．橙褐色砂質土
7-6．黄褐色極細砂からシルト
7-7．暗褐色粘土
9-1．淡緑灰色細砂
9-2．暗灰色粗砂
9-3．濃灰色極細砂
9-4．暗灰褐色シルト
9-5．暗青灰色極細砂
9-6．暗青灰色シルト
9-7．淡黄褐色砂礫
9-8．明黄灰色中砂から粗砂
9-9．青灰色細砂
9-10．暗灰色シルト
9-11．明灰色礫砂
10-1．暗紫灰色シルトから極細砂（ラミナ）
10-2．明黄灰色中砂から粗砂
10-3．淡黄灰色粗砂
11-1．暗紫灰色シルトから粘土
11-2．黒灰色粘土
12-1．暗緑灰色シルトから粘土
12-2．青灰色シルト
12-3．暗緑灰色粘土
12-4．緑灰色シルト
12-5．緑灰色礫砂混じりシルト

0　4m

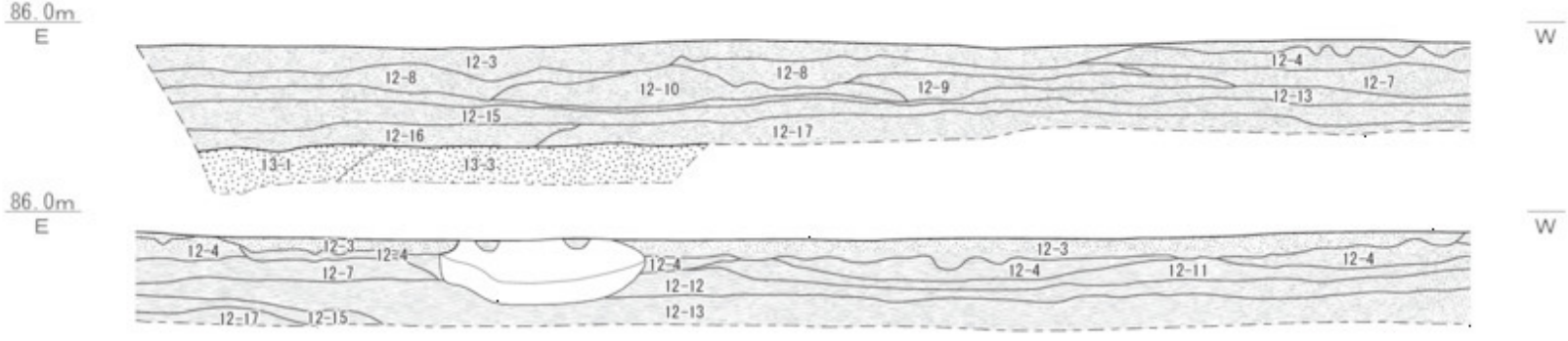
図15　北1区　東壁　土層断面図（2）（S.＝1/80）

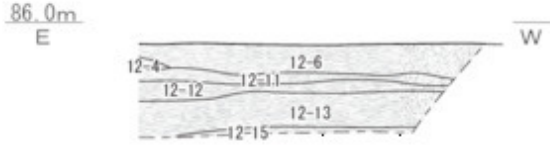


1．下層確認トレンチ２　土層断面図（北壁）



2．下層確認トレンチ３　土層断面図（北壁）

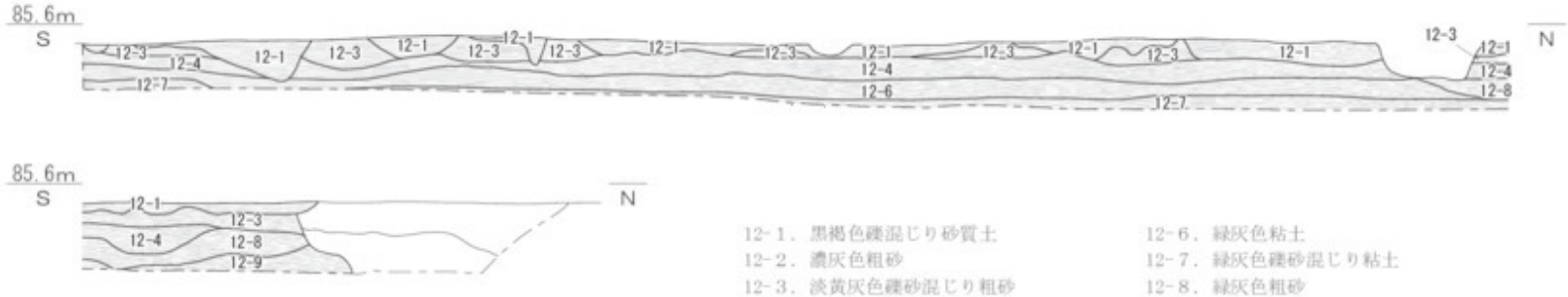




3．下層確認トレンチ８　土層断面図（北壁）

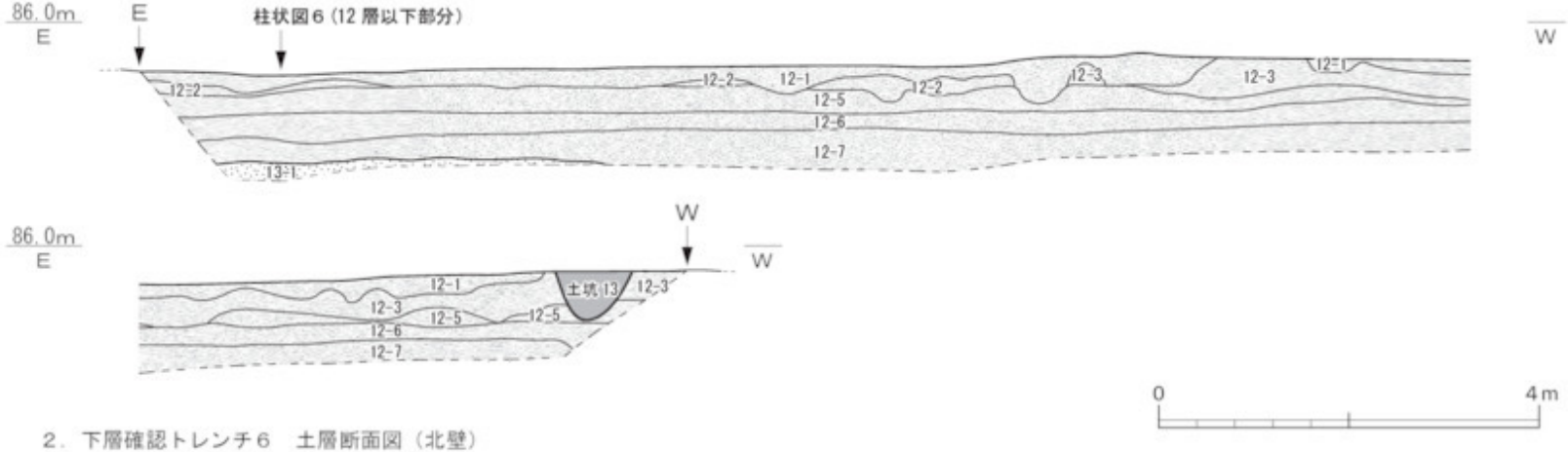
11-1．黒灰色シルト（礫砂含む）
11-2．黒灰色シルト
12-1．灰黒色礫砂混じりシルト
12-2．黒灰色シルト（礫砂多く含む）
12-3．暗褐色礫砂混じり砂質土
12-4．暗灰色粗砂混じり細砂
12-5．黄灰色砂礫
12-6．淡黄灰色礫砂混じり粗砂
12-7．明黄灰色シルト
12-8．明黄灰色シルト混じり砂質土
12-9．淡灰色礫砂
12-10．淡黄色礫砂
12-11．青灰色粗砂混じりシルト
12-12．緑灰色礫砂混じり極細砂
12-13．緑灰色シルト
12-14．暗緑灰色礫砂混じりシルト
12-15．緑灰色粘土
12-16．暗緑灰色礫混じり粘土（炭化物、土器片含む）
12-17．暗緑灰色礫混じり粘土
13-1．緑灰色礫砂混じり細砂
13-2．緑灰色極細砂からシルト
13-3．緑灰色粗砂混じりシルト

図16　下層確認トレンチ２・３・８（北３区）　土層断面図　（S.＝1/80）



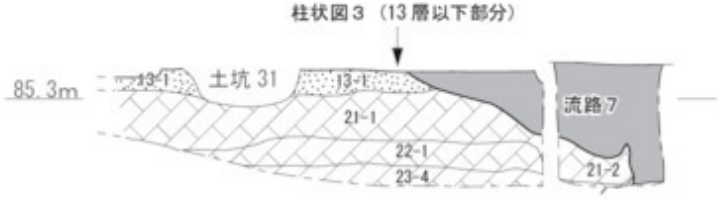
1．下層確認トレンチ５　土層断面図（北壁）

12-1．黒褐色礫混じり砂質土
12-2．濃灰色粗砂
12-3．淡黄灰色礫砂混じり粗砂
12-4．淡青灰色礫砂
12-5．緑灰色シルト
12-6．緑灰色粘土
12-7．緑灰色礫砂混じり粘土
12-8．緑灰色粗砂
12-9．淡緑灰色粗砂
13-1．淡緑灰色細砂混じり礫砂

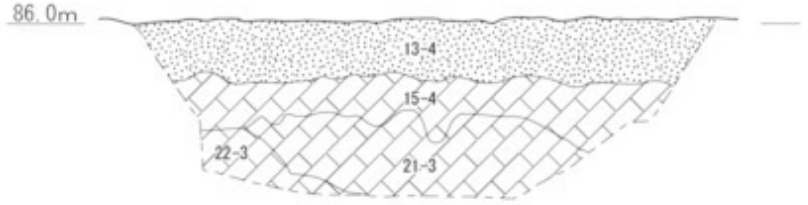


2．下層確認トレンチ６　土層断面図（北壁）

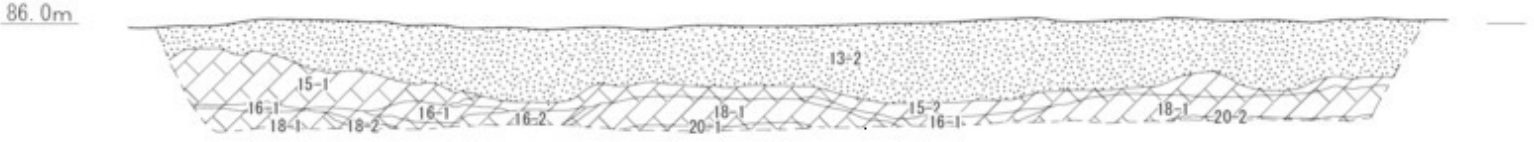
図 17　下層確認トレンチ５・６（北２区）　土層断面図　（S.＝1/80）



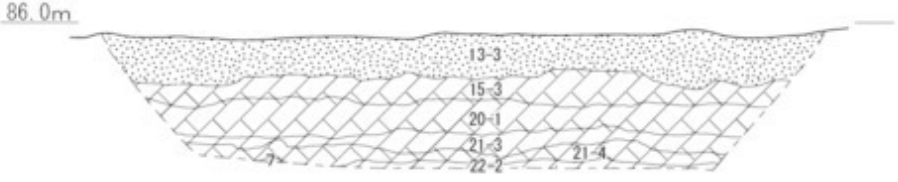
1．下層確認トレンチ９（南１区） 土層断面図（南壁）



4．下層確認トレンチ 12（南３区） 土層断面図（東壁）



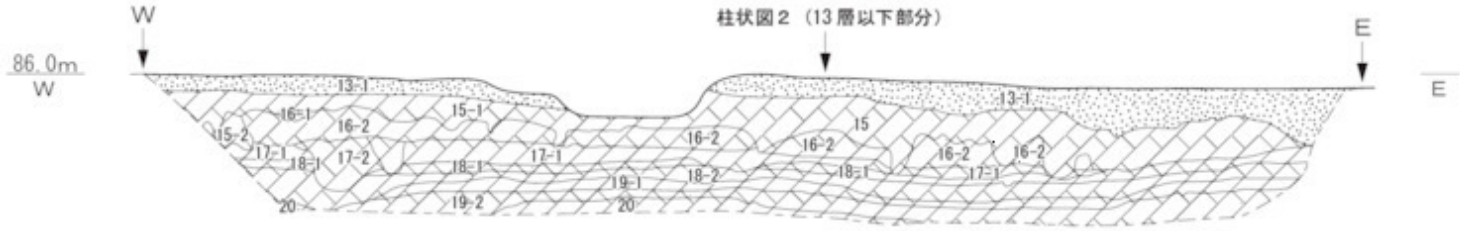
2．下層確認トレンチ 10（南３区） 土層断面図（西壁）



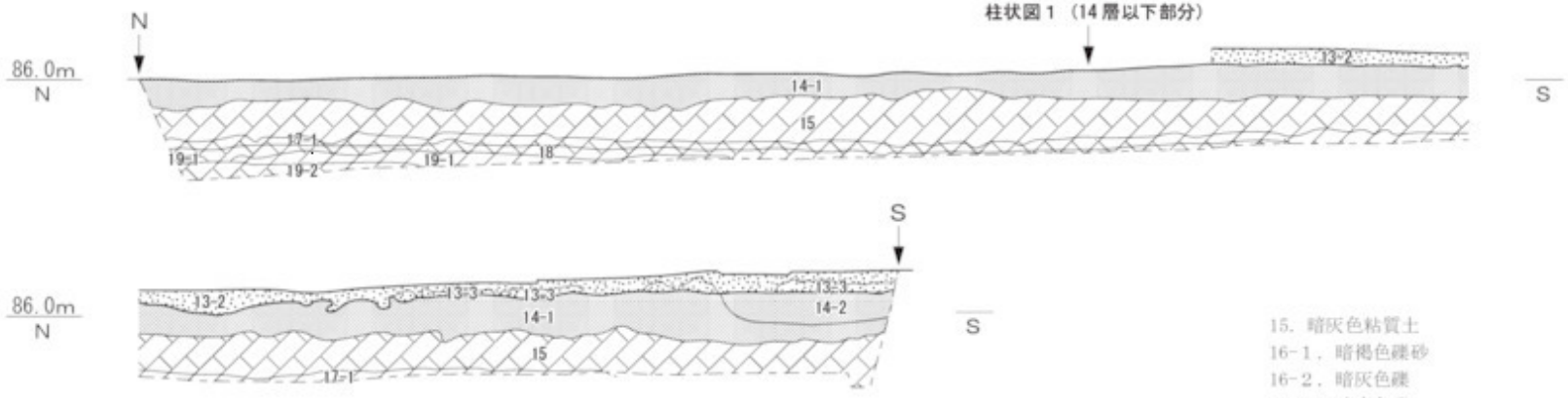
3．下層確認トレンチ 11（南３区） 土層断面図（東壁）

13-1．暗青灰色砂礫（炭化物少し混じる）
13-2．淡黄褐色砂礫混じりシルト
13-3．青灰色粘土（砂礫多く混じる）
13-4．淡青灰色砂礫混じり粘土
15-1．黄灰褐色粘砂
15-2．青灰色シルト
15-3．暗灰色砂礫混じり粘砂土
15-4．暗灰色粘土（砂礫多く含む）
16-1．青褐色粗砂
16-2．黄褐色粗砂
18-1．青褐色粘砂土
18-2．黄褐色粘砂土
18-3．淡灰色細砂
20-1．青灰色砂混じり粘土
20-2．灰色粘土
21-1．青灰白色砂礫
21-2．青黒色砂質土
21-3．灰色礫砂
21-4．灰色粗砂
22-1．暗緑灰色砂礫混粘土
22-2．灰色粘砂土
22-3．暗灰色粘土
23-4．緑灰色砂礫混粘質土

図18　下層確認トレンチ９～12（南１・３区） 土層断面図 （S.＝1/80）



1．下層確認トレンチ 13　土層断面図（北壁）



2．下層確認トレンチ 14　土層断面図（東壁）

13-1．黒灰色粘質土（礫多く含む）
13-2．暗灰青色粘質土
13-3．灰色粗砂
14-1．青灰色粘質土
14-2．青灰色粘質土（礫多く含む）
15．暗灰色粘質土
16-1．暗褐色礫砂
16-2．暗灰色礫
17-1．暗青色礫
17-2．淡灰色礫
18-1．暗青色粘土
18-2．暗青色粘土（礫混じる）
19-1．淡灰色粘質土
19-2．淡灰色粘質土（礫多く含む）
20．暗青色シルト

0　4m

図19　下層確認トレンチ 13・14（南４区）　土層断面図　（S.＝1/80）

第４章　第４－１次調査（トレンチ調査）の成果

第１節　北１区

１．１トレンチ（図４・図 20・21）

北１区の北西端に、長さ 28.6 m、幅 5.8 mの北東－南西方向の長方形の１トレンチを設けた。基本層序は、図 20 の土層図に示したように、現耕作土の１層、床土の２層、中世以降の耕作面基盤層の４層、第２遺構面基盤層の６層、第３遺構面基盤層の７層、第５遺構面基盤層の９層、第８遺構面基盤層の 12 層、第９遺構面基盤層の 13 層の順に堆積している。遺構は４層、７層の各上面で検出した。

ただし、４層については中世の素掘溝が検出されたのであるが、その上面だけではなく４層を細分層した土層の上面においてもそれを検出している。すなわち、当該期の素掘溝は合計２面の遺構面として認識、検出されたものである。上層の素掘溝は下層の素掘溝が洪水などによって埋没した後に、その土層の上面に形成されたもので、一旦耕作地が荒れた後もその沖積土上で、繰り返し同様な耕作が行われたことが窺える。素掘溝の規模は、上・下層ともに幅約 10 ～ 20㎝、深さ約 10 ㎝である。

７層上面では、流路３をトレンチのほぼ全域で検出した。流路３は北東－南西方向に延び、深さは最深部で約 1.9 mである。比較的深さが深い遺構であるため、７層より下位の土層を攪乱しており、特にトレンチの南半は縄文時代後期の遺構基盤層である 13 層にまで達していて、これらを削平している。

トレンチの南端部では、流路３の底面に設置された堰１を検出した（図 21）。堰１は杭列の方向は東西方向に延びている。流路３自体の方向は、このトレンチ調査ではその全容を把握できなかったのであるが、「第５章　第４－２次調査の成果」で後述するとおり、７層上面を面的に検出した第４－２次調査の結果によれば、北東－南西方向に延びるものである。したがって、流路３に伴う堰１は、水流に対して直交するのではなく、斜交する状態で構築されたことになる。

堰１には横木等が確認できず、杭のみが残存していた。現地で作成された図面や調査写真を確認すると、堰１に用いられた杭のうち 20 本が杭材の形状を維持した状態で残存したことが見て取れ、この20本とは別に35本分の杭の痕跡が褐色粘土化した状態で存在したことがわかる。その状況は、195 頁の図 150・151 として提示した。また、残存した杭 20 本のうち、19 本が取り上げられていたので、それらの形状等の観察結果は別表４に掲げた。

流路３からのその他の出土遺物は、杭列の北側の流路底でほぼ完形の畿内第Ⅴ様式の弥生土器甕（164 － 1）があったが、流路内出土土器として最も新しいものは、布留式期のものであった。このことから、流路が埋没した時期については古墳時代前期であると考えられる。

上記のように流路３が比較的深さの深い遺構であり、かつトレンチの大部分を占めていたために、

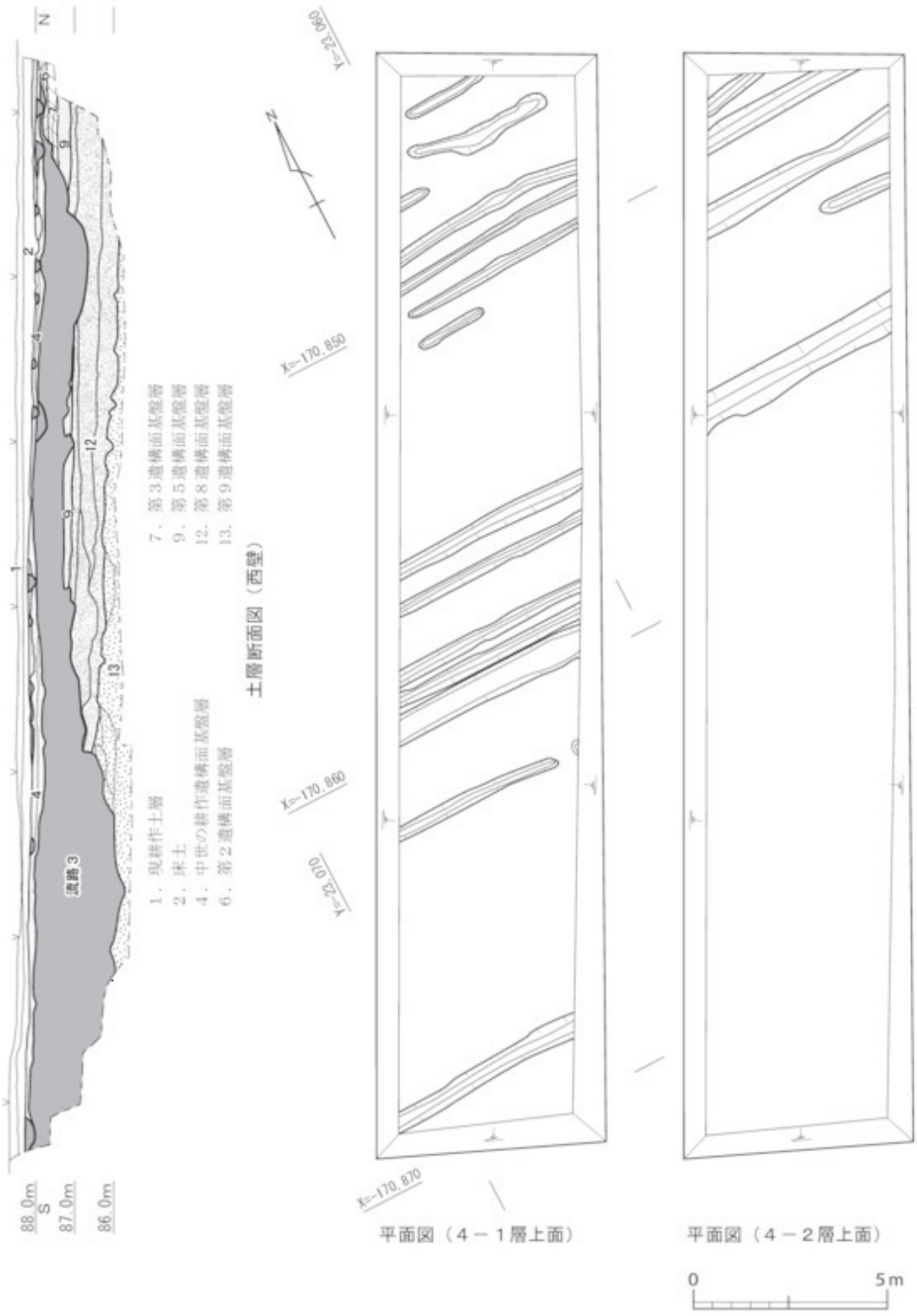
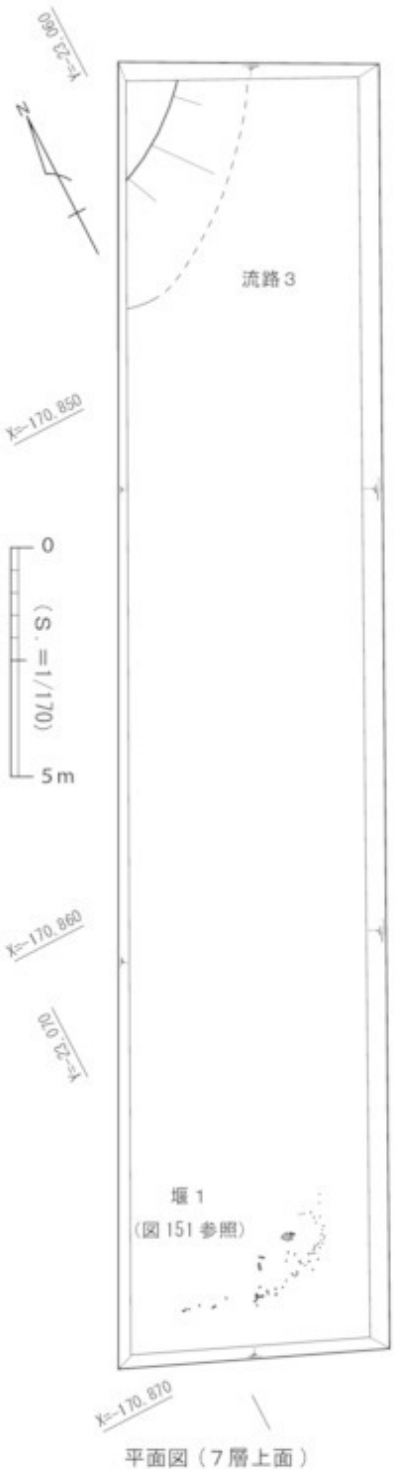


図20　北1区　1トレンチ　平面図（1）・土層断面図　（S.＝1/170）



平面図（７層上面）

図21　北１区　１トレンチ　平面図（２）
（S.＝1/170）

下層の確認が困難な状況であった。しかし、トレンチ北端部付近で流路３の外側に当たる土層がわずかに確認され、現地表面から約 2.5 mの深さに当たる 12 層中で縄文土器片が出土した。小破片であったため詳細な時期の特定には至らなかったが、少なくとも、この土器片が出土した 12 層が、縄文時代の遺物包含層であることが確認できた。

２．２トレンチ（図４・図 22）

２トレンチとして、北１区の北東端に南北 27.8 m、東西 6.2 mの長方形のトレンチを設けた。基本層序として１層から７層までの各土層を確認し、遺構は４層上面、５層上面、７層上面でそれぞれ検出した。なお、後述するように、２トレンチでは、５層上面での遺構の検出を主体とし、一部７層上面まで掘り下げた箇所があるが、基本的には遺構面を保全したうえで面的な調査に移行するために下層の掘削を行っていない。

４層上面では多数の素掘溝を検出した。素掘溝は基本的には東西方向に互いに平行して延びている。規模は幅 50cm、深さ 10 ～ 20cm 程度のものが多い。しかし、図 22 の平面図（４層上面）に示したように、トレンチの北端部付近で同様の溝ながら、北東－南西方向の１条の溝が東西方向の溝に重なって検出されている。本来切り合い関係があって、いずれかの方向の溝が新しいものであるが、残念ながら現地調査において一気に埋土が除去されたらしく、その先後関係に関する記録が残されていなかった。また、東西方向の溝の規模については、一部に幅 1.3 m程のものも認められる。これらは、ほかの素掘溝よりも規模が大きいので、それらと同様の性格を有したものか疑問であるが、掘削される方向は同じで平行している。大きな幅のものとして検出された溝については、２条の溝が区別できずに埋土除去されている可能性もまったくないとは

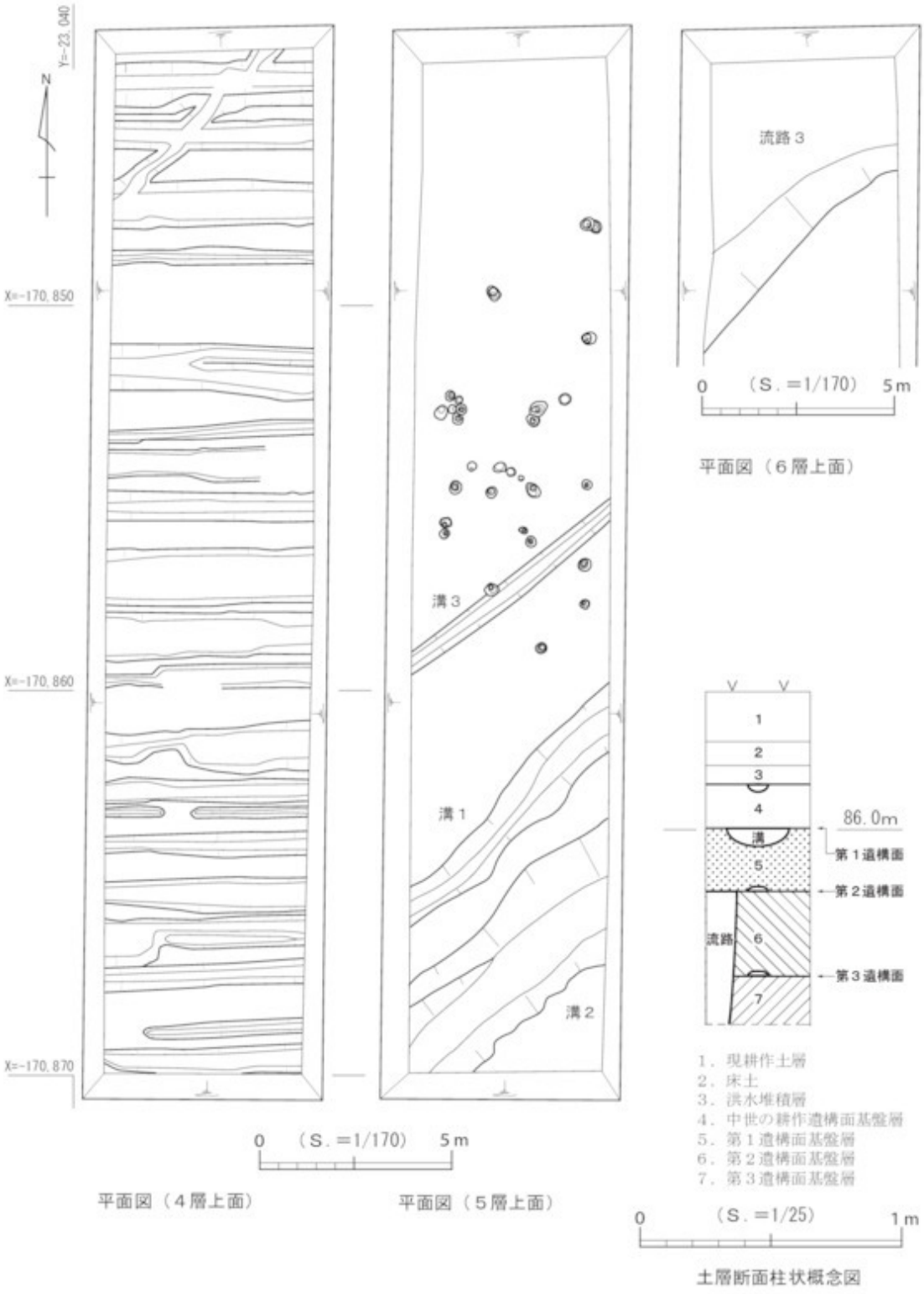


図22　北１区　２トレンチ　平面図　（S.＝１/170）・土層断面柱状概念図　（S.＝１/25）

言えない。

5層上面では溝3条、ピット29基を検出した。ピットはトレンチの中央付近で検出されている。図22の平面図（5層上面）に示したように、ピットの一部は溝3を切っており、両者の先後関係が確認できる。またピット間においても切り合い関係が確認できることから、当該遺構面上のピットは一度に形成されたものではなく、一定の時間幅の中で複数回にわたり設けられたと考えられる。ピットの規模は直径約30cm、深さ約15～25cmである。検出したピットのほとんどに柱痕が認められたが、規則的な配列を見いだすことができず建物配置の復原はできなかった。各ピットの詳細図は第4－2次調査の調査成果と合わせ、図50～58(74～82頁）に掲げ、その規模も同様に表2に掲げているので参照されたい。

5層上面の3条の溝は北東－南西方向にそれぞれ平行して延びている。検出長は6.5～7.3mである。北から順にみると、溝3は幅約60cm、深さ約20cm、溝1は幅90～120cm、深さ30～50cmで、溝2は幅2.0～2.5m、深さ約40cmである。

出土遺物は、溝1、溝3では検出されなかったが、溝2から古式土師器を中心とした土器が多数出土した。特に、その半数以上を完形もしくはそれに近い状態の高杯が占めていた。このような検出状況は特異なことであり、器種を選別したうえで人為的に土器が投棄されたことを窺わせた。土器の出土状況は第4－2次調査の成果と合わせ、「第5章　第4－2次調査の成果」で詳述する。なお、これらの遺物は溝2の「1区」出土遺物とし、図化可能であったものを図81－1～図87－63として掲げている。

次に5層より下層については、遺構がやや希薄であったトレンチ北端付近で掘削を行うことで確認作業を進めた。その結果6層上面で、1トレンチで検出した流路3の延長部分を検出した。当該トレンチで検出した箇所はその南東岸の一部である。検出深さは、この部分では約1.5mであった。

当該トレンチにおいては、上記のような遺構の検出状況から、5層上面については第4－2次調査で面的に調査を実施することとし、一部を除いて下層までの掘削は行わなず、遺構面保全のために埋め戻した。

3．3トレンチ（図4・図23）

北1区の中央の西端に南北6.3m、東西6.2mの方形のトレンチを設けた。基本層序は1層、2層、4層の各土層を確認した。4層上面で素掘溝を検出した。また、その4層を除去した高さで、トレンチ1で検出した流路の延長である流路3の埋土上面を検出した。

4層上面の素掘溝は、図23の平面図（4層上面）に示すように、東西方向に互いに平行して延びている。その規模は、深さ10cmほどで、幅は約30～50cmのものが主体をなすが、一部に85cmと幅がやや広いものがある。これらは同様の素掘溝であるが、幅の違いによってその性格に違いがあるのか明確ではない。

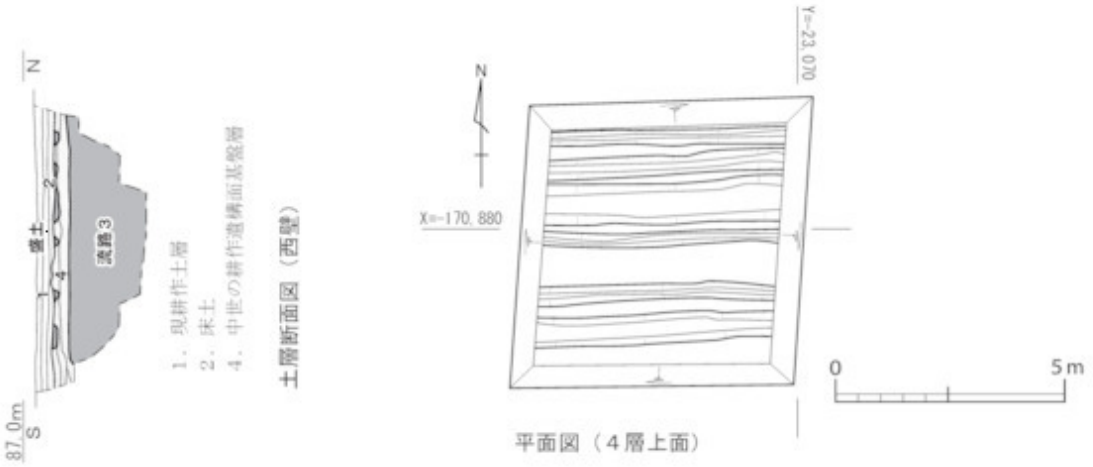


図23　北1区　3トレンチ　平面図・土層断面図　（S.＝1/170）

次に、4層を除去すると流路3の埋土上面が検出できた。この部分での4層の厚みは約40cmであった。流路3は7層上面に形成される遺構であるが、当該トレンチでは流路3がトレンチの全域に及んでいるため、土層としては7層を検出できなかったのである。

流路3の埋土を除去し、深さの確認をおこなったが、現地表面から約2.9 m下層まで掘削しても、その底の検出には至らなかった。当該トレンチは6.3 m×6.2 mの面積の狭いトレンチであり、これ以上の掘削は危険作業になると判断し、この深さで掘削を終えた。

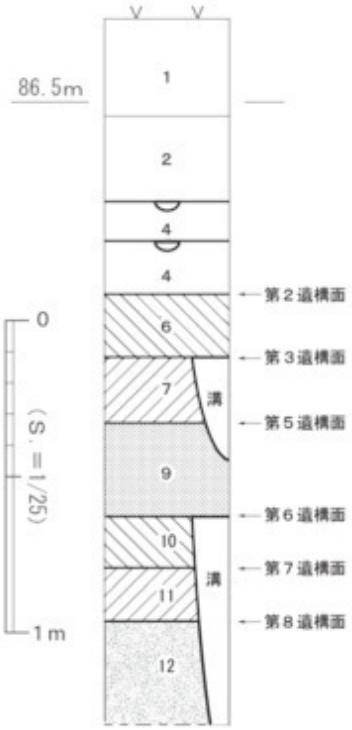
4．4トレンチ（図4・図24）

北1区の中央の東端に南北6.7 m、東西10 mの長方形の4トレンチを設けた。基本層序は、1層から12層までの各土層を検出したものの、3層、5層、8層は何らかの削平を受けたようで認められなかった。なお、11層以下はトレンチの南端部を拡張し、深堀をおこない基本層序の確認をおこなった。遺構は4層、7層、10層の各上面で検出した。

4層上面で素掘溝を多数検出した。深さ10～20cmで、幅は30～90cmのものがある。それらは東西方向に延び、互いに平行しているが、図24の平面図（4層上面）にみえるように、北東－南西方向の1条の溝が東西方向の溝と斜交している。ただし、切り合い関係に関する記録が残されていなかったため、現状ではその先後関係は不明である。

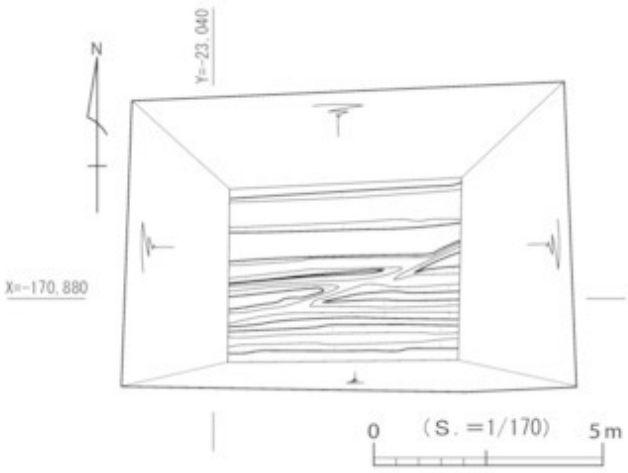
7層上面では溝11を検出した。溝11は北東－南西方向に延び、幅約85cm、深さ約30cmである。埋土は細砂とシルトの2層が堆積するのみで、比較的流れの緩やかな溝であったとみられる。出土遺物はなかった。

10層上面では溝25を検出した。溝25は北東－南西方向に延びるもので、幅0.8～1.2 m、深さ60～70cmである。また、その北岸の上端に沿って打たれた3本の杭を検出した。これらは、溝25に伴う護岸杭列とみられる。この3本のほか、トレンチの壁際で1本の杭が検出されており、

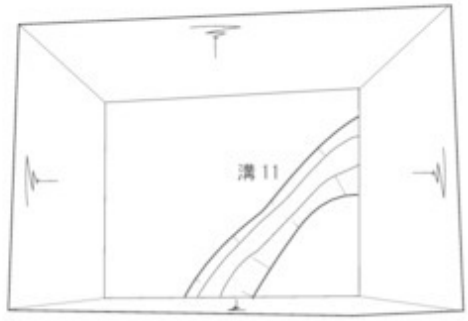


1．現耕作土層
2．床土
4．中世の耕作遺構面基盤層
6．第２遺構面基盤層
7．第３遺構面基盤層
9．第５遺構面基盤層
10．第６遺構面基盤層
11．第７遺構面基盤層
12．第８遺構面基盤層

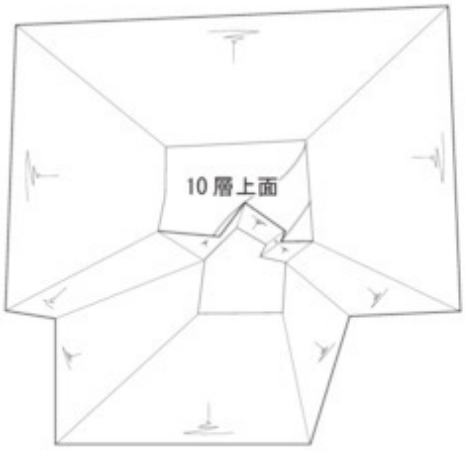
土層断面柱状概念図



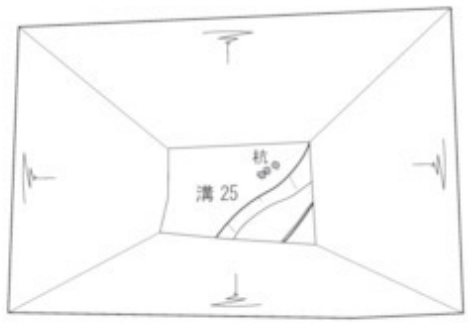
平面図（４層上面）



平面図（７層上面）



平面図（下層確認）



平面図（10 層上面）

図 24　北１区　４トレンチ　平面図　（S.＝１/170）・土層断面柱状概念図　（S.＝１/25）

この周辺では合計４本の杭が検出されている。そのうちの護岸杭らしき３本については取り上げられていたので、形状等の情報については別表４（別表４－827～829）に記した。

10層より下層の状況については、溝25の一部を壊すことになったが、トレンチの南端を拡張して深堀を行った。この結果、10層上面から約20cm下層で11層を、そこからさらに10～20cm下層で12層を確認した。両層とも遺構・遺物は認められなかった。

５．５トレンチ（図４・図25）

北１区の西南部に南北9.7 m、幅5.9 mのトレンチを設けた。平面形は調査区の形状に合わせて平行四辺形とした。

基本層序は１層、２層、４層を検出した。

４層上面で、東西方向に互いに平行して延びる６条の素掘溝を検出した。それらの規模はおおむね幅約35㎝、深さ約10 mほどである。

この４層を除去すると、１トレンチや３トレンチで検出した流路の延長である流路３の埋土の上面を検出した。この部分での４層の厚さは約30cmであった。流路３は７層上面に形成された遺構であるが、前述した３トレンチと同様に、この地点での流路３は当該トレンチの全体に及んでいるために、土層として７層自体を検出することはできなかった。この流路が流路３の延長であるとの認識は後の第４－２次調査の成果などによるものである。

次に流路３の埋土を除去していくと、トレンチの南半でこの流路に伴うとみられる杭列が出土し

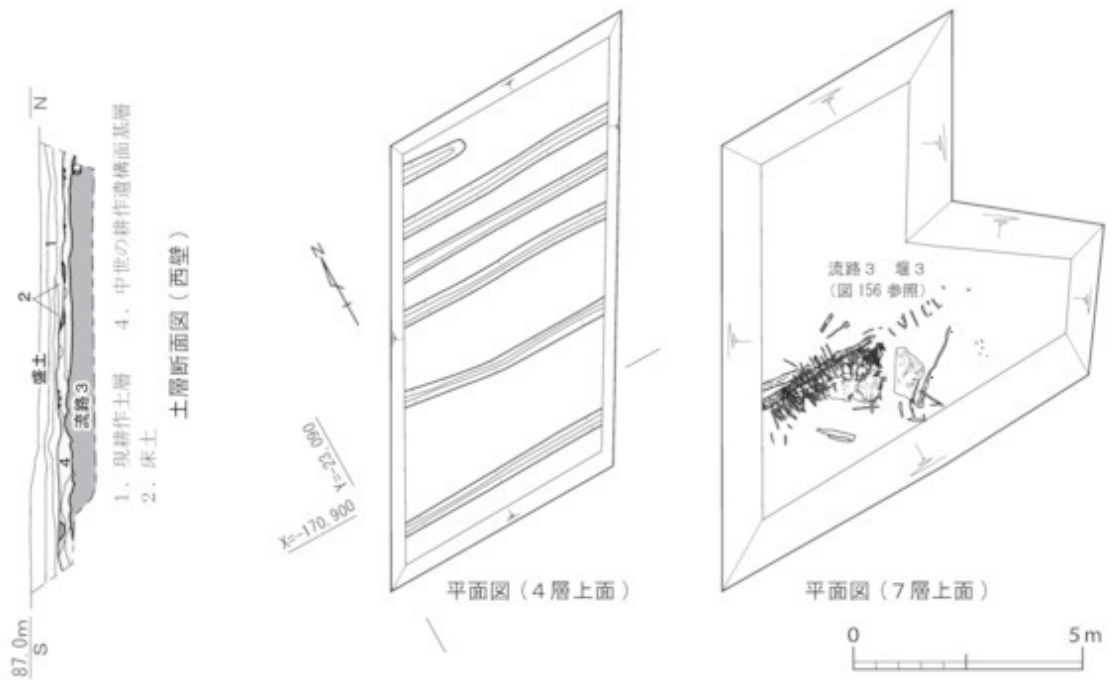
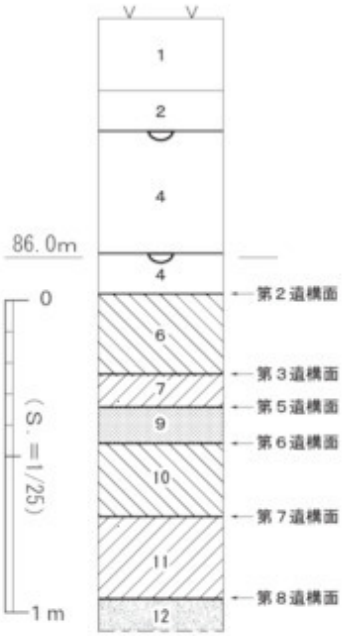


図25　北１区　５トレンチ　平面図・土層断面図　（S.＝1/170）

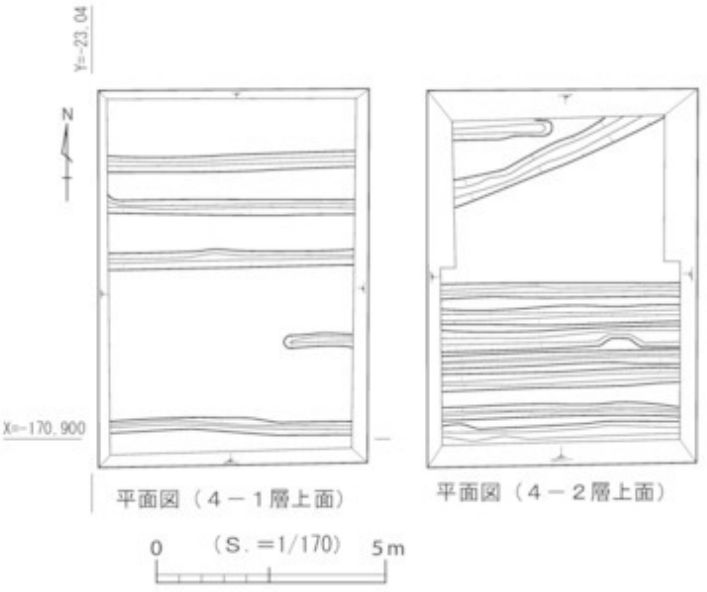
た。杭列は、全体に北方向に倒れた状態であったが、横木や、杭列の南側に貼り付いた状態の樹皮状の植物繊維などとともに柵状の遺構を形成していた。特に植物繊維が検出された地点では、杭列が１列だけではなく、幅１mほどの帯状の範囲に２列、３列と丁寧に列を重ねている様子も窺えた。この遺構の全容を把握するために、図25の平面図（７層上面）に示したように、トレンチの南東部を東方向に約３m拡張した。その結果、上記の杭列は長さ4.5 m程に及び、その南方向にも何らかの施設が存在していることがわかった。

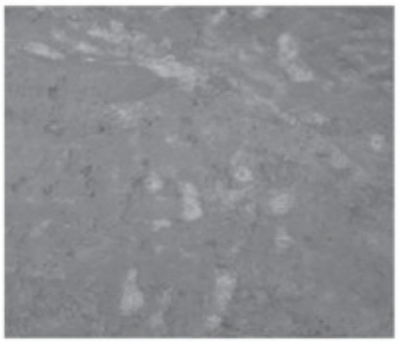
そこで、トレンチ調査としては一旦ここで調査を中断し、木製杭の養生を万全にしたうえでこれを埋め戻して、第４－２次調査で調査区を全面的に拡張して再検出することとした。したがって、当トレンチにおいては、これより下層の確認はこの時点では行っていない。また、上記の杭列等の出土状況の詳細は、「第５章　第３節　第３遺構面」の該当項で後述する。



1．現耕作土層
2．床土
4．中世の耕作遺構面基盤層
6．第２遺構面基盤層
7．第３遺構面基盤層
8．第４遺構面基盤層
9．第５遺構面基盤層
10．第６遺構面基盤層
11．第７遺構面基盤層
12．第８遺構面基盤層

土層断面柱状概念図





足跡遺構　東から（11層上面）

図26　北１区　６トレンチ　平面図　（S.＝1/170）・土層断面柱状概念図　（S.＝1/25）

6．6トレンチ（図4・図26）

北1区の南東部に南北8.2 m、東西5.9 mの方形のトレンチを設けた。1層から12層までの各土層が確認されたが、この地点では3層、5層、8層が確認されなかった。遺構は4層と11層の各上面で検出した。

4層では素堀溝を検出した。ただし、図26の平面図に示したように、4層の素掘溝はその最上面だけではなく4層を細分層した土層の上面においても検出された。つまり、当該期の素掘溝は合計2面の遺構面として認識、検出されている。素掘溝の規模は、上・下層ともに幅約10～20㎝、深さ約10㎝のものが複数条検出された。基本的に東西方向のものが互いに平行して延びているが、4－2層上面では、トレンチの北半でこれらとは平行しない北東－南西方向に延びる溝が1条検出されている。

4層上面から約1.1 m下層において11層を検出し、その上面で人間の足跡を多数検出した。その状況は図26中に写真で示した。11層は「第3章　基本層序」で前述したように、黒褐色ないし黒灰色の土色であったが、その上面は、特にこの地点では灰色系統の砂層となる10層で覆われていた。このため、11層上面に刻まれた足跡の埋土は黄灰色砂質土となっていたので、遺構面そのものの検出に加えて、遺構埋土の識別が比較的容易であった。これらの足跡は水田遺構に関連する可能性が高いが、当該トレンチで畦畔は検出されなかった。

11層より下層の確認については、現地表面から2.3 mの深さまで掘削し、側溝を利用して壁面を中心に精査した。結果的に、12層に対応する層を確認したが、この地点において遺物・遺構は認められなかった。

7．7トレンチ（図4・図27）

北1区6トレンチの南約2 mに1辺6 mの方形のトレンチを設けた。基本層序は1層、2層、4層、6層の各土層を確認した。ただし、6層については、現地調査時に調査担当者によって同層を

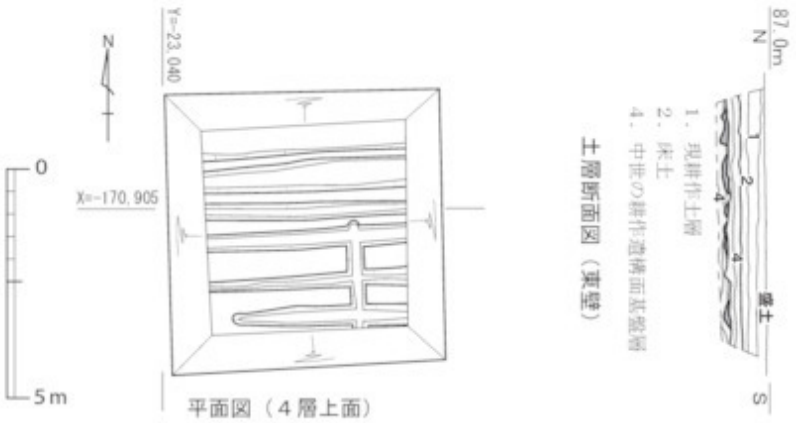


図27　北1区　7トレンチ　平面図・土層断面図　（S.=1/170）

確認した趣旨のメモが残されているものの、図27の土層断面図（東壁）にはそのことが反映されていなかった。ここでは、残された記録としての図面を提示しているものである。

4層上面で7条の素堀溝を検出した。素堀溝は、図27に示したように、基本的に東西方向に互いに平行して延びているが、トレンチの南半でこれらに直交する溝が1条検出されている。素堀溝の規模は幅約30～50㎝、深さ約10㎝である。

第2節　北2区

1．1トレンチ（図4・図28・29）

北2区の西端に、当初、長さ21ｍ、幅6ｍの南北に長いトレンチを設けた。その平面形は調査区の形状に合わせて平行四辺形としたが、後述するように、11層上面でトレンチの南東部を東方向に拡張したので、結果的に図29に見えるようなL字形のトレンチになった。

基本層序は1層、2層、7層および9～12層を確認した。この地点では、第1遺構面の基盤層となる5層、第2遺構面の基盤層となる6層などは認められなかった。ただし、北1区で認めれた4層上面の素掘溝が形成される面は、この地点では層位的には7層上面に繋がっている。すなわち、この1トレンチでは、7層上面（第3遺構面）の遺構と、ほかの調査区では4層上面（第1遺構面）に形成される中世の素掘溝が同一面で検出された。

実際の作業では、現耕作土・耕作床土を除去したその直下で素掘溝が検出された。この検出面は7層上面に当たる。ただし、当該トレンチでは、7層上面に形成された流路3がその大部分を占めているため、素掘溝が検出された土層は流路3の埋土の最上層の上面となる。

素掘溝は16条が検出された。その規模はおおむね幅35㎝、深さ10㎝程度である。互いに平行して東西方向に延びているが、図28の平面図（4層上面　流路3埋土上面）に示したように、途切れているものも多く、残存状況が良いとはいえない。

この面で検出した流路3は、北1区1・2・3・5トレンチで検出した流路の延長部分である。ただし、上述のように、この流路の埋土が、この高さではトレンチの大部分を占めているために、現地調査では当初その存在に気づかれなかったようで、流路3の埋土除去作業は、トレンチの南東部にわずかに残っていたはずの7層から10層などの土層を同時に掘削しながら進められていた。流路3の存在に気づいたのは、7層上面から約80cmほどを掘削してからのことであった。このために、図28の平面図（7層上面　流路3埋土除去後）に示した流路3の南東側の遺構の上端線は、この部分のトレンチ断面図および第4－2次調査の成果から復原したものである。

また、図28の土層断面図（西壁）を見ると、トレンチの中央付近に7層自体が残る高まりがあることがわかる。上記のようにトレンチは、このような土層の堆積にはまったく気付かれずに掘削された。しかし、それはとりもなおさず、トレンチのほぼ全体が砂質土を主体とする流路埋土で、その外側の遺構基盤層もまた洪水堆積を主因とする砂を中心とする土質であったからである。ただ、

同図に見える土層の堆積状況やその後第４－２次調査における面的な発掘の結果から考えて、この西壁にみえる基盤層の高まりについては、流路を横断するものではなく、平面図（７層上面　流路３埋土除去後）に示したように、西側の岸がやや狭まって東側に張り出していたものであったと想定した。すなわち、この部分では流路３の西岸法面がトレンチの西壁面に一部かかっているとみられる。

流路３の深さは、地点によって差があるが、最大深さはトレンチ南端付近の約 1.4 mである。

この流路に附属する施設として、南端付近の流路底から 60cm ほど上位で、堰４を検出した。堰４は、杭と横木による柵と、その付近の護岸施設によってなっている。柵は矢板と杭によって

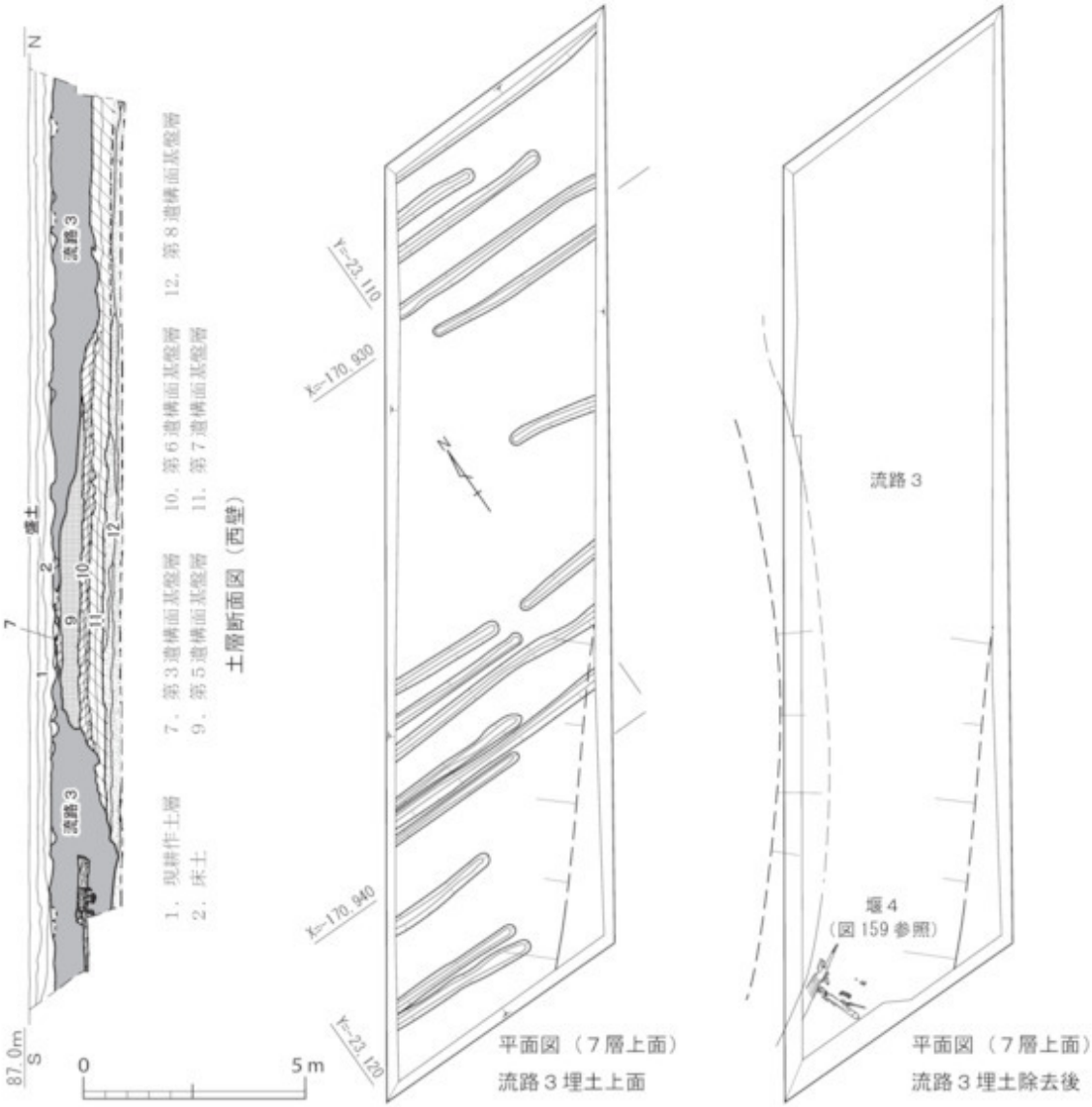


図 28　北２区　１トレンチ　平面図（１）・土層断面図　（S.＝1/170）

横木を水流に直交する方向に固定したものである。その詳細は、流路３という遺構全体の中に位置づけるため、「第５章　第３節　第３遺構面」の該当項に記す。

流路３の出土遺物として多数の土器が取り上げられている。それらは、後の第４－２次調査時に出土した物を合わせると、弥生時代前期から布留式期までのものがみられる。

次に 11 層上面で、多数の人間の足跡を検出した。現地表面から約 1.4 m下がった高さになっており、このレベルまで下がると、上記の流路３による攪乱の幅が狭くなっている。図 29 の平面図（11 層上面）に見えるように、足跡を検出したのはこの流路攪乱の付近で南北の地点である。このような足跡は水田遺構に関係するとみられる。しかし、トレンチの範囲では畦畔による水田の区画が認

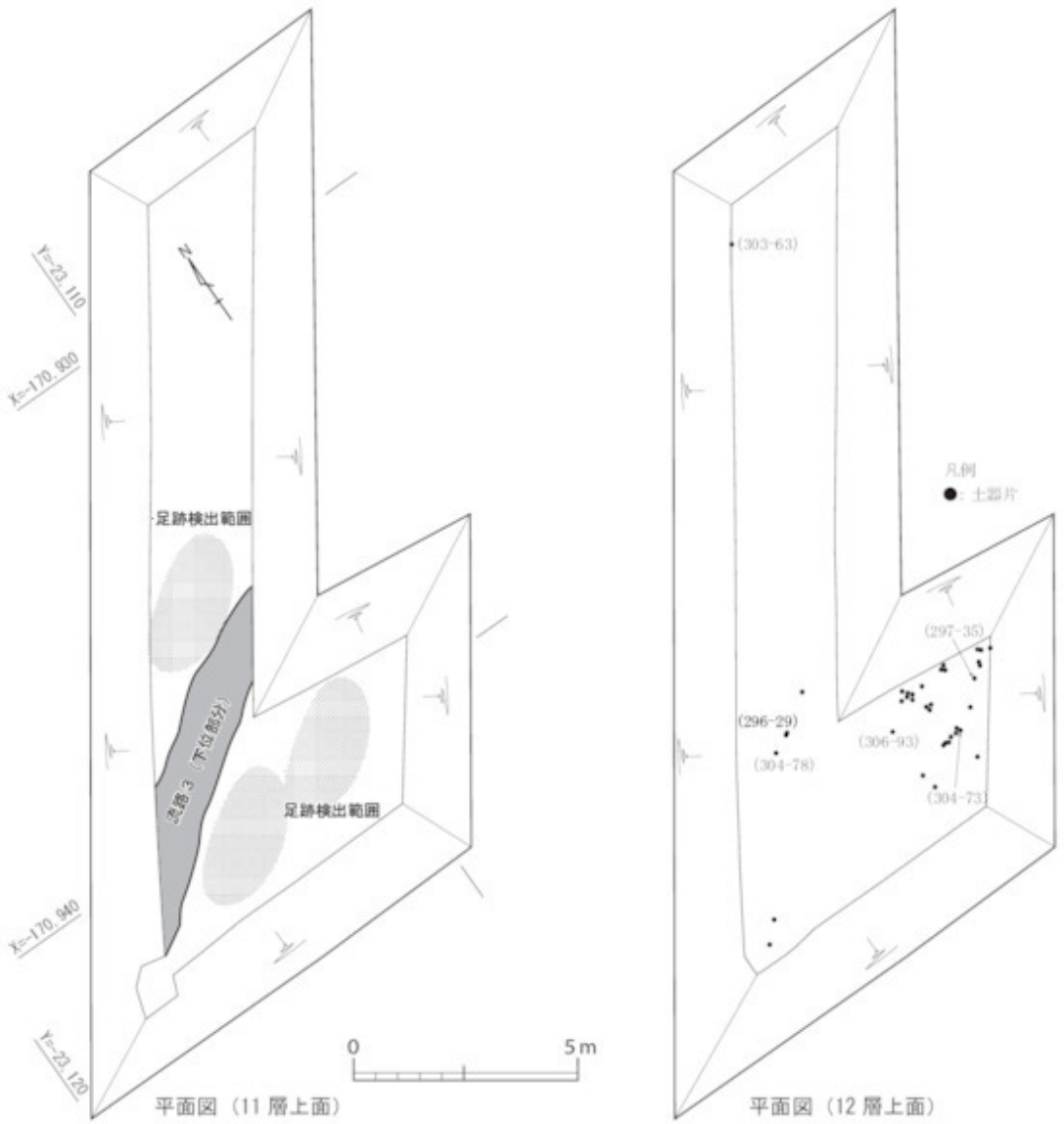


図 29　北２区　１トレンチ　平面図（２）（S.＝1/170）

められなかったので、このことを確認するために、トレンチの南東部を検出面で長さ 7.4 m、幅 3.9 m程の範囲を拡張した。その結果、拡張区でも同様な足跡が検出されたが、やはり畦畔は認められなかった。

さらに 11 層上面から約 30cm 下層まで掘削し、12 上面を検出した。12 層上面では遺構は確認できなかったが、遺構面上に遺物が分布する状況を確認した。

12 層上面で検出した遺物はすべて土器片で、そのうち図化可能であったものを、第 2 分冊 60 ～ 71 頁に、(295 － 18)、(296 － 23)、(297 － 32･34･35)、(298 － 38)、(300 － 54)、(303 － 61)、(304 － 69・70・71・72・75・76・79)、(306 － 89・91) として掲げた。これらは、ごく少量の滋賀里Ⅰ・Ⅱ式期の土器片を除き、口酒井期に相当するものである。

2．2 トレンチ（図 4 ・図 30）

北 2 区の東端に長さ 22.9 m、幅 6.2 mの南北に長いトレンチを設けた。基本層序は、図 30 の土層断面図（東壁）に示したように、北 2 区 1 トレンチとおおむね同様であるが、当該トレンチでは 10 層が認められなかった。遺構は 7 層、11 層の各上面で検出し、12 層上面で遺物の分布を確認した。

7 層上面では、16 条の素掘溝とそれに切られる溝 13 を検出した。素掘溝は、北 2 区 1 トレンチの層位と同様で、北 1 区では 4 層上面に形成されたものが、この地点では 7 層上面に繋がっているものである。この地点での 7 層上面の高さは現地表面から約 60cm であった。

素掘溝は、幅 30 ～ 50㎝、深さは約 15㎝で、それぞれが互いに平行して東西方向に延びている。溝 13 は北西－南東方向に延び、規模は幅約 120㎝、深さ約 40㎝である。当該遺構面で出土遺物は認められなかった。

11 層上面では、トレンチの南半において、図 30 の写真に示したように、人間の足跡を多数検出した。

12 層上面では、口酒井式期の土器片の散布を確認した。しかしこの地点では遺構は認められなかった。またトレンチの北半で杭 2 本とその杭の間に木片を検出した。ただし、この周囲で、その他の遺構や遺物が検出されず単独での出土であるために、この杭が 12 層上面で打ち込まれたものであること自体が疑問である。本来はより上層で打たれた杭の先端部分のみが偶然に残存したものと考えられる。

12 層より下層の確認は、部分的な掘削や側溝を利用した壁面を精査することで進めた。結果的に、現地表面から最大深さ約 2.8 mまでを掘削したが、粗砂層が見えるばかりで、遺構、遺物が存在する徴候はなかった。これ以上の掘削は危険作業になることから、この状況を確認して当該トレンチの調査を終了した。

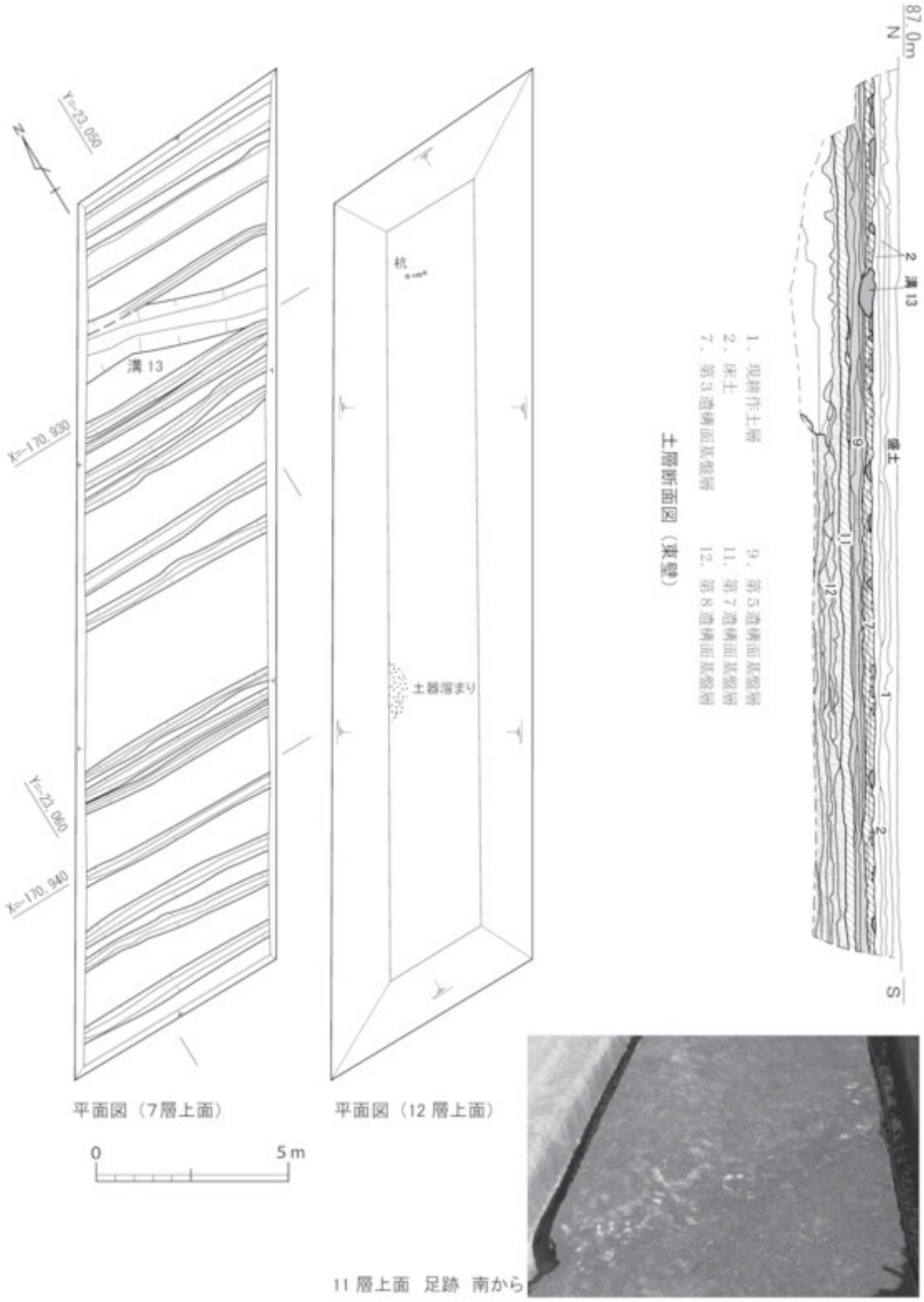


図30　北2区　2トレンチ　平面図・土層断面図　（S.=1/170）

第３節　北３区

１．１トレンチ（図４・図31）

北３区西端に長さ 25.1 m、幅 7.4 mの南北に長いトレンチを設けた。平面形は調査区の形状に合わせて平行四辺形とした。基本層序は１層から 11 層までの各土層を検出したが、この地点では５層・６層及び８層が確認されなかった。

中世の素掘溝は、ここでは７層上面で検出された。素掘溝は、図 31 の平面図（７層上面）に示したように、互いに平行する南北方向の素掘溝 23 条と、東西方向の素掘溝６条を検出した。それらの規模は、幅約 50cm、深さ約 15cm である。東西方向の溝と南北方向の溝には切り合い関係があり、東西方向の溝が古く、南北方向の溝に切られている。

なお、後述する第４－２次調査でトレンチの東側をこの７層上面で広げて精査した際に、図 120 に示したように、東西方向の溝 15 が検出されている。溝の位置や方向からは、このトレンチの同層上面でその延長部分が検出されるべきであると考えられるが、トレンチ断面図を精査しても、調査の記録としてはそれを見い出した痕跡がない。現地調査においては、広い面積で面的な調査を実施した第４－２次調査時には溝 15 を認識し検出したが、トレンチ調査の時点では、何らかの事情で遺構の認識ができなかったとみられる。

11 層上面では、水田遺構を検出した。この面は、その直上が厚さ約 20㎝の洪水砂層によって覆われており、畦畔、人間の足跡などが良好な状態で検出できた。水田は、畦畔について残存高約 10㎝のものが確認でき、これによれば一辺 5.5 ～ 7.3 mの方形をなす小区画水田であることが窺える。水田とともに検出した足跡はトレンチ全域に万遍なく認められた。

11 層上面でのこのような遺構の検出状況から、調査対象地の全面的な調査が必要と判断されたので、当該トレンチはこの高さで埋め戻し、遺構等は第４－２次調査で再検出することとした。

２．２トレンチ（図４・図32）

北３区中央付近に南北 20.8 m、東西 6.9 mの南北に長いトレンチを設けた。基本層序は、１層から９層までの各土層を検出したが、この地点では、５層・６層・８層は確認されなかった。遺構は４層、７層、９層の各上面で検出した。

４層上面では 11 条の素掘溝を検出した。規模は幅 30 ～ 50cm、深さ 10 ～ 30cm を基本とするが、図 32 の平面図（４層上面）に示したように、トレンチの中央付近では幅 100㎝を超えるものも存在した。また、素掘溝は基本的に南北方向に延びて互いに平行しているが、中央付近の１条のみが北東－南西方向となって、多くの素掘溝に対して斜交している。この溝とほかの南北方向の素掘溝には、切り合い関係があるはずでいずれかが新しいと考えられるが、残された調査記録にはその関係を示したものがなかったため、現状では不明である。

７層上面では、トレンチの中央付近で溝 15 を検出した。溝 15 は東西方向に延び、検出長は約 6.3

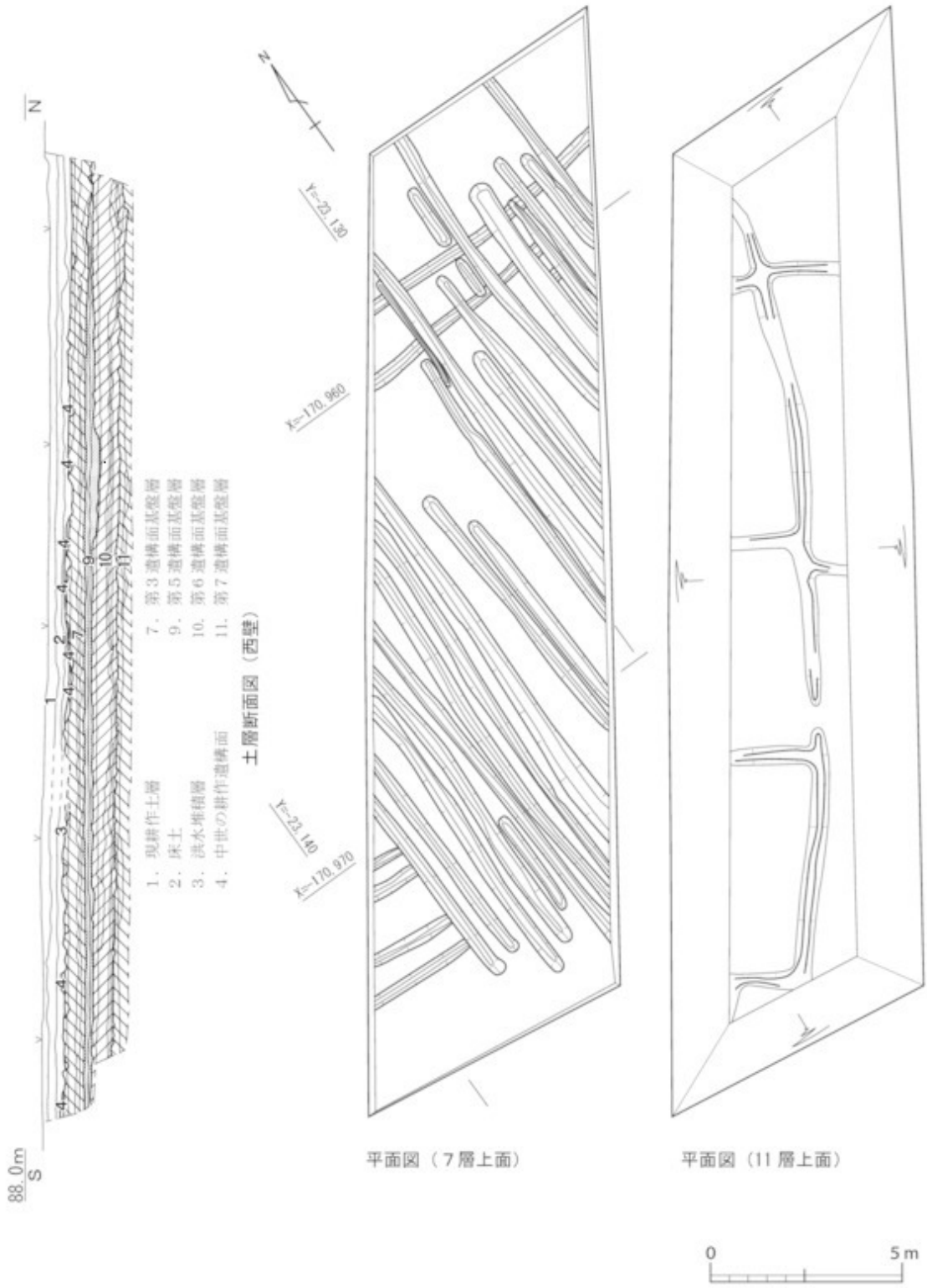
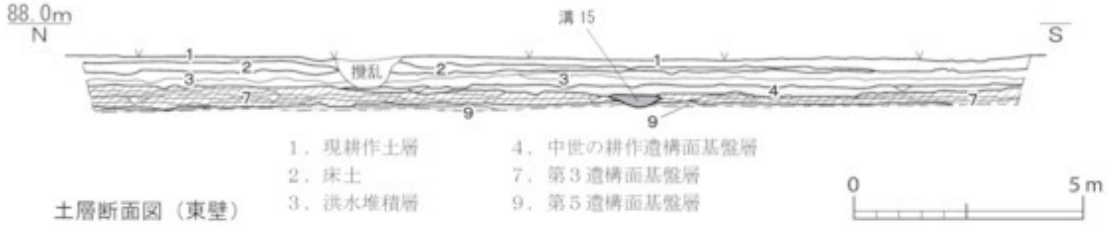


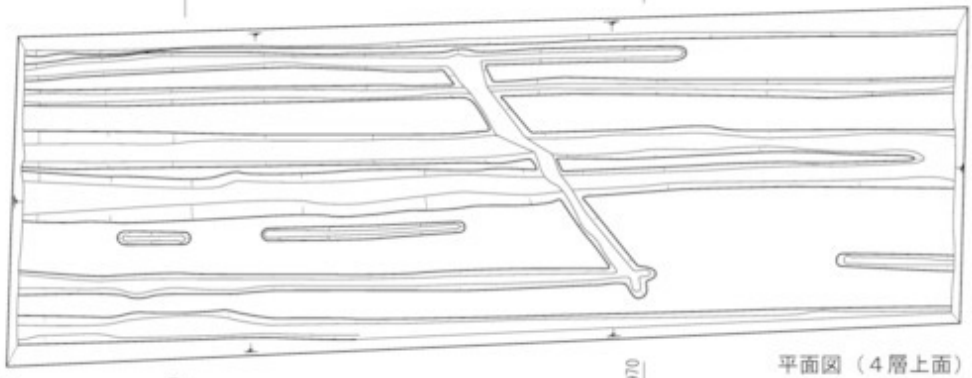
図31　北3区　1トレンチ　平面図・土層断面図　（S.=1/170）



1．現耕作土層　　4．中世の耕作遺構面基盤層
2．床土　　7．第3遺構面基盤層
3．洪水堆積層　　9．第5遺構面基盤層

土層断面図（東壁）

0　5m

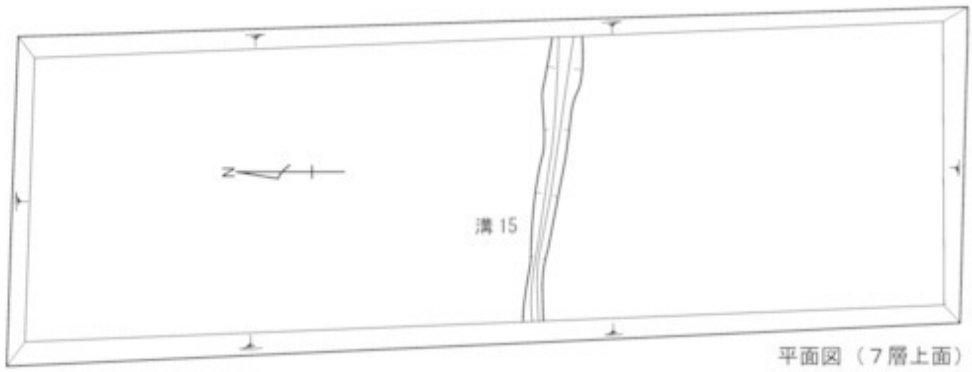


平面図（4層上面）

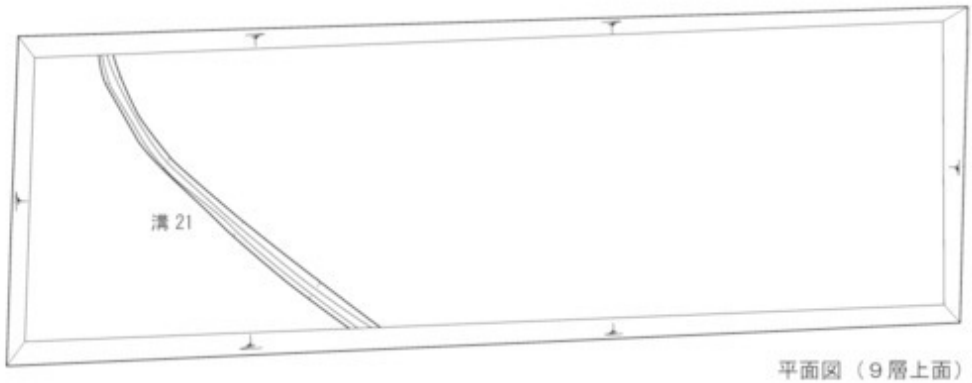
Y=-23,090

X=-170,960

X=-170,970



平面図（7層上面）



平面図（9層上面）

図32　北3区　2トレンチ　平面図・土層断面図　（S.＝1/170）

m、幅約 50㎝、深さ約 30㎝である。

９層上面では、トレンチの北半部で溝 21 を検出した。溝 21 は北東－南西方向に延びるもので、検出部分では緩やかに湾曲しているように見える。検出長約 8.2 m、幅約 50㎝、深さ 10㎝である。

第４節　南１区

１．１トレンチ（図４・図 33・34）

南１区の西端に長さ 45.9 m、幅 6.1 mの北西－南東方向に長いトレンチを設けた。基本層序は図 33 の土層断面柱状概念図に示したように、１層から 12 層までの各土層を検出したが、この地点では、３層、６層、10 層は確認できなかった。遺構は４層、５層、７層、９層、11 層の各上面で検出した。なお、当該トレンチにおいては、５層以下はトレンチの北端から約 9.5 mの範囲と南端から約 9.0 mの範囲を深掘りすることによって、基本層序と遺構の有無を確認することとした。それぞれの範囲を「北端部」、「南端部」と呼ぶ。

４層上面では、多数の素掘溝を現地表面より 0.4 ～ 0.5㎝の深さで検出した。素掘溝は、互いに平行して東西方向に延びるものが多い。その規模は幅 30 ～ 50㎝、深さ約 20㎝ である。一方で、図 33 の平面図（４層上面）に示すように、トレンチ南半では南北方向に延びる溝が検出されている。方向が異なる溝には切り合い関係があって、東西方向の溝が南北方向の溝を切っている。

次に５層以下はトレンチの北端部と南端部の各一部分を掘り下げて遺構面の確認をおこなった。

５層上面では、北端部で溝９と、その東側で３本の木杭を検出した。南端部では遺構、遺物等は認められなかった。

溝９は、現地調査時には平面的には検出していなかったが、整理段階で、後の第４－２次調査の成果を踏まえてトレンチの土層断面図等を精査することで、その存在を確認したものである。溝９はおおむね南北方向に延びるものである。

杭は溝９の東側で検出された。３本の杭が打ち込まれた状態で検出されたが、杭列とすれば東西方向に約６mの範囲に延びていることになる。しかし、この周囲には、面的に調査を実施した第４－２次調査の成果を含めても、これらにともなうとみられる遺構は検出されていない。したがって、これらの杭が本来打ち込まれた層位も含め、その性格については不明である。

７層上面では、図 34 の平面図（７層上面）に示したように、北端部で水田遺構を検出した。南端部では遺構、遺物は認められなかった。水田遺構は、南北に延びる２条の畦畔とそれに直交する東西方向の畦畔を確認したものである。水田の一区画全体の検出には至っていないが、南北方向の畦畔は最長で約 6.6 m、畦畔間の幅約４mを確認した。この検出状況から、水田は長軸を南北方向に向ける長辺 6.6 m以上、短辺約４mの小区画水田であったと考えられる。また、畦畔には約５㎝の盛土が認められた。このように、この地点で検出した水田遺構は残存状況が良好であったため、遺構面を保全したうえで、第４－２次調査で面的拡張した発掘調査を行うこととした。

また、同図の北端部の検出範囲の南西隅に溝16の上端を破線で表記している。溝16は、このトレンチ調査の時点では、その存在を認識されておらず、遺構として検出なされていなかった。しかし、この周囲を面的に調査した第4－2次ではこの地点に延びてくる溝16の東岸の上端と下端が平面で検出されている（図121）。この成果を受けて残された土層断面図を精査したところ、明確に溝の断面形状とその埋土と見られる土層が認められたので、破線にて復原して示したものである。なお、以下に南端部で9層上面と11層上面での検出遺構について述べるが、9層上面の溝22、11層上面の溝29について、破線での表示になっているのは、同様の経緯によるものである。

9層上面は、北端部は7層上面から下層への掘削を行っていないので、南端部のみで検出した。溝22を確認したが、これは、上記のようにトレンチ調査では平面の検出ができていない。

また、調査範囲の西端で1本の杭が打ち込まれた状態で検出された。ただし、単独で出土した検出状況であり、後の第4－2次調査の成果を含めても、周辺にこれに関連するような施設を見いだすことはできなかった。この杭に関しては、これが本来打ち込まれた層位も含めて、その性格が明確ではない。

次に、11層上面は、トレンチの南端部に一部9層上面を残しつつ、さらにその南半で掘削を継続することで検出した。この面にも水田遺構が見られた。ただしその上面での残状況はあまり良くなく、図34の平面図（11層上面）に見えるように、畦畔が不明瞭であった。それでも、少なくとも水田遺構は長軸を東西方向に向ける、長辺2.5 m、短辺1.5 mの小区画水田であることが窺える。これに加えてこの面上で多数の人間の足跡を検出した。その検出範囲は同図に示した。

溝29は、トレンチを東西方向に横切るものである。上記のように第4－3次調査の成果を踏まえて図上復原したものである。

当該トレンチでは、これよりも下層の確認は、南端部西壁沿いに設けた側溝を兼ねたトレンチを精査することで行った。この地点では結果的に、現地表面から約2.4 mまでを掘削して、12層を検出した。しかし、この地点では遺構・遺物が存在する徴候は認められなかった。

2．2トレンチ（図4・図35）

南1区の東端に、当初、南北33 m、東西7.1 mの長方形のトレンチを設けた。基本層序は1層から13層までを検出した。しかし、この地点では、3層、6層、8層、10層に対応する土層は見られなかった。

遺構は4層、5層、7層の各上面で検出した。

4層で検出した遺構は、ここでもその最上面だけでなく、細分層した土層の上面においても中世の素掘溝が検出された。上層、下層の素掘溝ともに東西方向に延び、幅約10 m、深さ約10cmの規模である。上層の素掘溝はトレンチの北半で認められた。検出した溝は途切れた状態で検出したものが多く、また検出面に攪乱が多くみられ、遺構面自体の残存状況が良好だったとはいえない。

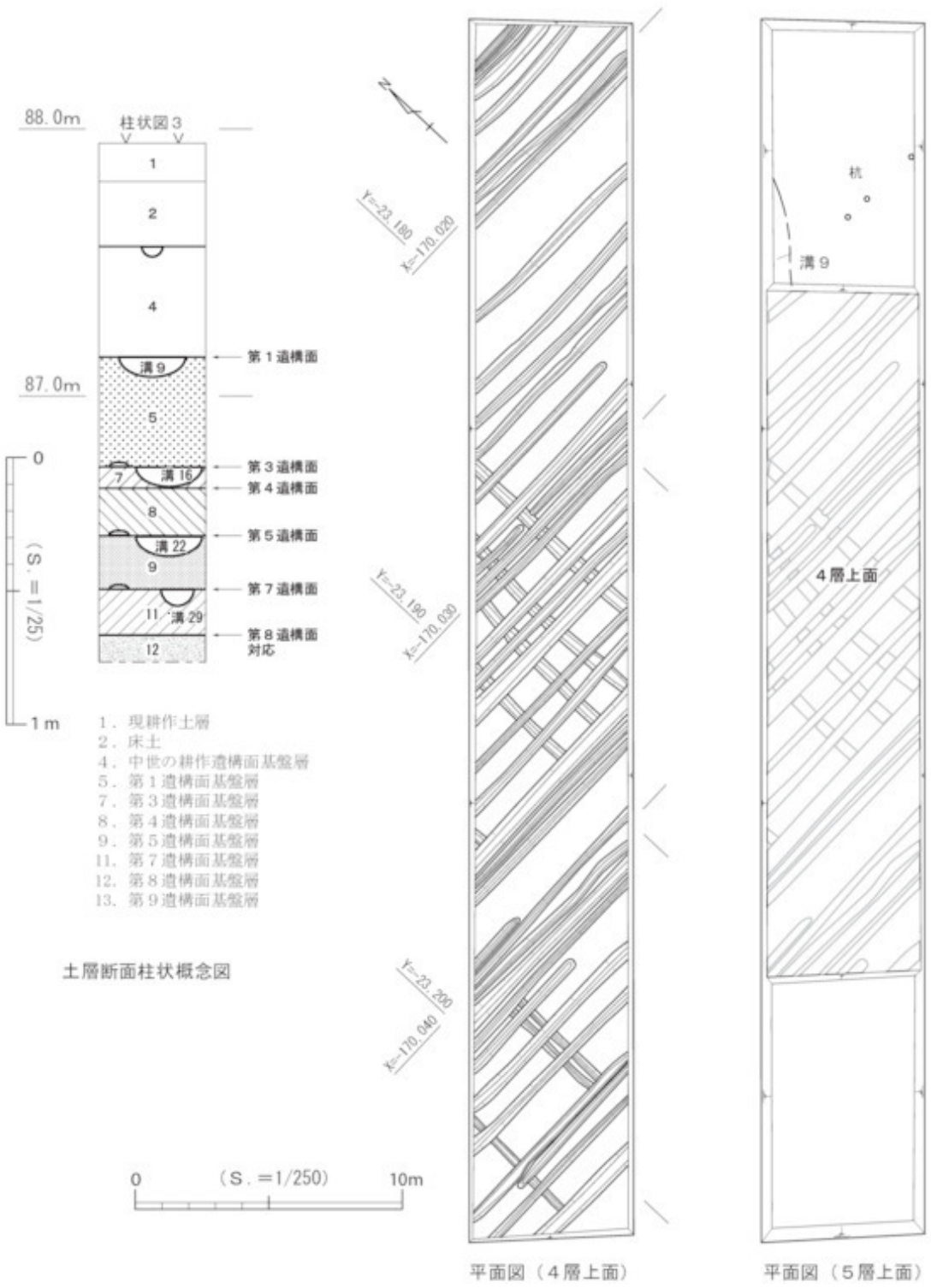


図33　南1区　1トレンチ　平面図（1）（S.＝1/250）・土層断面柱状概念図　（S.＝1/25）

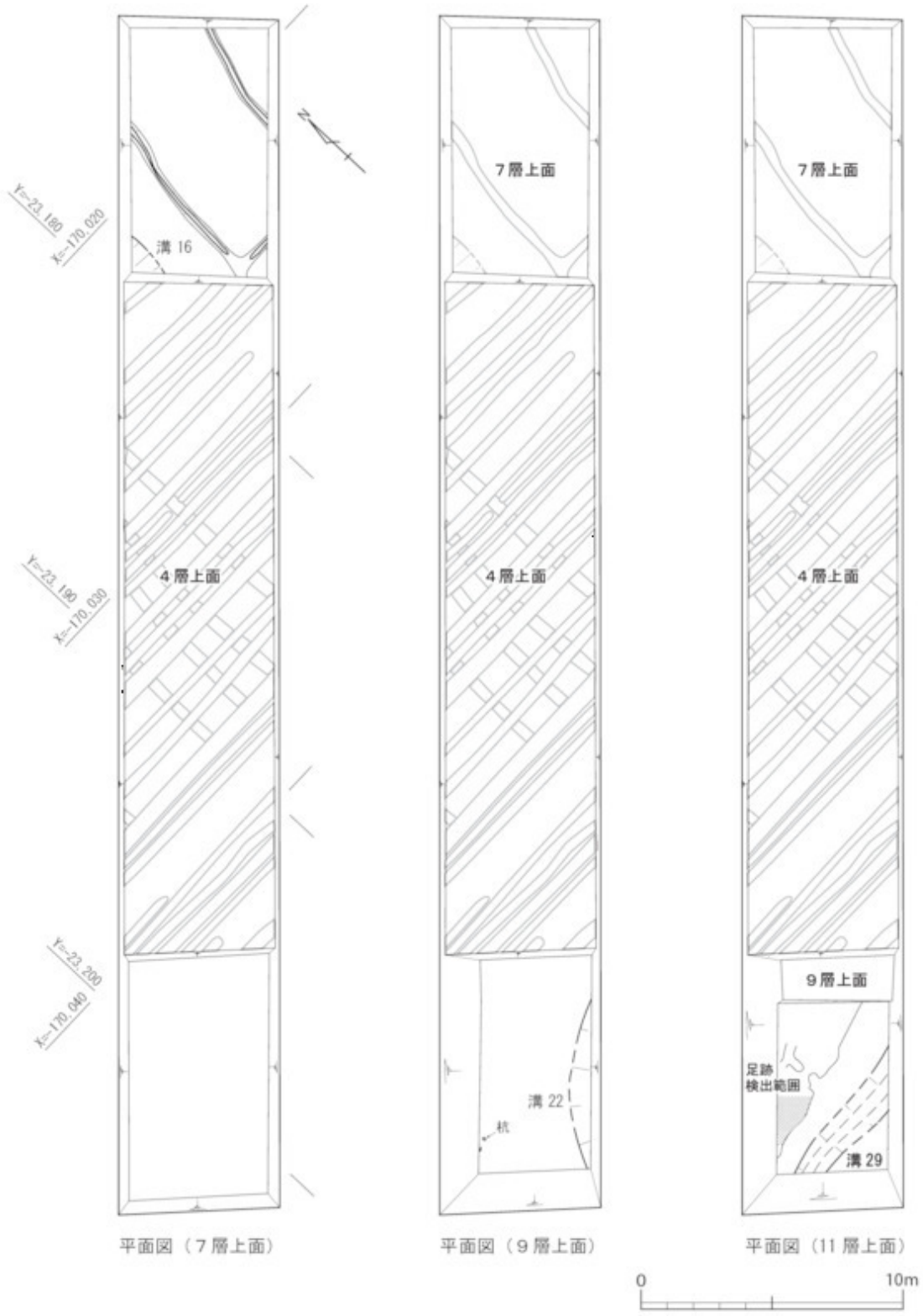
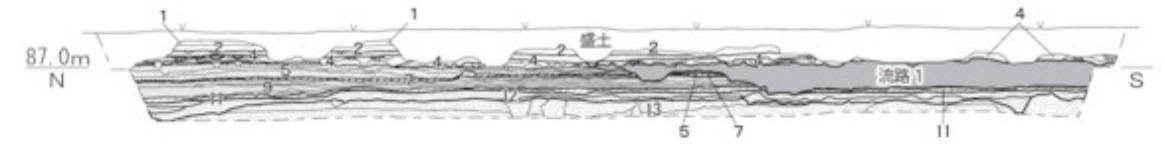


図34　南1区　1トレンチ　平面図（2）（S.＝1/250）



1．現耕作土層　　5．第1遺構面基盤層　　11．第7遺構面基盤層
2．床土　　7．第3遺構面基盤層　　12．第8遺構面基盤層
4．中世の耕作遺構面基盤層　　9．第5遺構面基盤層　　13．第9遺構面基盤層

土層断面図（東壁）

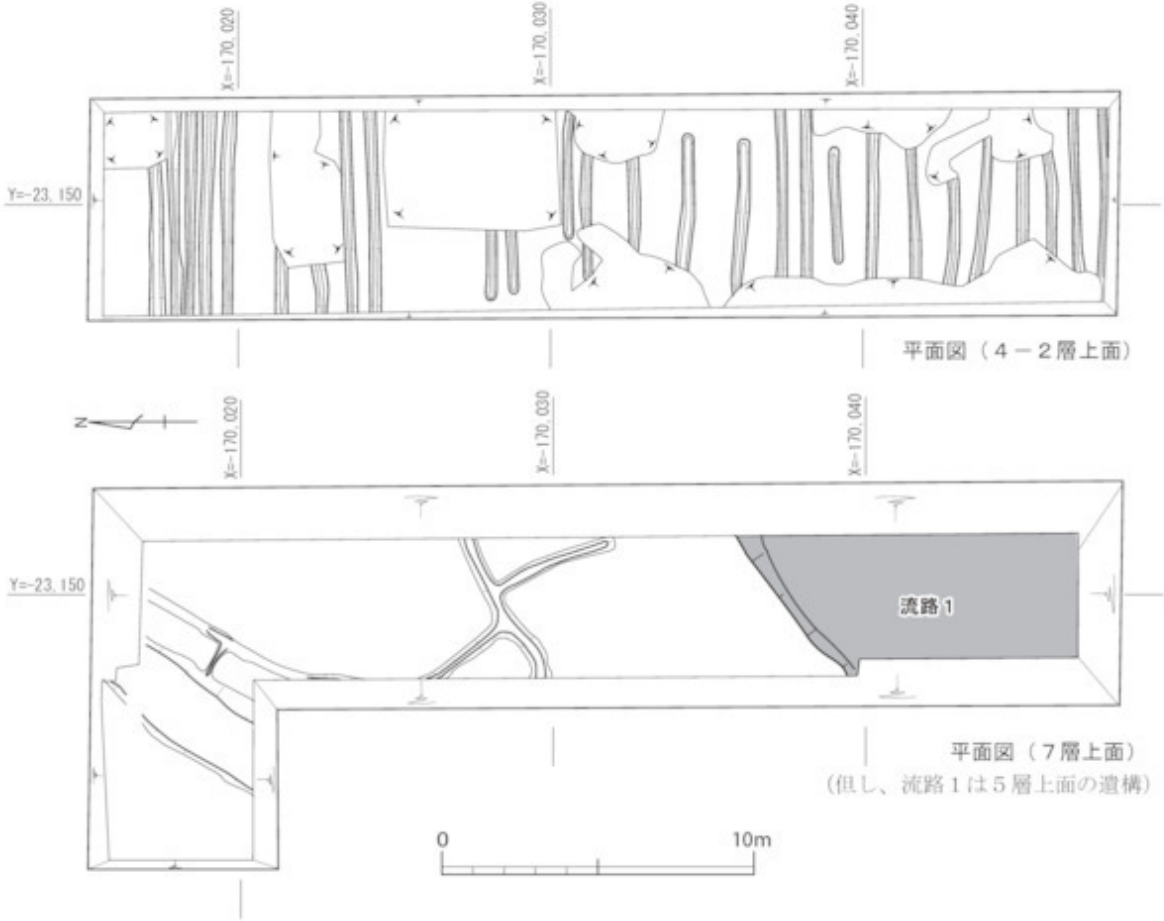


図35　南1区　2トレンチ　平面図・土層断面図　（S.＝1/250）

また下層の素掘溝は、図35の平面図（4－2層上面）に示したように、トレンチの全域で検出されたが、上層同様、多くの攪乱がみられた。

5層上面では、北東－南西方向に延びる流路1の北岸を検出した。流路1はトレンチの南半にあり、調査区の範囲ではその南岸は検出されていないので、規模が不明であるが南北幅は少なくとも17m程になる大きなものである。深さは1m以上あって、12層にまで至っている。このためこの地点では、その間の層位が攪乱されている。出土遺物として、残存長117㎝、径9㎝の杭1点があった。流路1は、トレンチ調査の時点では、基本的に埋土が除去されていない。したがって、現状で

は流路１の出土遺物として取り上げられているこの杭が、流路のどの部分から出土したのか不明な状態になっている。ただ、この時点で流路１の埋土が掘られた地点として、断面の確認を兼ねた東壁に沿った側溝部分があるので、杭はその地点から出土したと考えれられる。この周辺では、後の第４－２次調査で流路１に伴う堰１・堰２が検出されているから、トレンチ調査で出土した杭は、これらの堰を構成するものであった可能性が高い。

７層上面では、トレンチの北半部で水田遺構を検出した。南半は上記の流路１による攪乱を受けていた。水田は高さ 12cm の畦畔で区画されるものであるが、特に北端で検出した水田は、北東－南西方向に長軸を向け、短辺約１m、長辺は少なくとも３m以上ある小区画水田であることが明瞭に見て取れる。また、トレンチ北端部で水田の西側が、約 20cm の盛土になっていて通有の畦畔とも異なることから、その性格を探るためにトレンチのこの部分を拡張した。するとその約 20cm の盛土は上端の幅２mの帯状の高まりで、北東－南西方向に延びている状況を確認した。これは、この時点では水田遺構に伴う大畦畔である可能性が考えられた。

そこで、この部分を保全しつつ、遺構密度の少ない地点でさらに下層を掘削して、９層が存在することを確認した。しかし、ここでは明確な遺構は検出されなかった。

これより下層の確認は、東壁に沿う側溝を兼ねたトレンチにより主に断面を精査することで行った。結果的に 11 層上面に相当する層位において畦畔状の盛り上がりを確認した。さらに、12 層、13 層を検出したが、これら２層では遺構・遺物ともに認められなかった。

第５節　南３区

１．１トレンチ（図４・図 36）

南３区の東端に南北 5.9 m、東西 9.4 mのトレンチを設けた。基本層序は１層から 13 層までの各土層を検出したが、この地点では６層、10 層は検出されなかった。また、13 層以下には遺構、遺物が認められない青灰色粗砂層が堆積していることを確認した。遺構は４層、５層、７層の各上面で確認した。

４層上面では素掘溝を８条検出した。それらは互いに平行して南北方向に延びている。規模は、幅約 30cm、深さ 10 ～ 20cmである。現地調査で検出され記録されたのは図 36 の平面図（４層上面）に示した１面のみである。しかし、トレンチ南壁の土層断面図を精査すると、この面の約 20cm 上位でもう１面の素掘溝の形成面が存在することがわかった。前述のように、４層の素掘溝形成面は、上下２層があることが多いが、当該地点においても同様であったと考えられる。

５層上面では、南１区２トレンチで検出した流路の延長にあたる流路１が認められた。ただし、図 36 の平面図（５層上面）にこの流路の上端線および下端線を破線で示しているのは、現地調査において５層上面を検出した時点は、この遺構の平面図が作成されていなかったためである。この地点の流路１も、実際には上面を掘削してしまって、７層上面で始めて認識されたものであった。

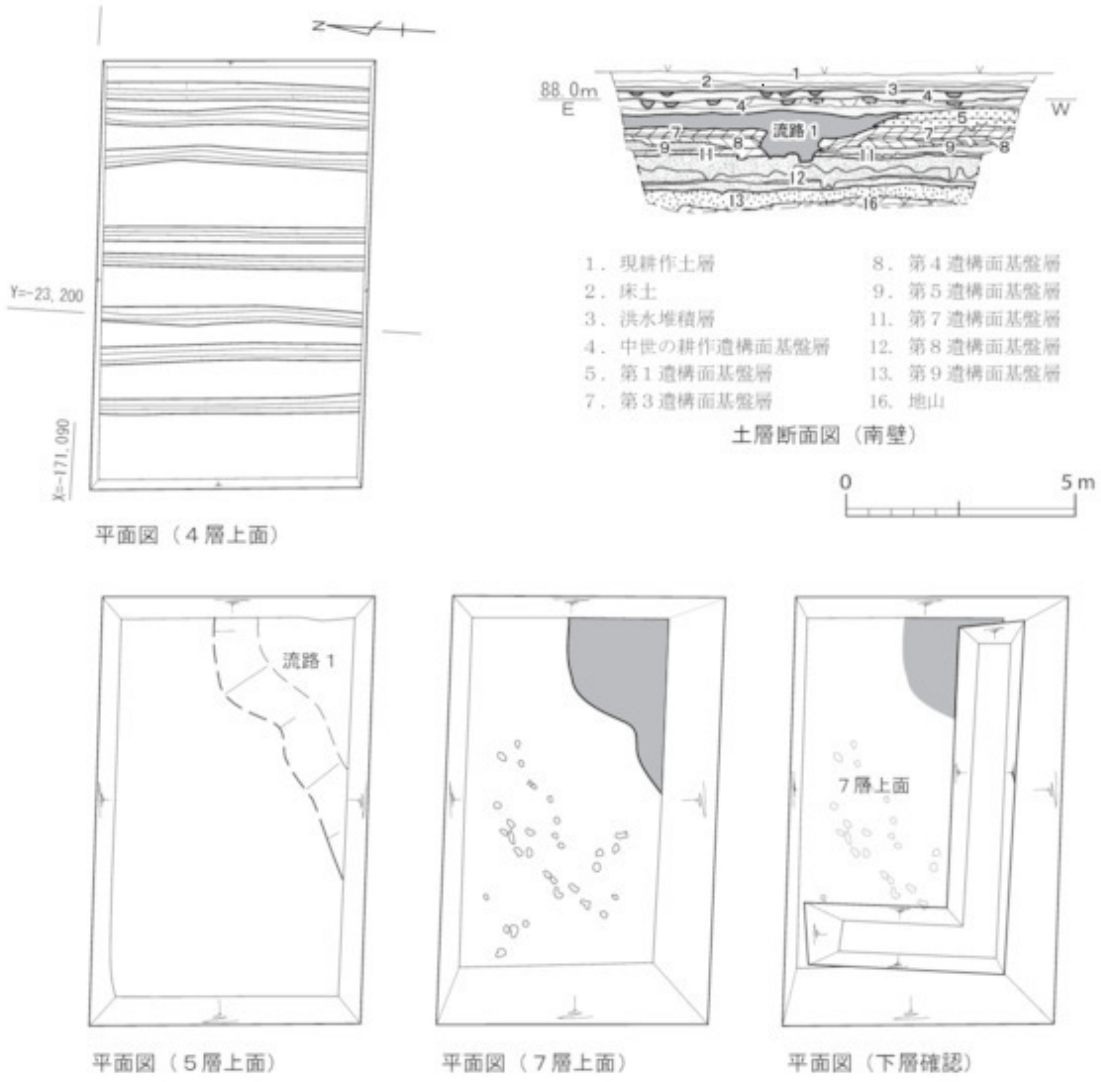


図36　南３区　１トレンチ　平面図・土層断面図　（S.＝1/170）

このため、ここでは第４－２次調査の成果を踏まえてトレンチの断面図を精査することで、５層上面での溝１の平面形を復原的に描いた。

７層上面では、足跡32箇所を検出した。いずれも輪郭がぼやけて明確な足跡形をするものはないが、このうち不整楕円形を呈して長さ17～23ｃｍ程度のものが11箇所あって、これは人間の足跡と判断できる。これとは別に、平面形が、長さ10ｍ前後でＶ字状を呈するものが７箇所あった。これは偶蹄目の動物の足跡のように見える。そうであれば、牛などの可能性が考えられる。だだし、この周辺を発掘調査した第４－２次においては、このトレンチの範囲外では足跡遺構が検出されなかった。また、畦畔に関してはトレンチの範囲内でも見られなかった。このような状況に加えて、さらに上層から踏み抜かれた足跡がこの層位で検出された可能性もあることから、これらの足跡が７層上面にあたる遺構形成面に伴うものであることは確定的ではない。

7層以下の基本層序については、トレンチの西壁から南壁に掛けてL字形のサブトレンチを設けて確認をおこなった。現地表面から約1.6mの深さで11層を確認し、さらにそれより下層に12層、13層を検出した。しかし、これらの層位では遺構、遺物は認められなかった。

第6節　まとめ

第4－1次調査の成果として、当該地では縄文時代中期末から中世に至る遺構面が重層的に存在していることが明らかになった。

中世以降の耕作遺構である素掘溝は調査区全体で確認した。層位的には、基本的にこの時期の素掘溝は4層上面に形成されるのであるが、4層から6層までが検出されなかった北2区を中心にした範囲では、この遺構面が7層上面に繋がっているとみられる。すなわち、そのような調査区では、7層上面で中世以降の素掘溝がそれよりも以前の遺構を切るという切り合い関係をもって同一面で検出された。また、このような素掘溝の形成面は、4層上面の1面にとどまるのではなく、重層的に検出された地点も少なくない。具体的には、北1区1トレンチ、同6トレンチ、南1区2トレンチ、南3区1トレンチで、4層を細分層した土層の上面においても確認された。

5層上面の遺構は、北1区と南1区、南3区の各トレンチで検出された。特に、北1区では、ピットや溝、流路等の遺構が検出され、溝からは多量の古式土師器が出土した。しかし、5層もしくはそれに対応する層位自体、北2区と北3区では検出されなかった。この範囲では何らかの攪乱、削平が及んでいると考えられる。

7層、9層、10層、11層上面は、水田遺構が検出された遺構面である。水田遺構は、水田を区画する畦畔だけではなく、溝やそれに伴う堰などとして検出されている。

7層は今次調査区全体で認められ、その上面で、流路や、畦畔・足跡・溝などの水田遺構を確認した。9層上面では、北3区2トレンチで溝、南1区1・2トレンチで水田畦畔を検出した。10層上面では、北1区4トレンチで溝を検出した。10層はその土層自体、今次調査では限定的にしか認められていないが、北1区4トレンチで溝が検出された。11層は、色調が黒褐色を呈して特徴的であったので、その層位の認識が比較的容易であった。この土層の上面を平面的に検出したトレンチのうち、北1区6トレンチ、北2区1・2トレンチで足跡を検出し、北3区1トレンチ、南1区1・2トレンチでは水田畦畔を検出した。当該遺構面では足跡とともに、畦畔も比較的良好な状態で残存していることが確認できた。

次に、12層以下は縄文時代の遺物が出土する層位であることを確認した。上層に遺構が存在しないか、あるいは側溝を利用したトレンチで土層断面を確認できた地点では、総じてその土層が存在することが確認できたが、遺物は、12層上面に土器片が散布することを北2区1・2トレンチで確認した。出土した土器片は口酒井式期を主とするものである。しかし、第4－1次調査でのトレンチ調査では当該期の遺構は確認できていない。

さらに、12層の下層に13層などの土層の堆積を確認した。

以上の調査成果を受けて、第4－2次調査としては、開発対象地全体を面的に調査する必要があると判断できた。ただし、調査地には、現状でＪＲの線路が東西に横切っている地点や、生活道として利用されている地点がある。また、隣接地には水田耕作地や住宅も存在している。このような地点では、調査による掘削の影響が隣地に及ばないようにするために、隣地境界から6～8m程度を控えて発掘を行う必要がある。

このような点を考慮しつつ、第4－2次調査の対象地は、図3などに示した範囲とすることを決めた。その総面積は11,840㎡である。

また、調査対象とするべき遺構面は、トレンチ調査によって遺構、遺物が検出された面のすべてであるが、当初の調査方針に則って、中世以降の素掘溝のみが検出される遺構形成面は、トレンチ調査にとどめることとし、第4－2次調査の対象とはしなかった。

したがって、第4－2次調査の調査対象層位として、第1遺構面は、古墳時代前期の遺構、遺物が検出された5層上面とした。以下、第2遺構面は6層上面、第3遺構面は7層上面、第4遺構面は8層上面、第5遺構面は9層上面、第6遺構面は10層上面、第7遺構面は11層上面、第8遺構面は12層上面と呼んで調査対象遺構面と認識した。

また、各遺構面の面的な調査を実施する際しては、この第4－1次調査のトレンチ調査の成果を最大限に活用した。つまり、他の調査区で遺構が検出されている場合でも、トレンチの地点によっては同一層上に遺構や遺物も存在しないことが確認できている場合があったので、遺構面によって適宜調査対象範囲を狭めながら、下層までの調査を遺漏なく実施することに努めた。さらに、12層上面や13層以下については、上層で遺構が存在したために、トレンチ調査では十分にその内容を把握できていない。12層以下については、上層の調査を終えた後に適宜下層確認トレンチを設けて、状況を見極めつつ調査を実施することとした。

結果的には、第4－2次調査において、12層上面、13層上面、14層上面で遺構が確認されたので、13層上面を第9遺構面、14層上面を第10遺構面と呼んだ。

都合、この玉手遺跡においては、調査対象遺構面は10面を数えることになった。各遺構面の形成時期は、第4－1次調査の段階では不明な点も多かった。しかし、第1遺構面で古墳時代前期の土器が出土する溝があり、第8遺構面で縄文時代晩期の土器の散布が認められた。そして、この土層に挟まれる第3・第5・第6・第7遺構面は水田遺構が検出された遺構面であるから、これらは弥生時代の各時期に属するものであろうとのおおよその見当をつけ得た。以上の知見を得て、第4－2次調査に臨んだものである。

第５章　第４－２次調査の成果

第１節　第１遺構面

第１遺構面は、基本層序の５層上面に形成された遺構面である。図 37 に示したように、北１区および南１～４区の各調査区で遺構が認められた。しかし、「第３章　基本層序」でも述べたように、北２区、北３区ではその５層自体が、何らかの削平を受けていたらしく存在しない。

第１遺構面で検出した遺構は、近代以降の井戸、中世の素掘溝、古墳時代の建物跡・溝などで、これら時期幅のある遺構が同一面で検出されたものである。以下に、遺構については中世以降と古墳時代に分けて、順次記述を進める。

１．中世以降の遺構

（１）井戸（図 37・図 40・図 41）（南４区）

南４区の調査区中央付近で、近代以降の井戸を検出した。井戸は、図 41 に示したように、約 2.5 mの隅丸方形の掘方内に、平面形が方形をなす井戸枠が据えられていた。検出面から掘方底面までの深さは約 1.8 mである。井戸枠の残存状態は悪く、その上部は失われていた。そのため井戸枠内には、元は井戸枠に使用されたとみられる数本の板材が落ち込んでいた。井戸枠の構造は、堀方内の四方に直径約 10㎝、長さ約 1.4 mの丸杭を打ち込んで隅柱とし、隣合う隅柱の外側に丸太材や板材を横桟として渡して、さらにその外側に厚さ１㎝前後の薄い板材を縦方向に組むものである。横桟は残存部では上下の２段があり、隅柱には横桟を嵌め込むための刳り込みが認められる。縦板は、内側がこの横桟に当たる構造で、外側は掘方に埋め戻された土による土圧を受けることで保持されている。その板材の大きさは一定ではなく、幅約５～ 25㎝、長さ約 85cm ～１ mのものが使用され、これらが１辺につき４～５枚程度が立てられている。縦板の長辺には、井戸枠を構築するのに関係しない抉り込みがあるものが見られることから、建築材などを転用したものもあったと考えられる。また、井戸枠内に落ち込んだ板材には墨書文字が書かれたものが１点あった。墨書文字は状態が悪くその詳細は明らかでないが、やはり元は建築材の一部であったとも考えられよう。掘方の埋め戻しには、土のほか木の枝や竹を切ったものなどが詰められていた。

井戸の上記のような構造は、宇野隆夫氏の分類（宇野 1989）ではＢⅣ類の縦板組隅柱横桟どめ井戸に、鐘方正樹氏の分類（鐘方 2003）では組立て式方形縦板組型Ｂ類（薄板横桟留型）に相当する。

出土遺物は井戸枠内から近代以降の瓦片１点のほか、土師器片、弥生土器片があった。掘方内からは土師器片が出土した。

なお、井戸を検出した地点は、弥生時代前期から後期に至るまで幾たびも形成と埋没を繰り返した流路４の直上に当たっている。すなわち、早くとも近代以降に造られたこの井戸は弥生時代の流

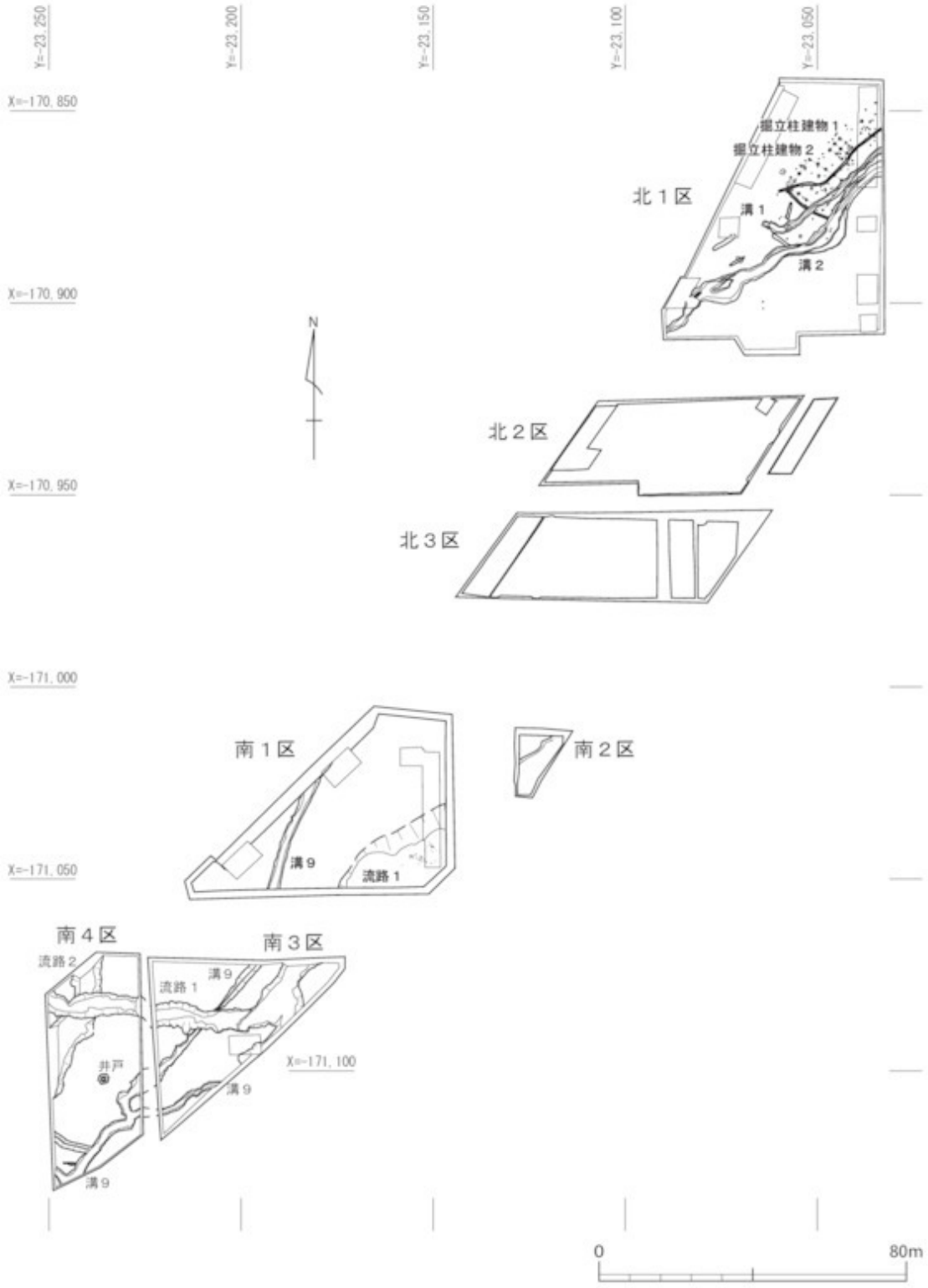


図 37　第 1 遺構面　全体図　（S.＝1/1,700）

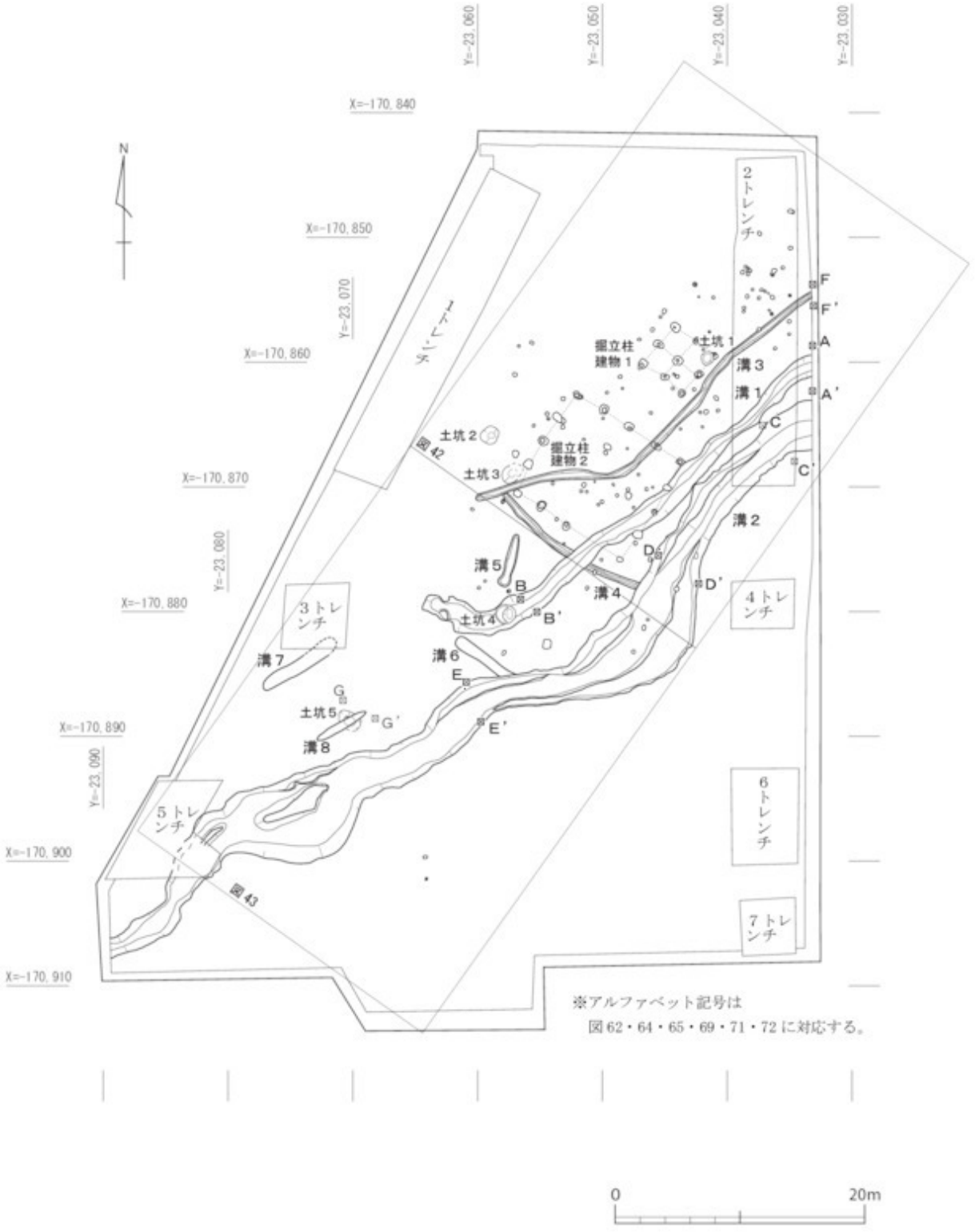
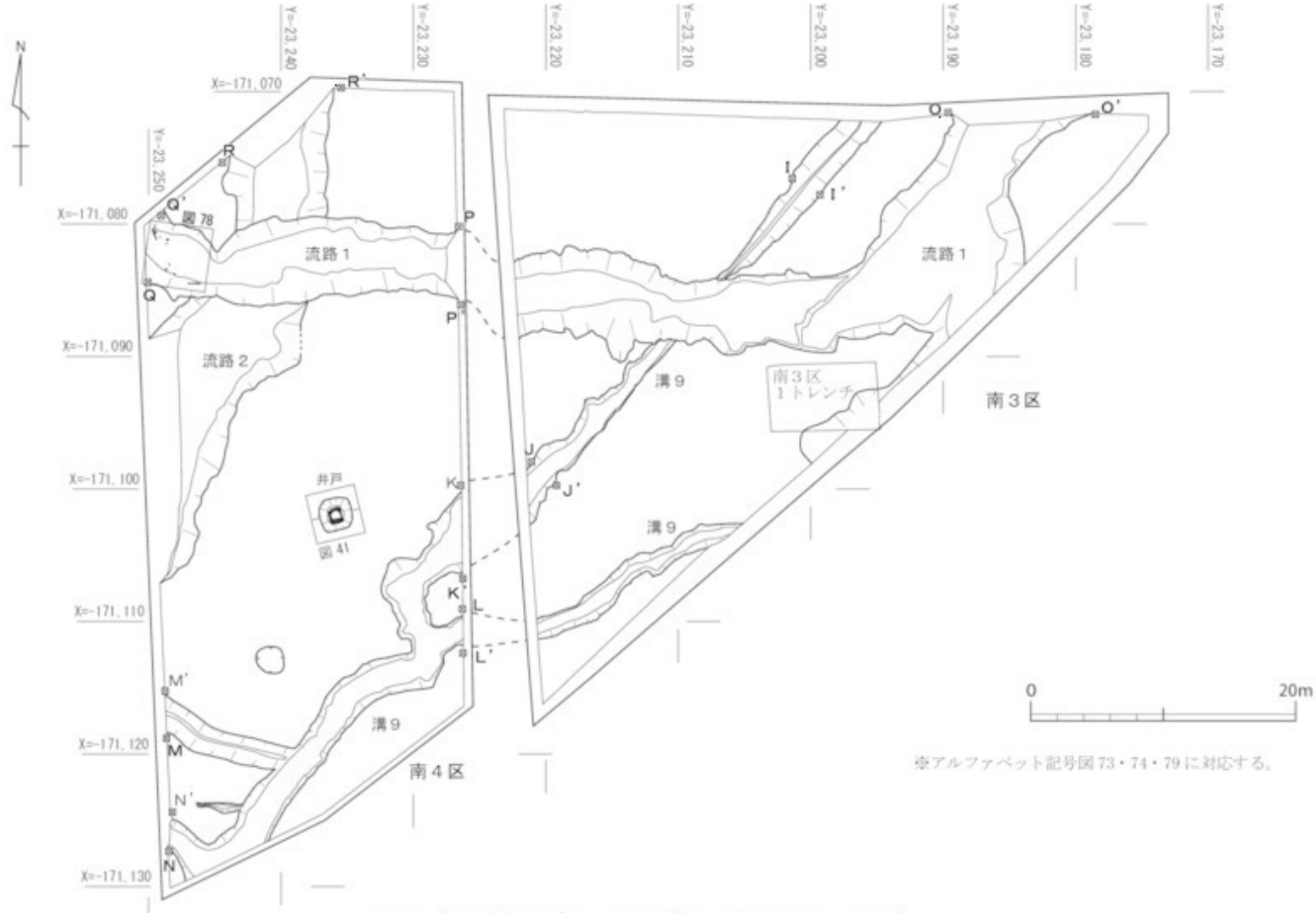


図38　第1遺構面　北1区の遺構　平面図　（S.＝1/500）

※アルファベット記号H・H'は図73に対応する

図 39　第１遺構面　南１・２区の遺構　平面図　（S.＝1/500）



※アルファベット記号図 73・74・79 に対応する。

図 40　第 1 遺構面　南 3・4 区の遺構　平面図　（S.=1/500）

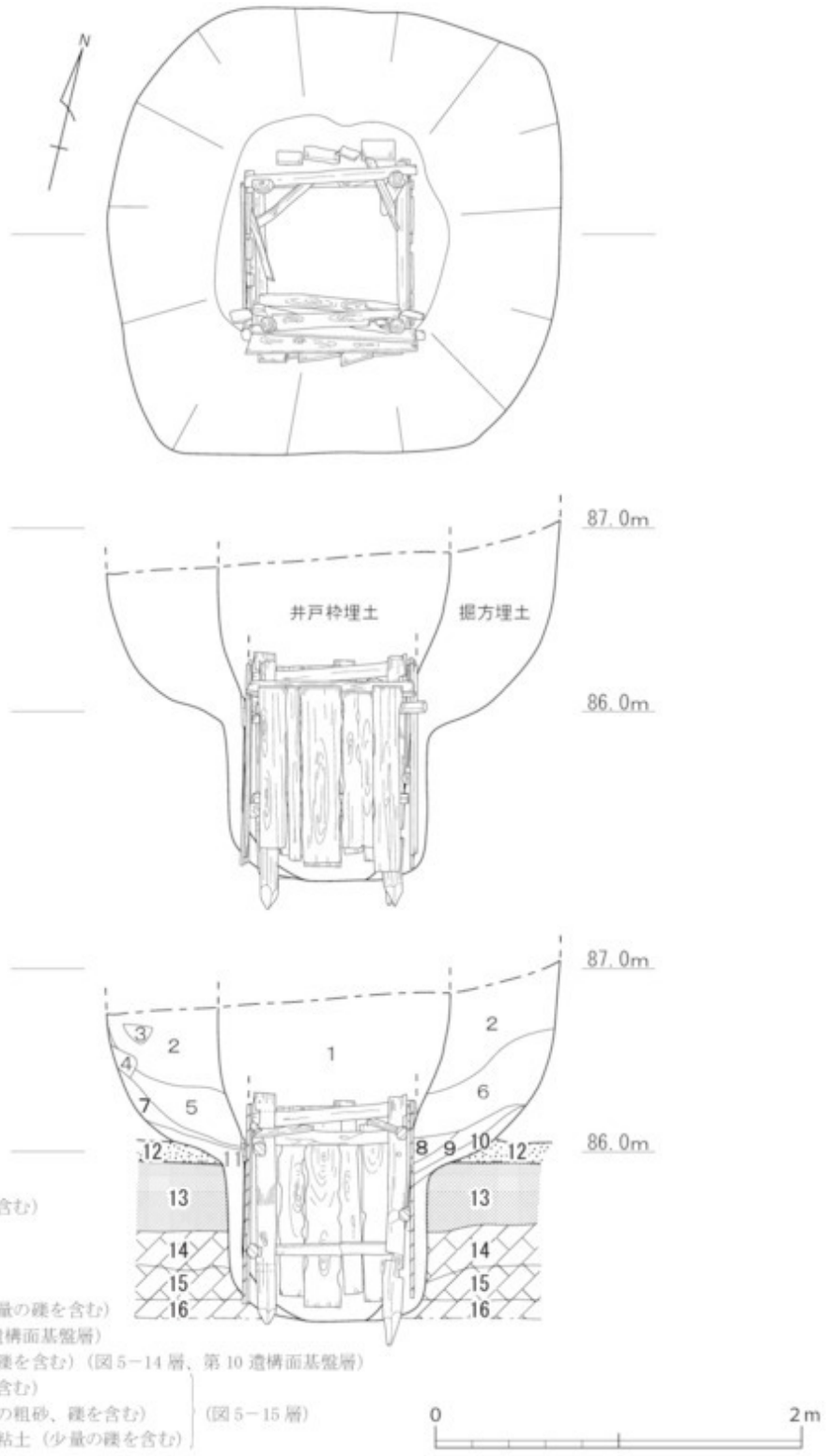


図41　第1遺構面　南4区　井戸　平面・立面・断面図　（S．=1/40）

路の埋土を掘り抜いたものであった。このことは、地下水脈の関係上、井戸の立地としては好都合であったに違いない。

（2）素掘溝

図37・図40の平面図には表現していないが、第1遺構面上面で、南3区・南4区で素掘溝が多く検出されている。幅30cm、深さ10～30cmほどの規模で、互いに平行しておおむね南北方向に延びいている。第1遺構面の、それよりも以前に形成され埋没した流路や溝などの埋土上面に掘られているもので、遺構の切り合い関係からもそれらよりも新しいことがわかる。

なお、出土遺物については、現地調査において各遺構に個別番号等の遺構名称が振られず、一括して「素掘溝」との名称で取り上げられていた。このため、遺構の形成時期の確定には若干厳密性を欠いている。ただし、遺構の検出状況および取り上げられている遺物を見ても、それらが同時期であることは窺える。遺物には、土師器片（80－2）、須恵器片、瓦器片、土錘（80－3）などがあった。これらの出土遺物から、当該遺構面の素掘溝の形成年代は、13世紀以降とみられる。

2．古墳時代の遺構

古墳時代の遺構として、建物跡のほか多くのピット、土坑、溝などを検出した。このうち建物やピット等は、個々の遺構からの出土遺物が乏しいために、遺構の形成年代について厳密に確定することが難しい。

後述するように、溝2については古墳時代前半の遺物が多量に出土している。また、溝1および土坑3・同5で、少量ながら弥生時代および庄内式期から布留式期の土器片が出土している。ピットから出土する遺物は、やはり少数でかつ細片が多いのであるが、弥生時代から古墳時代のもので、それよりも新しいものは含んでいない。

一方、遺構の切り合い関係を見ると、幾つかの土坑とピットの間に切り合い関係があり、相対的に形成年代を位置づけることが可能なものがある。なかでも、溝1および溝3と、掘立柱建物2を構成するピットの関係をみると、前者の埋土の上面に後者が形成されるという関係が明らかになっている。

このような出土遺物と遺構の切り合い関係から、溝1・溝2・溝3は古墳時代でも前期に形成されその前半のうちに埋没したものとし、掘立柱建物2はそれよりも新しい古墳時代の後半に形成されたものと考えた。この時、掘立柱建物1の形成時期を決めることはさらに困難なのであるが、掘立柱建物2と位置が近く、遺構の主軸方向にもある程度の関係が窺えることから、ほぼ同時期と考えた。また、その他のピット群についても、根拠薄弱ながら掘立柱建物とおおよそ同時期と考えた。土坑については、土坑5は上記のようにその出土遺物から古墳時代前期とみられるが、掘立柱建物1を構成するピットのうち土坑1に切られるものがあるから、土坑1はおおむね古墳時代後期に形成されたと考えられる。すなわち、各土坑の形成時期は、古墳時代の前期から後期にいたる比較的

時間幅があるものと考えられる。

（1）掘立柱建物

①掘立柱建物1（図37・図38・図42～46・表1）（北1区）

北1区北半中央のやや東寄りで検出した。2間×2間の総柱建物である。建物の方位は、北に対しておおむね50°東に振っている。

堀立柱建物1の平面形はほぼ正方形である。その規模は、建物の北辺に当たるピット1とピット3の間隔および西辺に当たるピット1とピット7の間隔が、芯々間距離でそれぞれ3.9mおよび4.1mである。ピットの掘り方は、多くは平面形が長径60～80cm程の不整楕円形を呈するとみられるが、ピット5や同6・同7・同8のように、掘方の上端が部分的に直線的になるものや隅角の形状をするものがある。これらは、方形プランが意識されているかにもみえるが明確ではない。また、多くのピットに径20～30cmの柱痕を確認した。一方で、図46－5に示したように、ピット8のような浅いものは後世の削平を受けていると考えられる。

出土遺物は、ピット7から土師器の細片3点があった。その時期の特定は困難であるが、うち1点は、布留式土器甕の体部と口縁部の接合部の破片とみられる。北東隅のピット3は、土坑1と切り合い関係があり、その南半を切られている。

各ピットの規模等の情報は、表1にまとめたので参照されたい。

②掘立柱建物2（図37・図38・図42・図47～49・表1）（北1区）

北1区の中央部のやや北寄りで検出した、4間×4間の掘立柱建物である。その規模は、建物の北辺に当たるピット10とピット14の間隔および西辺に当たるピット10とピット21の間隔が、芯々間距離でそれぞれ9.9mおよび9.3mである。各ピットの掘方は、平面形が長径60～80cmほどの不整楕円形であることを基本とすると思われるが、図48・49に示したように、ピット

表1　第1遺構面　掘立柱建物1・2　ピット計測表

ピット番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱痕径(cm)	備　考	ピット番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱痕径(cm)	備　考
掘立柱建物1											
1	88	68	25	(12)		6	78	56	25	14	
2	62	35	23	19		7	94	68	52	32	
3		(56)	40	16		8	72	51	10	18	
4	86	59	13	24		9	65	58	20	30	
5	81	75	46	23							
掘立建物2											
10	89	50	44	28		18	52	48	16	22	
11	77	73	43	32		19	75	70	24		
12	79	63	50	21		20	83	67	33		
13	97	54	37	(20)	炭化物出土	21	63	55	29		
14	66	53	32	29		22	89	66	60	55	
15	95	61	35		ピット85を切る	23	73	62	43	25	
16	73	48	48			24	44	40	30		
17	85	74	41	34	土器片検出						

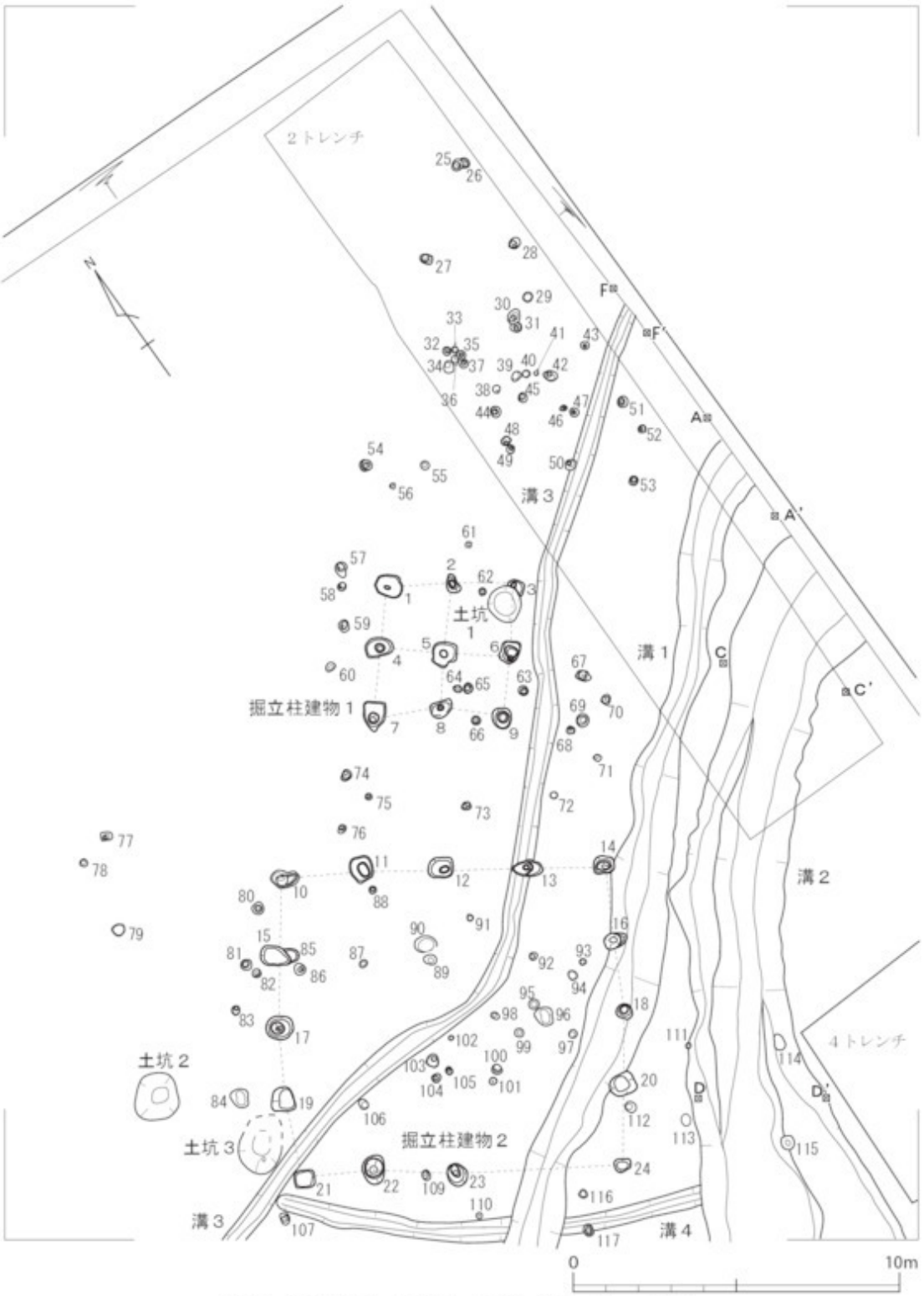


図42　第1遺構面　北1区　平面図（1）（S.＝1/200）

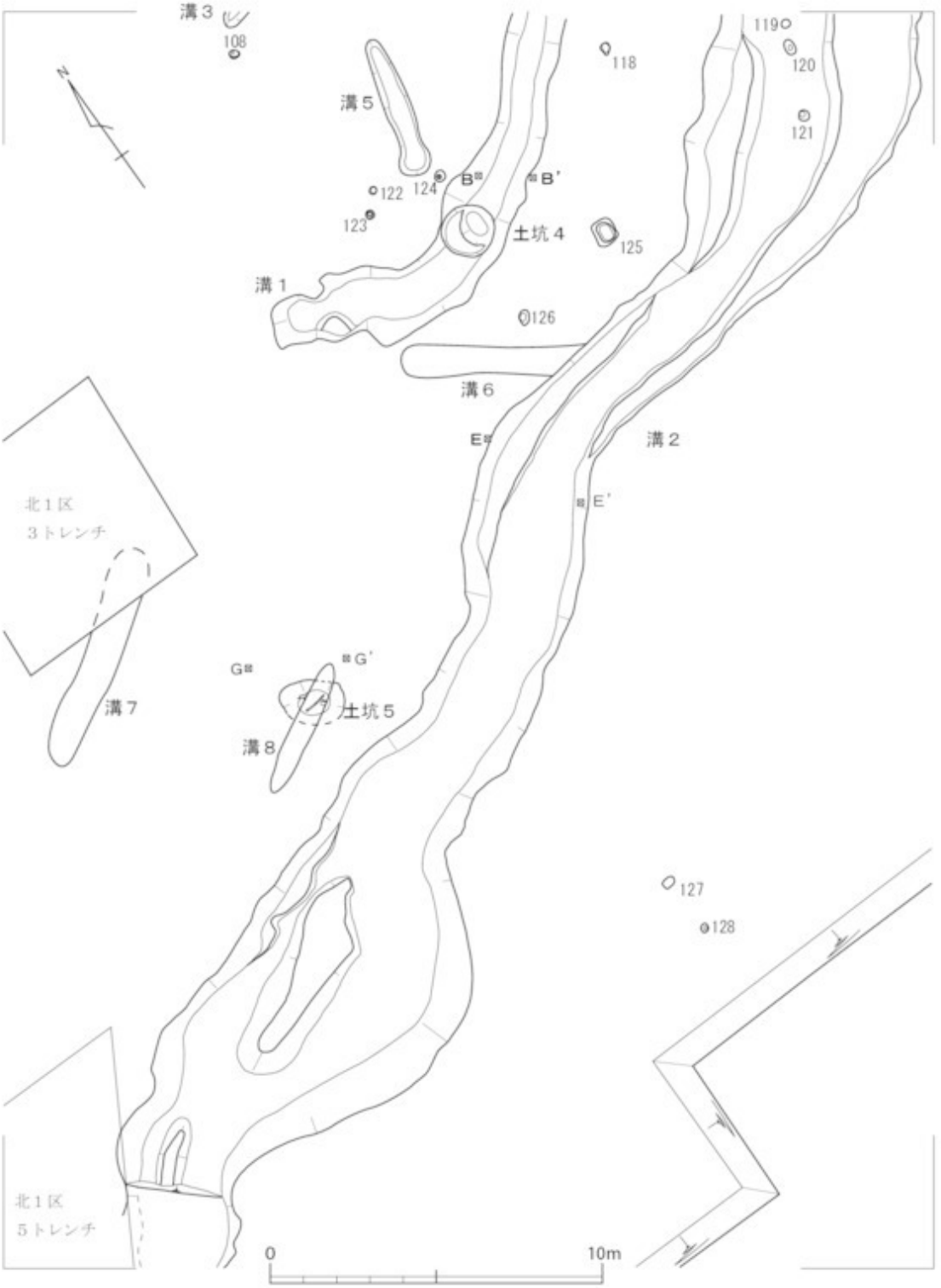


図43　第１遺構面　北１区　平面図（２）（S.＝1/200）

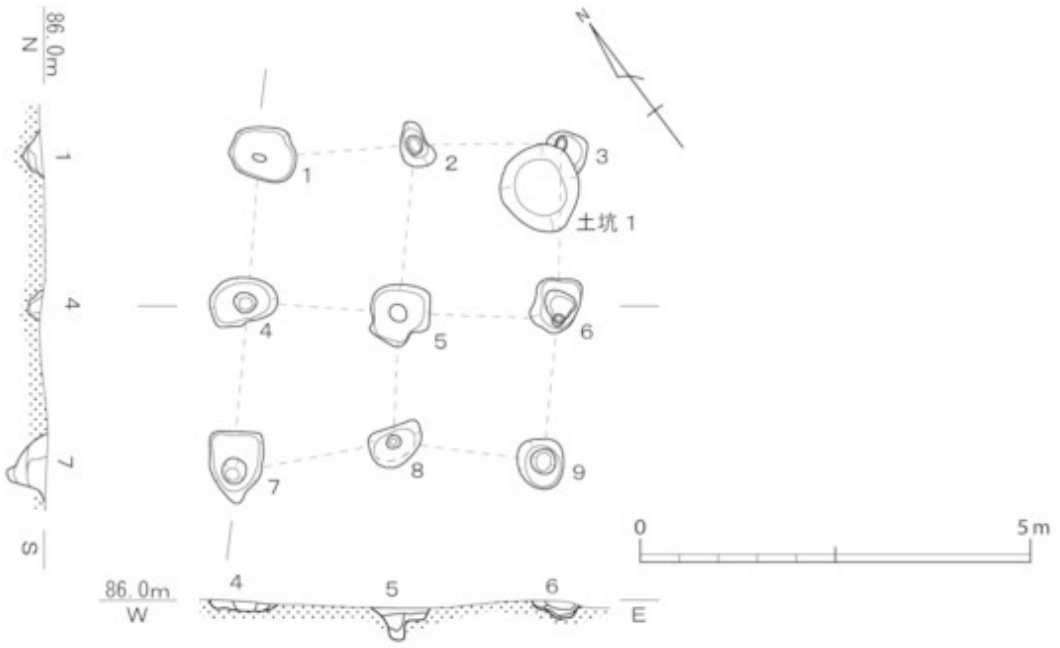


図44　第１遺構面　北１区　掘立柱建物１　平面図　（S.＝1/100）

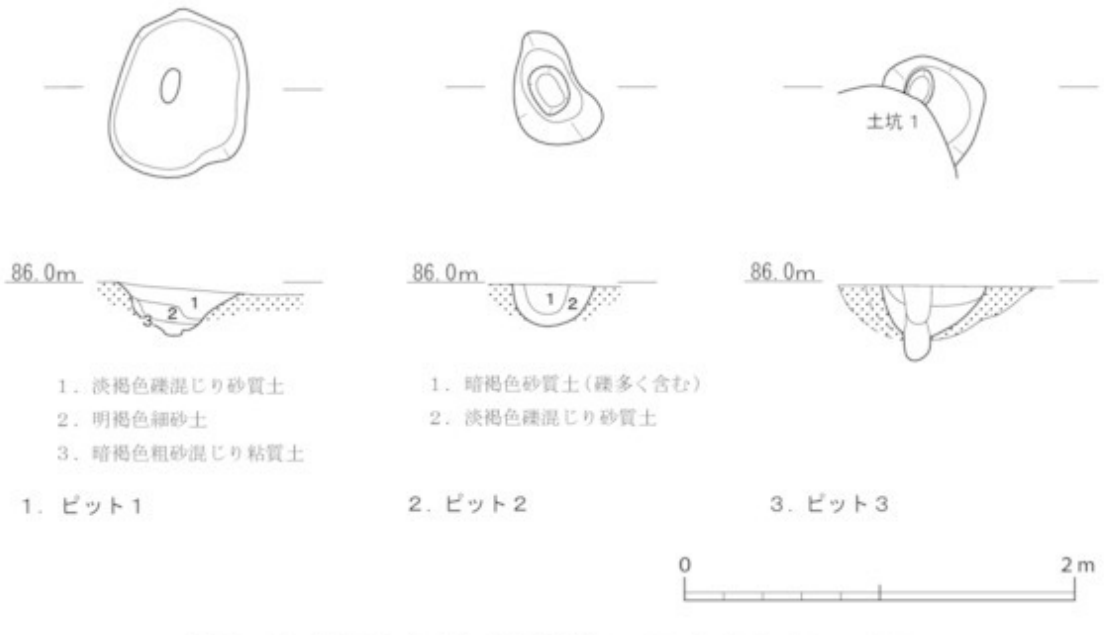


図45　第１遺構面　北１区　掘立柱建物１　ピット（１）（S.＝1/40）

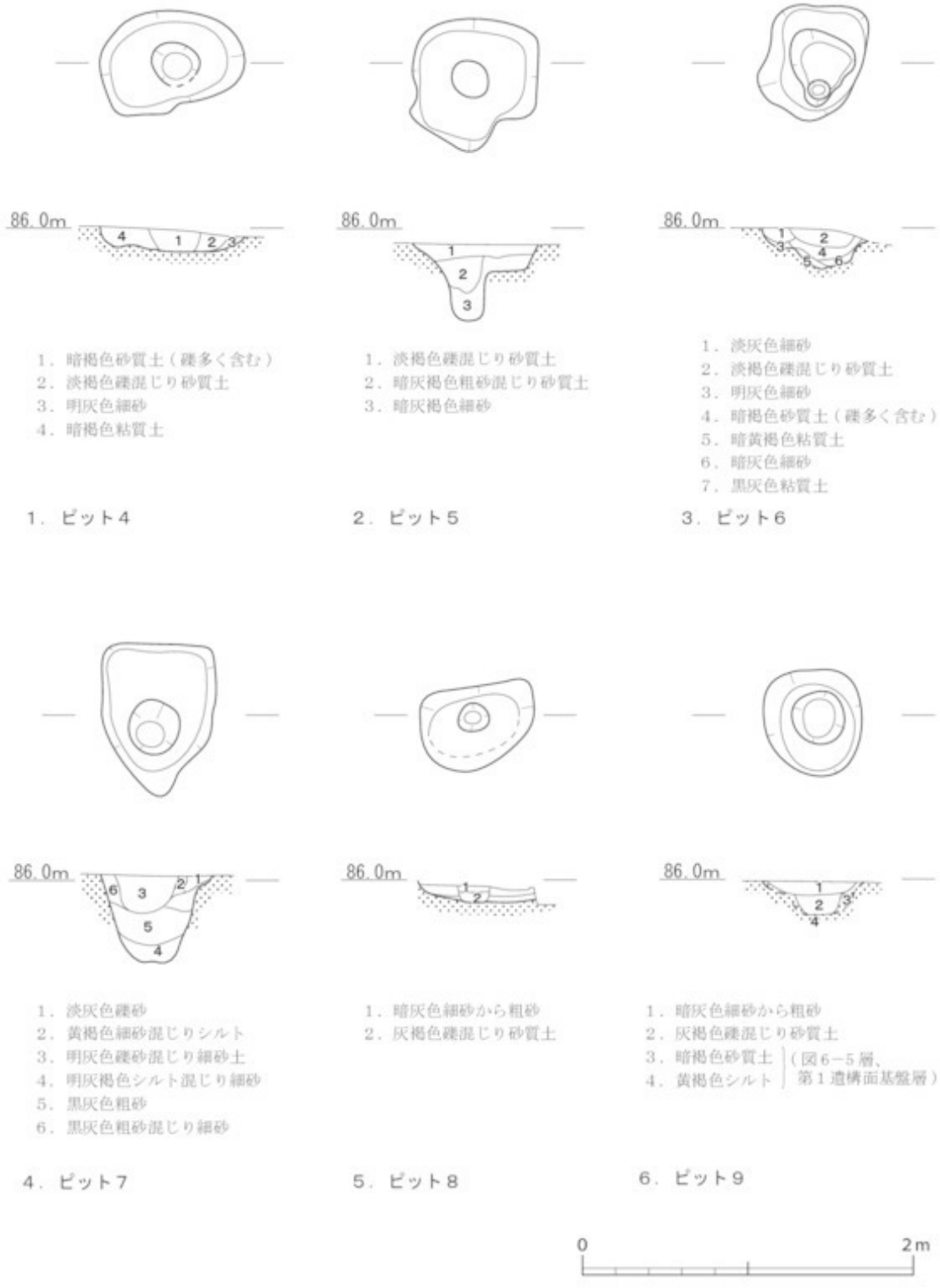


図46　第1遺構面　北1区　掘立柱建物1　ピット（2）（S.＝1/40）

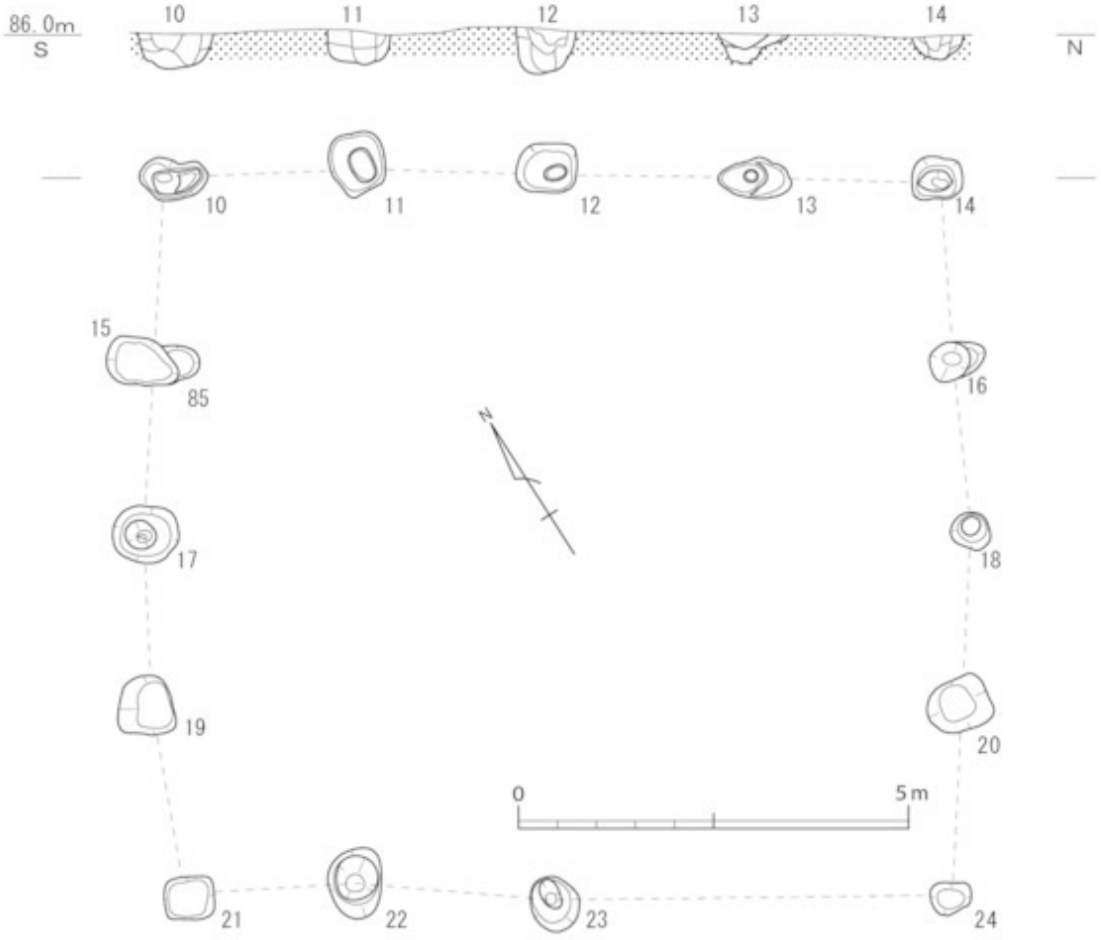


図 47　第 1 遺構面　北 1 区　掘立柱建物 2　平面図　（S.＝1/100）

11・同 12・同 14・同 17・同 21・同 24 のように方形を意識したともみえるものがある。ピットのなかには柱痕が検出されたものが 7 基ある。それらは、有機質の柱が土壌化したもので、柱材そのものではない。このため当初の柱の寸法は正確ではないが、おおむね径 30cm 弱ほどのものであったらしい。各ピットの規模等の情報は、表 1 にまとめたので参照されたい。

掘立柱建物 2 の周辺の遺構を図 42 によって見ると、北約 4 m の至近の位置に掘立柱建物 1 が所在している。掘立柱建物 2 の方位は、北に対しておおむね 60° 東に振っているが、この角度は厳密には掘立柱建物 1 とは合わないものの、まったく無関係とも思えない程の差異となっている。位置関係と建物の方向という観点からは、掘立柱建物 1 と同 2 は同時期に存在して、互いに何らかの関係があったことが示唆される。

また、検出した柱穴は、図 42 見えるように、溝 1 や溝 3 と切り合い関係があり、ピット 14・同 16・同 18・同 20 が溝 1 の、ピット 13 が溝 3 の、それぞれ遺構埋土の上面を掘り込む状態で検出されている。このことは、掘立柱建物 2、ひいては同 1 の形成時期を考えるうえでの手がかり

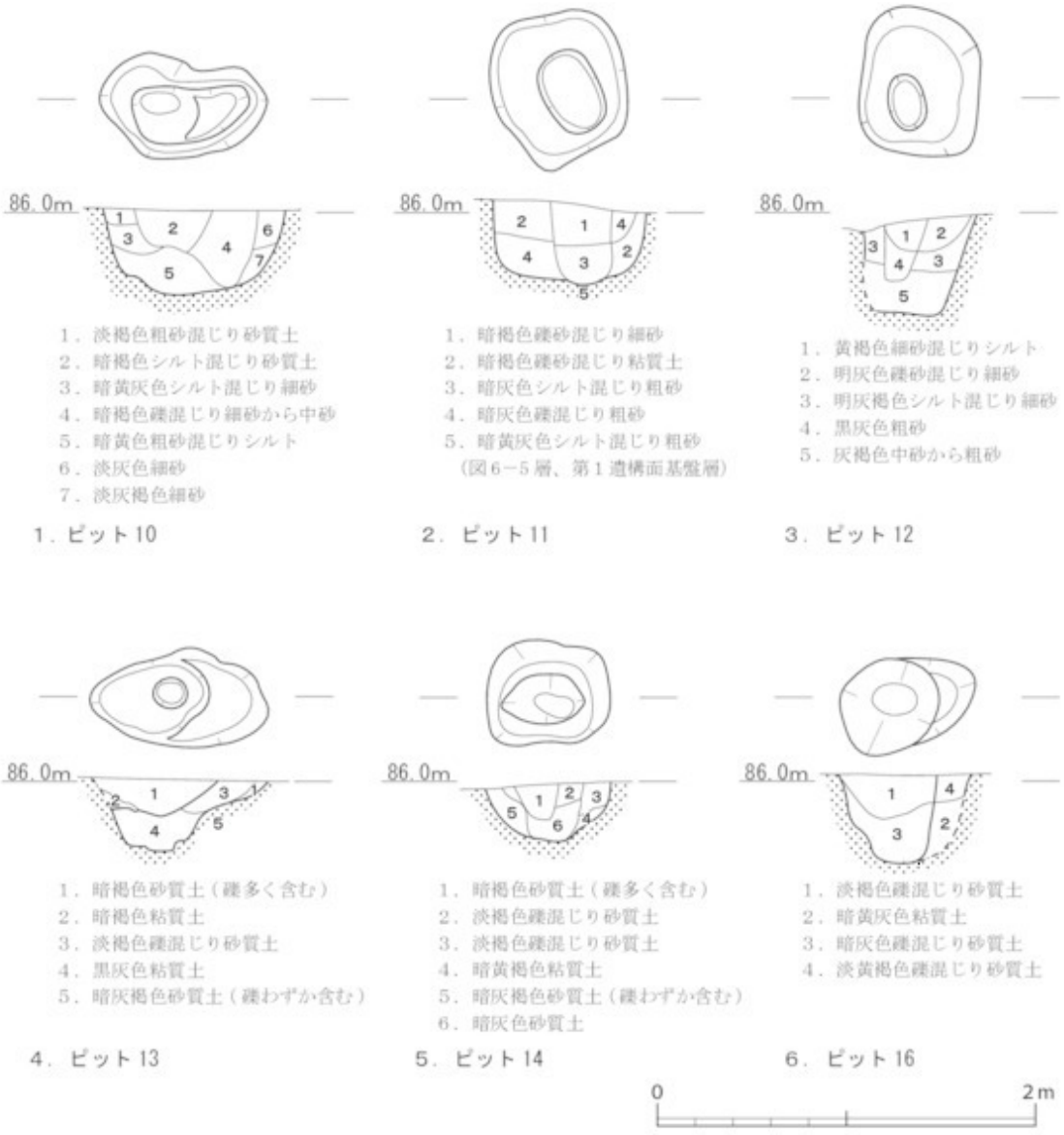
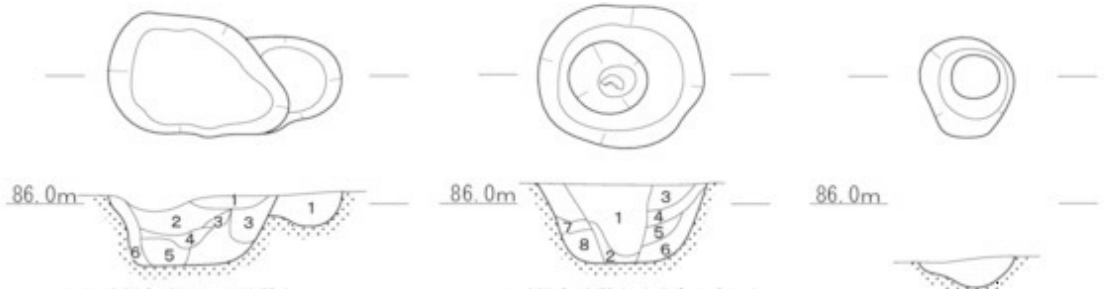


図48　第1遺構面　北1区　掘立柱建物2　ピット（1）（S.＝1/40）

を与えている。なお、検出された掘立柱建物2の柱穴について、南東隅のピット24とそこから西に1基目のピット23の間には、本来存在したであろう位置にピットが検出されていない。ピット13の南に対向する位置で、かつピット24と同23に対して等間隔になる位置であれば、図42に見えるように、溝1の埋土上に当たる。この場合は、溝埋土に掘られた遺構であったために、遺構埋土の識別が特に困難であったために、検出されなかった可能性が考えられる。

出土遺物は、ピット10から土師器細片13点、同11から土師器片、同12から土師器片1点、同17から土師器片8点、同24から土師器片16点があった。いずれも細片で時期の特定が困難であるが、ピット10および同11から出土した土器片は古墳時代のものとみることができるもの



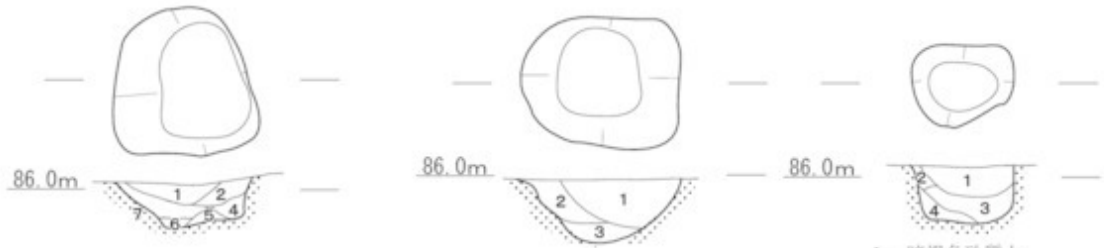
1．淡褐色礫混じり粘質土
2．暗灰色砂質土（礫少し含む）
3．暗灰色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．暗褐色粗砂混じり粘土
6．暗灰色粗砂混じり細砂

1．ピット15

1．暗褐色砂質土（礫多く含む）
2．暗黄褐色粘質土
3．淡褐色礫混じり砂質土
4．淡灰色細砂
5．暗灰褐色砂質土（礫わずか含む）
6．暗褐色粘質土
7．暗黄灰色粘質土
8．明灰褐色砂質土（礫少し混じる）

2．ピット17

3．ピット18



1．暗褐色砂質土（礫多く含む）
2．淡褐色礫混じり砂質土
3．暗灰色礫混じり砂質土
4．淡褐色礫混じり砂質土
5．濃褐色シルト
6．暗黄褐色粘質土
7．暗灰褐色砂質土（図6−5層、第1遺構面基盤層）

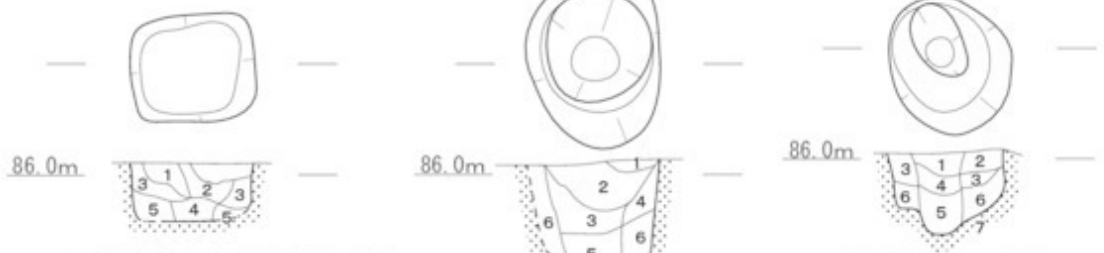
4．ピット19

1．淡褐色礫混じり細砂
2．暗黄褐色細砂
3．暗灰色砂質土

5．ピット20

1．暗褐色砂質土
2．淡褐色礫混じり細砂
3．暗黄褐色細砂
4．暗灰色砂質土

6．ピット24



1．暗黄灰色シルト（礫わずかに含む）
2．淡褐色礫混じり砂質土
3．暗褐色礫混じり細砂
4．暗灰褐色礫混じり粘質土
5．暗褐色シルト混じり細砂

7．ピット21

1．淡褐色礫砂混じり砂質土
2．淡褐色礫混じり砂質土
3．暗灰色中から粗砂
4．暗褐色礫混じり細砂
5．暗灰褐色粗砂混じり細砂
6．暗褐色シルト混じり細砂

8．ピット22

1．淡褐色礫混じり砂質土
2．淡褐色礫混じり砂質土
3．暗褐色礫混じり細砂
4．暗褐色細砂
5．灰褐色粗砂
6．灰褐色礫混じり細砂
7．暗褐色粗砂
（図5−5層、第1遺構面基盤層）

9．ピット23

0　2m

図49　第1遺構面　北1区　掘立柱建物2　ピット（2）（S.=1/40）

であった。

（2）ピット群（図 37・図 38・図 42・図 43・図 50 ～ 58・表 2）（北 1 区）

北 1 区の北半を中心に、掘立柱建物 1 および同 2 を構成するピットを除き、104 基のピットを検出した。これらの一部には柱痕を確認したものもあるが、建物配置を復原的に見い出すことはできなかった。また、掘立柱建物 1 および同 2 の範囲内に分布するものもある。これらは、実際には掘立柱建物の一部を支える柱穴であった可能性もなくもないが、時期が異なっている場合が多いであろう。

各ピットの規模は表 2 にまとめ、個々の平面図・断面図を図 50 ～ 58 に示した。ピットの平面形は円形で、その大きさは一部にピット 84 や同 96 のように長径約 60 ～ 70cm とやや大きいものがあるが、おおむね径 30cm程度、深さ約 20 ～ 30cm 程度である。

出土遺物はあまり多くないが、ピット 63・同 84・同 114・同 115・同 119・同 125 から土器片が出土した。細片が多く時期の特定は難しいが、それがわかるものは弥生時代から古墳時代中期頃までの土器片であった。このうち図化可能であったものは（80 － 4 ～ 7）として示している。これらの遺物の年代はピット形成時期の上限を示すものである。また、ピット 28 では柱材が残存していた。柱材残存規模は、径 13.5cm、長さ 22.0cm である。

（3）土坑

①土坑 1（図 38・図 42・図 59）（北 1 区）

北 1 区北東部で検出した。図 42 に示したように、掘立柱建物 1 の北東隅に当たるピット 3 と切り合い関係があり、これを切っている。

平面形は径約 1.5 mの不整円形で、深さは 45cmである。図 59 の断面図をみると、土坑の法面はほぼ垂直に掘り込まれて、底は比較的平らである。出土遺物が時期、性格は不明であるが、掘立柱建物 1 との切り合い関係から、古墳時代後期頃とみられる。

②土坑 2（図 38・図 42・図 60）（北 1 区）

北 1 区中央の北東寄りで検出した。平面形は長径 1.56 mの不整楕円形で、深さは 45cmである。出土遺物はなかった。

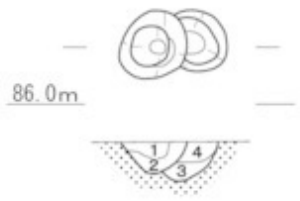
③土坑 3（図 38・図 42・図 60）（北 1 区）

北 1 区中央のやや北東寄りで検出した。平面形は長径 1.88 m、短径 1.3 2 mの不整楕円形で、深さは 36cmである。図 60 の断面図に示したように、土坑の断面形は浅いU字形を呈している。埋土に関しては、現地調査の記録図面に分層はなされているものの注記が一部欠けてていた。埋土の上半はシルトないしは粘質土との記録があるが、下半はそれがなかった。この部分は、調査時の写真からみると砂質土の堆積であったらしい。

出土遺物は、2 層中から弥生土器甕（80 － 8）が出土した。これは、年代的には想定する遺構面の時期よりも溯るものであるが、遺構形成時期の上限を示すものと理解される。

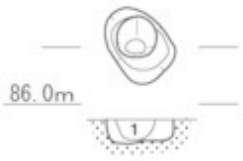
表2　第1遺構面　ピット25～128　計測表

ピット番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱痕径(cm)	備考	ピット番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱痕径(cm)	備考
25	38	34	16	20		77	36	26	22	12	
26	(33)	31	21			78	25	23	11		
27	38	30	14	20		79	39	36	38		
28	37	30	63	22	柱材出土	80	38	33	30	18	
29	30	28	17			81	36	34	30	23	
30	50	39	29	15		82	28	27	24	21	
31	34	28	26	13		83	29	24	35	14	
32	27	26	22	17		84	60	51	31		
33	22	18	9			85		(46)	34		建物2 ピット15に近接
34	38	31	12			86	36	34	20	16	
35	28	27	32	13		87	27	22	17		
36	24	23	11			88	24	23	7	14	
37	38	28	27	14		89	41	29	18		
38	25	23	23			90	69	50	14		
39	34	24	19			91	21	18	8		
40	23	22	26			92	26	24	25		
41	14	-	28			93	21	19	18		
42	45	33	34	17		94	30	25	24		
43	26	24	16	9.5		95	33	31	7		
44	34	31	20	17		96	69	66	30	40	
45	30	26	24	18		97	26	25	19		
46	24	17	22	10		98	28	21	8		
47	29	27	24	11		99	29	28	25		
48	30	26	23	13		100	32	30	28	20	
49	27		29	12		101	25	23	13	21	
50	38	32	21	13		102	17	15	14		
51	33	31	26	16		103	40	36	31	15	
52	26	23	19	9		104	28	26	36	15	
53	28	27	15	10		105	24	20	9	9	
54	38	35	21	15		106	34	26	15		
55	28	26	25			107	37	26	17	17	
56	18	17	11			108	32	23	20	21	
57	49	34	14	18		109	33	26	15	20	
58	28	24	12	18		110	19	18	14	12	
59	37	32	14	12		111	18	17	7		
60	33	25	9			112	36	33	14		
61	24	23	12	13		113	37	31	14		
62	24	22	30	19		114	52	32	24		溝2埋土上に形成
63	31	28	14	14		115	44	42	30		溝2埋土上に形成
64	26	23	20	21		116	26	25	18		
65	(30)		10	(17)		117	39	31	19	15	
66	29	26	16	18		118	39	30	19		
67	47	32	20	21		119	29	26	13		溝2埋土上に形成
68	25	23	20	10		120	47	31	20		溝2埋土上に形成
69	41	40	27	25		121	34	33	9		溝2埋土上に形成
70	31	27	26	20		122	24	22	7		
71	22	19	16			123	28	25	14	14	
72	12	10				124	33	31	22	11	
73	30	24	14	14		125	79	67	24		
74	37	29	10	21		126	44	32	26		
75	20	19	18	13		127	38	27	24		
76	30	22	18	13		128	28	22	36	11	



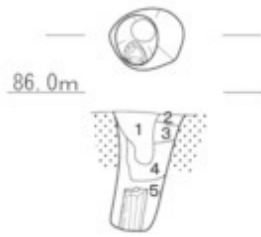
1．淡灰褐色粗砂混じり細砂
2．暗褐色粗砂混じり細砂
3．淡黒褐色粗砂混じり細砂
4．暗黄褐色粗砂混じり細砂

1．ピット25・26



1．淡灰褐色粗砂混じり細砂

2．ピット27

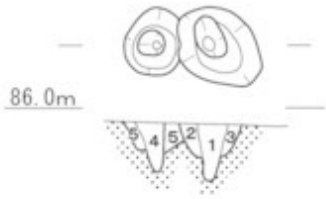


1．暗灰色礫混じり粗砂
2．明赤褐色礫砂
3．濃灰色粗砂
4．暗灰色粗砂混じり細砂
5．暗灰色細砂

3．ピット28

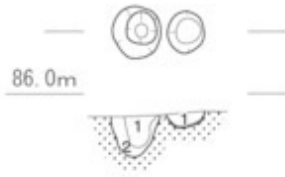
1．明灰色粗砂混じり細砂
2．暗灰色粗砂（礫わずかに含む）

4．ピット29



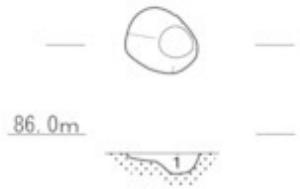
1．明灰色粗砂混じり細砂
2．暗灰色粗砂（礫わずかに含む）
3．明赤褐色礫砂
4．灰褐色粘質土（礫わずかに含む）
5．灰褐色礫混じり細砂

5．ピット30（右）・31（左）



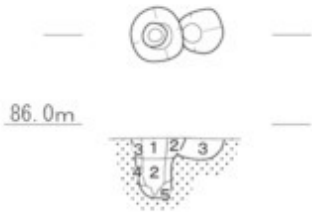
1．淡橙灰色粗砂混じり細砂
2．暗灰色細砂

6．ピット32（右）・33（左）



1．暗橙褐色粗砂混じり細砂

7．ピット34



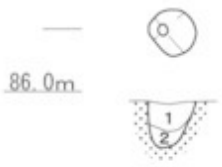
1．明灰色粗砂混じり細砂
2．暗灰色粗砂混じり細砂
3．暗灰色細砂
4．暗灰褐色細砂
5．黒褐色粗砂混じり細砂

8．ピット35（左）・36（右）

1．淡橙灰色粗砂混じり細砂
2．暗灰褐色細砂
3．暗灰色細砂
4．橙褐色細砂
5．暗灰褐色シルト混じり細砂

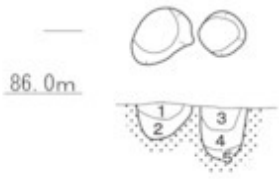
9．ピット37

図50　第1遺構面　北1区　ピット25～37　（S.＝1/40）



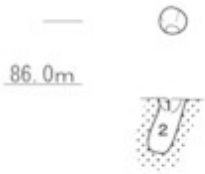
1．明黄褐色細砂
2．明黄褐色シルト混じり細砂

1．ピット38



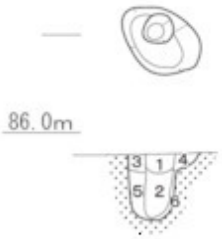
1．明赤褐色礫混じり細砂
2．黒褐色粗砂混じり細砂
3．灰褐色粘質土（礫わずかに含む）
4．黄褐色細砂

2．ピット39（左）・40（右）



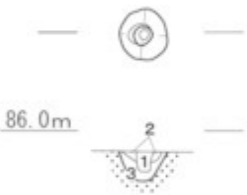
1．明赤褐色礫砂
2．灰褐色粘質土
（礫わずかに含む）

3．ピット41



1．明灰色粗砂混じり細砂
2．暗黄灰色粗砂混じり細砂
3．灰褐色礫混じり細砂
4．褐灰色細砂
5．暗黄灰色シルト
6．淡灰褐色粗砂

4．ピット42

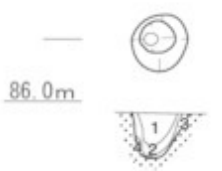


1．灰褐色シルト混じり細砂
2．濃灰色粗砂混じり細砂
3．明灰色細砂

5．ピット43

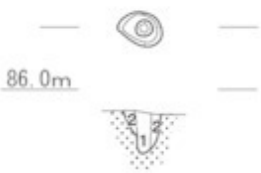
1．暗黄灰色粗砂混じり細砂
2．褐灰色細砂
3．淡灰色細砂
4．淡灰色シルト混じり細砂

6．ピット44



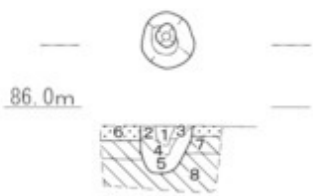
1．灰褐色礫混じり細砂
2．暗灰色粗砂（礫わずかに含む）
3．灰褐色粘質土（礫わずかに含む）
4．淡灰色細砂

7．ピット45



1．暗灰褐色シルト混じり細砂
2．暗灰色粗砂混じり細砂

8．ピット46

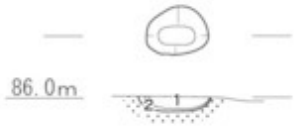


1．暗灰褐色粗砂
2．濃灰色粗砂混じり細砂
3．明褐色細砂
4．暗灰色粗砂
5．暗灰色細砂
6．明黄褐色細砂（図6−5層、第1遺構面）
7．濃灰色細砂
8．明灰褐色シルト（図6−6層、第2遺構面）

9．ピット47

図51　第1遺構面　北1区　ピット38～47　（S.=1/40）

図52　第1遺構面　北1区　ピット48～59　（S.＝1/40）

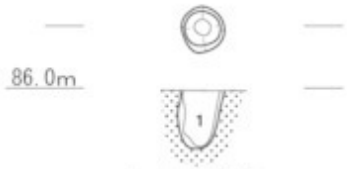


1．暗灰色砂礫混じり細砂
2．明褐色細から微砂

1．ピット60

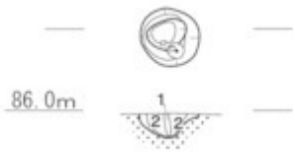
1．赤褐色砂礫
2．明褐色細から微砂

2．ピット61



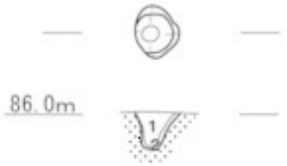
1．緑灰色細砂

3．ピット62



1．黒褐色砂質土
2．明褐色細から微砂

4．ピット63



1．黒褐色砂質土
2．明褐色細から微砂

5．ピット64

1．黒褐色砂質土と明褐色細から微砂の混在層
2．明褐色細から微砂

6．ピット65

1．黒褐色砂質土
2．明褐色細から微砂

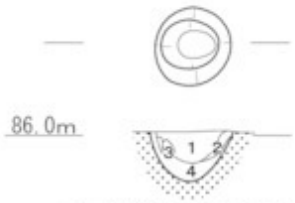
7．ピット66

1．淡褐色礫砂混じり細砂
2．淡灰褐色礫砂
3．暗灰褐色粗砂混じり粘質土

8．ピット67

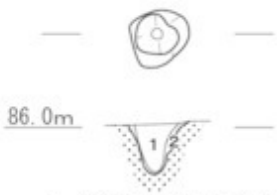
1．淡褐色礫砂混じり細砂
2．淡灰褐色礫砂
3．明灰褐色礫混じり細砂

9．ピット68



1．淡褐色礫砂混じり細砂
2．明灰褐色粗砂混じり細砂
3．淡黄白色極細砂
4．黄褐色細砂

10．ピット69



1．淡褐色礫砂混じり細砂
2．明灰褐色粗砂混じり細砂

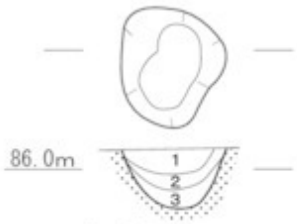
11．ピット70

1．暗褐色礫混じり細砂土
2．暗黄褐色細砂（粗砂わずかに含む）

12．ピット71

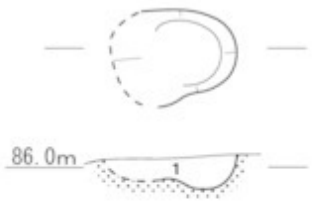
図53　第1遺構面　北1区　ピット60～71　（S.＝1/40）

図 54　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 72 ～ 83　（S.＝1/40）



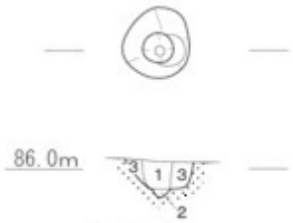
1．黄灰色細砂
2．明黄灰色礫混じり細砂
3．黄灰色細砂

1．ピット84



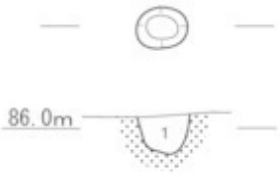
1．淡褐色礫混じり粘質土

2．ピット85



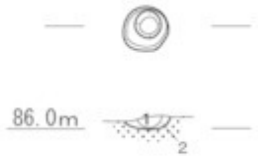
1．暗灰色礫砂
2．暗褐色粗砂混じり細砂
3．明黄褐色礫混じり細砂

3．ピット86



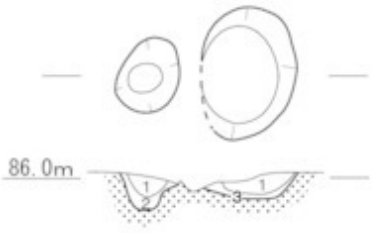
1．暗黄褐色細砂
（粗砂わずかに含む）

4．ピット87



1．濃灰色中砂
2．暗黄褐色細砂
（粗砂わずかに含む）

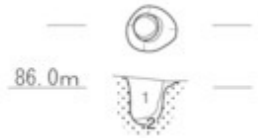
5．ピット88



1．淡褐色礫砂混じり砂質土
2．灰褐色砂質土
3．淡黄褐色細砂

6．ピット89（左）・90（右）

7．ピット91

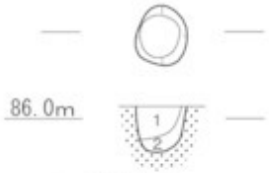


1．褐灰色砂質土
（細砂からシルト主体）
2．淡黄色シルト質粘土

8．ピット92

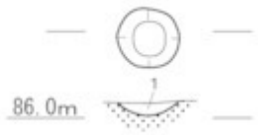
1．灰色砂質土と褐灰色砂質土
の混在層

9．ピット93



1．灰色砂質土
2．褐灰色砂質土
（細砂からシルト主体）

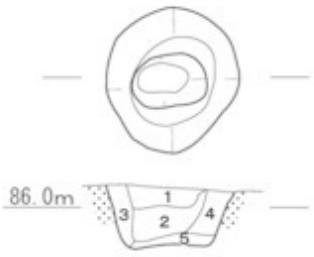
10．ピット94



1．褐色細砂

11．ピット95

図55　第1遺構面　北1区　ピット84～95　（S.=1/40）



1．灰色砂質土
2．灰色砂質土
（細砂から微砂のブロック混じる）
3．灰色砂質土
（シルト質粘土のブロック混じる）

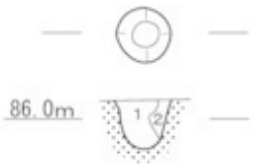
1．ピット 96

1．灰色砂質土と褐灰色砂質土
（細砂からシルト主体）の混在層
2．褐色細砂

2．ピット 97

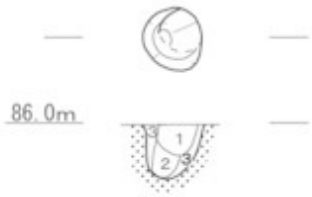
1．灰色砂質土
2．緑黄灰色シルト

3．ピット 98



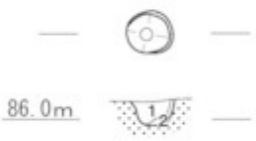
1．灰色砂質土と褐灰色砂質土
（細砂からシルト主体）
2．褐色細砂

4．ピット 99



1．暗灰色砂質土（礫少し含む）
2．灰色砂質土
3．灰黄色シルト

5．ピット 100

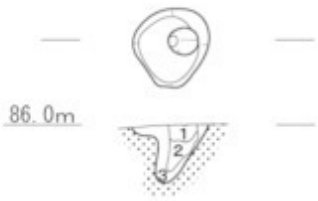


1．灰色砂質土
2．褐色細砂

6．ピット 101

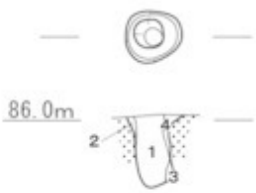
1．淡褐色礫粗砂混じり細砂
2．明褐色細砂
3．淡灰色細砂から中砂

7．ピット 102



1．淡灰色砂質土（細砂主体）
2．灰褐色砂質土
3．灰黄色シルト

8．ピット 103



1．灰褐色砂質土
2．灰黄色シルト
3．明褐シルト質粘土
（中砂から細砂混じり）

9．ピット 104

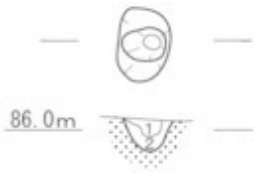
1．淡灰色砂質土（細砂主体）
2．灰黄色シルト

10．ピット 105

1．暗褐色砂質土（礫含む）
2．灰白色細砂混じりシルト

11．ピット 106

図 56　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 96 ～ 106　（S.＝1/40）



1．暗灰色中砂から細砂
2．黄褐色シルト

1．ピット 107

1．赤褐色砂礫
2．明褐色細砂から微砂

2．ピット 108

1．淡褐色礫砂混じり砂質土
2．灰褐色砂質土

3．ピット 109

1．褐色砂礫混じり細砂
2．褐色細砂からシルト

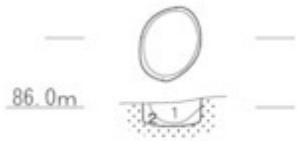
4．ピット 110

1．明黄灰色細砂

5．ピット 111

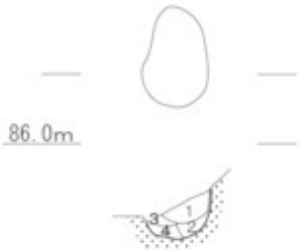
1．明褐色砂礫混じり細砂
2．明褐色粗砂混じり細砂
3．明黄灰色細砂

6．ピット 112



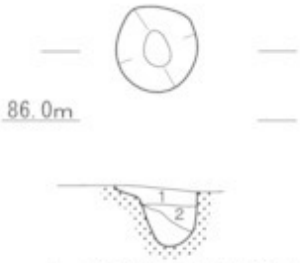
1．淡黄色シルト混じり粗砂
2．淡黄褐色シルト

7．ピット 113



1．淡褐色粗砂混じり極細砂
2．暗黄褐色シルト
3．明灰色細砂混じり粗砂
4．濃灰色粗砂

8．ピット 114

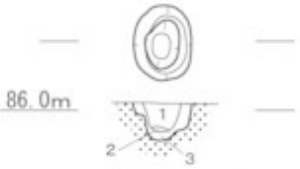


1．淡褐色粗砂混じり極細砂
2．明灰色細砂混じり粗砂

9．ピット 115

1．明褐色砂礫混じり細砂
2．明褐色粗砂混じり細砂

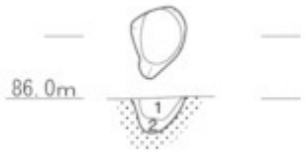
10．ピット 116



1．明褐色砂礫混じり細砂
2．淡黄色シルト混じり粗砂
3．明黄灰色細砂

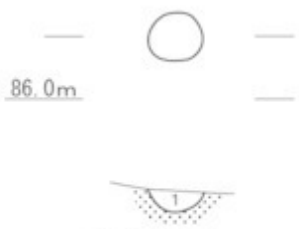
11．ピット 117

図 57　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 107 ～ 117　（S.＝1/40）



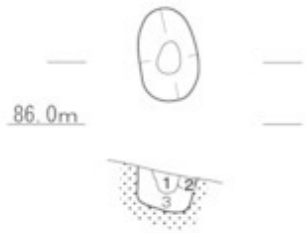
1．明褐色砂礫混じり細砂
2．明黄灰色細砂

1．ピット 118



1．濃灰色粗砂

2．ピット 119



1．暗褐色シルト混じり細砂
2．明灰色粗砂
3．暗褐色粗砂混じり細砂

3．ピット 120

1．明灰色細砂
2．黒灰色シルト

4．ピット 121

1．淡黒色砂礫
2．緑黄灰色シルト

5．ピット 122

1．淡黒色砂礫
2．緑黄灰色シルト

6．ピット 123

1．暗灰色中砂から細砂
2．淡黄褐色細砂
3．黄褐色シルト

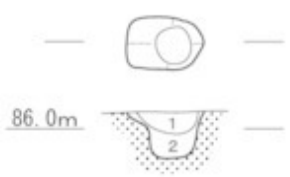
7．ピット 124

1．暗褐色シルト混じり細砂
2．暗褐色粗砂混じり細砂

8．ピット 125

1．明褐色砂礫混じり細砂
2．明褐色粗砂混じり細砂
3．淡黄褐色シルト

9．ピット 126



1．淡黄褐色砂質土
（礫わずかに含む）
2．暗褐色砂質土

10．ピット 127

1．明褐色砂礫混じり細砂
2．黄褐色シルト混じり細砂

11．ピット 128

図 58　第 1 遺構面　北 1 区　ピット 118 ～ 128　（S．=1/40）

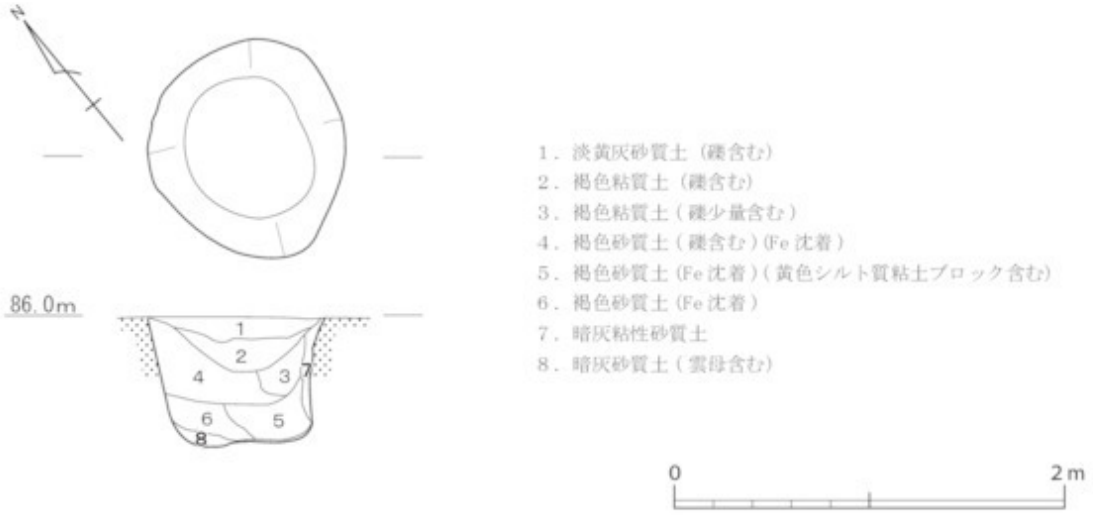


図 59　第 1 遺構面　北 1 区　土坑 1　平面・断面図　（S.＝1/40）

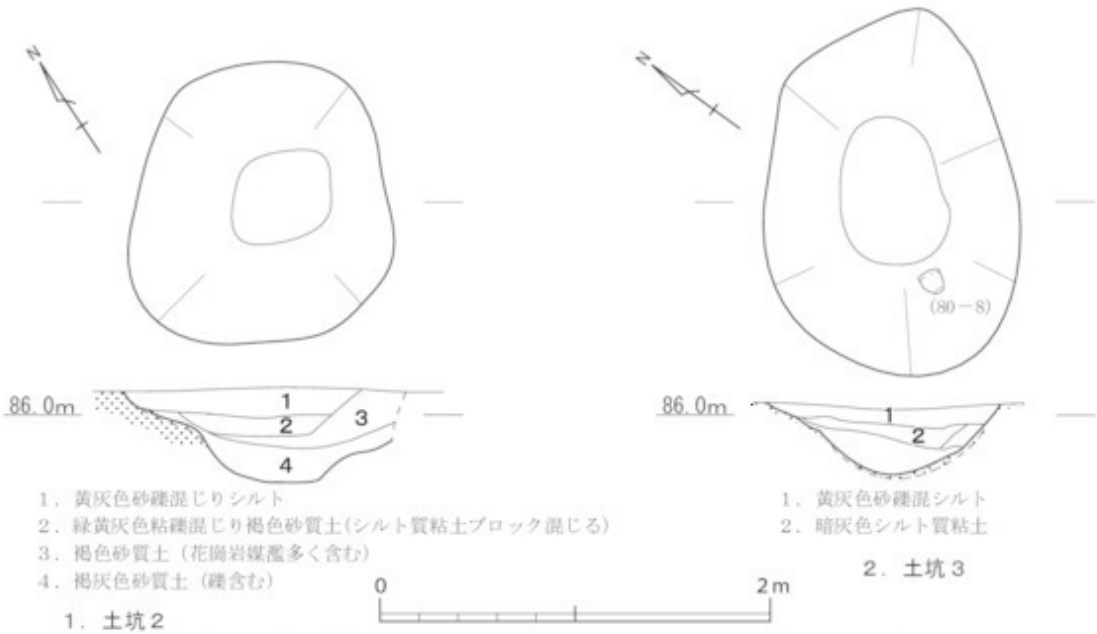


図 60　第 1 遺構面　北 1 区　土坑 2・3　平面・断面図　（S.＝1/40）

④土坑 4（図 38・図 43・図 61）（北 1 区）

北 1 区のほぼ中央部で検出した。図 43 に見えるように、溝 1 の埋土上面でこれを掘り込む掘方が確認できた。

平面形は直径 1.64 mの円形である。図 61 に示したように、土坑 4 の底面は、西半部がテラス状の段をなし東半部が深くなっている。検出深さは、西半で 35㎝、東半で 70㎝である。

出土遺物はなかった。

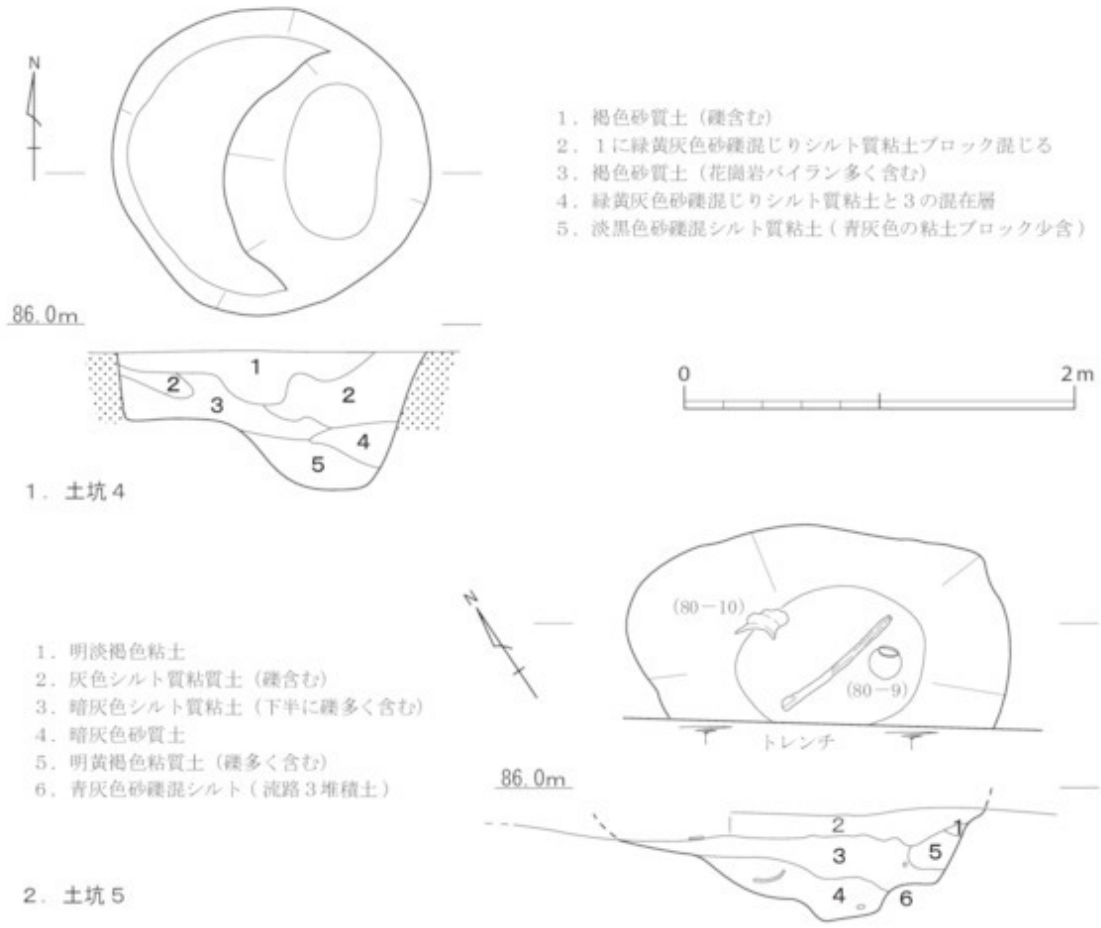


図61　第1遺構面　北1区　土坑4・5　平面・断面図　（S.＝1/40）

⑤土坑5（図38・図43・図61）（北1区）

北1区南西部で検出した。ただし、この地点に設定したトレンチの断面に埋土および土器が見えたことでその存在に気がついたもので、平面的には、図61の断面図に示したように、第1遺構面上面ではなくそれよりも約10～20cmほど下がった地点での検出となっている。後述する溝8と切り合い関係があり、溝8に切られている。

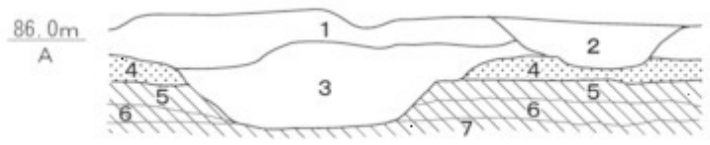
検出した平面形は長径約2m、短径約1.3mの楕円形であり、深さは最大52cmである。埋土は底付近に砂質土が堆積し、その上部に粘質土が堆積する。

出土遺物は、布留式前半に当たる甕が2点（80－9・10）のほか庄内式から布留式期の土師器高杯の脚部片や、長さ70cmばかりの棒状の自然木が出土した。

（4）溝

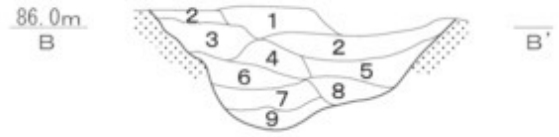
①溝1（図37・図38・図42・図43・図62）（北1区）

北1区の北半で検出した。北東－南西方向に延びている。検出長約36mで、幅と深さは地点によって異なるが、幅は1.0～2.0m、深さは30～60cmである。



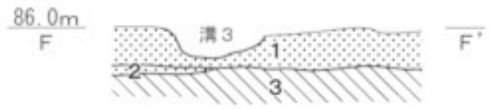
1．溝１（A－A’ 断面）

1．淡褐色砂質土（図６－４層に対応）
2．暗褐色砂質土（素堀溝埋土）
3．明黄白色礫砂
4．黄褐色極細砂からシルト
（図６－５層、第１遺構面基盤層）
5．暗褐色粘土
6．淡褐色極細砂
7．暗灰褐色粘土
（図６－６層、第２遺構面基盤層）



2．溝１（B－B’ 断面）

1．暗褐色礫砂混じり砂質土
2．暗褐色細砂混じり礫砂
3．暗灰褐色細砂（礫砂をわずかに含む）
4．黒褐色細砂
5．淡褐色礫混じり細砂
6．黒褐色シルト混じり礫砂
7．黄灰色細砂
8．暗褐色礫砂
9．黄灰色細砂（シルトのブロック入る）



1．暗赤色粗砂
2．黄褐色極細砂からシルト
3．暗褐色粘土

3．溝３（F－F’ 断面）

1．淡黄色シルト
2．暗灰色砂礫混じり粘質土
（図６－６層、第２遺構面基盤層）
3．灰色シルト質粘土
（下半にFe沈着）
4．淡黄白色細砂からシルト
（図６－７層、第３遺構面基盤層）

4．溝８（G－G’ 断面）

0　2m

※アルファベット記号は図 38 に対応する。

図 62　第１遺構面　北１区　溝１・３・８　断面図　（S.＝1/40）

溝１は掘立柱建物１の東側に位置し、掘立柱建物２の南東部に重複している。前述したように、掘立柱建物２を構成するピット 14・同 16・同 18・同 20 が、溝１の埋土上から掘り込まれている。溝１の埋土上には、このほか土坑４も形成されていることが確認できている。

溝１からの出土遺物は認められなかった。

②溝２（図 37・図 38・図 42・図 43・図 63 ～ 72）（北１区）

北１区の中央から南半で検出した。北１区の南西隅から東辺の中央やや北に至る北東－南西方向に延びる溝で、溝１の南東側に平行している。溝１と同様に複数のピットに切られている。検出長約 70 m、幅約３～５m、深さ 40cm ～ １mである。埋土は、図 71・72 に示したように、細砂や粗砂など砂質土を基本としている。

溝２の検出状況として、特徴的であるのはその出土土器の多さである。当初、溝２の検出北東端部は、第４－１次調査における北１区２トレンチ内で検出されたものである。この時点では、溝の長さは約 6.8 mが検出されただけであったが、その埋土中に多量の土器が含まれていて、特に完形

に近い高杯がその多くを占めていたことから、特異な遺構のあり方が留意されていた。

このため、面的な発掘調査を行った第４－２次調査においては、遺物の出土状況を極力詳細に記録するべく、調査区内で溝２を１区～ 11 区に分割して、それぞれ遺物出土状況図を 1/5 のスケールで作成した。先のトレンチ調査で検出された範囲は、このうちの１区にほぼ相当している。ただし、大量の遺物が破片化して、地点によっては密度高く出土する状況から、必ずしも出土状態を保った状態での検出ができず、したがって平面図に記録されないままに取り上げられた遺物も少なからず存在する。その場合でも、少なくとも上記の地区ごとに取り上げて出土位置のおおよそがわかるようにした。またその際に、埋土の層位を意識したものの、土層によって明確に層位を区別することが不可能であったので、その出土の高さによって「上位」・「中位」・「下位」の別をつけることにした。しかしながら、このことについては、今回の整理作業によってその差が遺物の型式差には必ずしも反映しないことがわかったので、ここでは溝２における各地区ごとの出土遺物として一括して扱う。

さて、溝２からはコンテナにして計 38 箱分の遺物が出土した。このうち、原位置をとどめた状態で記録できたものは、図 64 ～ 70 にその出土状況図を掲げた。また、上記のように、溝２の出土土器については、高杯の比率が高いなど、器種によって偏在があることが気付かれたので、土器の各形式の分布状況を示すために、同図に基づいて図 63 として形式別の遺物分布図を作成した。しかし、この図は出土時の原位置が明確なものだけを記号化して示したものである。上記のようにこれ以外に、厳密な出土位置の記録がないものの出土地区がわかっているものが多数あるので、これを合わせて、地区ごとの形式別出土点数を集計して同図の左上に示した。合計 511 点の土器を取り扱うことができた。

ただし、これらの土器は、完形もしくはそれに近いものではない場合が多数であるから、個体数の認定は厳密には難しい。例えば甕は、口縁部などの特徴的な部位で個体特定ができるものを数え、体部だけの破片などは、ダブルカウントの可能性があるから総数からは除いている。したがって、器種の特定ができるものでそのような不整合が生じないように配慮しつつ数えたが、数字自体は正確ではない。それでも、地区ごとの形式別個体数のおおむねの傾向は把握できるものと考える。

図 63 を見ると、土器の出土点数は、１区、２区、６区に多い。このうち、形式別の個体数を見ると、総じて高杯と甕の比率が高く、とりわけ高杯の含有比率は、１区は 57.2％、２区は 45.3％、６区は 48.4％と、半数近くまたは過半数を占めている。

このように、特定の地点および特定の器種に出土点数が偏ることは、自然的な偶然によるものとは考えられない。突出して多い器種が供膳具である高杯であることは、ここに何らかの祭祀行為があって、その終了後に、使用された土器がこの溝に投棄されたものと考えるのが妥当であろう。

そして、そのような観点から溝２周辺における遺構を見ると、図 38 に示したように、溝２の検出北端に当たる１区・２区のすぐ西側には、掘立柱建物１および同２が存在している。また、溝２は、

形式 / 地区	高杯	甕	壺	小形丸底壺	須恵器	その他	計
1区	99	40	21	11	0	2	173
	57.2%	23.1%	12.1%	6.4%	0.0%	1.2%	100.0%
2区	58	36	17	3	1	13	128
	45.3%	28.1%	13.3%	2.3%	0.8%	10.2%	100.0%
3区	12	6	9	2	2	2	33
	36.4%	18.2%	27.3%	6.1%	6.1%	6.1%	100.0%
4区	25	9	3	2	0	1	40
	62.5%	22.5%	7.5%	5.0%	0.0%	2.5%	100.0%
5区	5	7	8	3	2	3	28
	17.9%	25.0%	28.6%	10.7%	7.1%	10.7%	100.0%
6区	31	14	10	4	0	5	64
	48.4%	21.9%	15.6%	6.3%	0.0%	7.8%	100.0%
7区	13	3	3	3	0	0	22
	59.1%	13.6%	13.6%	13.6%	0.0%	0.0%	100.0%
8区	3	5	1	1	0	0	10
	30.0%	50.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	100.0%
9区	2	1	0	0	0	1	4
	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	100.0%
10区	0	0	0	1	0	1	2
	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	100.0%
11区	4	0	2	0	0	1	7
	57.1%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	14.3%	100.0%
計	252	121	74	30	5	29	511
	49.3%	23.7%	14.5%	5.9%	1.0%	5.7%	100.0%

地区ごとの形式別土器出土点数

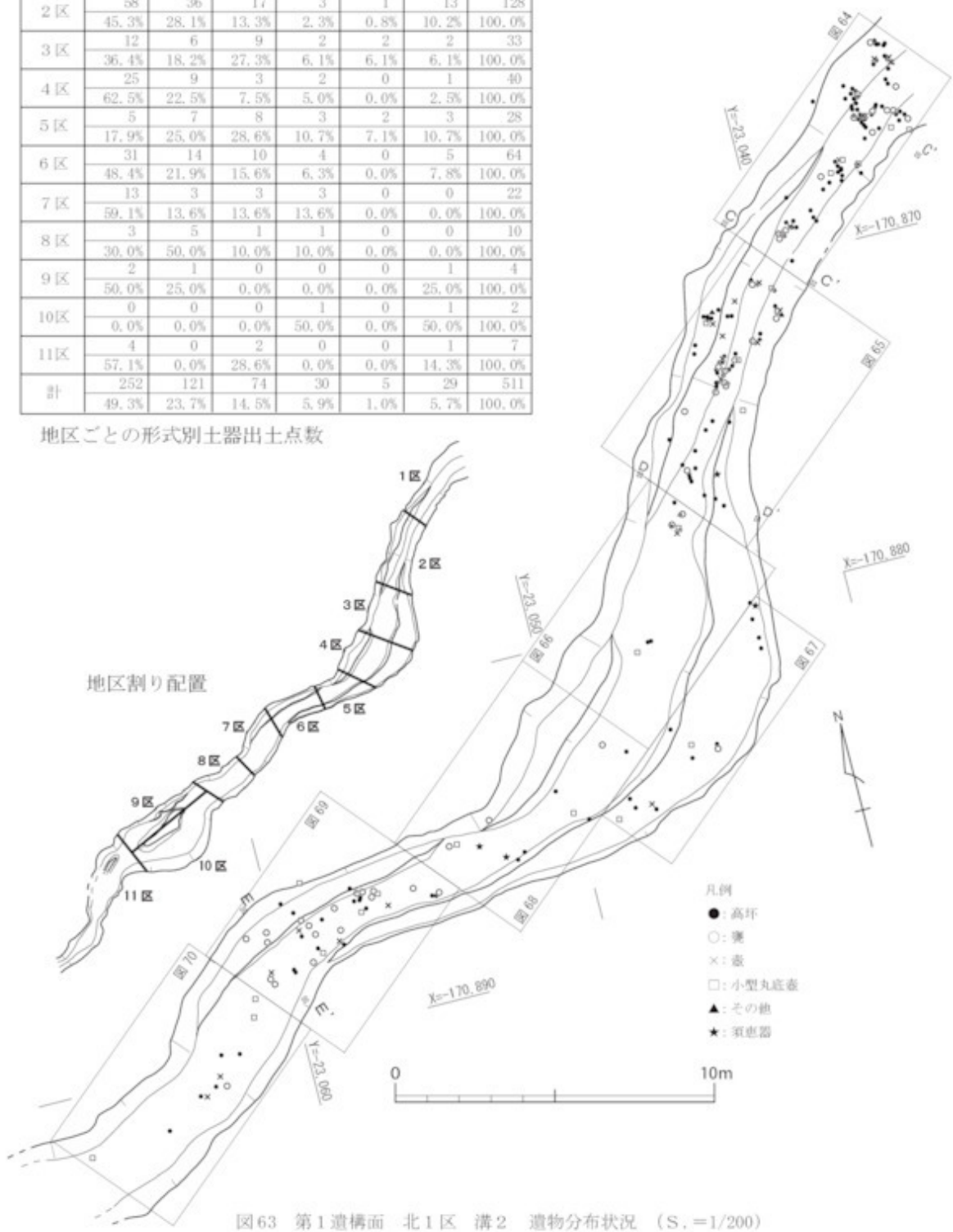


図63　第1遺構面　北1区　溝2　遺物分布状況　（S.=1/200）

図64　第1遺構面　北1区　溝2　平面図（1）（S.＝1/40）

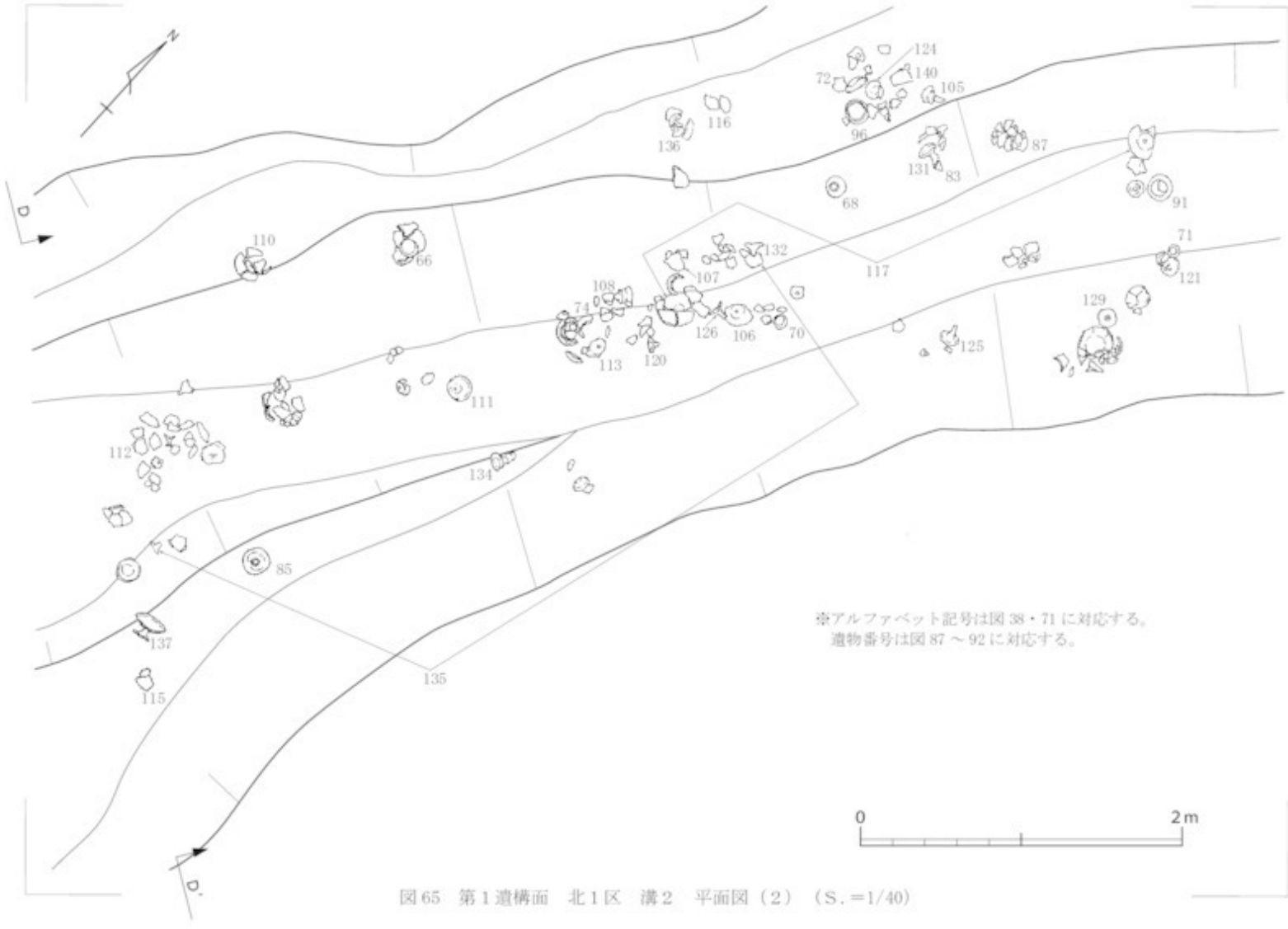


図 65　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（2）（S.=1/40）

※遺物番号は図 93・94 に対応する。

図 66　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（3）（S.＝1/40）

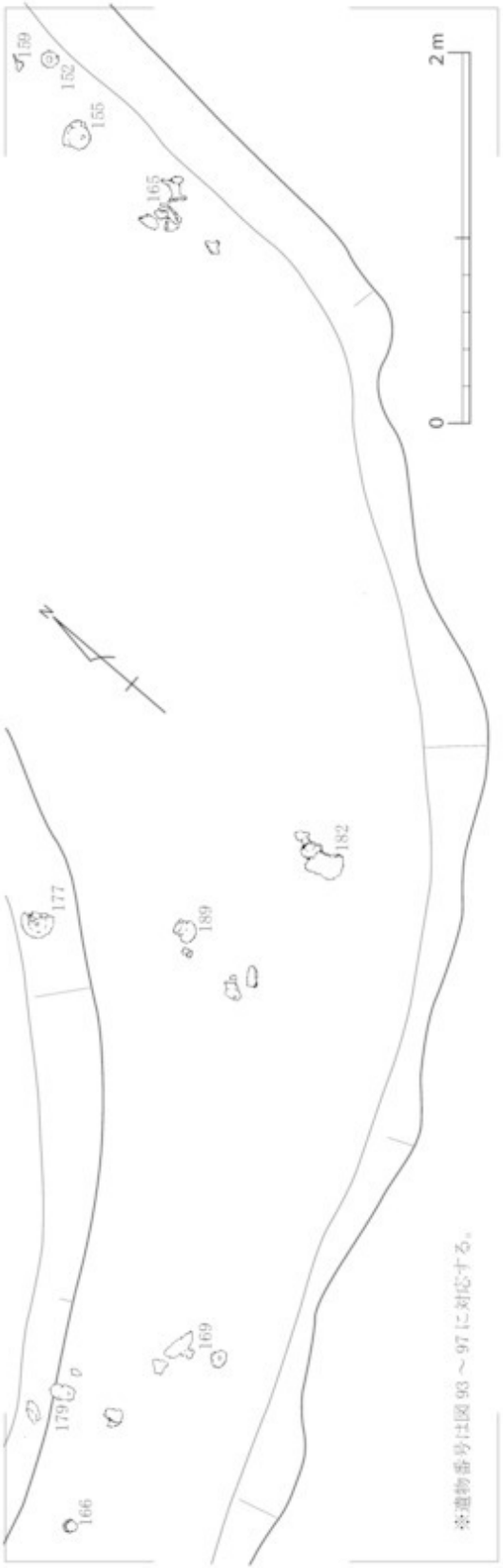


図67　第1遺構面　北1区　溝2　平面図（4）（S.＝1/40）

当該建物の東側ではその東辺に平行して延びているが、掘立柱建物2の南側で西方向に屈曲して、わずかに同建物の南辺側に回り込むような形状になっている。そのために、出土土器の点数が多い6区は、同建物の南正面の延長付近に当たっている。このような遺物出土地点の掘立柱建物との位置関係から、これらが有機的に関連していた可能性が考えられる。すなわち、掘立柱建物1および同2は、当時の何らかの祭祀にかかわる遺構であって、溝2出土土器はその祭祀に関わる遺物であった可能性が考えられる。

溝2出土遺物は、地区ごとに分けて図81～104に掲げた。その逐一の年代観については「3．遺物　（1）土器・土製品」で詳述されている。瞥見すれば、庄内式土器から布留式の土師器が多く、少量ながら須恵器を含んでいる。庄内式土器や布留式土器は個別にその型式だけを見ても、年代の細別はできない。したがって、同項でも個々の土器に対しては一定の時期幅を持った記述になっているが、特に様式を特定している場合には「その時期を中心にしている」の意で記述されているものである。それでも、庄内式併行期や布留式併行期にそれぞれ限定されものや、初期須恵器も出土しているから、溝の存続期間が長期にわたっていたことが窺われる。

今、出土個体数が多かった1区、2区、6区の高杯の型式に注目して見てみると、1区出土の高杯は、図83～86に示したように、庄内式土器、布留式土器が混在していることがわかる。2区出土高杯（図90～92）も同様で、時期幅がある。型式的に見ても、

図68　第1遺構面　北1区　溝2　平面図（5）（S.=1/40）

例えば脚部内面のケズリが行われるものと、内面にシボリ目を残すものが混在している。6区出土の高杯は、図100･101に示したように、布留式でもやや新しい傾向があるように見受けられるが、脚部の内面を削るものも散見されるから、相対的に新しい時期に限定することもできない。

このような出土遺物の時期的な傾向からみると、この溝2および掘立柱建物1および同2周囲で行われた祭祀は、庄内式併行期から布留式にかけの比較的長い期間に行われていたと考えられる。

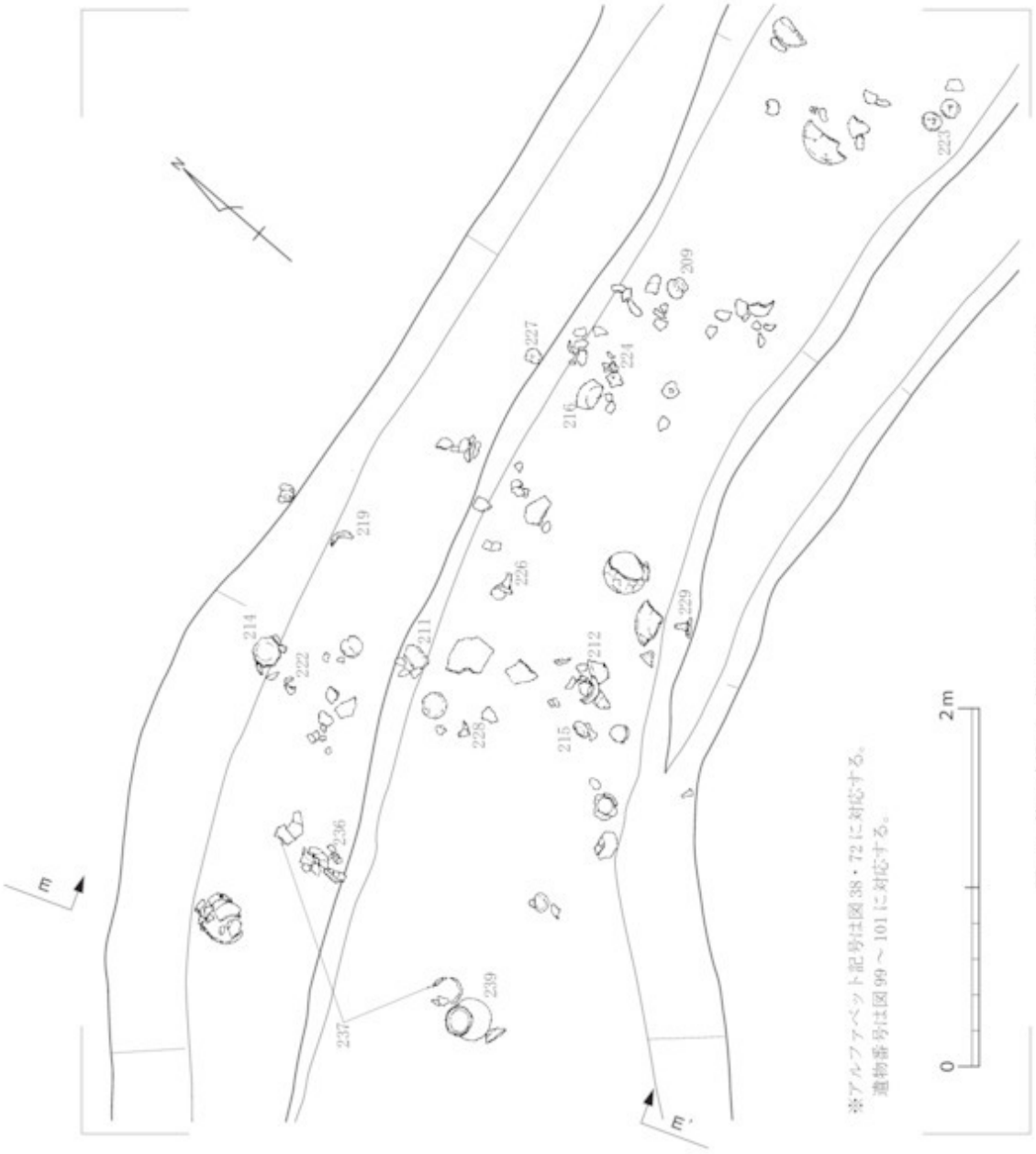
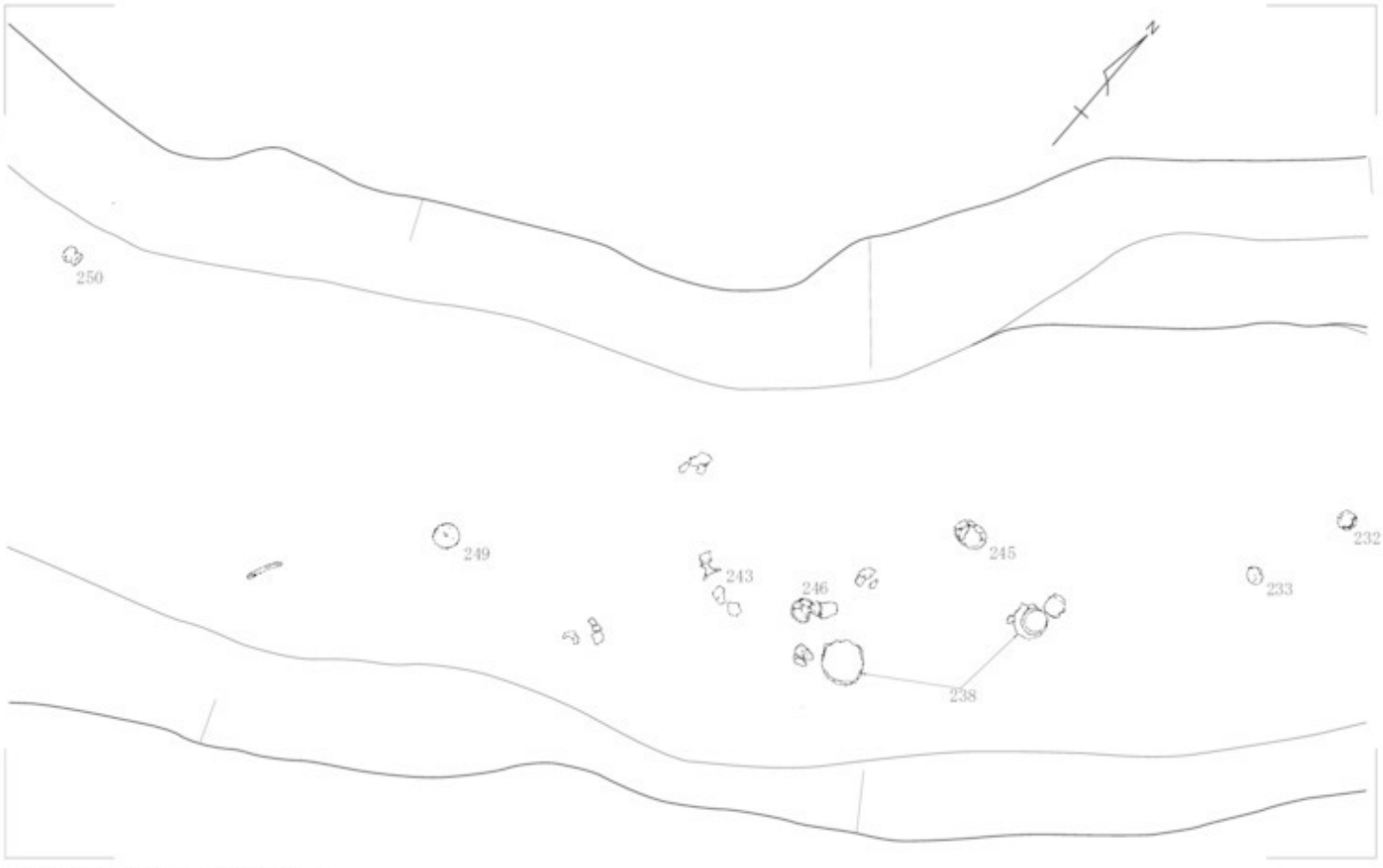


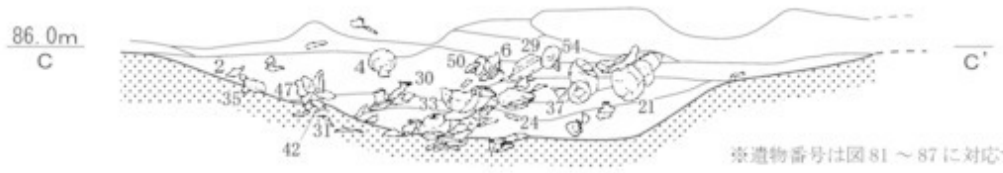
図69　第1遺構面　北1区　溝2　平面図（6）（S.=1/40）

その一方で、最終的に土器が投棄された地点が固定的であって、同じ溝２の範囲においてさえあまり移動していないことが窺える。このことは、この祭祀が建物と関連していてこそ起こりうる事態と思われる。すなわち、建物自体が、建替えなどの行為があったとしても、比較的長い期間その場所に存在していて、土器を投棄する場所がその建物との相対的な位置関係で決まっていたとすれば、このように、時期幅をもった特定の器種の土器が、同一地点に集中的に投棄される結果となり得ると考えられる。



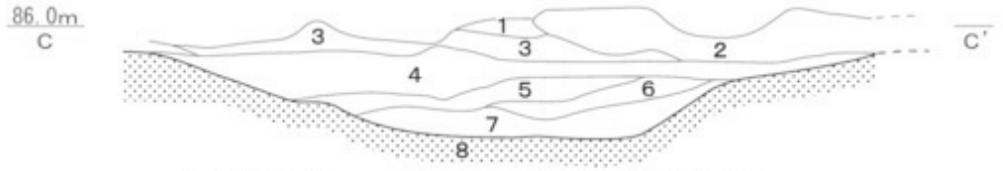
※遺物番号は図 101 ～ 104 に対応する。

図 70　第 1 遺構面　北 1 区　溝 2　平面図（7）（S.＝1/40）



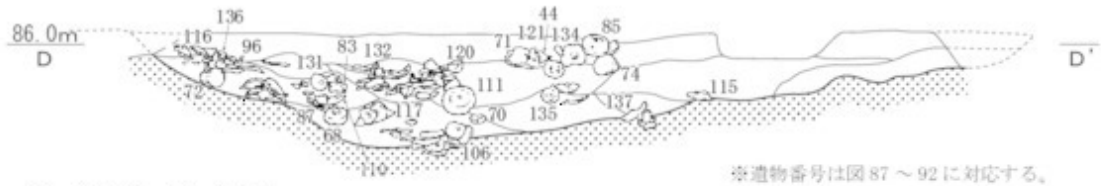
※遺物番号は図81～87に対応する。

1．溝2（C－C’立面）



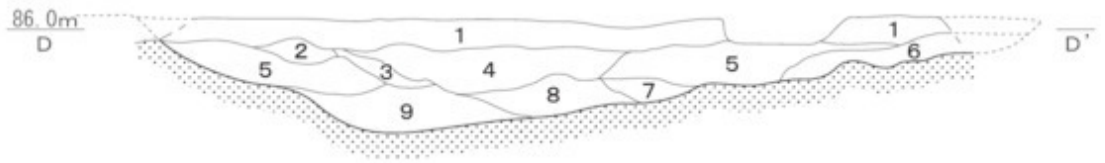
1．暗灰褐色礫砂
2．黄褐色粘質土
3．暗灰褐色シルト混じり粗砂
4．暗灰色粗砂
5．淡灰色粗砂混じり細砂
6．淡灰色シルト混じり細砂
7．淡黄灰色細砂
8．淡灰色細砂（図6－5層、第1遺構面基盤層）

2．溝2（C－C’断面）



※遺物番号は図87～92に対応する。

3．溝2（D－D’立面）

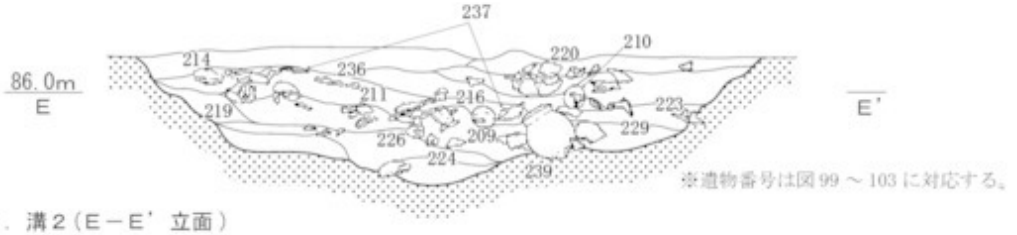


1．暗褐色礫砂混じり砂質土
2．暗褐色礫混じり細砂
3．暗灰色細砂
4．黒褐色礫砂混じり細砂（炭化物わずかに含む）
5．明灰色礫砂
6．明褐色礫混じり細砂
7．黒褐色粗砂混じり細砂
8．濃灰色細砂
9．明灰色粗砂混じり細砂

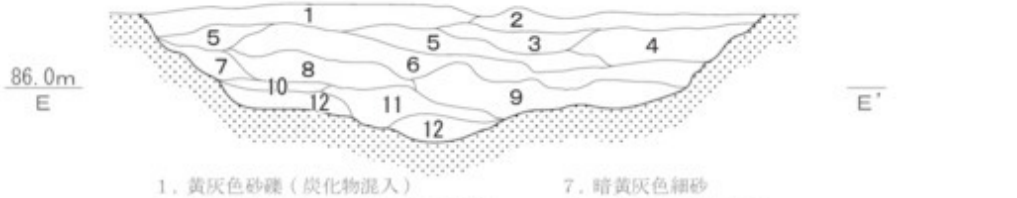
4．溝2（D－D’断面）

※アルファベット記号は図38・64・65に対応する。

図71　第1遺構面　北1区　溝2　立面・断面図（1）（S.＝1/40）



1．溝２（E－E’立面）



1．黄灰色砂礫（炭化物混入）
2．淡黄灰色微砂からシルト（Fe 沈着）
3．淡暗灰色微砂
4．淡黄灰色微砂混じり礫砂
5．暗褐色中砂（礫少量含）
6．暗黄灰色細砂
7．暗黄灰色細砂
8．褐色砂礫混じり粗砂
9．褐色細砂混じり粗砂
10．暗黄灰色細砂
11．褐色砂礫
12．暗褐灰色細砂

2．溝２（E－E’断面）

※アルファベット記号は図 38・69 に対応する。

図 72　第１遺構面　北１区　溝２　立面・断面図（２）（S.＝1/40）

③溝３（図 38・図 42・図 43・図 62）（北１区）

北１区の北半で検出した。検出部分の中央ほどで東西方向から北東－南西方向に屈曲している。幅 50 ～ 80cm、深さ約 15cm で、検出長は約 30 mである。断面の形状は、図 62 － 3 に示したように、歪な矩形を呈している。ただ、遺憾ながら現地で作成された図面に土層注記が記されていなかったために、ここでそれを提示することができない。

また、上述したように掘立柱建物２を構成するピット 13 が、溝３の埋土上面でこれを掘り込んで形成されていることが確認された。出土遺物がなかったために、溝３の形成時期を特定することは難しいが、溝１や溝２とおおむね同様の方向であることや、ピットとの切り合い関係からも、溝１・溝２とおおむね同時期の遺構であるとみられる。

④溝４（図 38・図 42）（北１区）

北１区の中央部付近で検出した。北西－南東方向に延びている。溝１・溝２と切り合い関係があり、それらに切られている。規模は、幅約 1.2 m、深さ 10 ～ 20cm で、検出長は約 13 mである。出土遺物は認められなかった。

⑤溝５（図 38・図 43）（北１区）

北１区の中央付近で検出した。おおむね南北方向に延びる溝であるが、検出長は約４mと溝にしては短い。幅 1.2 mであるが、深さは５cm と非常に浅い。

出土遺物もなく他の遺構との切り合い関係も確認できないことから、その形成年代を特定するこ

とが難しく、上記のような遺構のあり方みてもその性格は不分明である。

⑥溝６（図 38・図 43）（北１区）

北１区中央部のやや南寄りで検出した。おおむね北西－南西方向に延びる溝である。東端を溝２に切られており、西端もその地点から約５mで検出されており、元はどのような長さがあったものか、またどのような性格の溝であったのかなど不明確である。幅約 80cm ほどのものとして記録されているが、遺憾ながら、埋土を除去した状態での調査記録が残っていない。

⑦溝７（図 38・図 43）（北１区）

北１区中央部のやや南西寄りで検出した。おおむね北東－北西方向に延びる溝である。北東端部は、図 43 に見えるように、第４－１の北１区３トレンチの範囲内に入っている。しかし、トレンチ調査においてはこの面において溝状の遺構が検出されていない。また、面的な発掘を行った第４－２次調査でも、トレンチを超えてそのその北東側にこの溝の延長が検出されていないので、遺構自体はトレンチの範囲内で収束すると考えられる。トレンチ調査の時点では、その規模の小さいことなどのために遺構として認識することが難しかったものと思料される。

検出長約５m、幅は約１mが平面図として記録されているが、遺憾ながら、埋土が除去された状態での記録が残っていない。このためもあって、形成時期も不詳でその性格は不明確である。

⑧溝８（図 38・図 43・図 62）（北１区）

北１区西南部で検出した。溝７の南東約５mの地点に位置する。北東－南西方向に延びている。検出長約４mの短い溝で、幅 0.7 m、深さ約 10cm である。上述のように、土坑５と切り合い関係があり、これを切っている。溝８からの出土遺物として古墳時代とみられる土師器片が 20 点ばかりが検出されており、土坑５では布留式前半の土器が出土することから、溝８は古墳時代中期から後期ごろに形成された遺構であると考えられる。

⑨溝９（図 37・図 39・図 40・図 73）（南１・３・４区）

南４区南西隅から見え始め、南３区を経て、南１区の西半に至る範囲で検出された。北東－南西方向の溝であるが、南４区の東壁付近で分岐して、一方は北東－南西方向、一方は東西方向に延びている。

溝９の規模は地点によって異なるが、おおむね幅約 2.5 ～ 3.0 m、深さ 30 ～ 50cm である。

出土遺物はあまり多くなかったが、縄文土器片 (105 － 1)、弥生土器片（105 － 2・4）、須恵器片（105 － 5）などがあった。年代幅が大きいが、古墳時代より新しい遺物は含まれていなかった。

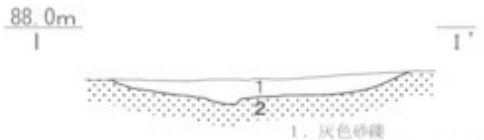
（５）流路

①流路１（図 37・図 39・図 40・図 74 ～ 78）（南１～４区）

南１区の南東部、南２区の中央、南３・４区の北半で検出した。流路１は、南４区から南３区にかけて東西方向に延びているが、南３区北東端付近で、調査区外の南方向から延びてきた流路と合流して、この地点でおおむね北東－南西方向に流路方向を変えて、南１区から南２区に至っている。

1．溝９（H－H’断面）

1．褐灰色細砂(Fe多く沈着)(溝９埋土)
2．灰色細砂混じり砂礫
3．灰色砂礫
（溝16埋土）
4．黄灰色細砂
5．黄灰色粗砂
6．灰色細砂混じり粘土
7．黄褐色砂礫
（図5－7層、第３遺構面基盤層）
8．暗灰色粘土(図5－8層、第４遺構面基盤層)



2．溝９（I－I’断面）

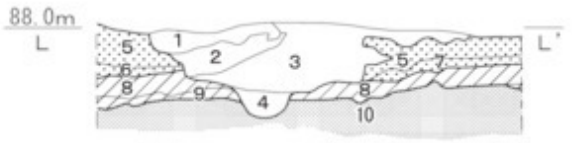
1．灰色砂礫
2．図5－5層、第１遺構面基盤層

3．溝９（J－J’断面）

1．灰色砂礫
2．図5－5層、第１遺構面基盤層

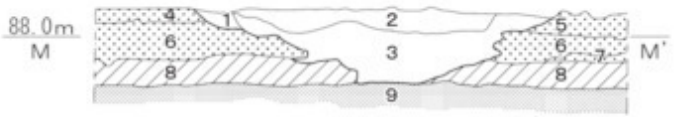
4．溝９（K－K’断面）

1．淡灰色礫砂
2．明黄褐色粘質土
3．灰褐色細砂（Fe含む）
4．淡黄褐色砂質土
5．暗灰色粘質土
6．橙褐色粘質土
（図5－5層、第１遺構面基盤層）



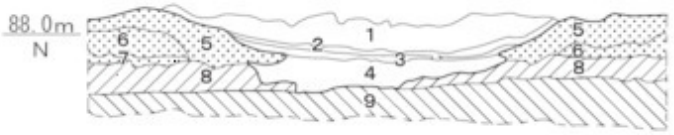
5．溝９（L－L’断面）

1．暗褐色砂質土　2．暗橙褐色砂質土
3．暗褐色礫砂　4．灰白色礫砂
5．暗灰色粘質土（Fe多く含む）
6．橙褐色粘質土（礫多く含む）
（図5－5層、第１遺構面基盤層）
7．暗褐色粗砂
8．暗橙褐色粘質土（礫多く含む）
9．褐色粘質土
（図5－7層、第３遺構面基盤層）
10．淡褐灰色シルト（図5－9層、第５遺構面基盤層）



6．溝９（M－M’断面）

1．淡橙灰色シルト　2．淡灰色礫砂
3．暗褐色粗砂　4．明黄褐色粘質土
5．暗橙褐色粘質土
6．暗褐色粗砂
7．暗黄色粗砂
（図5－5層、第１遺構面基盤層）
8．暗橙褐色粘質土　（図5－7層、第３遺構面基盤層）
9．淡褐灰色シルト　（図5－9層、第５遺構面基盤層）



7．溝９（N－N’断面）

1．暗褐色粗砂
2．暗黄褐色粘質土
3．暗橙褐色粘質土（シルト混じり）
4．暗橙褐色礫砂
5．暗橙褐色粘質土
6．暗褐色粗砂
7．暗黄色細砂
（図5－5層、第１遺構面基盤層）
8．暗橙褐色粘質土（図5－7層、第３遺構面基盤層）
9．淡褐灰色シルト（図5－8層、第４遺構面基盤層）

※アルファベット記号は図39・40に対応する。

0　3m

図73　第１遺構面　南１～４区　溝９　断面図　（S.＝1/60）

なお、南１・２区では、その北岸を検出したものの南岸は調査区外に当たっているため検出していない。また、南４区の西端で流路２との切り合い関係が認められる。流路１が流路２を切っている。

流路１の規模は、南３・４区では幅 6.0 ～ 7.0 mである。南３区の合流地点付近でやや幅が広くなり、南１区に続くものと思われる。南１区では、南岸が調査区外に当たっており、そのうえ遺構面の上面がうまく検出できていないために明確ではないが、断面等を精査するとその幅は少なくとも 17 m程あることがわかる。

深さは南西が浅く北東が深い。検出深さは、0.8 ～ 1.2 mである。埋土は、図 74 に示したように、粒子の細かい細砂や粘砂土と粒子の粗い粗砂や礫砂の互層となっている。また、同図にみえるように、流路１の深さはおおむね９層上面にまで至っていることがわかる。さらに、第４－１次調査の南１区２トレンチの東壁断面（図 35）に見えるように、流路１の深いところでは、12 層の一部を削っている。

流路１の底で、２箇所の堰と２箇所の杭列を検出した。

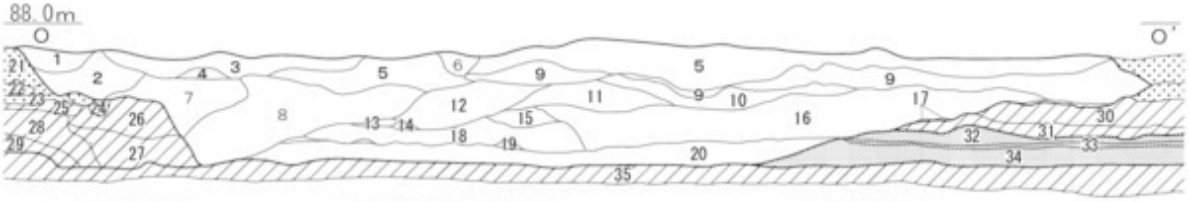
堰１は、図 39 に示したように、南１区の南東隅部で検出した。この部分での流路の南岸が調査区外に当たるため明確ではないが、想定される流路方向に対しておおむね直交するものである。図 75 に見えるように、幅 1.2 m、長さ３mの帯状の範囲に 19 本の杭や矢板が打ち込まれた状態で残存していた。そのうちの２本が矢板であったが、それらは矢板のみを打ち並べて護岸をするという矢板本来の使用法（藤田 1992）ではなく、ほかの杭と同様の使用方法であった。

堰２は、堰１の南５m程の地点にあった。堰１とは平行しておらず、流路１に対してやや斜交している。図 76 に見えるように、40 本の杭や矢板が、幅 1.6 m、長さ 6.5 m程の帯状の範囲に打ち込まれた状態で残存していた。

杭列１は、堰２の西端部から 2.5 m程南の地点で検出した。図 77 に示したように、杭列といっても、２本の杭の先端部のみが残存したものであるから、本来的には列をなしていたものかなど、詳細がわからない。ただ、このような流路の底にあって単独で打たれる杭である可能性は低いと考えて「列」とした。その場合にも、その距離の近さから堰２を構成する杭であった可能性などもあって、その性格は不明確である。

堰１・２共に、互いの杭や矢板間が 10 ～ 30cm の間隔が開いているものであるから、残存状況が良いとは言えない。このような状況のもと、堰１と堰２および杭列１は、杭等の列の方向が平行しないこともあって別々の遺構とした。しかし、元々は同時に機能したものか、場合によっては堰１と堰２の間に堰堤状の施設が構築されていたのか、あるいは時期的に先後関係のある遺構なのかなど、詳細は明確ではない。

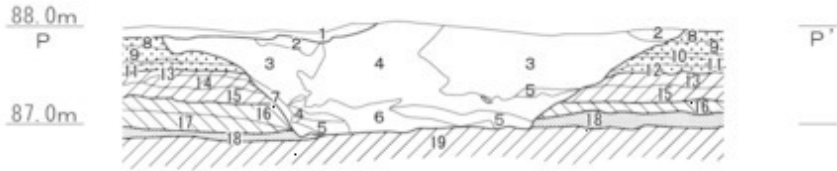
杭列２は、南４区の流路１の検出範囲の西端で確認した。ここでは計 11 本の杭・矢板が検出されているが、原位置を保った状態のものとしては、図 78 のａ－ａ'の立面図に示したように、流路１に直交する方向に打ち込まれた６本の杭および矢板があった。矢板は 10 本のうち２本であっ



1．灰褐色粘砂土
2．黄褐色粘砂土
3．暗灰褐色粘砂土
4．灰色砂礫
5．淡灰黄色砂礫
6．灰色粘砂土
7．灰色砂
8．淡灰黄色粗砂
9．暗灰色粘砂土（鉄分含む）
10．暗灰色粘土
11．淡灰黄色粗砂
12．灰色粗砂混じり粘土
13．灰色粘砂土
14．淡灰黄色粗砂
15．暗灰色粘砂土
16．灰色粗砂混じり粘砂土
17．灰色砂礫混じり粘土
18．灰黄色粘砂土
19．灰黄色粗砂
20．淡灰色砂礫
21．灰褐色粘砂土
22．淡灰色粘砂土（鉄分含む）
23．暗灰色粘砂土（鉄分含む）
24．暗灰色粘砂土
25．灰褐色粘砂土（鉄分含む）
26．淡灰黄色粗砂
27．灰色粘砂土
28．灰色砂礫
29．灰黄色細砂
30．黄灰色粘土
31．灰色砂礫混じり粘土
32．灰色粘砂土
33．淡灰色粘土
34．淡褐色砂礫
35．灰褐色砂礫

（図5－5層、第1遺構面基盤層）
（図5－7層、第3遺構面基盤層）
（図5－9層、第5遺構面基盤層）
（図5－11層、第7遺構面基盤層）

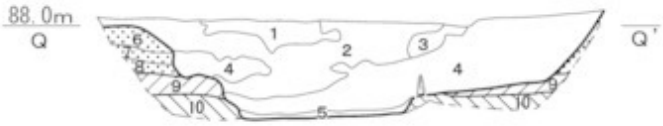
1．流路1（O－O'断面）



1．暗褐色粘質土（素堀溝埋土）
2．暗灰褐色粘質土（礫多含）
3．暗灰褐色シルト
4．淡灰色砂礫
5．暗灰褐色粘質土（礫多含）
6．赤褐色砂礫
7．黄褐色シルト
8．淡灰色砂質土
9．明黄褐色粘質土（Fe多含）
10．灰褐色細砂（Fe含）
11．暗灰色粘質土（Fe多含）
12．橙褐色粘質土（礫多含）
13．暗橙褐色粘質土（礫多含）
14．橙褐色粘質土
15．褐色粘質土
16．淡褐灰色シルト
17．淡灰色礫砂
18．暗褐色粘質土
19．黒褐色粘質土

（図5－5、第1遺構面基盤）
（図5－7層、第3遺構面基盤層）
（図5－8層、第4遺構面基盤層）
（図5－9層、第5遺構面基盤層）
（図5－11層、第7遺構面基盤層）

2．流路1（P－P'断面）



1．暗灰褐色シルト
2．淡灰色砂礫
3．暗灰褐色砂質土（礫多含）
4．暗褐色粘砂土
5．赤褐色砂礫
6．明黄褐色粘質土（Fe多含）
7．暗褐色粗砂
8．暗褐色粘質土（礫多含）
9．淡黄褐色粘質土（礫多含）
（図5－7層、第3遺構面基盤層）
10．暗灰色シルト
（図5－8層、第4遺構面基盤層）

（図5－5、第1遺構面基盤層）

3．流路1（Q－Q'断面）

※アルファベット記号は図40に対応する。

0　4m

図74　第1遺構面　南3・4区　流路1　断面図　（S.＝1/80）

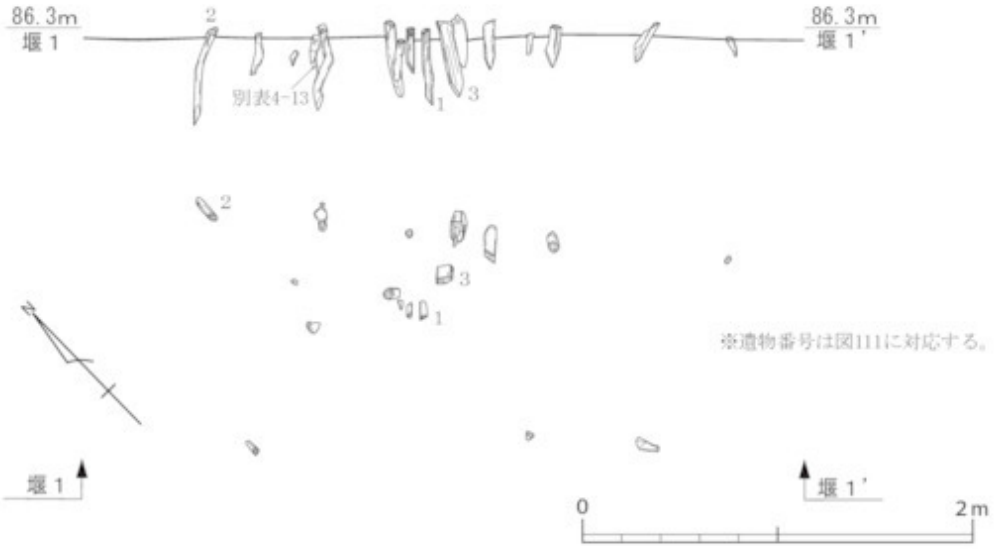


図75　第1遺構面　南1区　流路1　堰1　平面・立面図　（S．=1/40）

たが、それらは杭と同様の使用方法であった。

だだし、6本の杭等の残存状況を見ると、流路の南岸に偏って3本が、北岸に偏って3本が打ち込まれており、それらが東西方向にやや広がりを持っている。特に北岸に偏った方の3本については、その西側にさらに5本の杭がみられる。このようなことから、これらの杭は単純にこの地点で流路1を横断する堰であるとも断定できず、何らかの護岸施設である可能性も考えられた。なお、図78の平面図の北西部と南東部に、それぞれ長さ1m弱の木材が横たわっている状態が記録されている。南東部のそれは加工痕が見られないが、北東部のそれは断面三角形に削り出される加工がなされている。特に後者については、元は矢板などとして利用されていたものが原位置を移動したものと思われる。

出土遺物のうち土器類については、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などの破片が約350点あった。そのうち、図化可能であった42点を図106～108に掲げた。出土量の比較的多い遺構であると言える。新しいものでは、土師器質の土管（106－1）や瓦器椀（106－2）などがあるが、おおむね弥生時代から古墳時代後期に至るまでの比較的時期幅のある遺物が出土しており、その中でいずれかの時期に偏在するという傾向は読み取れない。

なお、堰1に用いられた杭のうち、図75に示した(別表4－13）としたものについて、放射性炭素による年代測定を行い、その結果を別表1に示した。詳細は別表1を参照されたいが、その最も高い確率の数値をとれば、暦年校正年代は、cal AD 421－538となっている。

②流路2（図37・図40・79）（南4区）

南4区の北西部で検出した。おおむね南北方向に延び、東西方向に流れる流路1に切られている。流路2の規模は、幅6.7～10m、深さ1.8～3mで、検出長は約30mである。

図76　第1遺構面　南1区　流路1　堰2　平面・立面図　（S．=1/40）

図79の土層断面図に示したように、流路2の埋土は砂礫など粒子の粗い土砂の堆積であることから流れの速い流路だったと考えられる。

出土遺物は、少なかったが図109に図化可能であった8点を掲げた。弥生時代後期後頃から古墳時代中期後葉頃までの土器が見られる。このような出

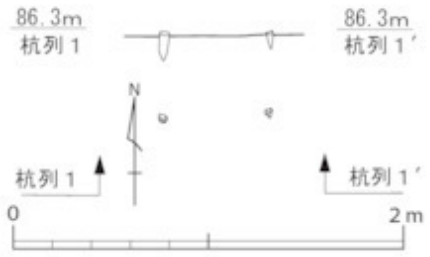
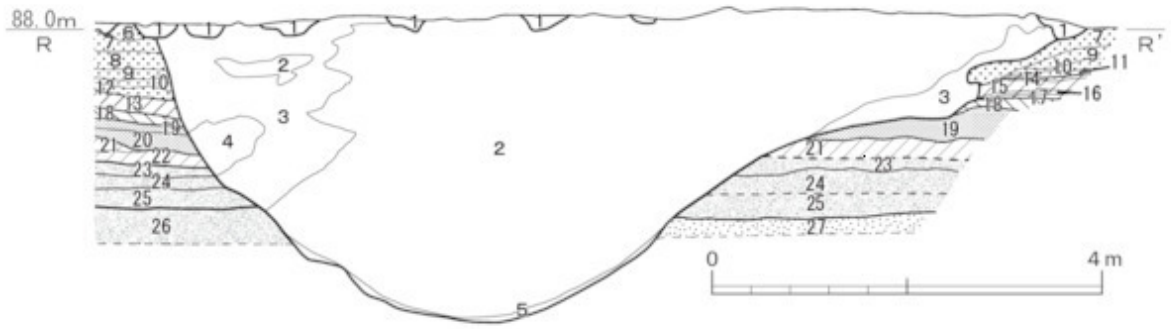


図77　第1遺構面　南1区　流路1　杭列1
平面・立面図　（S．=1/40）

図78　第1遺構面　南4区　流路1　杭列2　（S．=1/40）



1．暗褐色粘質土（素堀溝埋土）
2．淡灰白色礫砂
3．灰黄色細砂
4．暗青灰色粘質土
5．赤褐色砂礫
6．暗褐色砂質土
7．暗橙褐色粘質土
8．淡灰色砂質土
9．明黄褐色粘質土（Fe 多含）
10．暗灰色粘質土（Fe 多含）
11．暗褐色砂質土
12．暗褐色粗砂
（図 5－5 層、第 1 遺構面基盤層）
13．淡黄褐色粘質土（礫、Fe 多含）
14．橙褐色細砂
15．暗橙褐色粘質土（礫含）
16．暗橙褐色粘質土
17．褐色粘質土
（図 5－7 層、第 3 遺構面基盤層）
18．淡褐灰色シルト（図 5－8 層、第 4 遺構面基盤層）
19．暗褐色粘質土（礫少含）
20．褐色礫砂
（図 5－9 層、第 5 遺構面基盤層）
21．黒褐色粘質土
22．暗灰色粘質土
（図 5－11 層、第 7 遺構面基盤層）
23．黒褐色礫混じり粘質土
24．暗青灰色砂質土
25．暗青灰色粘質土
26．黒灰色粘質土（礫多含）
（図 5－12 層、第 8 遺構面基盤層）
27．暗灰青色礫混じり粘質土（図 5－13 層、第 9 遺構面基盤層）

※アルファベットは図 40 に対応する。

図 79　第 1 遺構面　南 4 区　流路 2　断面図　（S.＝1/80）

土遺物および遺構の切り合い関係から、流路 2 は古墳時代中期には埋没したとみられる。

3．遺物

（1）土器・土製品

第 1 遺構面出土の土器・土製品を図 80 ～ 109 に示した。

（80 － 1）は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境には凹線があり、口縁端部には段を有する。この特徴と口径の大きさから古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属すると思われる。

（80 － 2・3）は南 4 区素掘溝から出土した。（80 － 2）は土師器皿である。内外面をナデにより仕上げる。風化が激しいため詳細は不明であるが 13 世紀に属すると思われる。

（80 － 3）は土錘である。紡錘形の外形を呈し、長軸方向に穿孔をもつ管状のものである。全体をナデで仕上げる。中世のものと思われるが詳細は不明である。

（80 － 4・5）はピット 63 から出土した。（80 － 4）は弥生土器広口壺の口縁端部である。上端には刻目を施し、端部内外面に波状文、外面に円形浮文を配するなど加飾性は高い。粘土紐を下部に貼り付けることによって下垂した面をつくりだしていることから、同形式の中でも出現期に近い畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属すると思われる。

（80 － 5）は庄内式土器高杯である。稜をもたない椀形の杯部は内外面を丁寧なナデにより仕上げられる。半球状の椀形体部に円錐状の脚台部が接合するもので、小形化が進んだ段階に相当すると思われる。脚台部接合部の屈曲はあまく、杯部から直接開く形状の脚台部がつくと思われる。庄内２式に属する。

（80 － 6）はピット 119 から出土した庄内式土器甕である。縁端部は「はねあげ口縁」を呈する。体部の外面はナデにより平滑に仕上げられており、球体化し小形化の進んだ庄内３式に属する。

（80 － 7）はピット 125 から出土した弥生土器高杯である。３方向に透孔を有する脚部は中実であり、緩やかに開く裾部をもつ。体部との接合は挿入付加法である。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（80 － 8）は土坑３出土の弥生土器甕である。わずかに「はねあげ口縁」を呈する口縁部は緩やかに体部に続き、平底の底部外面には木葉の圧痕がみられる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（80 － 9・10）は土坑５から出土した。（80 － 9）は土師器壺である。球形の体部から明確な稜をもたずに短く立ち上がる口縁部をもつ。屈曲にシャープさはなく、古墳時代中期前葉～中葉に属する。体部外面に黒斑がみられる。

（80 － 10）は土師器甕である。球形の体部に屈曲をもって立ち上がる、やや内湾した口縁部をもつ。口縁端部は内傾、肥厚させる。体部内面はケズリにより薄く仕上げられ、外面はハケ、肩部には横方向のハケを施す。口縁部から体部外面に黒斑がみられる。布留１～２式に属する。

図 81 ～ 87（上段）に溝２の１区から出土した遺物を掲載した。

（81 － 1 ～ 6）は土師器壺である。（81 － 1）は二重口縁壺である。やや外反する口縁部をもつ。口縁部と体部の接合部の屈曲は鈍く、器壁も厚い。布留３式に属する。

（81 － 2）は小形丸底壺からの分化である。口縁部と体部の屈曲は明瞭であるが、内面にみられるケズリとナデは極めて荒く、粘土紐の接合痕が残ったままである。布留３式に属する。口縁部外面と体部外面中程に煤が付着する。

（81 － 3・5）はやや外反しながら短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁部と体部の接合部における屈曲は緩やかであり、古墳時代中期に属する。

（81 － 4・6）は直口壺である。ともに口縁端部と体部接合部に強いナデによるわずかな稜をもつ。（81 － 4）の体部内面には斜環状に煤が付着。（81 － 6）は口縁部・体部外面に黒斑がみられる。ともに古墳時代前期末に属する。

（81 － 8・9）は庄内式土器壺の底部である。外面をヘラミガキ、内面をハケのちナデで仕上げる。ともに庄内２～３式に属する。

（81 － 7）は土師器鼓である。器壁は薄く精緻な印象をもつ。布留４（古）式を初見とし、初期須恵器の出現以前のものとして考えられているが、出土例は少数で不明な点は多い。

（82 － 10 ～ 16･18）は土師器甕である。時期差はあるもののすべて布留式併行期のものである。

（82 － 10・14）は口縁端部を内面に鋭く肥厚させ、外面はシャープに仕上げる。口縁部と体部の屈曲部にはナデが施される。ともに布留３式に属する。（82 － 10）は体部に黒斑がみられる。（82 － 14）は口縁部に煤が付着する。

（82 － 11）は内面に肥厚させた端部をナデにより面をもたせる。体部に横方向のハケを施す。薄い器壁などから布留１～２式に属すると思われる。

（82 － 13）は内湾気味の口縁部をもち、端部は内面にやや肥厚させる。体部外面には横方向のハケを施すが、やや長胴形の体部に厚い器壁をもつことから布留２～３式に属すると思われる。

（82 － 12・15）は口縁部外面に体部から続く縦方向のハケを施す。口縁端部は肥厚せず上方に面をもち、内面には横方向のハケが施される。器壁は薄く、（82 － 12）は口縁部と体部中ほどに煤が付着する。ともに布留０式に属する。

（82 － 16）はやや内傾した口縁部に内面に向かって肥厚させる端部をもつ。体部と口縁部の接合部の屈曲は強く、やや長胴形の体部には横方向のハケが施される。布留１式に属する。

（82 － 18）は二重口縁化した甕である。長胴ぎみの体部をもつ。布留３式と思われる。

（82 － 17）は弥生土器甕の底部である。底面には焼成前に施された穿孔がみられる。外面をタタキ、内面をクモの巣状のハケで調整し、板ナデで仕上げる。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。（83 － 19 ～ 86 － 59）は高杯である。（4 － 20 ～ 5 － 31、85 － 33、86 － 45）は庄内式土器、この他は以降の土師器である。（83 － 19）は緩やかに外反して開く口縁部をもつ。底面はほぼ水平を呈する。体部と杯部の接合部は明確な稜線をもつ。外面は縦方向のハケ、杯部内面に横方向のハケを施す。脚台部は充填法により体部と接合する。布留０式に属する。

（83 － 20）は杯部が大きくなり、外反して開く口縁部をもつ。底面は小さくなり、ほぼ水平を呈する。体部と杯部の接合部は、粘土紐貼り付けによる断面三角形の突帯を巡らせる。脚台部は充填法により体部と接合する。庄内３式に属する。

（83 － 21）の杯部は外反しながら大きく開き、体部との接合部に稜をもつ。底面は脚台部との接合部に向かって漏斗状に凹む。庄内１～２式に属する。

（84 － 22 ～ 24・26、85 － 33）の口縁部は外反しながら大きく開き、体部と杯部の接合部に稜をもつ。体部内面は脚台部との接合部に向かって漏斗状に凹む。庄内１～２式に属する。（85 － 33）の脚台部は充填法により体部と接合する。

（84 － 25・27 ～ 31）は杯部が大きくなり、外反して開く口縁部をもつ。底面は小さくなり、ほぼ水平を呈する。体部と杯部の接合部は明確な稜線をもつ。（84 － 25）は底面に暗文風ヘラミガキが施され、脚台部は充填法により体部と接合する。（84 － 27）も同じく充填法が用いられる。（84 － 29）の脚台部は挿入付加法により体部と接合する。いずれも庄内３式に属する。

おなじ形態的特徴を有しながら外面の稜線が緩やかな（85 － 32・34 ～ 36）は布留０式に属する。（85 － 32・36）の脚台部は挿入付加法により体部と接合する。

（84 － 22 ～ 24・26、6 － 33）は体部に稜線をもたない椀形の体部と円錐形の脚台部をもつ。器壁は厚く、調整は粗雑な印象である。（85 － 39）は接合法、（85 － 43）の脚台部は挿入法により体部と接合する。いずれも古墳時代前期～中期に属する。

（85 － 44）は外反して開く杯部をもち、体部との接合に稜線をもたない。布留２～３式に属する。

（86 － 45）は有段高杯である。杯部と体部接合部の屈曲は明瞭であり、口縁端部は丸くおさめる。弥生土器の系譜をひくものである。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。庄内１～２式に属する。

（86 － 49 ～ 59）は土師器高杯の脚台部である。（86 － 49 ～ 57）は庄内後期～布留式併行期のものである。脚台部と裾部の屈曲が明瞭なものは（86 － 49 ～ 54）で、比較的古い要素をもつ。（86 － 58・59）は脚台部内面にケズリがみられず、シボリメをナデで押さえる程度であり、粗製化が進んだ古墳時代中期に属すると思われる。（86 － 54・55）は挿入付加法、（86 － 52・57）は充填法、（86 － 58）の脚台部は接合法により体部と接合する。

（87 － 60）は土師器小形丸底鉢、（87 － 61・62）は土師器小形丸底壺である。（87 － 60）は器壁が薄く精緻なつくりであり、全体を横方向のヘラミガキで仕上げる。浅い椀形の体部から続く口縁部は内湾して立ち上がる、小形丸底鉢の中では最も成立が遅い器種である。布留０～１式に属する。

（87 － 61）は口縁部径とほぼ等しい器高をもつ。口縁部はやや外傾する。布留１～２式に属する。

（87 － 62）は口縁部高が器高の 1/4 程度である。口縁部と体部の接合部にナデを施し、屈曲をなだらかにする。布留３式～古墳時代中期に属する。

（87 － 63）は大形の土師器壺の口縁部である。内傾しながら立ち上がる口縁部は内外面をハケで仕上げられており、面のある端部にもハケを施す。讃岐地方にみられるいわゆる「大形複合口縁壺」である。布留１～２式併行期のものと思われる。

図 87（下段）～ 92 に溝２の２区から出土した土器を掲載した。

（87 － 64 ～ 69、88 － 76・78・86・87）は壺である。（87 － 64・68）は庄内式土器、この他は以降の土師器である。

（87 － 64）は、波状文と円形浮文をもつ二重口縁壺の口縁部である。頸部と口縁部の屈曲が内面では明瞭でなく、外面に断面三角形の突帯をめぐらす。口縁部の形態から庄内０式に属すると思われる。

（87 － 65）は直口壺の口縁部である。口頸部はわずかに内湾し、肩部に突帯をめぐらせる。口縁部の形態から布留１～４（新）式に属すると思われる。

（87 － 66）は外傾する直線的な口頸部と球形を呈する体部をもつ直口壺である。肩部内面にケズリが施され、体部内面に指頭圧痕が残る。口縁部と体部の形態から布留１～２式に属する。

（87 － 67）は直口壺と思われるが、頸部から肩部の一部しか残存していない。焼成不良のため

調整痕は不明であるが、頸部が突帯状に膨らみ、縦方向のハケメが残る。布留１～４（新）式に属する。

（87 － 68）は脚台に直口壺をのせた台付壺である。肩の張った扁球形の体部が残存する。外面にはハケメが残り、赤彩が施される。体部中ほどに穿孔と思われる打欠きが認められる。形態から庄内３～布留０式に属すると思われる。

（87 － 69）は、直立する頸部に外傾する口縁部をもつ壺である。頸部中ほどに粘土紐貼付による突帯がめぐる。肩が張った球形の体部になると思われる。頸部から肩部外面に縦方向のヘラミガキ、体部内面にはケズリが施される。体部外面にはハケメが残り、煤が付着する。口頸部の形態から布留１式に属すると思われる。

（88 － 76）は、韓式系土器に特徴的なくびれのない平底の底部を呈する小形の広口壺である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。口縁部から体部外面、肩部内面にハケメが残る。底部の形態から古墳時代中期に属すると思われる。

（88 － 78）は直口壺を模したミニチュアの土師器壺である。口縁部は短く、外面にヘラ描きによる凹線文をもつ。体部は扁球形で底部は丸底である。庄内０式～古墳時代中期に属する。

（88 － 82）は庄内式土器壺もしくは甕の底部である。くびれをもつ平底で、外面にタタキが残り、内面にヘラナデが見られる。庄内０～３式に属すると思われる。

（88 － 83）は器種不明の土師器の底部である。韓式系土器の特徴を有する器壁の薄い平底であり、体部が外側に広がる。外面にケズリが施される。古墳時代中期に属する。

（88 － 86・87）は外傾する直線的な口頸部をもち、体部が扁球形を呈する土師器直口壺である。口縁端部は丸くおさめる。（88 － 87）は焼成が不良であり、目立った調整痕は認められない。（88 － 86）は体部から底部外面にハケ、底部内面に指頭圧痕が残り、体部内面にはケズリが施される。いずれも口縁部と体部の形態から布留３～４（新）式に属すると思われる。

（88 － 70 ～ 73）は土師器小形丸底壺である。（88 － 70）は口縁部が残っておらず、肩の張った扁球状を呈する体部のみ残存する。体部外面には底部に向かって縦方向のケズリが施され、内面はナデを施す。体部の形態から布留１式に属する。

（88 － 71 ～ 73）は、扁球状の体部に器高の約 1/3 の高さの口縁部をもつ。（88 － 71）は体部から底部にかけて外面にはハケ、内面にはケズリが施される。（88 － 72）は体部外面にハケメが残り、体部から底部内面にケズリが施される。（88 － 73）は全体的にナデで仕上げている。口縁部の形態から布留２～４（新）式に属する。

（88 － 74）は土師器甕である。口縁部は直線的にのび、体部は扁球状を呈する。体部から底部外面にハケメが残る。布留３～４（新）式に属する。

（88 － 77・79・80）は土師器鉢である。（88 － 77）は半球状のミニチュアの鉢である。外面に指頭圧痕が残り、体部から底部にかけて外面に黒斑がある。（88 － 79・80）は小さく外反する

口縁部をもち、体部は緩やかに内湾する。いずれもミニチュア土器であり、詳細な時期を否定することは難しく、庄内期～古墳代中期中頃の範囲に収まると言うに留める。

（88－81・84・85）は須恵器甕である。（88－81）はすぼまった頸部から屈曲して外側に開く口縁部をもつ。（88－84）は頸部径が大きく、口縁部と肩部に稜をもち、稜と稜の間に列点文が施される。底部は上げ底状に凹む。体部内外面に自然釉がかかる。口縁部と体部の形態から古墳時代中期前半（TK73～216型式期）に属する。（88－85）は頸部径が小さく、肩の張った扁球状の体部を呈する。体部から底部外面にかけてハケメが残るのみで、文様などは認められない。（88－81・85）は古墳時代中期前半（TK216型式）に属する。

（88－75、89－88～103）は甕である。いずれも口縁部から体部が残存する。（88－75、89－88～96・100）は庄内式土器、この他は以降の土師器である。

（88－75）は短い口縁部に長胴形の体部をもつ小形甕である。口縁端部は丸くおさめられ、口頸部の器壁は厚く、体部の器壁はケズリにより薄く作られている。体部外面にハケメが残る。形態から庄内1～2式に属すると思われる。

（89－88）は、口縁端部が外反して面をもち、体部外面に右上がりのタタキを施す弥生系甕である。口縁部と体部の形態から庄内0式に属すると思われる。

（89－89）は口縁端部の上方に面をもち、外側に肥厚する口縁部をもつ。口縁部の形態から庄内0式に属する。

（89－90・91・93）の口縁部は直線的にのび、端部を丸くおさめる。（89－91）は口縁部外面にハケメが残り、肩部内面にケズリが施される。いずれも口縁部の形態から庄内1～2式に属すると思われる。

（89－92・94・103）は、「はねあげ口縁」をもつ。（89－92）は口縁部内面にハケメが残り、肩部内面にケズリが施される。（89－94）は口縁部内外面にハケメが残る。（89－103）は口縁部内外面と肩部外面にはハケ、内面にはケズリが施される。いずれも口縁部の形態から庄内2～3式に属すると思われる。

（89－95・96・100）は、口縁端部を内側に肥厚させて丸くまとめる口縁部をもつ。（89－95）は肩部外面にハケ、内面にケズリが施される。（89－96）は口縁部外面に煤が付着する。（89－100）は肩部内面にケズリが施される。いずれも口縁部の形態から庄内3～布留1式に属すると思われる。

（89－97）は口縁端部の内外面を肥厚させ、上面に水平な端面をもたせたものである。口縁端部外面に稜線をもつ。口縁部と肩部外面にハケメが残り、肩部内面にケズリが施される。形態から布留0～3式に属すると思われる。

（89－98）は、口縁端部を内面に鋭く肥厚させる口縁部をもつ。体部外面にはハケ、内面にケズリが施される。口縁部の形態から布留2式に属すると思われる。

（89 － 99・101・102）は、外側に面をもつ口縁端部をもち、球形の体部を呈する。（89 － 99）は口縁部内面にハケメが残る。（89 － 102）は口縁部内面に煤が付着する。（89 － 101）は口縁部内面と肩部外面にハケメが残る。いずれも口縁部の形態から布留０～４式に属すると思われる。

（90 － 104 ～ 117、91 － 131 ～ 92 － 137）は高杯である。（90 － 104・107）は庄内式土器、この他は土師器である。

（90 － 104）は杯部高に対して口径が広く、あまり深くならない半球状の椀形高杯である。杯部外面にハケメが残る。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。杯部の形態から庄内０～布留１式に属する。

（90 － 105）は外上方に伸びる口縁部をもつ。口縁部と体部の屈曲部に突帯状の稜線をもつが、一部稜線がなくなり体部と口縁部の境界が不明瞭なところがある。脚台部は接合法により体部と接合する。杯部の形態から布留０～３式に属する。

（90 － 106）は、屈曲部の内面は曲面となっているが、外面に段を有する有段高杯である。口縁部の内外面には横方向のヘラミガキ、体部の外面に縦方向のヘラミガキが施される。脚台部は充填法により体部と接合する。杯部の形態から布留０式に属する。

（90 － 107）は口縁部がやや外反気味にのび、口縁部と体部の屈曲部に突帯状の稜線をもつ杯部である。脚台部は接合法により体部と接合する。杯部の形態から庄内３式に属する。

（90 － 108 ～ 111・115）は口縁部と体部の境界が不明瞭で、外面にわずかに稜線の痕跡を残し、内面はほとんど曲面となる高杯である。（90 － 108）は杯部内面に縦方向のヘラミガキが施される。（90 － 109）は杯部外面に縦方向のヘラミガキが施され、杯部内面に煤が付着する。（90 － 110）は杯部外面にハケメが残る。（90 － 111）は体部内外面に縦方向のヘラミガキが施される。（90 － 112）は杯部内面にハケメが残る。（90 － 108・109）は充填法、（90 － 111・11 － 112）は接合法、（90 － 110）の脚台部は挿入付加法により体部と接合する。いずれも杯部の形態から布留２～４（古）式に属する。

（90 － 113）は浅い椀状の杯部である。底部に水平面をもつ。杯部外面に縦方向のヘラミガキが施される。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。杯部の形態から古墳時代中期に属する。

（90 － 117）は口縁部と体部の屈曲部外面にわずかに稜線をもつ、口径 24.2cm の大形高杯である。杯部外面には縦方向のヘラミガキが施される。脚台部は充填法により体部と接合する。形態から布留３式～古墳時代中期に属する。

（90 － 114 ～ 116、91 － 132・134・135、92 － 137）は杯部に稜線が認められない土師器高杯である。（90 － 114・116）はナデ以外に目立った調整は認められない。（90 － 115）は杯部内外面にハケメが残る。（90 － 114）は挿入付加法により体部と接合する。いずれも杯部の形態から古墳時代前期末～中期に属する。

（91 － 118 ～ 130）は高杯の脚台部である。

（91 － 118）は透孔が２孔残る。（91 － 119）は外面に縦方向のヘラミガキが残り、内面はケズリが施される。（91 － 120）は裾部内面にハケメが残り、脚柱部内面にケズリが施される。（91 － 121）は外面にハケ、内面にはケズリが施される。透孔が３孔残る。（91 － 122）は外面に縦方向のヘラミガキが施され、内面はナデにより平滑に仕上げられる。（91 － 123）は内面にケズリが施される。（91 － 124・125）は内面にケズリが施されてシボリメはほとんど残らない。（91 － 126）は内面にケズリが施され、透孔が３孔残る。（91 － 127）は内面にケズリ、外面に縦方向のヘラミガキを施す。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。（91 － 128）は外面に縦方向のヘラミガキが施され、内面にシボリメが残る。（91 － 129）は外面に縦方向のヘラミガキが施される。（91 － 130）は外面に縦方向のヘラミガキが施され、内面にシボリメが残る。脚台部は接合法により体部と接合する。

（91 － 119 ～ 123・125・128・130）は円錐状を呈する。このうち（91 － 125）は挿入付加法、（91 － 128）の脚台部は接合法により体部と接合する。（91 － 118・127）は短い脚柱部に大きく開いた裾部をもつ。（91 － 124・126・129）は、直線的に広がる脚柱部に屈折して開いた裾部をもつ脚台部で、挿入付加法により体部と接合する。いずれの脚台部も中空である。

（91 － 131）は杯部内面と脚台部外面に縦方向のヘラミガキが施され、脚台部に透孔が３孔残る。（91 － 132）は裾部外面に横方向のヘラミガキが施される。（91 － 133）は杯部内面にケズリと脚台部外面に縦方向のヘラミガキが施される。（91 － 134）は脚台部外面に縦方向のヘラミガキが施される。（91 － 135）は裾部外面にハケメが残り、脚台部に透孔が２孔残る。（91 － 131・133・134、92 － 136）の脚台部は挿入付加法、（91 － 132・135、92 － 137）の脚台部は充填法により体部と接合する。

高杯の脚台部は布留３式以降シボリメを残すものが増える傾向にあり、溝２では庄内０式～古墳時代中期までの遺物が認められる。このことから、（91 － 118 ～ 126・133・135）は布留０～２式、（91 － 127 ～ 132・134）は古墳時代中期、（92 － 136・137）は杯部の形態から古墳時代前期末～中期に属すると思われる。

（92 － 138 ～ 140）は土師器甑である。（92 － 138）はわずかに外傾しながら外上方に立ち上がる底部である。円形の蒸気孔が６孔あり、内面に指頭圧痕が残る。

（92 － 139）は内湾して立ち上がる体部をもつ底部である。不整形の蒸気孔が２孔残存する。内面に指頭圧痕が残る。

（92 － 140）は底部を欠失する。口縁部から底に向かってすぼまる体部を有する。把手は扁平なものである。体部外面にはハケメと指頭圧痕が残り、体部内面にはケズリが全体的に施される。いずれも古墳時代中期に属する。

（87 － 68、88 － 70・72・76・77・83、89 － 88・90・91・93、90 － 105 ～ 107・110・

111・117、91 － 118・120・121・123・126・129・134・135、92 － 136）に黒斑が認められる。

図 93・94 に溝２の３区から出土した土器を掲載した。

（93 － 141）は列点文、波状文、円形浮文が施された土師器二重口縁壺の口縁部である。頸部と口縁部との接合部に粘土を貼りつけ、外面を垂下させることによって面をもたせる。内面全体に縦方向のヘラミガキが施される。頸部内面に黒斑が認められる。口縁部の形態から布留０～１式に属する。

（93 － 142 ～ 146）は土師器甕である。（93 － 142）は、「はねあげ口縁」をもつ。口縁部内外面と体部外面にハケメが残り、体部内面はケズリが施される。（93 － 143・144）は口縁端部を丸くおさめる。（93 － 144）は体部外面に、（93 － 143）は口縁部と体部外面にハケメが残る。（93 － 145）は、やや外傾気味に直立する頸部に、外反する口縁部をもつ。体部外面はハケメが残り、煤が付着する。体部内面は全体的にケズリが施される。（93 － 146）は口縁端部を丸くおさめる。体部外面はハケ、内面はケズリが施される。（93 － 144）は布留２式～古墳時代前期に属する。この他は古墳時代中期に属する。

（93 － 147）は土師器壺もしくは甕の口縁部から体部の破片である。口縁部は非常に短く、頸部は緩やかにカーブする。体部は膨らみをもたず、外面全体にハケメが残り、赤彩が施される。古墳時代前期～中期に属する。

（93 － 148・149）は土師器小形丸底壺である。（93 － 148）は短い口縁部と、扁球形の器壁が厚い体部をもつ。体部外面にハケメが残る。形態から布留３～４式に属する。（93 － 149）は体部が小さく、口縁部が大きくなる。口縁部内外面、底部外面に横方向のヘラミガキ、口縁部と体部の接合部外面に縦方向のヘラミガキが密に施される。形態から布留１～２式に属する。

（93 － 150）は土師器鉢である。口縁部は短く、外反する。体部は底部に向かってすぼまる。体部外面にハケメが残る。古墳時代前期に属する。

（93 － 151）は土師器小形丸底壺である。口縁部は欠損している。頸部径は大きく、扁球形の体部を呈する。口径は体部の最大径に近くなると思われる。肩部内面に指頭圧痕が残る。布留０～４（新）式に属する。

（93 － 152・153）は須恵器である。（93 － 152）は甕である。口縁部が欠損する。頸部径は小さく、肩部が張らない扁球状の体部となる。文様は認められない。形態から古墳時代中期前半（TK216 型式）に属する。

（93 － 153）は有蓋高杯蓋である。つまみは扁平な宝珠形で、頂部は細い突起状になる。天井部は凹線が２条施され、列点文が施される。天井部と口縁部の境の稜は外側に突出する。古墳時代前期末（TG232 型式）に属する。陶質土器の可能性がある。

（94 － 154 ～ 158・164・165）は土師器高杯である。（94 － 154・157・158）は口縁部と体部の境界が不明瞭で、外面にわずかに稜線の痕跡を残し、内面はほとんど曲面となる。（94 －

157）の脚台部は充填法により体部と接合する。（94 － 158）は杯部内外面にハケメが残る。（94 － 154）は口縁部内面に縦方向のヘラミガキが施され、体部内外面にハケメが残る。いずれも杯部の形態から布留２～４（古）式に属する。

（94 － 155）は杯部に稜線が認められない高杯である。口縁部外面に縦方向のヘラミガキ、体部外面にケズリが施される。布留２～３式に属する。

（94 － 156・164）は口縁部が強く屈曲せず、外面に稜線の痕跡を残し、内面はほとんど曲面となる杯部を呈する。（94 － 156）は口縁部外面にハケ、内面に縦方向のヘラミガキが施される。（94 － 164）は体部外面にハケ、脚台部内面にケズリが施される。脚台部は接合法により体部と接合する。いずれも杯部の形態から布留１～２式に属する。

（94 － 165）は口径 23.4cm、器高 15.6cm の大形高杯である。口縁部は直線的にのび、端部が強く外反する。円盤状の体部に口縁部を接合しており、屈曲部は段をもつ。体部外面に横方向のヘラミガキが施される。脚台部は直線的に広がる脚柱部に屈折して開く裾部をもつ。裾端部は面をもち、脚柱部内面はケズリが施される。脚台部は接合法により体部と接合する。形態から古墳時代中期に属する。

（94 － 159 ～ 163）は高杯の脚台部である。（94 － 159・163）は円錐状の脚台部である。（94 － 160・161）は短い脚柱部に大きく開いた裾部をもつ。（94 － 162）は直線的に広がる脚柱部に屈折して開いた裾部をもつ。いずれの脚台部も中空である。（94 － 159）は外面に縦方向のヘラミガキが施される。（94 － 160）は内面にケズリ、外面に縦方向のヘラミガキが施される。透孔が３孔残る。（94 － 161）は外面に縦方向のヘラミガキが施される。（94 － 163）は内面にシボリメが残り、裾の先端部が段をもつ。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。（94 － 159・162）は庄内２式、（94 － 160・161）は布留３式、（94 － 163）は古墳時代中期に属する。

（93 － 141・151、94 － 158）に黒斑が認められる。

図 95 ～ 97 に溝２の４区から出土した土器を掲載した。

（95 － 166・167）は手捏ねの小形の土師器壺である。丸底の底部、僅かに外反する口縁部をもつ。古墳時代中期に属する。

（95 － 168 ～ 170）は壺である。（95 － 168）は庄内式土器広口壺である。口縁端部は横方向のナデにより尖らせる。頸部の突帯には刻目を有する。内外面はヘラミガキで仕上げられる。庄内２～３式に属する。

（95 － 169）は土師器二重口縁壺である。外反する頸部から続く口縁部は直立し、接合部の屈曲にはシャープさがみられない。完形であれば器高 30cm を超える大形品であろう。布留３～４式に属する。

（95 － 170）は土師器短頸壺である。わずかに外傾する短い口縁部をもち、球形の体部外面にはヘラミガキ、内面にはケズリが施される。布留１～２式に属する。

（95 － 171 ～ 174）は土師器甕である。（95 － 171）はわずかに肥厚した口縁端部をもち、体部外面には横方向のハケが施される。布留４式に属する。

（95 － 172）は端部を上方に摘み上げる口縁をもつ。体部との接合部にはナデが施され、器壁は内面のケズリにより薄く仕上げられる。布留１～２式に属する。

（95 － 173）は口縁端部にわずかに「はねあげ口縁」の名残を残すが、口縁部外面に及ぶ縦方向のハケ、内面の斜め方向のハケ調整と、体部との接合部にみられる明瞭な屈曲から布留０式に属する。

（95 － 174）は口縁端部内面を肥厚させる。体部との接合部にはナデがみられる。風化のため詳細は不明であるが布留３～４式に属する。

（96 － 175 ～ 187）は土師器高杯である。（96 － 175）は深い口縁部と杯部の接合部に明確な稜をもち、杯部内面には広い水平面を有する。これらの形状から古墳時代中期に属すると思われる。

（96 － 176・177）は杯部外面にわずかに稜をもつ。内面には暗文風ヘラミガキがみられる。布留２～３式に属する。口縁端部に布留式甕に見られる内側に肥厚させる調整をもつ（96 － 178）も同様の時期に属すると思われる。

（96 － 179）は大きく開く口縁部と浅い杯部を有する。風化のため不明瞭ではあるが内面にヘラミガキが観察できる。外面には口縁と杯部の接合痕が残ることから、粗製化の進んだものと思われる。布留３～４式に属する。

（96 － 180･185･187）は外面に稜をもたない土師器高杯である。風化のため不明瞭ではあるが、杯部内面にはヘラミガキがみられ、（96 － 185・187）は脚台部内面にはシボリメが残る。（96 － 181）も同様のものと思われる。（96 － 187）の脚台部は接合法により体部と接合する。布留２～３式に属する。

（96 － 182 ～ 184）は土師器高杯の脚台部である。脚柱部内面はケズリにより平滑に仕上げられ、これにより裾部との接合部に稜をもつ。（96 － 182・184）は杯部との接合には挿入付加法を用いる。（96 － 183）は充填法が用いられる。いずれも布留１～２式に属する。

（96 － 186）は庄内式土器高杯である。内外面共に口縁部と杯部の接合部分に屈曲をもち、杯部は脚台部接合部に向かって緩やかに傾斜する。内面のシボリメをケズリにより平滑に仕上げる。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。庄内０～１式に属する。

（97 － 188・189）は土師器小形丸底壺である。（97 － 188）は偏球状の体部に外反する口縁部をもつ。体部外面は細かなハケで仕上げられ、口縁端部は丸くおさめる。口縁部の高さは器高の約 1/2 である。布留１～２式に属する。（97 － 189）は球形の体部に外傾する口縁部をもつ。口縁部の高さは器高の約 1/3 で、口径は体部最大径を下回る。口縁部と体部中程に煤が付着する。布留３式～古墳時代中期に属する。

（97 － 190）は土師器鉢である。体部中ほどに最大径をもつ。受け口状に立ち上がる口縁部は

尖り気味の端部をもち、体部外面はナデ、内面はケズリで仕上げる。口径と体部最大径はほぼ同じであり、どちらも約30cmである。布留２～３式に属する。

（97－191）は韓式系軟質土器鍋である。平底の底部、格子目タタキを全体に施された体部には中ほどに沈線が２条巡らされ、対角線上に短い把手が付く。短く外傾した口縁部は横方向のナデにより面をもつ。内面は指頭圧痕が顕著に残る。古墳時代中期前半に属する。

図98・99（上段）に溝２の５区から出土した土器を掲載した。

（98－192～194・197・198）は土師器壺である。（98－192）は小形の壺である。外反する口縁部に肩の張った体部が続く。体部内面にはケズリ、外面はナデにより仕上げられる。布留３～４式に属する。

（98－193・194）は二重口縁壺である。（98－193）の外面は丁寧なナデで仕上げられる。口縁端部は折り返しにより内側に肥厚する。口縁部と頸部の接合部は稜をもち、シャープな屈曲をもって体部につづく。布留１～２式に属する。

（98－194）は球形の体部外面にはハケが施され、内面はナデで仕上げられる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と頸部の接合部分の屈曲はシャープさを欠く。布留３～４式に属する。

（98－198）は小形丸底壺である。球形の体部から続く口縁部は外傾して開く。口縁端部は丸くおさめる。どちらも口径は体部最大径より小さい。布留３～４式に属する。

（98－197）は小形で粗製の壺である。下膨れの体部外面には粘土紐接合痕が残る。体部内面はケズリ、口縁部内面には荒いハケメが残る。端部は丸くおさめる。古墳時代前期のものと思われる。

（98－195）は土師器小形丸底鉢である。内外面共風化のため調整不明であり、赤彩が残存する。布留０～１式に属する。

（98－196）はミニチュアの土師器鉢である。砲弾形の外形をもち、外面はハケ、内面はナデにより仕上げられる。古墳時代前期のものと思われる。

（98－199～201）は土師器甕である。体部外面には縦方向のハケ、内面はケズリにより仕上げる。（98－199）は口縁端部を丸くおさめる。（98－200・201）は端部を摘み上げによりわずかに拡張する。いずれも布留０～１式のものである。

（98－202～205）は土師器高杯である。（98－202）は口縁部と杯部の接合部外面に稜をもち、杯部内面には広い水平部をもつ。（98－204）も外形の特徴を同じくする。内面には放射状のヘラミガキが施され、摘み上げにより立ち上がった口縁部をもつ。脚台部は充填法により体部と接合する。ともに庄内３～布留０式に属する。

（98－203）は内外面共に風化が激しく調整は不明瞭。円板充填法により接合する脚柱部をもつ。古墳時代中期に属する。

（98－205）は緩やかに広がる中空の脚台部である。脚台部外面の調整は風化により不明瞭。内面のシボリメをケズリにより平滑に仕上げる。裾部内面にはハケを施し、端部は横方向のナデに

より面をもつ。庄内２～布留１式に属する。

（98 － 206）は須恵器把手付椀である。平底から外傾して立ち上がる体部中程と頸部に突帯をもち、口縁部はやや外反する。把手の断面は円形を呈する。

（99 － 207）は韓式系硬質土器甕である。球形を呈する体部外面は平行線状タタキのちヘラ状工具による沈線をほぼ等間隔に 11 条巡らせる。内面はナデで仕上げられる。短く直立気味に立ち上がる頸部と外反する口縁部をもつ。どちらも古墳時代中期前半のもの（TK216 型式）と思われる。

図 99（下段）～ 101（上段）に溝２の６区から出土した土器を掲載した。

（99 － 208）は土師器有孔鉢である。内湾する扁球形の体部をもち、底部は丸底を呈する。底部のほぼ中心に焼成前穿孔が施され、外面には煤が付着する。布留０～２式に属する。

（99 － 209･210）は土師器小形丸底壺である。（99 － 209）はわずかに内湾する口縁部をもつ。肩部に面をもち、扁球形で底部が尖り気味の体部を呈する。体部から底部外面にかけてハケメ、肩部内面に指頭圧痕が残り、体部内面にはナデが施される。口縁部から体部外面に煤が付着する。布留２～４（新）式に属する。

（99 － 210）は扁球形の体部に器高の約 1/3 の高さの口縁部をもつ。体部外面にハケメが残る。布留２～４（新）式に属する。

（99 － 211）は大形の庄内式土器二重口縁壺である。頸部が欠け、口縁部が残存する。口縁部は口径 39.0cm、器壁の厚さが約 1.5cm の大形のものである。口縁部は強く外反し、頸部との屈曲部に段をもつ。内面に横方向、外面に縦方向のハケメが残る。口縁端部に刻目、綾杉状の列点文が２列施される。口縁部の特徴から庄内０～１式に属する。

（100 － 212・213）は土師器甕である。（100 － 212）は「はねあげ口縁」をもち、体部が球形を呈する。口縁端部内面には指頭圧痕が残る。口縁部から体部外面に縦方向のハケメが残り、体部内面にはケズリが施される。庄内２～布留０式に属する。（100 － 213）は口縁端部が外側にわずかに肥厚して面をもち、やや肩の張った球形の体部を呈する。体部外面にハケメ、内面に指頭圧痕が残る。頸部から肩部に煤が付着する。古墳時代中期に属する。

（100 － 214 ～ 221）は高杯である。（100 － 216）は庄内式土器、このほかは土師器である。

（100 － 214・219 ～ 221）は口径が 24.0cm 前後の大形の高杯である。（100 － 214）は、「はねあげ口縁」をもち、口縁部と体部の接合部に明瞭な稜線をもつ高杯である。体部外面にケズリが施される。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。布留３式～古墳時代中期に属する。

（100 － 215）は杯部に稜線が認められず、口縁部がわずかに外反する高杯である。杯部の形態から古墳時代前期末～中期に属する。

（100 － 216）は口縁部が直線的に発達し、口縁部と体部の屈曲部に段をもつ杯部をもつ。口縁端部はわずかに摘み上げられ、ナデにより外面に段をもつ。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。杯部の形態から庄内３式に属する。

（100 － 217・218）は口縁部と体部の境界が不明瞭で、外面にわずかに稜線の痕跡を残し、内面はほとんど曲面となる。口縁端部は外側に面をもつ。（100 － 218）は杯部内面にハケメが残る。（100 － 217）は体部内外面にハケメが残る。脚台部は充填法により体部と接合する。いずれも杯部の形態から布留２～４（古）式に属する。

（100 － 219・220）は口縁端部の外側に面をもつ、「はねあげ口縁」を呈する。口縁部と体部の接合部の屈曲は緩やかである。（100 － 221）の口縁端部は丸くおさめられ、口縁部と体部の接合部の屈曲も緩やかである。脚台部外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面にはシボリメが残る。裾部の先端は面をもつ。（100 － 219・221）の脚台部は挿入付加法により体部と接合する。いずれも布留３式～古墳時代中期に属する。

（101 － 222 ～ 229）は高杯の脚台部である。（101 － 223・224）は短い脚柱部に大きく開いた裾部をもつ。（101 － 225 ～ 228）は、直線的に広がる脚柱部に屈折して開いた裾部をもつ。（101 － 222）は透孔が２孔残り、内面にケズリが施されている。（101 － 229）は円筒状の脚柱部をもつ脚台部である。内面にケズリ、外面に縦方向のヘラミガキが施される。裾の先端部が上方にわずかに反る。脚台部は充填法により体部と接合する。（101 － 223）は内面にケズリが施され、内外面に煤が付着する。透孔が３孔残る。（101 － 224）は裾部に透孔が３孔残る。（101 － 228）はシボリメが一部残るがナデにより消されている。脚柱部外面に煤が付着する。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。（101 － 225・226）は脚柱部内面にケズリ、外面に縦方向のヘラミガキが施される。（101 － 227）は内面にケズリが施される。裾端部は面をもつ。すべて庄内０～布留２式に属すると思われる。

（100 － 212・214・217・219、101 － 222・223・228）に黒斑が認められる。

図 101（下段）～ 103 に溝２の７区から出土した土器を掲載した。

（101 － 230 ～ 233）は土師器小形丸底壺である。（101 － 230）は小形丸底壺である。短い受口状の口縁部をもち、口縁端部は外反する。口縁部の形態から古墳時代中期に属する。

（101 － 232）は扁球形の体部をもつ。体部外面にはハケ、内面には指頭圧痕とケズリがみられる。（101 － 233）は肩が張る体部をもち、外面全体にハケメが残る。口縁部内面、肩部外面に煤が付着する。（101 － 231）は扁球形の体部を有する。体部外面はケズリを施した後、ナデで仕上げる。口縁部から肩部内外面に煤が付着する。いずれも布留３～４式に属する。

（101 － 235）は土師器小形器台の受部である。内面に縦方向のヘラミガキが施された円盤状の受部に、ごく短い口縁部が立ち上がる。受部の特徴から庄内３～布留２式に属する。

（101 － 234・237、102 － 238・239）は壺である。（101 － 234・237）は二重口縁壺である。（101 － 234）は口縁部と体部を欠失する。頸部には波状文、突帯には刺突文が施される。直立する頸部に接合する口縁部は外反気味に開くものと思われる。内外面に煤が付着する。庄内０～２式に属する。

（101 － 237）は球形の体部をもち、短く外反する頸部、外傾して開く口縁部を有する。体部外面にハケメが残り、肩部内面に指頭圧痕とケズリが認められる。頸部と口縁部の接合部分には外面にわずかに段をもつ。体部から底部外面に煤が付着する。布留３～４式に属する。

（102 － 238）は口縁部が外傾しながら立ち上がり、端部は外面に面をもつ。体部は長胴形に近い球形で、底部は尖り気味の丸底である。体部外面に縦方向のハケメが残り、体部内面はケズリが施される。口縁部から肩部、底部の内外面に集中して煤が付着する。庄内３～布留０式に属する。

（102 － 239）は短頸壺である。わずかに外傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。体部は長胴形で、底部は中央がわずかに凹む平底である。口縁部内外面にハケメ、体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面、体部から底部内外面に煤が付着する。庄内３～布留０式に属する。

（101 － 236、240）は土師器甕である。（101 － 236）は口縁部から体部が残存する。外傾気味に直立し、口縁部はわずかに外反する。肩は張らず、球形か長胴形の体部である。口縁部から体部外面に縦方向のハケメが残る。口縁部内面はハケ、体部内面はケズリが施される。布留０～２式に属する。

（103 － 240）は口縁端部を内傾させて内外に肥厚させている。肩は張らず、球形か長胴形の器壁が薄い体部である。体部外面は横方向と一部縦方向のハケメが残り、体部内面はケズリが施される。口縁部の形態から布留０～２式に属する。

（103 － 241 ～ 246）は土師器高杯である。（103 － 241・243・244）は口縁部と体部の境界が不明瞭で、外面にわずかに稜線の痕跡を残し、内面がほとんど曲面となる杯部をもつ。（103 － 243）は体部から脚柱部外面にハケメが残り、脚柱部から裾部外面に縦方向のヘラミガキが施される。脚台部内面にケズリが施され、内外面には煤が付着する。（103 － 241）は体部外面にハケメが残る。（103 － 244）は体部から脚柱部外面にハケメが残り、脚柱部から裾部外面に縦方向のヘラミガキが施される。脚台部内面にはケズリが施される。杯部の形態から布留２～３式に属する。

（103 － 242）は直線的に広がる脚柱部に屈折して開く裾部をもつ高杯の脚台部である。外面に縦方向のヘラミガキ、内面にケズリが施される。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。庄内０～布留２式に属すると思われる。

（103 － 245）は杯部に稜線が認められない高杯である。口縁端部と裾部先端はナデにより内側に肥厚する。体部から脚柱部外面に縦方向のヘラミガキ、脚台部内面にケズリが施される。透孔が３孔認められる。杯部の形態から古墳時代前期末～中期に属する。

（103 － 246）は大形の高杯である。口縁端部は面をもち、外側にわずかに肥厚する。口縁部と体部の接合部は強い稜線をもつ。体部外面と脚台部内面にケズリ、脚台部外面に縦方向のヘラミガキが施される。脚部には、通有透孔が穿たれる外面の３ヶ所に未貫通の竹管文が施されている。竹管文の外形は 1.1cm で、その内面側は、外側から器壁が押されることによって、径約 1.5cm、高さ１～２mm ほどの盛り上がりになっている。杯部内面、脚部外面に煤が付着する。布留３式～古

墳時代中期に属する。

（101 － 231、103 － 243・245）は黒斑が認められる。

図 104 に溝２の８～ 11 区から出土した土器を掲載した。

（104 － 247 ～ 252）は溝２の８区から出土した。

（104 － 247）は土師器小形丸底壺である。肩部が張った扁球状の体部をもち、全体的に器壁は薄い。口縁部は短く、端部は内側にわずかに肥厚する。体部内外面にハケメが残る。布留３式～古墳時代中期に属する。

（104 － 248）は土師器甕である。口縁部は内湾し、肩の張らない球形の体部をもつ。口縁端部は内面に肥厚させ、丸くおさめている。体部外面には縦方向と横方向のハケメが残り、体部内面にはケズリが施される。口縁部の形態から布留０～２式に属する。

（104 － 249・252）は杯部に稜線が認められない土師器高杯である。（104 － 249）は杯部内面に横方向のヘラミガキ、杯部外面にケズリが施される。口縁部内外面に煤が付着する。（104 － 252）の口縁端部は内側にわずかに肥厚する。杯部内面に縦方向のヘラミガキが施され、脚台部から体部外面にケズリの痕跡が認められる。脚台部は挿入付加法により体部と接合する。いずれも杯部の形態から古墳時代前期末～中期に属する。

（104 － 250）は小形の土師器壺である。外傾して開く口縁部に、扁球形の体部を呈する。全体をナデで仕上げる。口縁部から底部外面全体に煤が付着するが、壺の片側半分に煤が付着し、もう片側には付着しない。口縁部内面も同じく煤が付着するところとしないところに分かれるが、こちらは外面に煤が付着している側とは逆の内面に煤が付着する。庄内３～布留４（新）式に属する。

（104 － 251）は弥生土器甕の体部から底部である。外面には右上がりのタタキが施され、すぼまった平底の底部をもつ。内面にはクモの巣状のハケメが残る。体部外面に煤が付着する。底部の形態から畿内第Ⅴ様式に属する。

（104 － 253・254）は溝２の９区から出土した。

（104 － 253）は土師器高杯の脚台部である。直線的に広がる脚柱部に屈曲して開く裾部をもつ。内面にはケズリが施される。裾部内外面にわずかに煤が付着する。脚台部は接合法により体部と接合する。形態から布留２～３式に属する。

（104 － 254）は庄内式土器広口壺である。外傾する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。やや下膨れの球形の体部を呈し、底部は欠損する。体部外面は斜め方向のハケ、内面はナデが施される。体部内外面に煤が付着する。庄内０～３式に属する。

（104 － 255・256）は溝２の 10 区から出土した。

（104 － 255）は土師器小形丸底壺である。体部とほぼ同じ高さの口縁部をもち、口径は体部径よりも大きい。体部外面にケズリの痕跡が残るが、最終的に内外面ともにナデで仕上げる。体部外面に煤が付着する。口縁部の形態から布留３～４式に属する。

（104 － 256）は弥生土器高杯の脚部である。膨らんだ脚柱部に短い裾部をもつ。裾部には穿孔が１孔残存する。全体的にナデで仕上げる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（104 － 257 ～ 261）は溝２の 11 区から出土した。

（104 － 257）は土師器小形丸底壺である。扁球形の体部から屈曲して立ち上がる短い口縁部を有し、底部は面をもつ。内外面に煤が付着する。古墳時代中期に属する。

（104 － 258）は庄内式土器壺の口縁部から体部である。外反する口縁部をもち、口縁端部は外傾する。体部はやや肩が張り、球形のものと思われる。全体的にナデで仕上げる。口縁部内外面と体部内面に煤が付着する。口縁部の形態から庄内０～２式に属する。

（104 － 259）は弥生土器椀形高杯の杯部から脚部である。半球状の杯部内外面に縦方向のヘラミガキが施される。畿内第Ⅴ様式の新しい段階～庄内０式に属する。

（104 － 260）は土師器小形器台である。円錐状の脚台部が残存する。受部との接合部分の外面に縦方向のヘラミガキが施される。内外面全体に煤が付着する。脚台部の形態から布留１～２式に属する。

（104 － 261）は大形土師器高杯の杯部である。口縁部は外上方にのびる。円盤状の体部に口縁部を接合しており、屈曲部は段をもつ。口縁部内外面に縦方向のヘラミガキが施され、体部外面にハケメが残る。布留３式～古墳時代前期に属する。

（104 － 257・259・260）に黒斑が認められる。

図 105 に溝９から出土した土器を掲載した。

（105 － １）は縄文土器深鉢の口縁部である。外反する口縁部は粘土紐を貼りつけて肥厚させ、口縁端部外面にＬＲの縄文を施す。縄文時代後期に属する。

（105 － ２）は弥生土器甕の口縁部である。外面全体に煤が付着する。畿内第Ⅴ様式に属すると思われる。

（105 － ３）は器種・時期ともに不明である。土製品の可能性がある。

（105 － ４）は弥生土器高杯の脚部である。裾部の先端は面をもち、外面に縦方向のヘラミガキが施される。透孔が２孔残存する。畿内第Ⅴ様式に属する。

（105 － ５）は須恵器甑である。蒸気孔は残存していないが、器壁の厚い底部に、やや内湾しながらのびる体部をもつ。内面に指頭圧痕が残り、外面にはタタキとケズリが施される。古墳時代中期前半に属する。

図 106 ～ 108 に流路１から出土した土器を掲載した。

（106 － １）は土管である。継手部分の破片である。近世以降に属する。

（106 － ２）は大和型の瓦器椀である。口縁端部の内側に沈線が施され、口縁端部はナデによりやや外反する。高台は断面三角形を呈する。内面に横方向のヘラミガキが施され、外面には指頭圧痕が残る。13 世紀後半に属する。

（106－3～6）は壺である。（106－3・5・6）は弥生土器、（106－4）は土師器である。

（106－3）は頸部が外傾しながら立ち上がり、強く外反する口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。口縁端部外面と下端・上端に刻目、口縁部内面に横方向のヘラミガキが施される。口縁部の形態から畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（106－4）は口縁部が直線的で短く、球形に近い丸底で扁球形の体部をもつ。口縁部から体部外面にハケメが残る。体部から底部内面にはヘラ状工具による粗いナデが施される。口縁部から体部外面、体部から底部内面に煤が付着する。布留3式～古墳時代前期末に属する。

（106－5）は口縁部に粘土紐を貼りつけ、口縁端部を上下に拡張する。頸部は緩やかに外反する。文様は認められない。口縁部の形態から畿内第Ⅴ様式後半に属する。

（106－6）は口縁部と頸部の屈曲が強く、口縁端部は外傾して外側に面をもつ。内外面にハケメが残る。口縁部の形態から畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（106－7～11、107－12、16）は甕である。（106－7～10）は土師器、（106－11、107－16）は弥生土器、（107－12）は庄内式土器である。

（106－7）の口縁端部は摘み上げた後、ナデによって外傾させて丸くまとめる。口縁部内面と体部外面にハケメ、内面に指頭圧痕が残る。（106－8）は外傾する口縁部に、摘み上げた後、ナデによって外傾させて面をもたせた口縁端部をもつ。体部は器壁の薄い球形を呈する。体部から底部外面にハケメが残る。内外面全体に煤が付着する。（106－9）は口縁端部と頸部が細くなり、中ほどに膨らみをもつ口縁部である。内面にハケメが残る。いずれも口縁部の形態から古墳時代中期に属する。

（106－10）の口縁端部は内面に鋭く肥厚させ、外面はシャープにおさめる。口縁部は内湾し、外面に稜線をもつ。口縁部の形態から布留4式に属する。

（106－11）の口縁部は外反し、口縁端部は外側にわずかに面をもつ。体部外面に右上がりのタタキ、体部内面に板ナデの痕跡が残る。口縁部外面に煤が付着する。畿内第Ⅴ様式の新しい段階から庄内0式に属する。

（107－12）は小形の甕である。口縁部から体部が残存する。外反する短い口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部と体部の間に明瞭な稜線をもたず、緩やかに外反する。体部内面に指頭圧痕が残る。口縁部の形態から庄内0～3式に属する。

（107－16）の底部はくびれのある平底を呈する。底部外面と体部内外面に煤が付着する。形態から畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（107－13～15）は弥生土器壺もしくは甕の平底の底部である。（107－13）はわずかに突出し、くびれをもつ。（107－14・15）はほとんどくびれをもたない。（107－14）の外面にはタタキが施される。いずれも畿内第Ⅴ様式に属する。

（107－17）は小形の弥生土器鉢である。口縁端部は肥厚し、面をもつ。口縁部の形態から畿

内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（107 － 18）は土師器小形丸底鉢である。外反する口縁部に扁球形の体部をもつ。口縁部外面と体部内外面に煤が付着する。布留０～２式に属する。

（107 － 19・20）は土師器鉢である。（107 － 19）は短く外反する口縁端部をもつ。全体をナデで仕上げる。体部に煤が付着する。古墳時代中期に属する。

（107 － 20）は大形の土師器鉢である。球形の体部から屈曲をもって外傾する口縁部をもつ。全体をナデにより仕上げられるが、体部外面にハケメが残る。布留２～３式に属する。

（107 － 21）は土師器甑の体部である。把手は先端を欠失する。体部は長胴形を呈する。外面は一部ケズリの痕跡が残るがナデで仕上げる。古墳時代中期に属する。

（107 － 22 ～ 25）は土師器高杯の脚台部である。（107 － 22）は屈折して開いた裾部をもつ。裾部の先端は上向きに反る。脚柱部の外面にはヘラミガキ、内面はヘラケズリが施され、丁寧に作られている。（107 － 23）は屈折して開いた裾部をもつ。裾部の先端は外側に面をもつ。脚柱部外面にハケ、裾部内面にはシボリメ、指頭圧痕、ハケメが残る。（107 － 24）は高杯の杯部から脚台部である。脚柱部は短く、屈折して開く裾部をもつ。脚柱部内面にシボリメは認められない。透孔が２孔認められる。（107 － 25）は脚台部である。体部内面は平らで、脚柱部は短く内面にはシボリメが残る。これらは古墳時代中期に属する。

（108 － 26・27）は高杯である。（108 － 26）は土師器である。浅い椀状の杯部である。外面に稜線が認められる。杯部の形態から古墳時代中期後半に属する。

（108 － 27）は弥生土器である。口縁部が外反し、体部との屈曲は明瞭である。口縁部内面に横方向のヘラミガキ、体部内面に縦方向のヘラミガキが施される。口縁部内外面に煤が付着する。杯部の形態から畿内第Ⅴ様式に属する。

（108 － 28 ～ 30･37）は土師器杯である。（108 － 28）は口縁部が外反し、底部は尖り気味になる。底部外面に「×」のヘラ記号が認められる。（108 － 29）は口縁部がややひらく浅い半球状を呈する。（108 － 30）は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。いずれも体部外面にはヘラケズリが施され、内面はナデで仕上げる。形態から古墳時代中期～後期前半に属する。

（108 － 31 ～ 42）は須恵器である。

（108 － 31）は小型壺蓋、（108 － 32 ～ 38）は杯蓋である。（108 － 31）は口縁部から体部が直線的で、扁平な天井部をもつ。天井部と体部の境に稜線はもたない。口縁端部は内面をナデにより面をもたせ、先端は丸くおさめる。天井部には左回りに回転ヘラケズリが施される。形態から古墳時代後期に属する。

（108 － 32）は有蓋高杯の蓋である。直立する口縁部をもち、体部は直線的で高さが高くなり、天井部は丸みをもった扁平状になる。つまみは円錐台状で頭頂部は凹むが中央は突出する。各端部は鋭く仕上げる。古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 33）は器高が低く、口径が大きく扁平である。口縁端部は内側に段をもつ。天井部と体部の境はあまり突出せず稜線が残る。天井部には左回りに回転ヘラケズリが施される。形態から古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 34）は器高が低く、口縁部と天井部の境の稜線はほとんど残っていない。口縁部から天井部は口縁部外面にハケメ、天井部内面に指頭圧痕が残り、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。天井部に打ち欠きによる焼成後にあけられた穿孔が１孔残り、穿孔のまわりに指頭圧痕が認められる。形態から古墳時代後期後半（TK43 型式）に属する。

（108 － 35）は器高が低く、扁平である。口縁端部は内側に段をもつ。天井部と体部の境にわずかに稜線が残る。天井部には左回りに回転ヘラケズリが施される。形態から古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 36）は口径が大きく扁平である。口縁端部は内側に段をもつ。天井部と体部の境はあまり突出せず稜線が残る。天井部には左回りに回転ヘラケズリが施される。古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 37）は丸みのある体部をもつ。全体にナデで仕上げる。７世紀前半（TK217 型式）に属する。

（108 － 38 ～ 40）は杯身である。

（108 － 38）は立ち上がりが内傾し、稜が上向き気味に突出する。外面に左回りの回転ヘラケズリが施される。（108 － 40）は扁平で口径は大きく、立ち上がりが内傾する。稜はほぼ水平に突出する。底部には左回りに回転ヘラケズリが施される。底部内面の中央に青海波文の当て具痕が認められる。

（108 － 39）は立ち上がりが内傾し、稜はほぼ水平に突出する。外面に左回りの回転ヘラケズリが施される。いずれも古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 41）は壺の口縁部から体部である。頸部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は外傾する。口縁端部は外面が凹む。全体をヨコナデで仕上げる。古墳時代後期中葉（TK10 型式）に属する。

（108 － 42）は器台である。椀状の杯部に外反して開く口縁部をもつ。口縁端部は上下に肥厚し、外側に面をもつ。杯部外面は２本１組の凸線を２組もち、杯部が２段に分けられる。２組の凸線の間に波状文、下段の凸線の下に平行タタキが施される。杯部内面に自然釉が認められる。古墳時代後期後半に属する。

図 109 に流路２から出土した土器を掲載した。

（109 － 1）は弥生土器甕である。口縁端部は摘み上げにより上方に拡張する。口縁部の形態から畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（109 － 2）は弥生土器壺の頸部から体部である。肩の張った体部にやや外傾し、直線的にのびる口頸部をもつ。頸部外面にハケメ、肩部内面に指頭圧痕が残る。畿内第Ⅴ様式に属する。

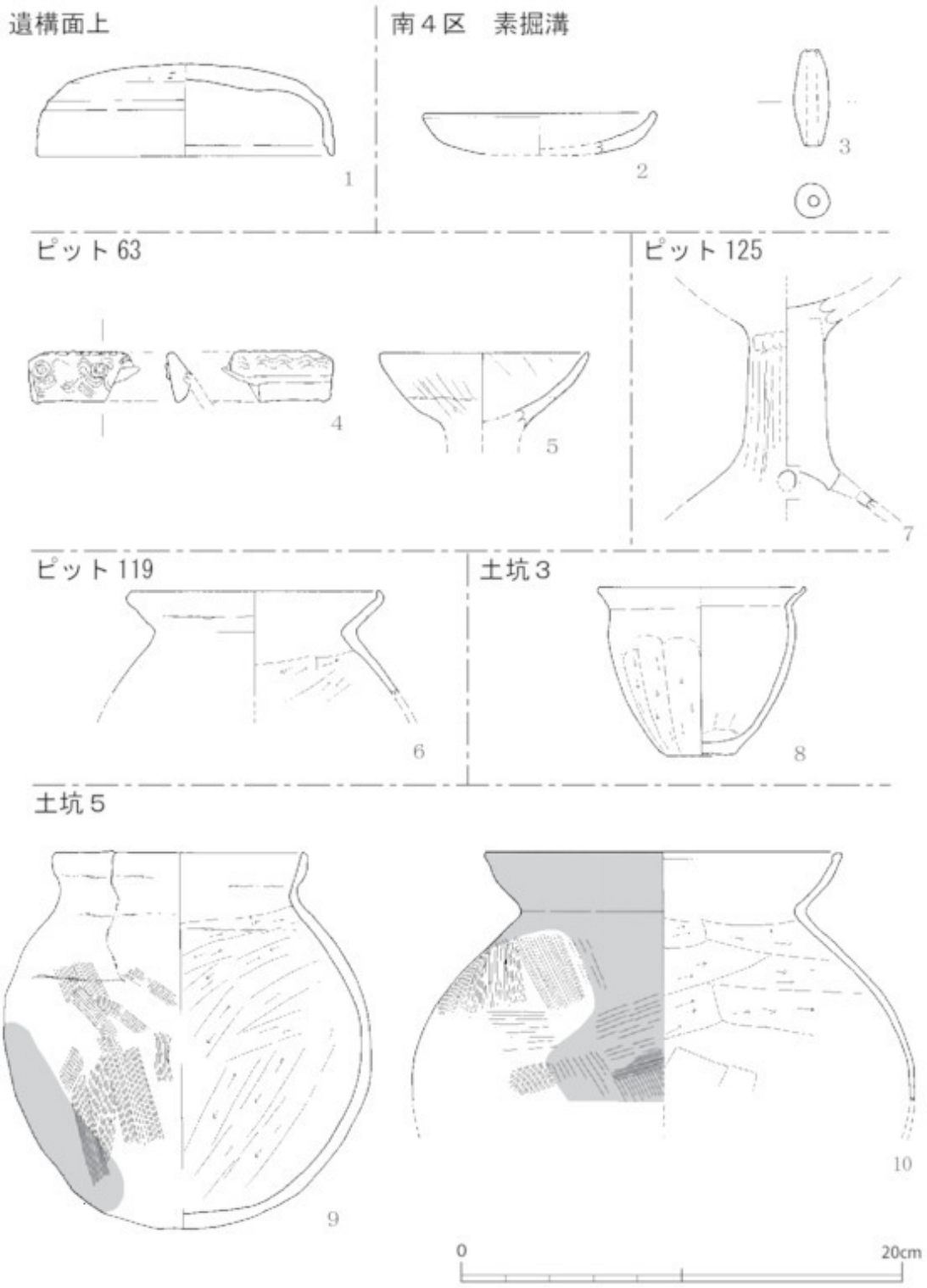


図 80　第１遺構面　遺構面上・素掘溝・ピット・土坑　出土土器・土製品　（S.＝1/3）

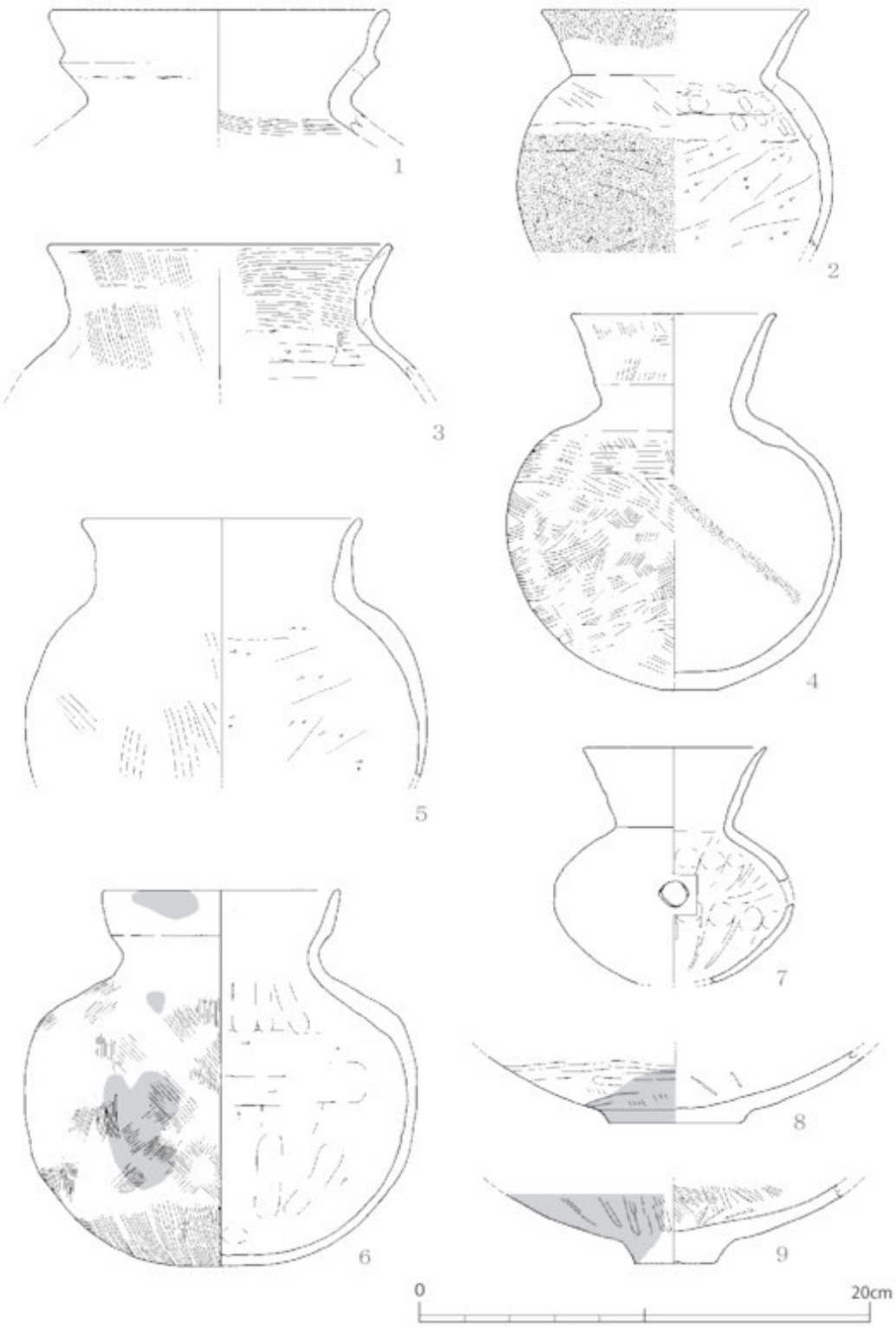


図81　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（1）（S.=1/3）

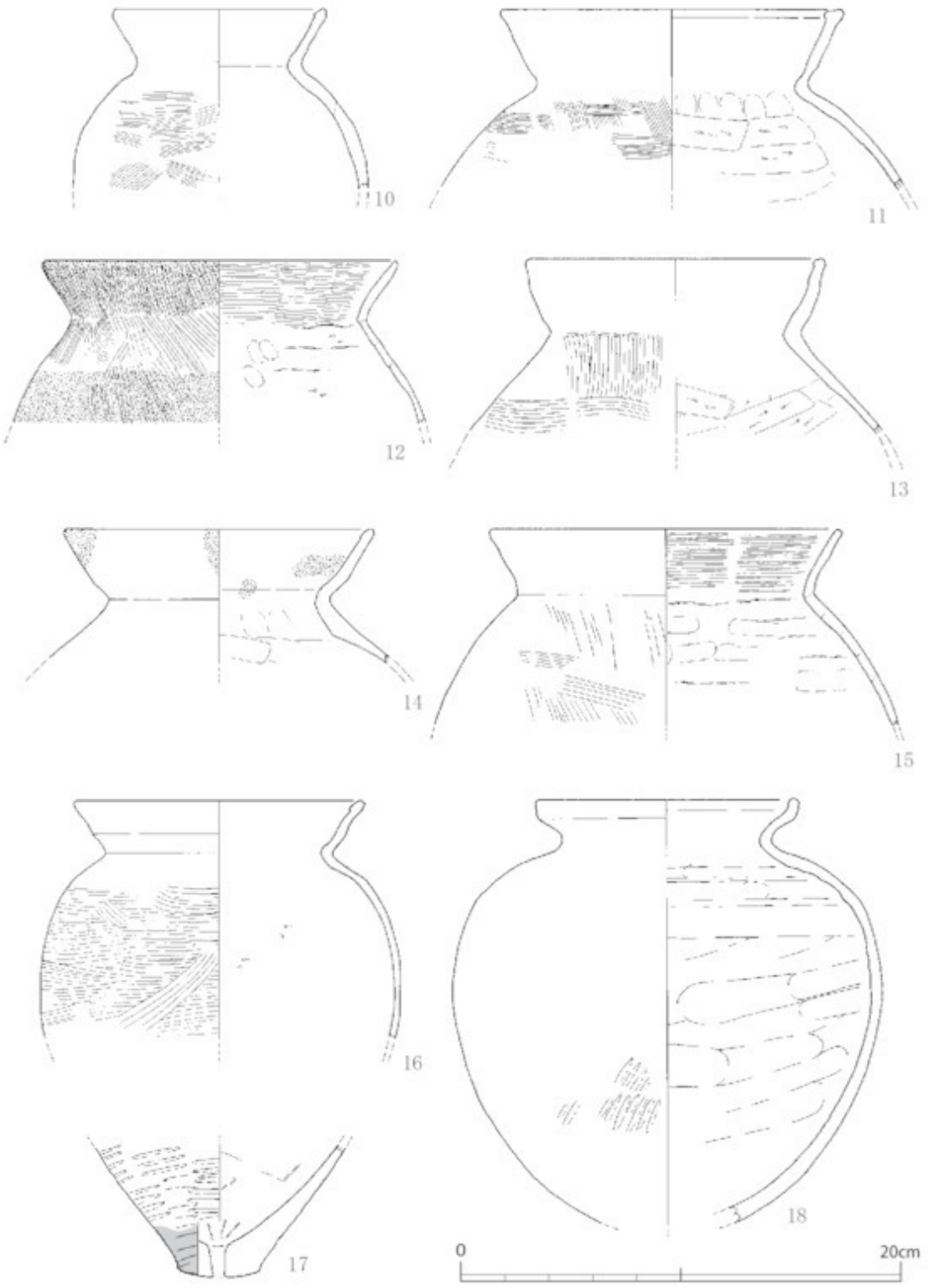
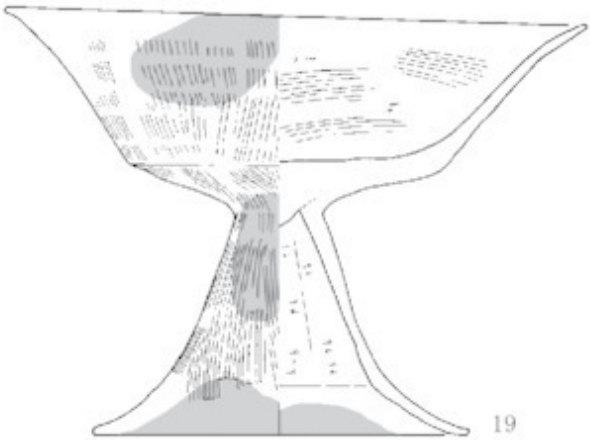
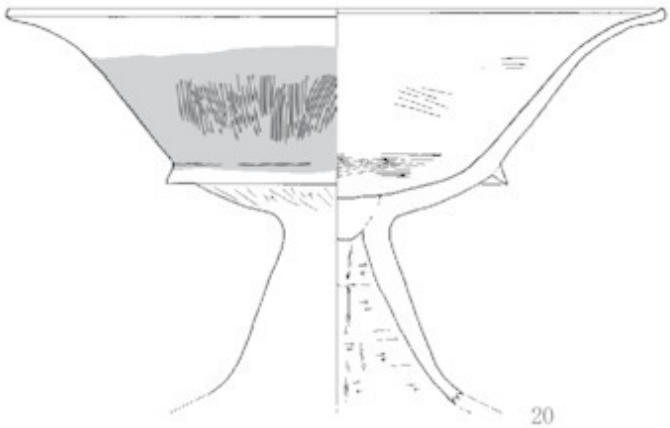


図82　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（2）（S.=1/3）





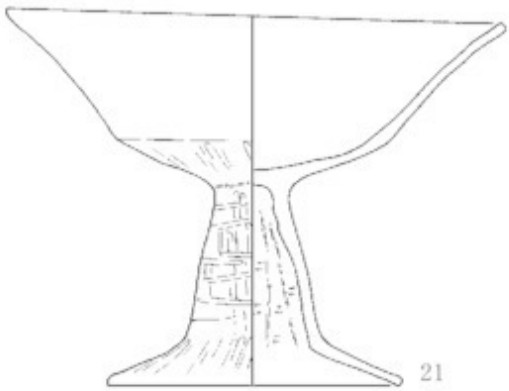


図83　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（3）（S.=1/3）

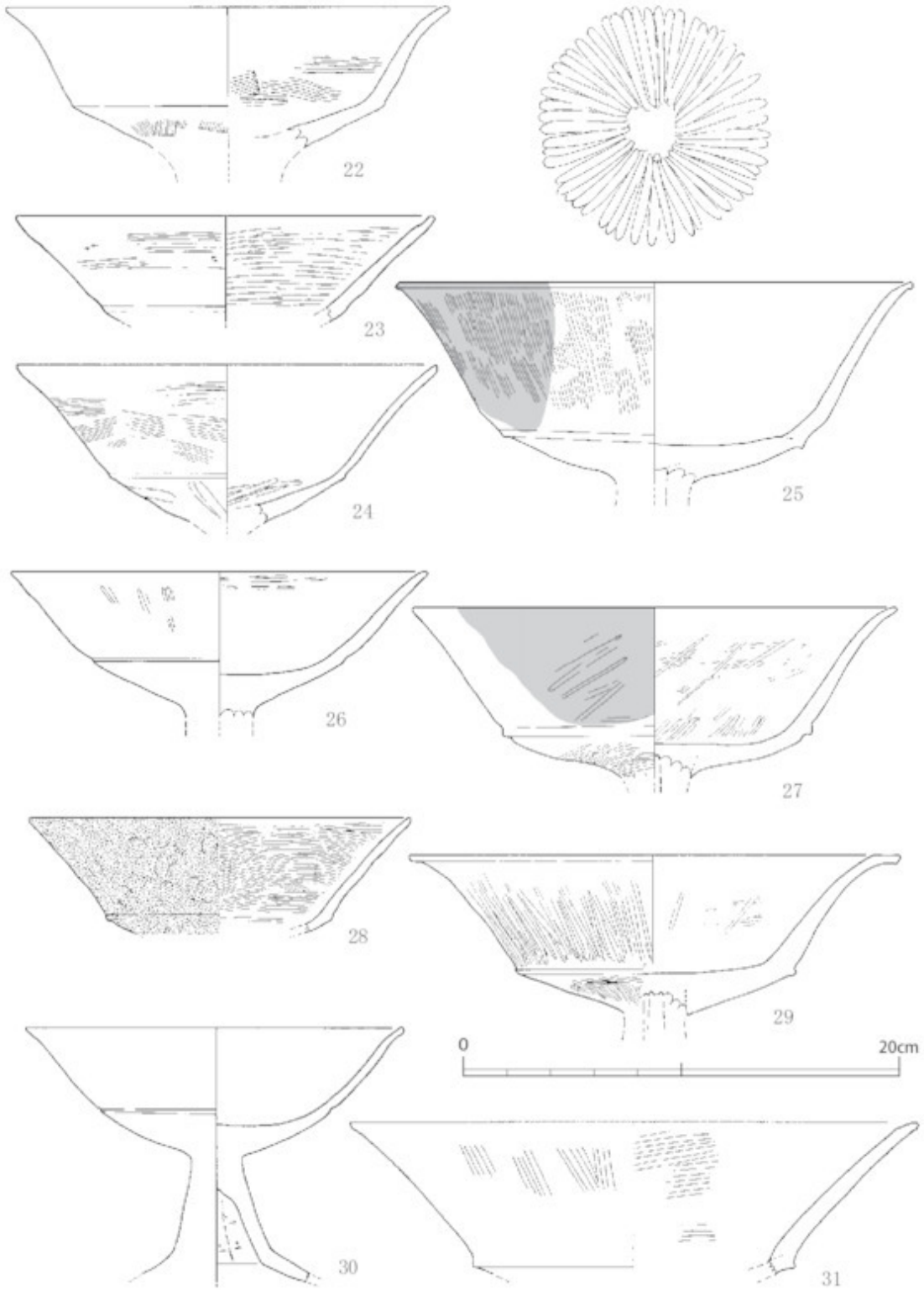


図84　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（4）（S.=1/3）

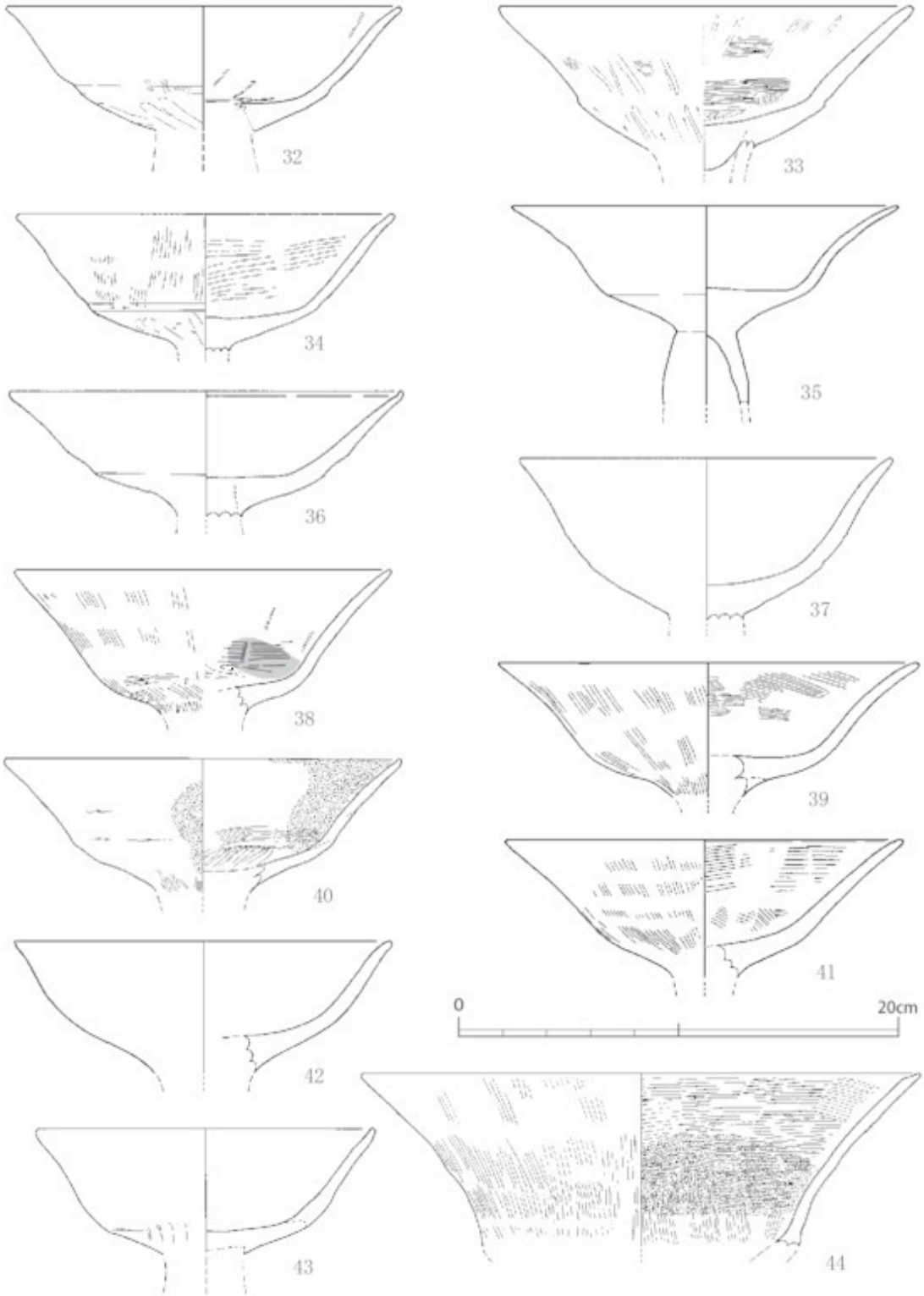


図85　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（5）　（S.＝1/3）

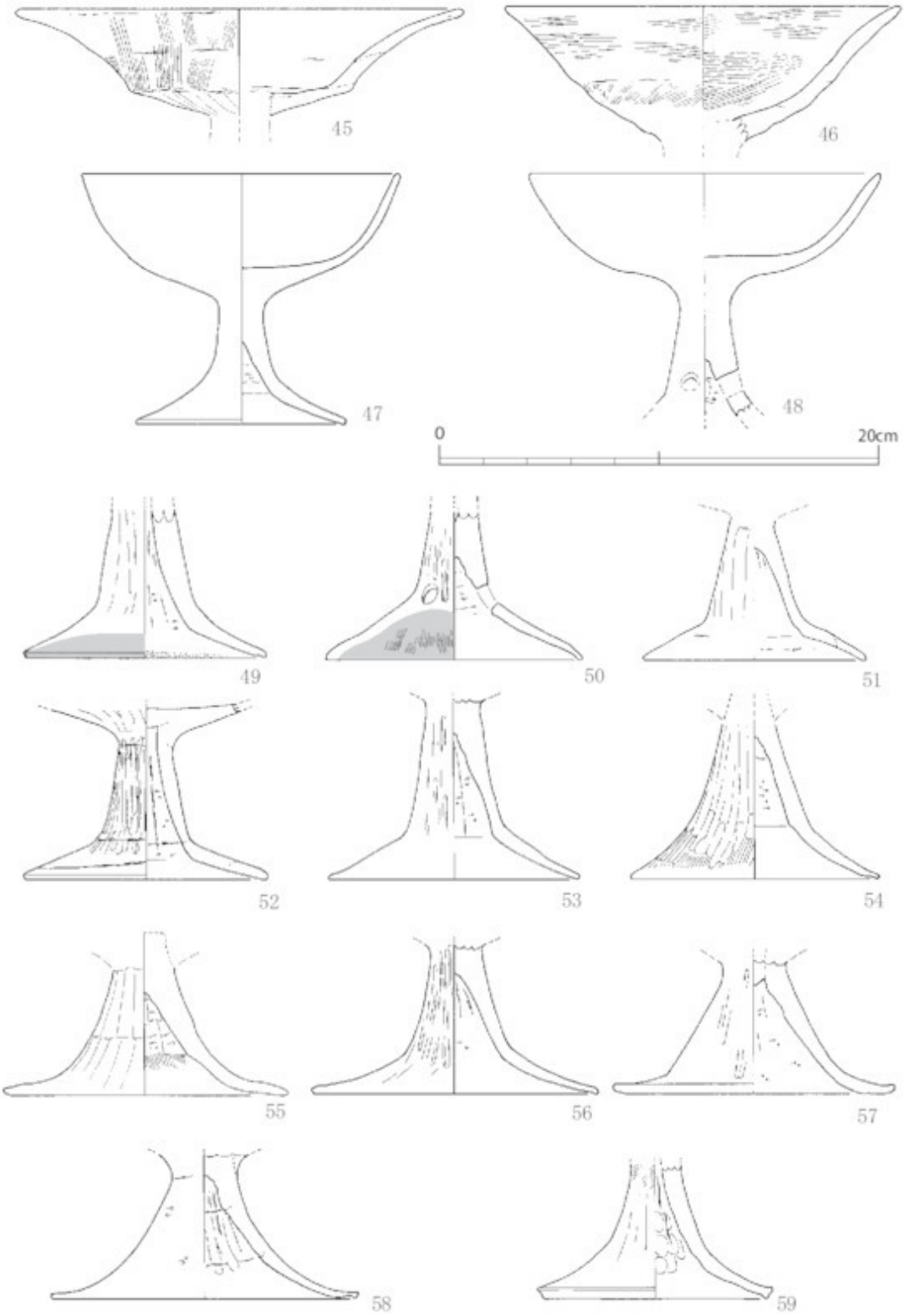


図 86　第 1 遺構面　溝 2　1 区　出土土器（6）（S.=1/3）

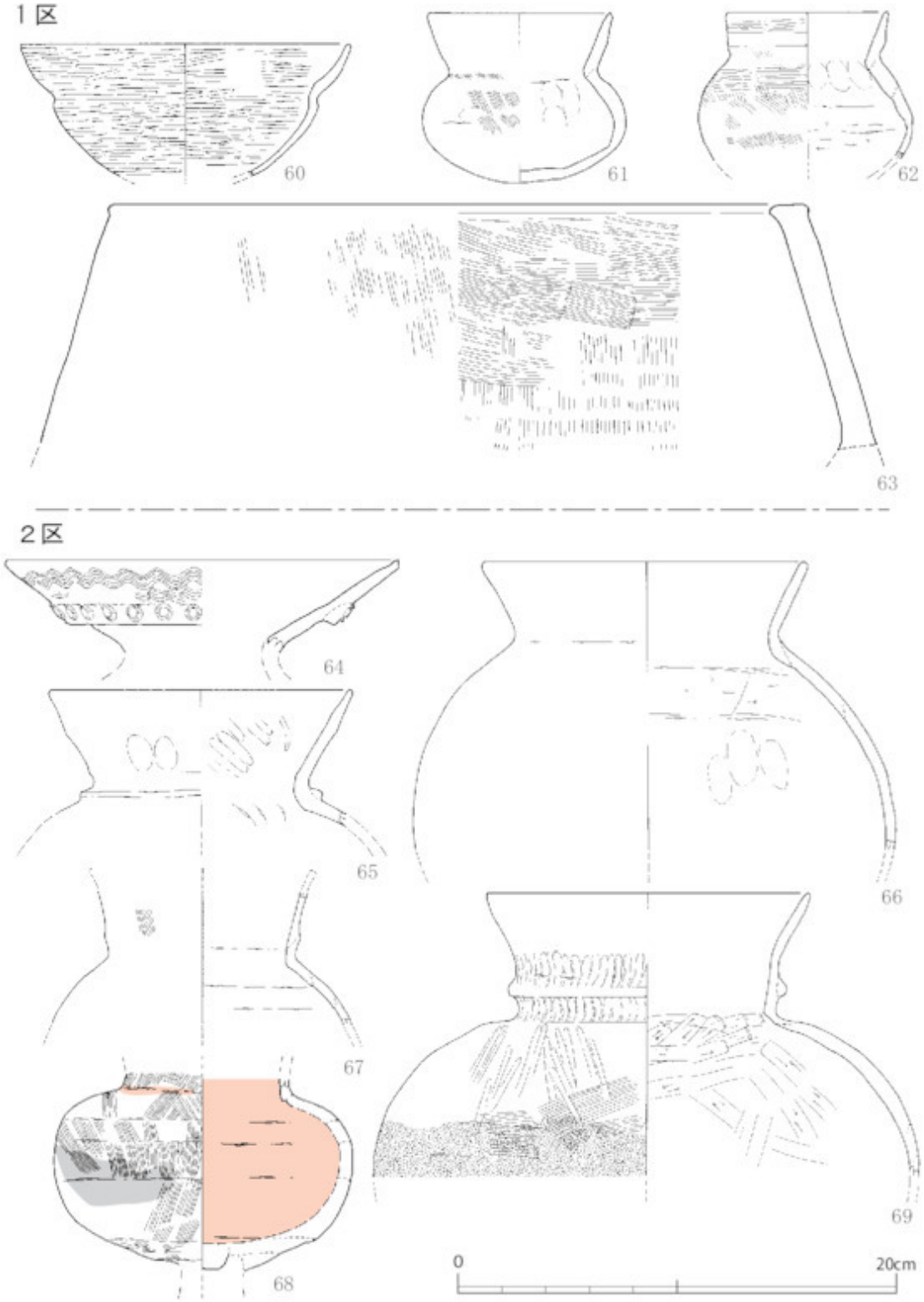


図87　第1遺構面　溝2　1区　出土土器（7）・2区　出土土器（1）（S.=1/3）

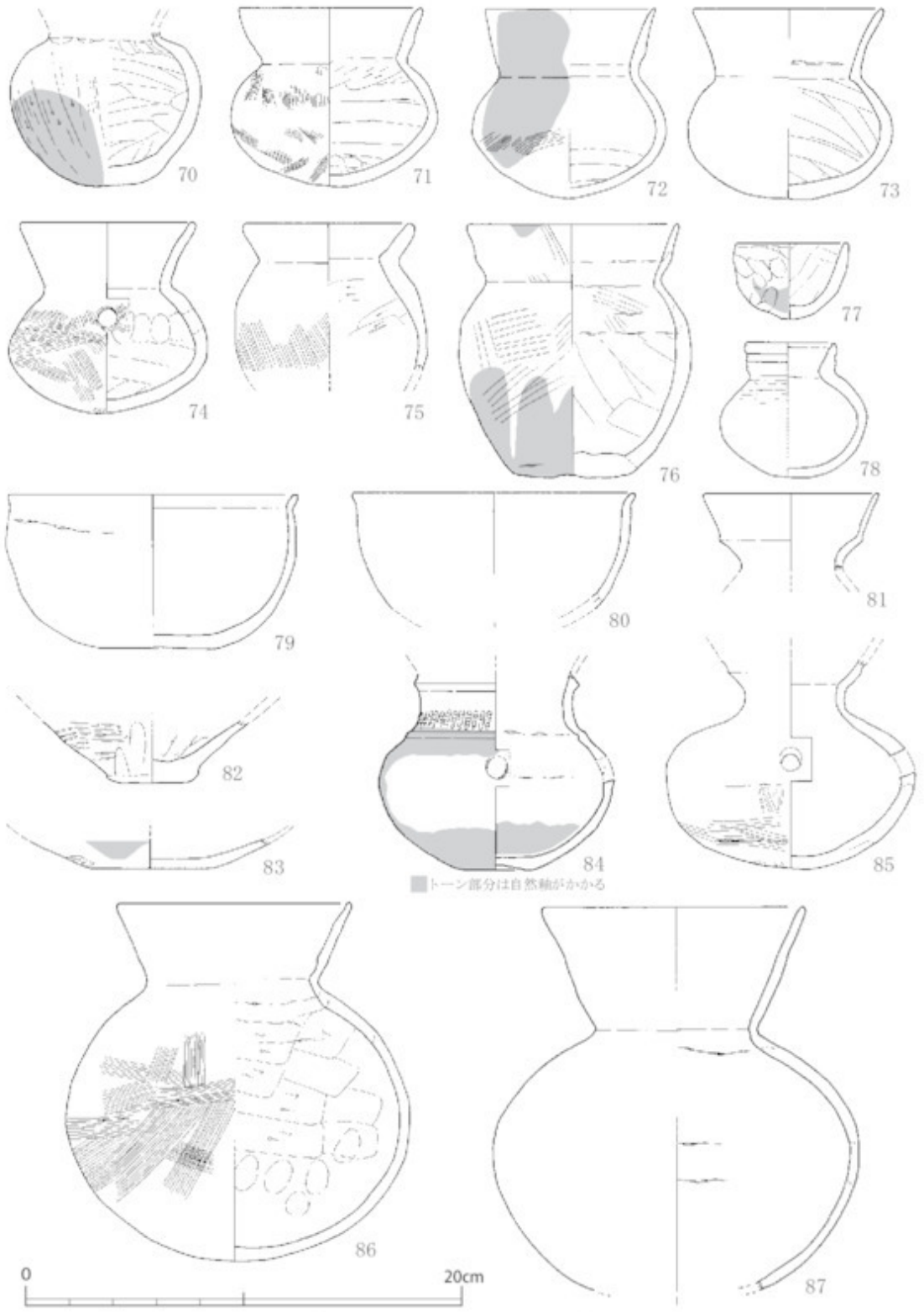


図88　第1遺構面　溝2　2区　出土土器（2）（S.＝1/3）

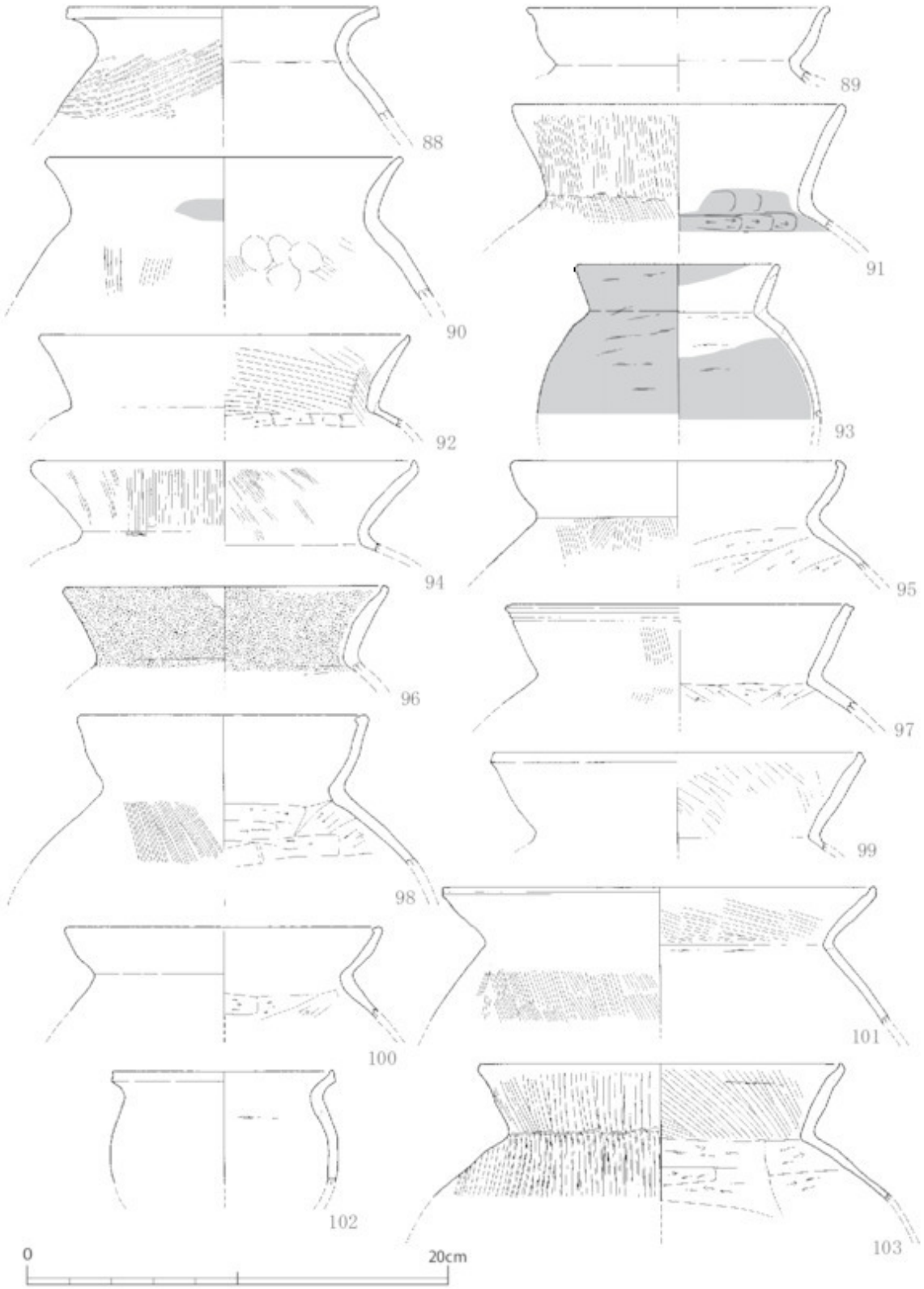


図89　第1遺構面　溝2　2区　出土土器（3）（S.＝1/3）

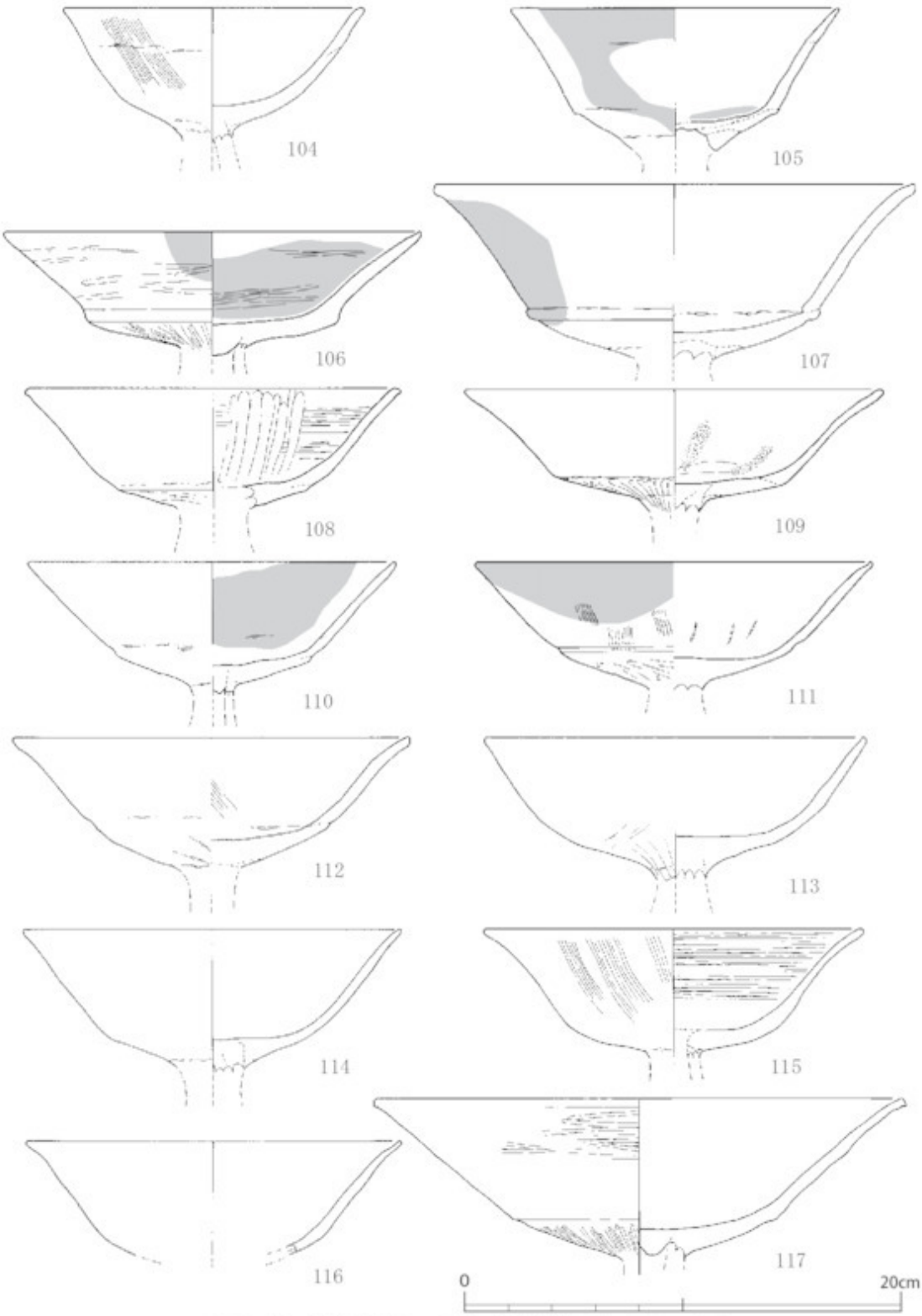


図90　第1遺構面　溝2　2区　出土土器（4）（S.＝1/3）

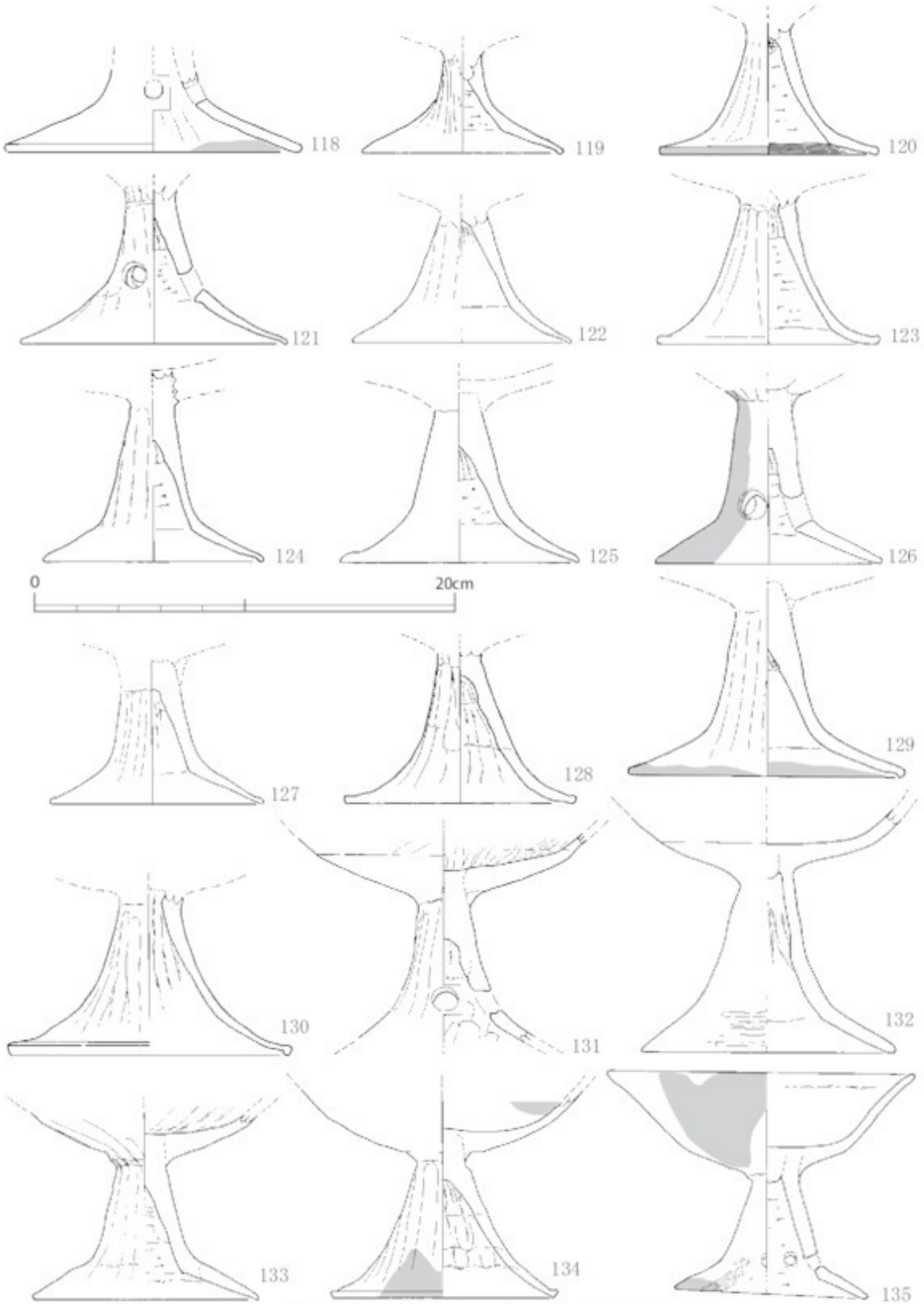


図91　第1遺構面　溝2　2区　出土土器（5）　（S.=1/3）

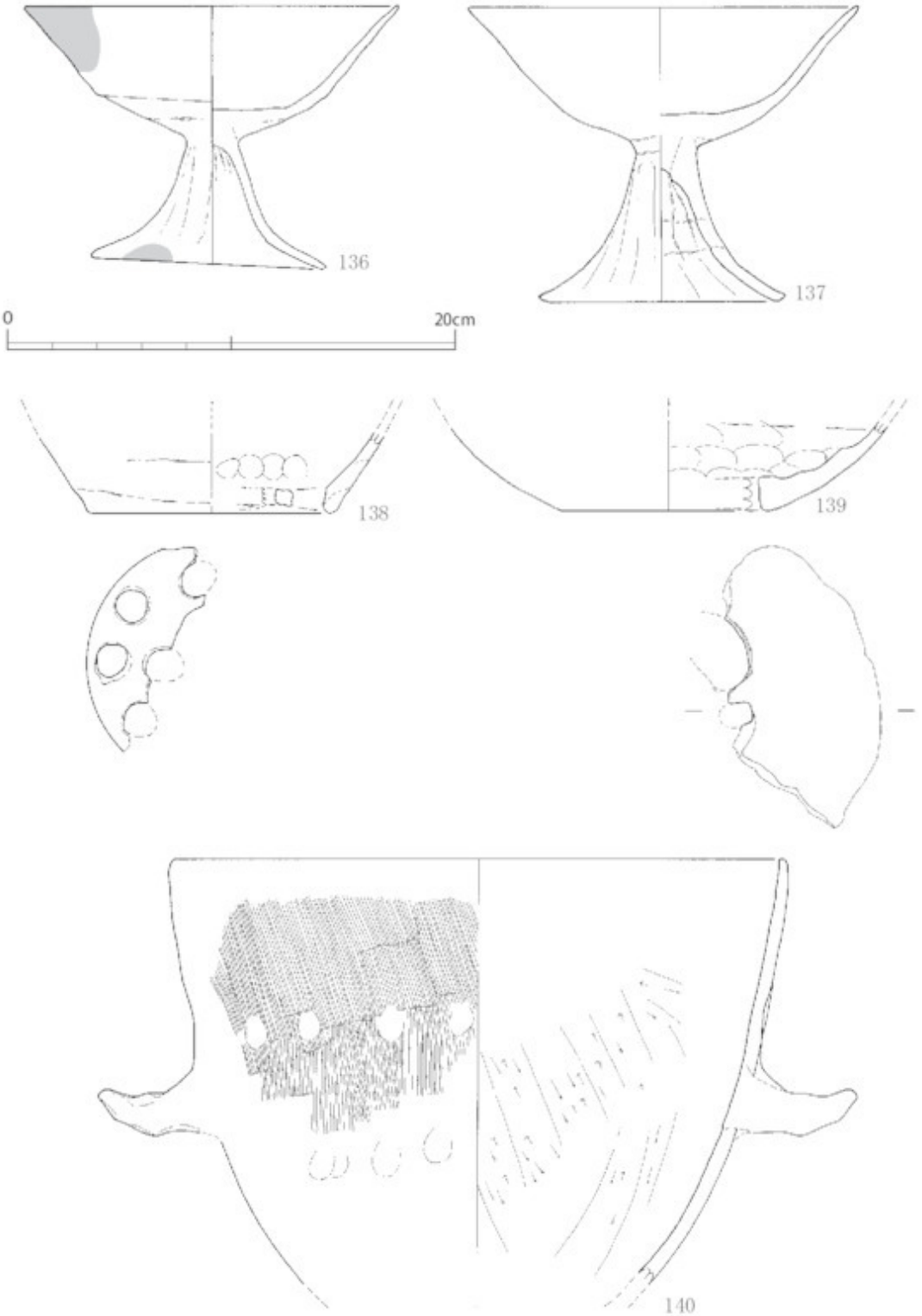


図92　第1遺構面　溝2　2区　出土土器（6）（S.＝1/3）

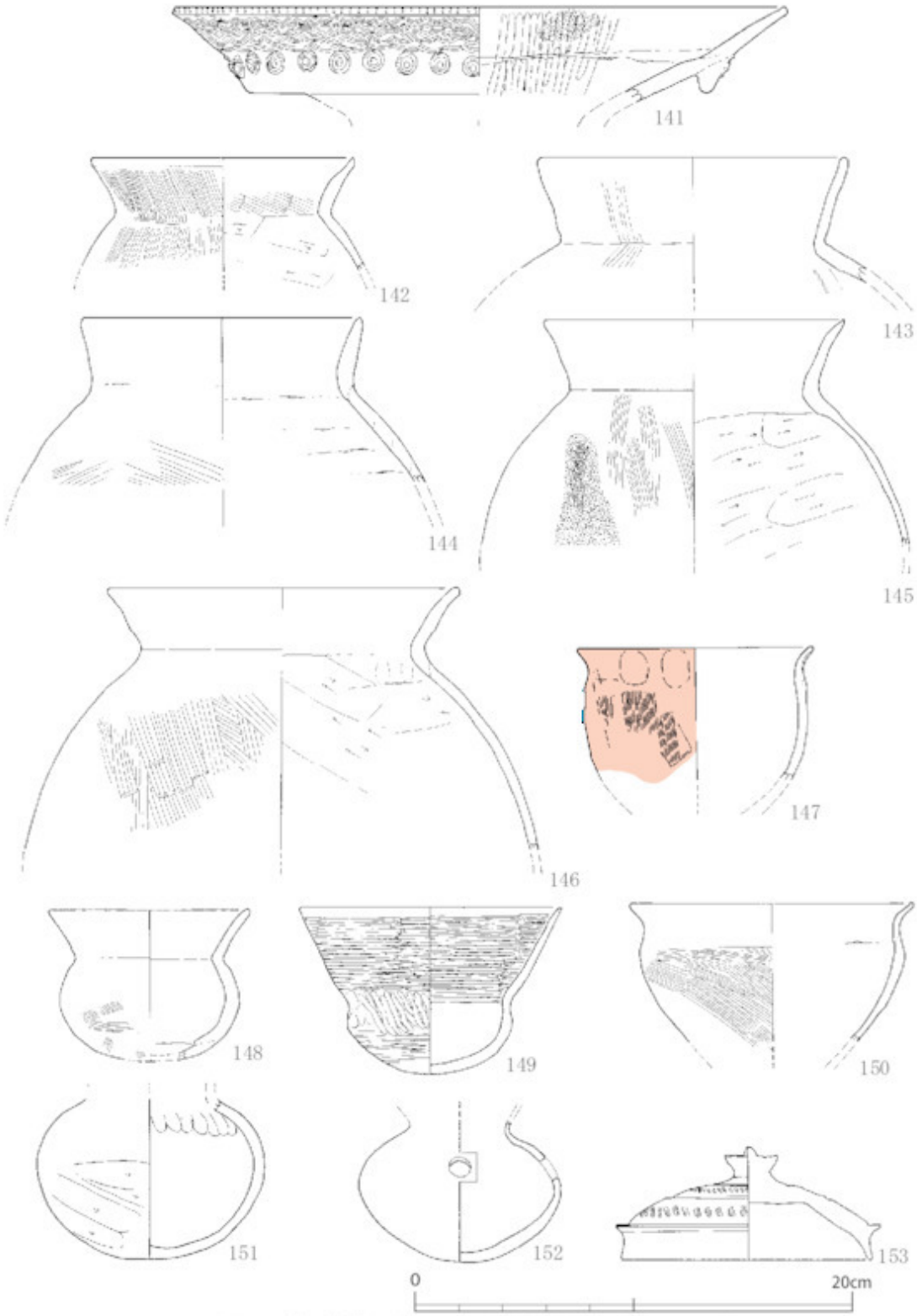


図93　第1遺構面　溝2　3区　出土土器（1）　（S.＝1/3）

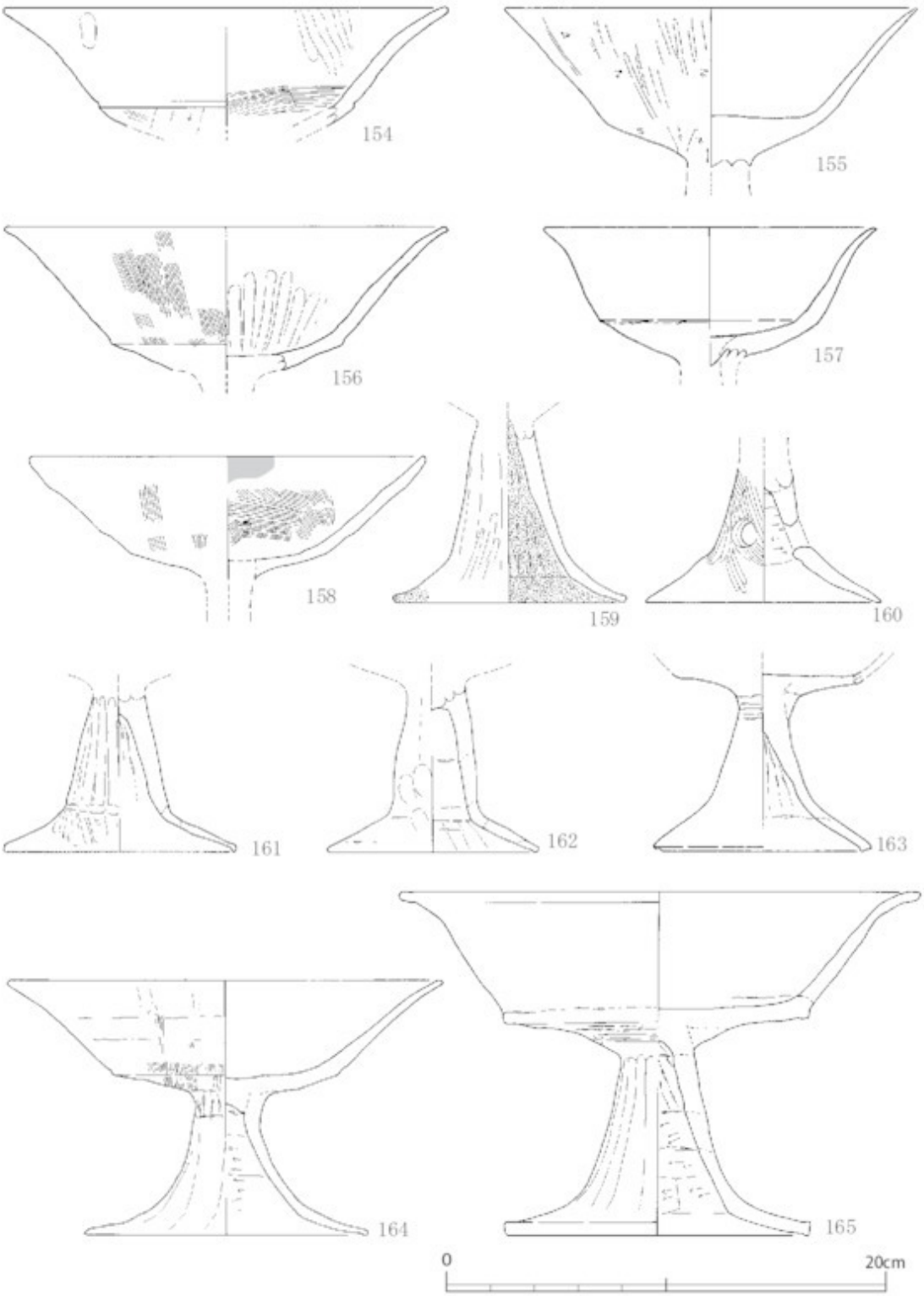


図94　第1遺構面　溝2　3区　出土土器（2）（S.=1/3）

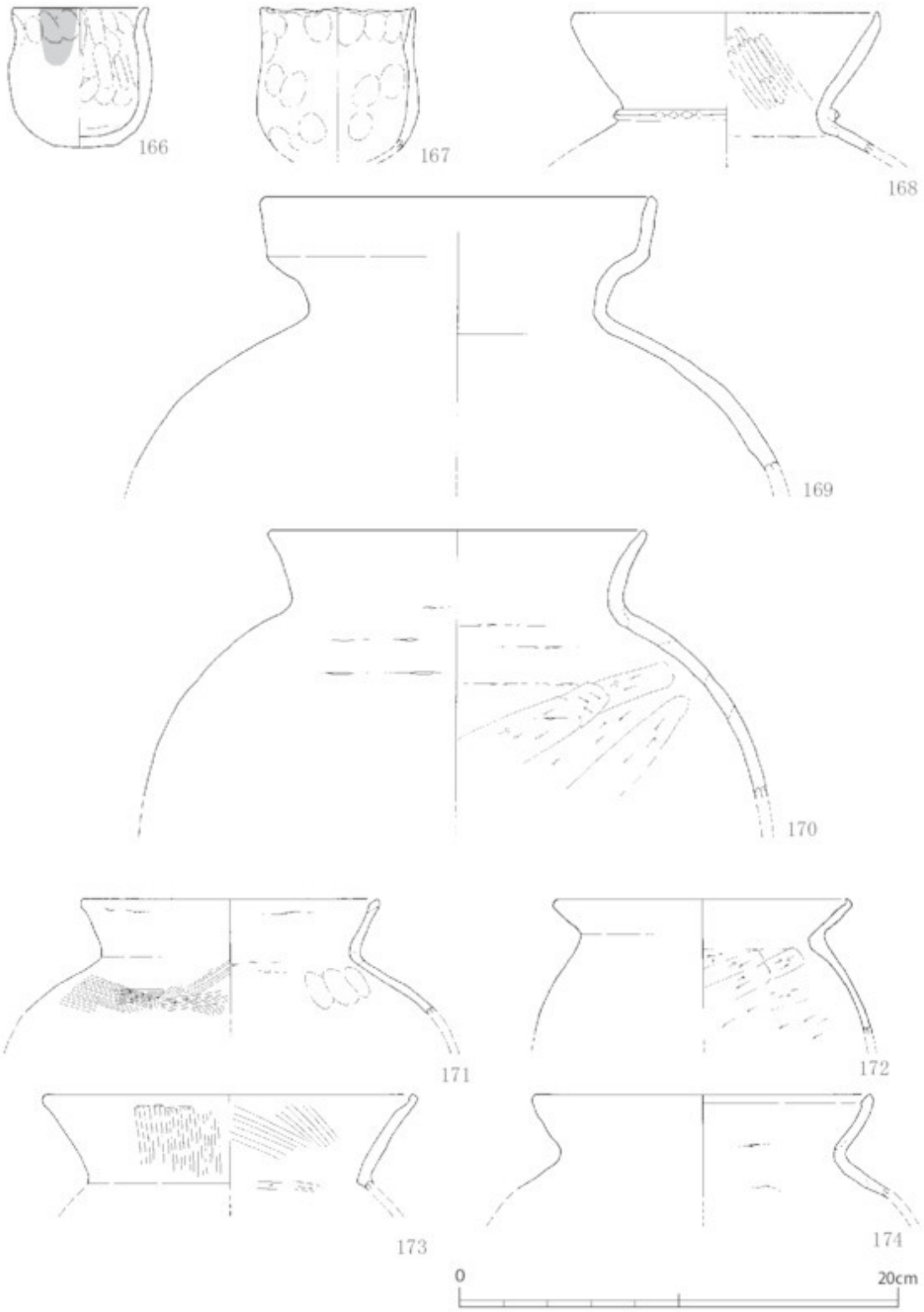


図95　第1遺構面　溝2　4区　出土土器（1）（S.＝1/3）

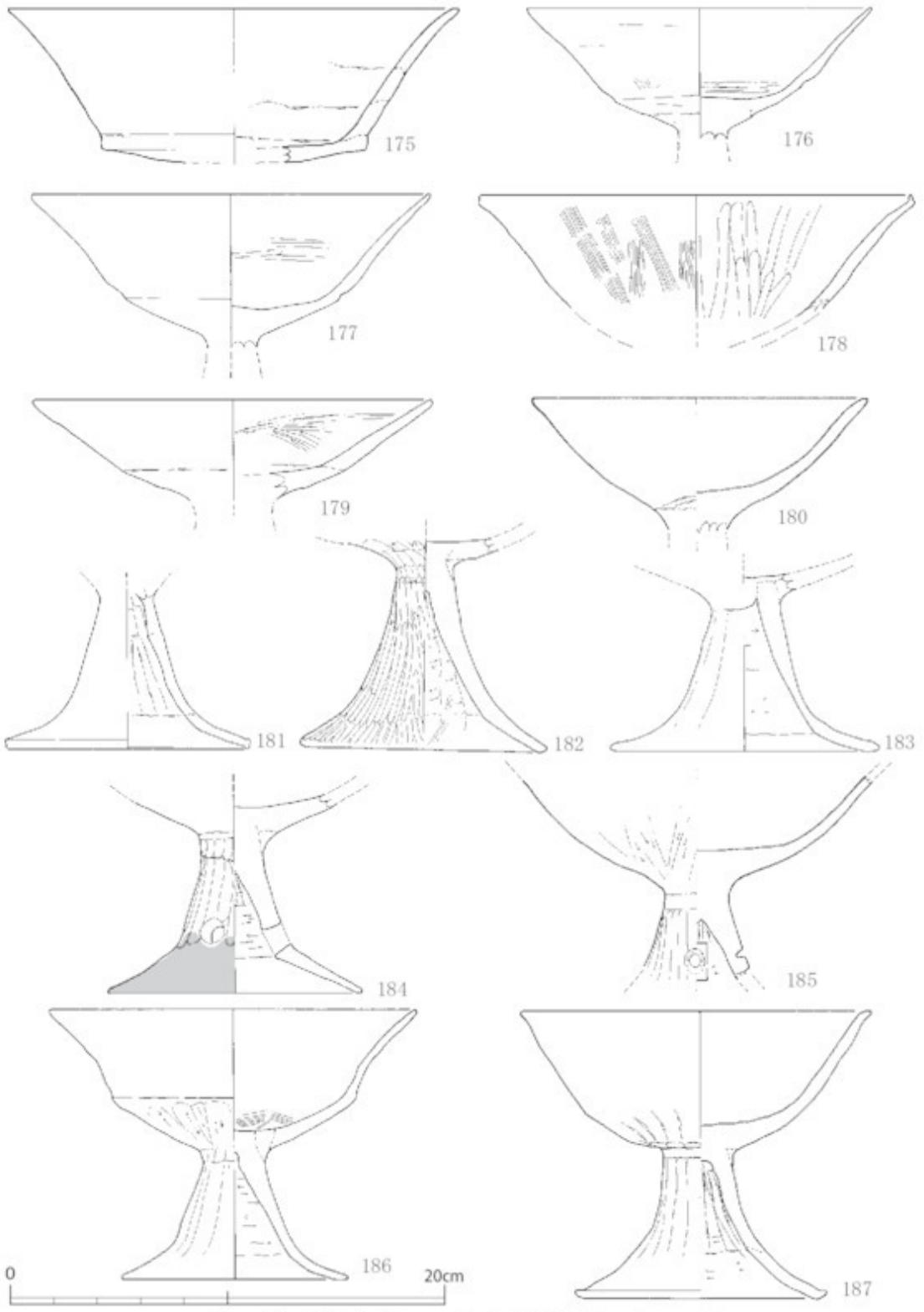


図96　第1遺構面　溝2　4区　出土土器（2）（S.=1/3）

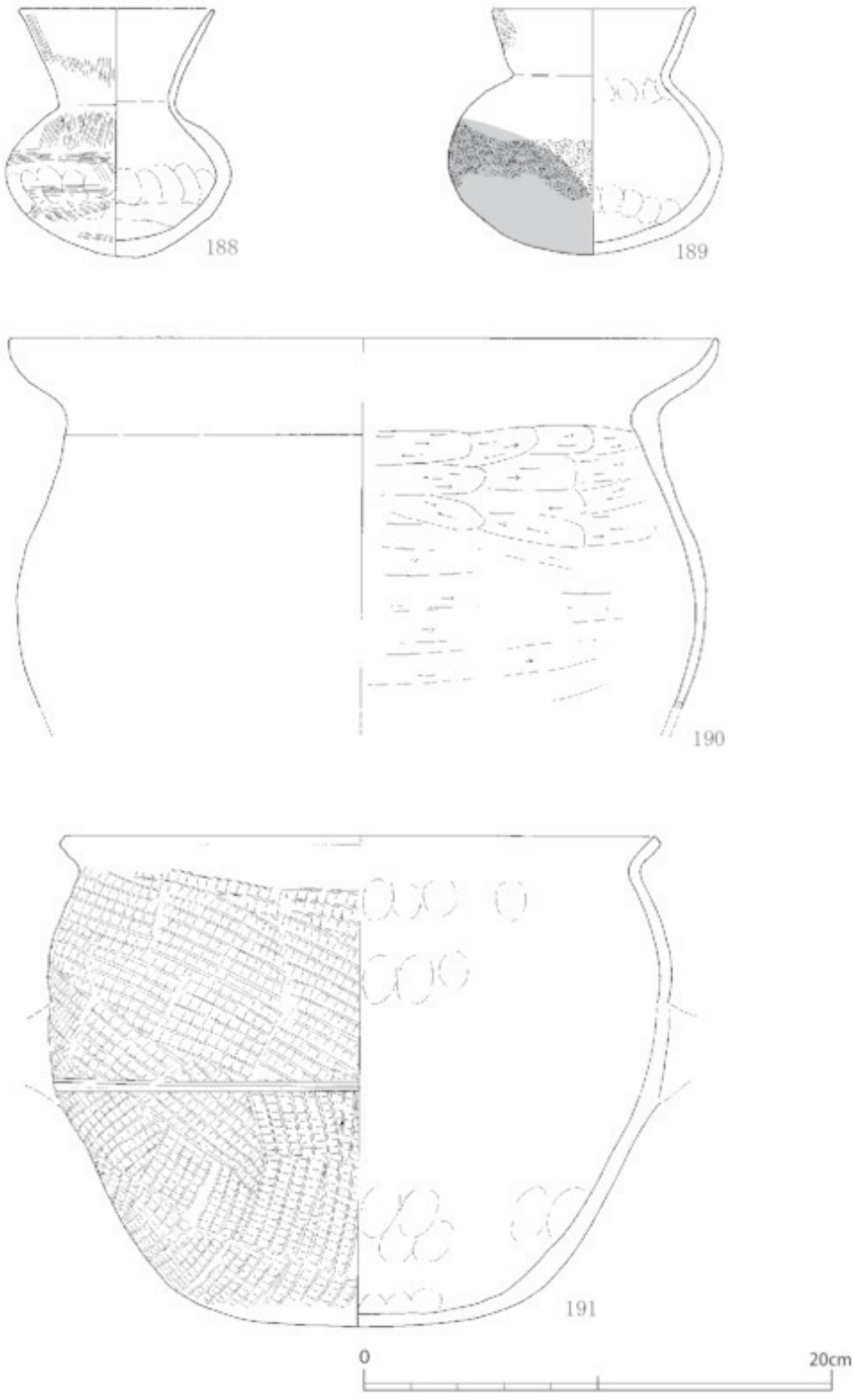


図97　第1遺構面　溝2　4区　出土土器（3）（S.＝1/3）

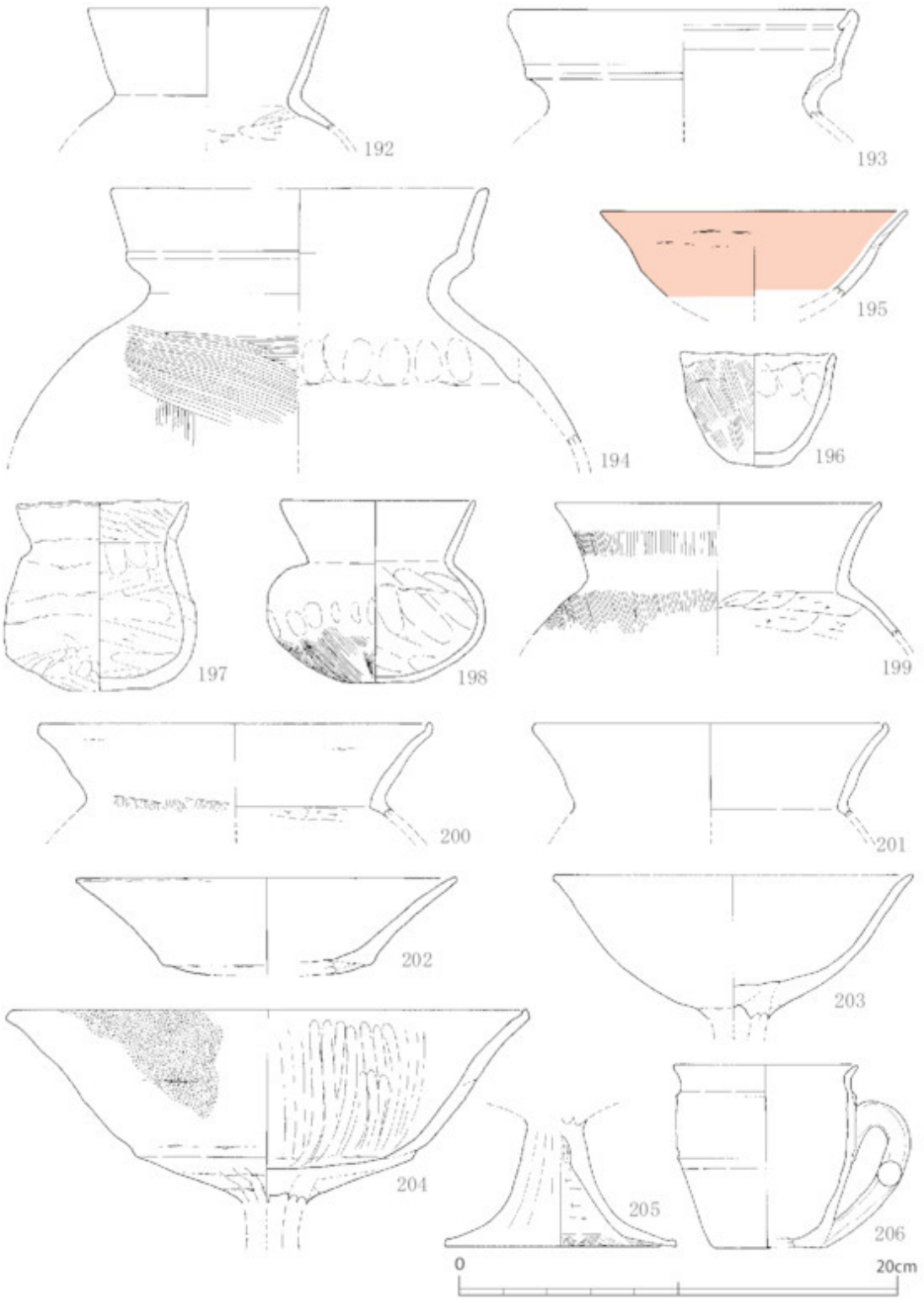


図98　第1遺構面　溝2　5区　出土土器（1）（S.=1/3）

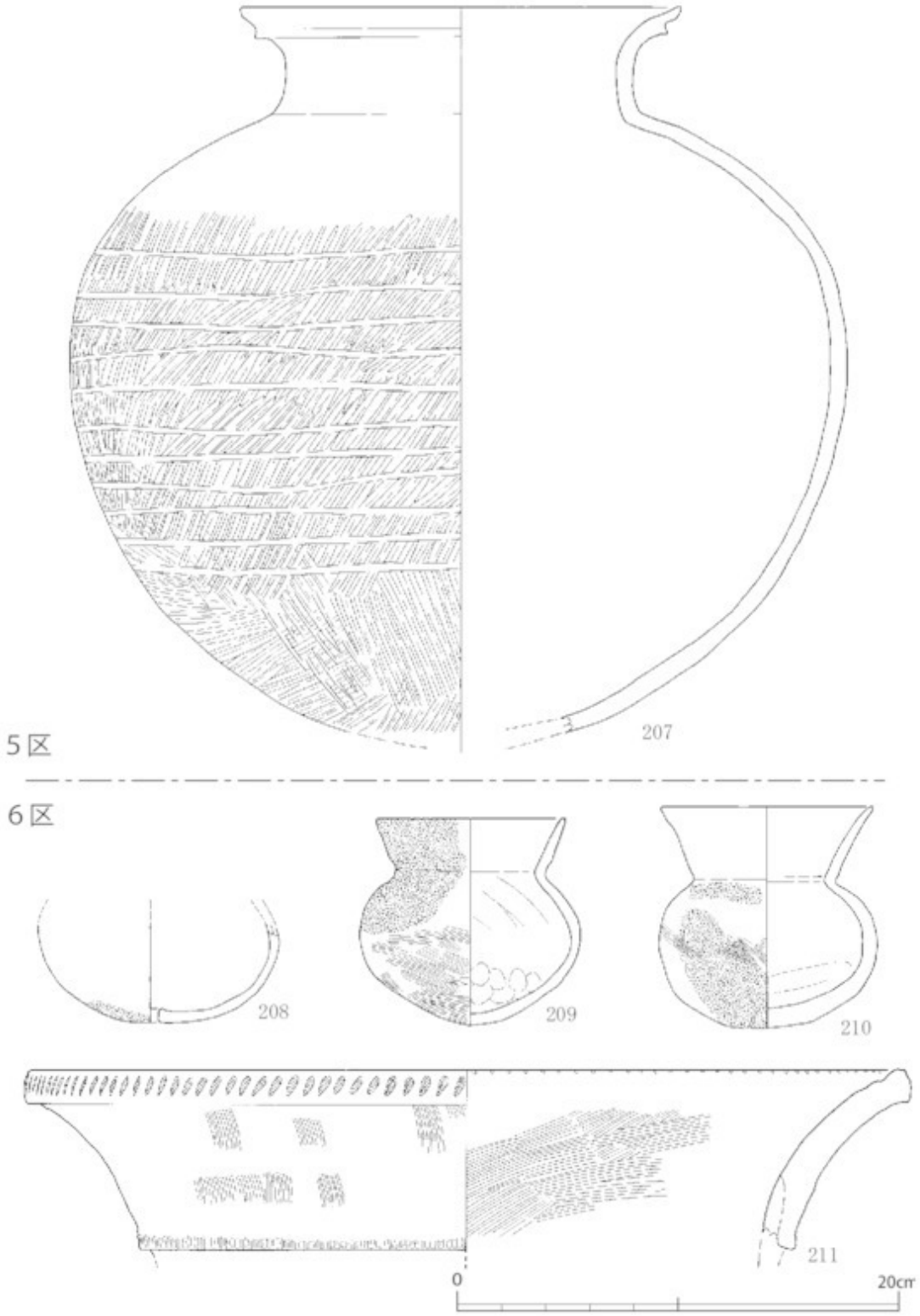


図99　第1遺構面　溝2　5区　出土土器（2）・6区　出土土器（1）（S.＝1/3）

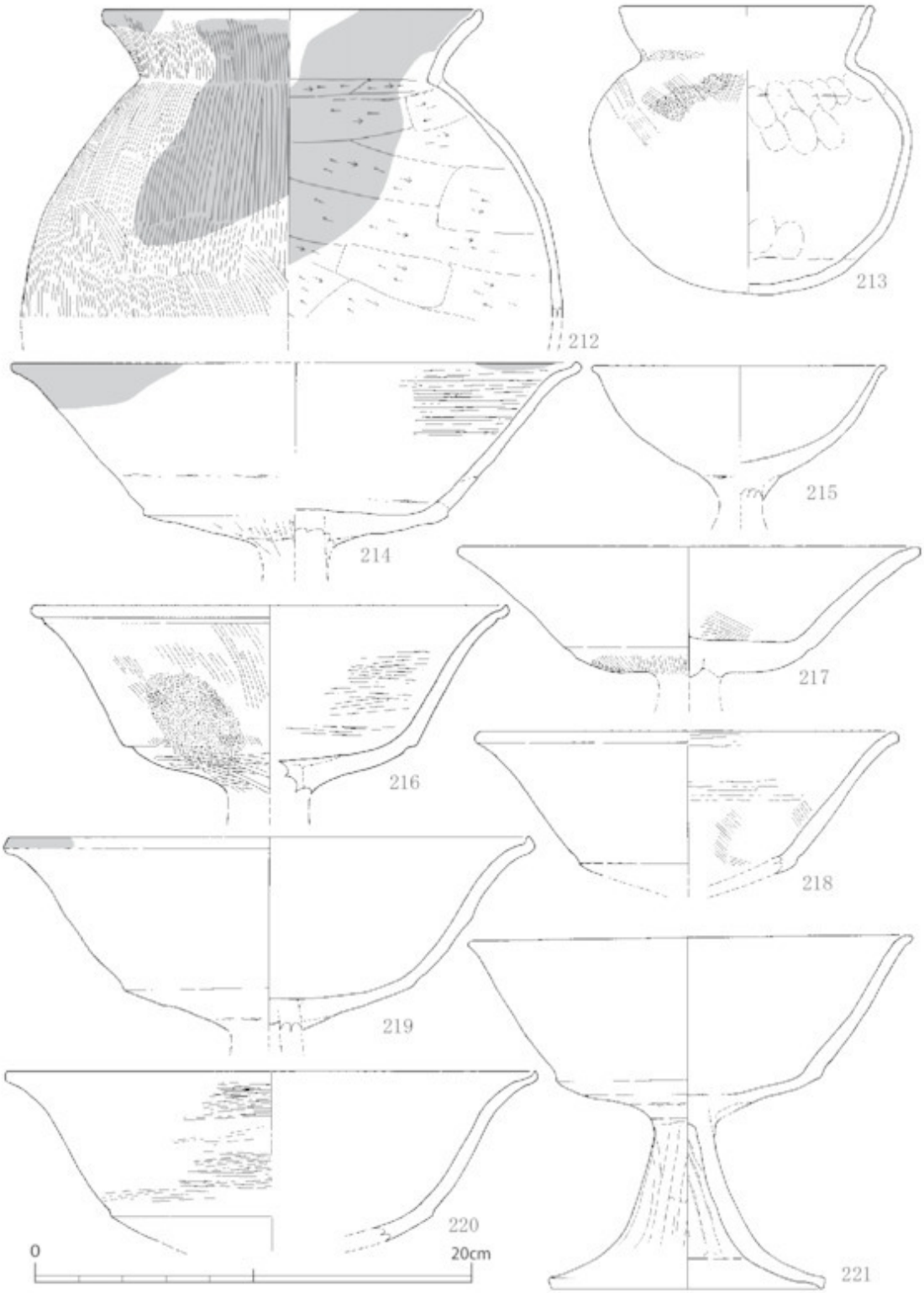


図 100　第 1 遺構面　溝 2　6 区　出土土器（2）（S.＝1/3）

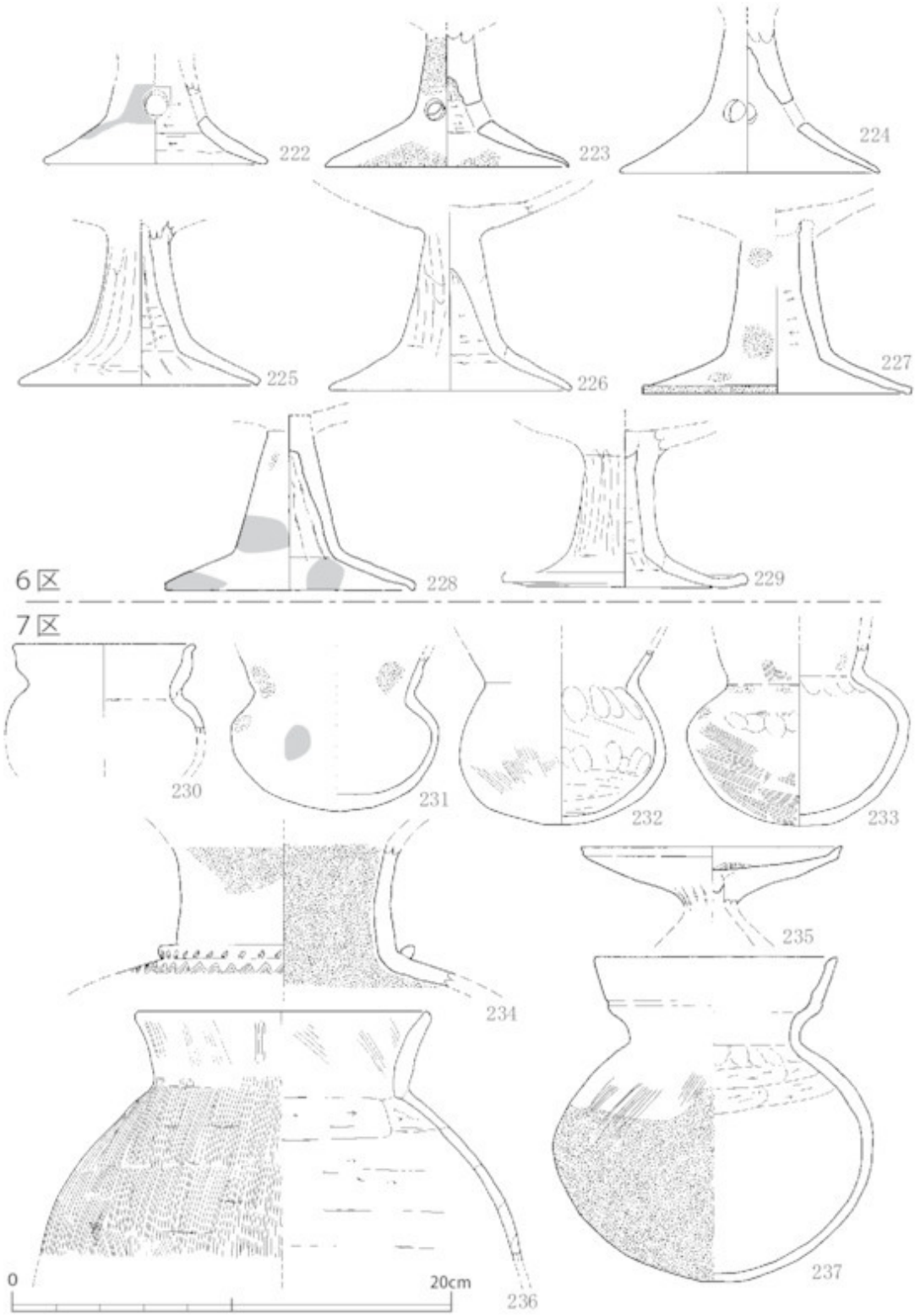


図101　第1遺構面　溝2　6区　出土土器（3）・7区　出土土器（1）　（S.＝1/3）

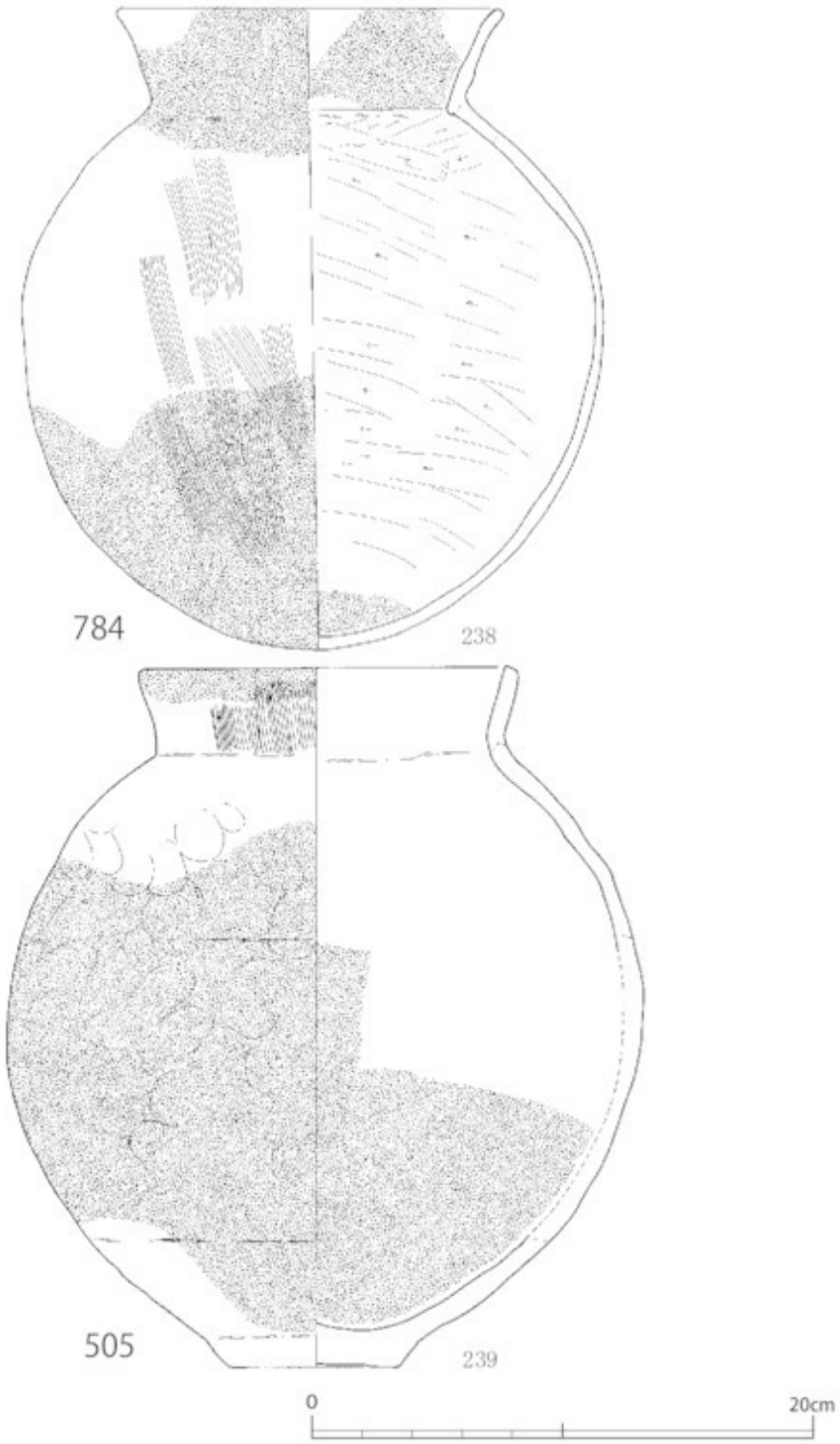


図 102　第 1 遺構面　溝 2　7 区　出土土器（2）（S.＝1/3）

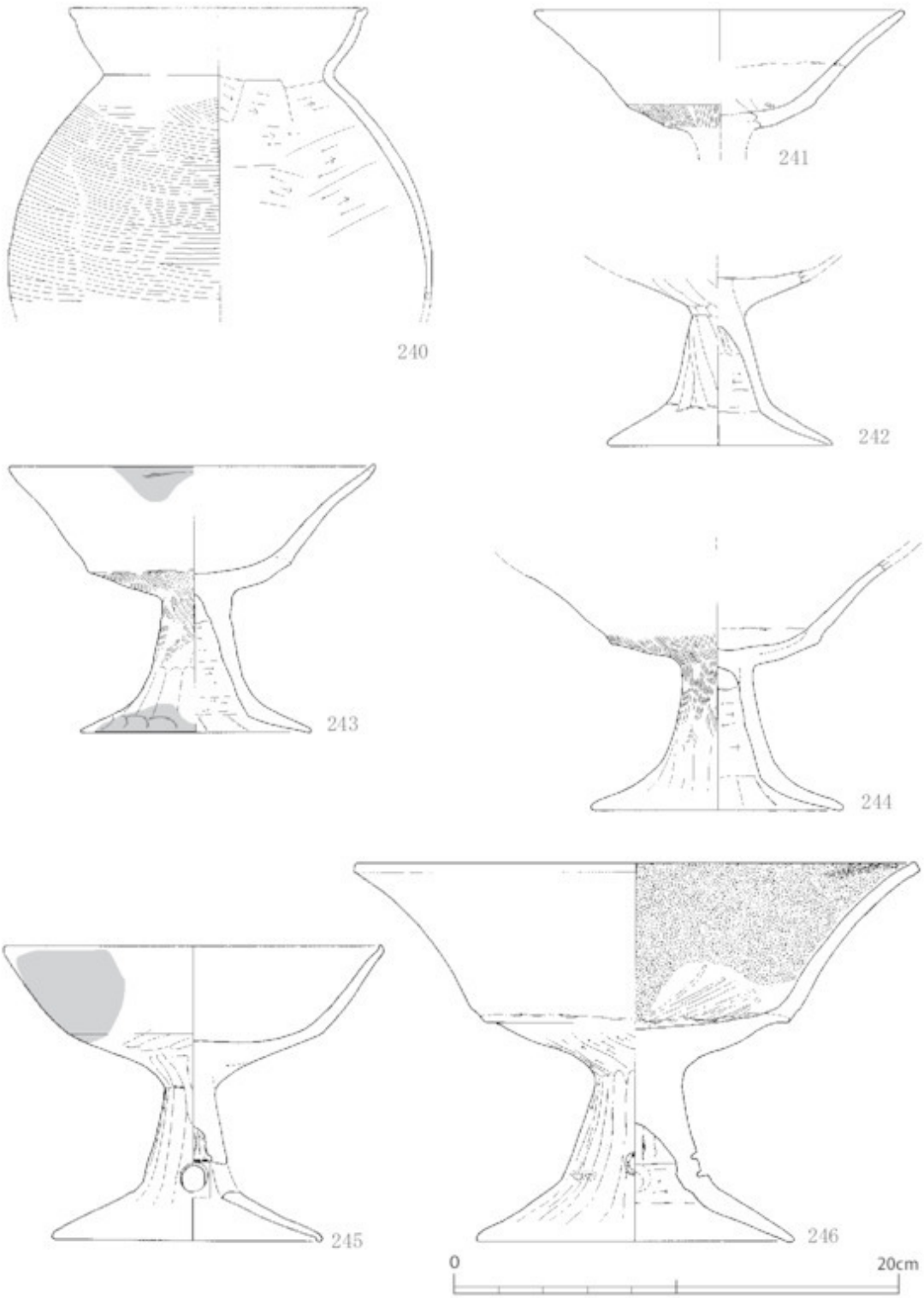


図 103　第 1 遺構面　溝 2　7 区　出土土器（3）（S.=1/3）

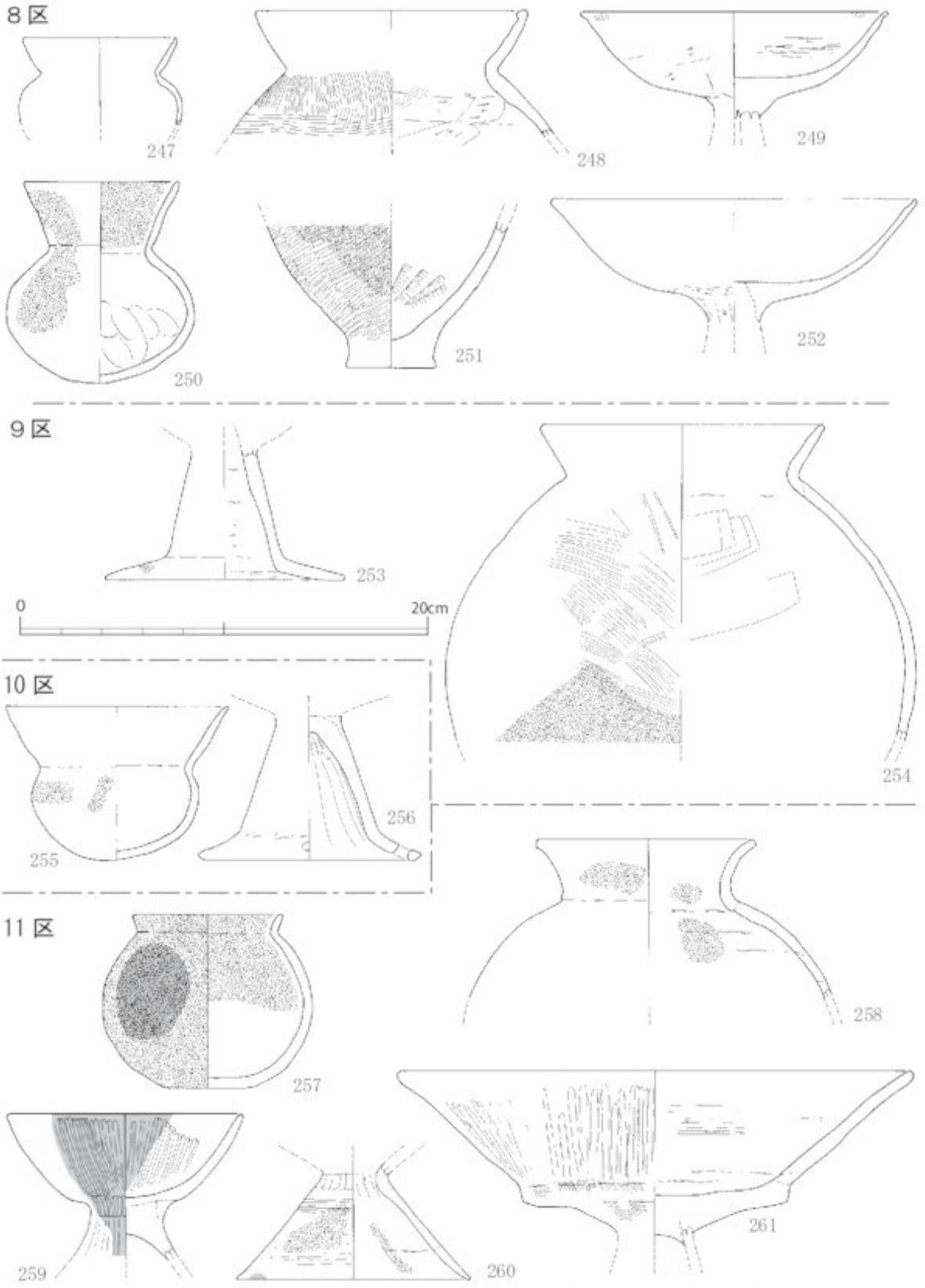


図104　第1遺構面　溝2　8・9・10・11区　出土土器　(S.=1/3)

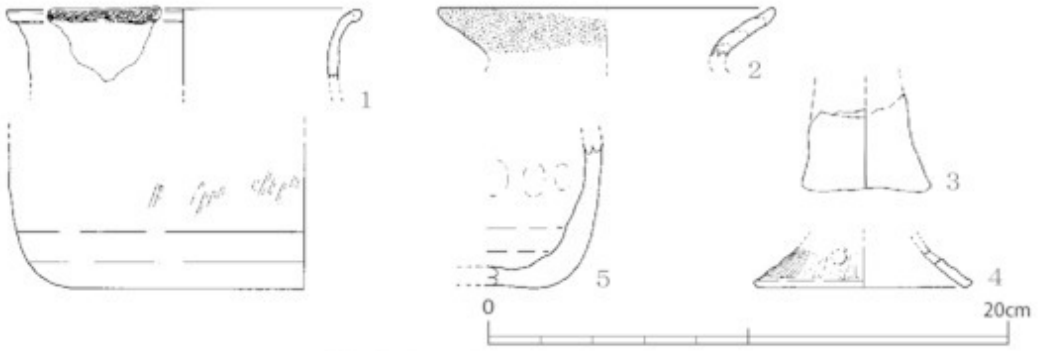


図105　第1遺構面　溝9　出土土器　（S.＝1/3）

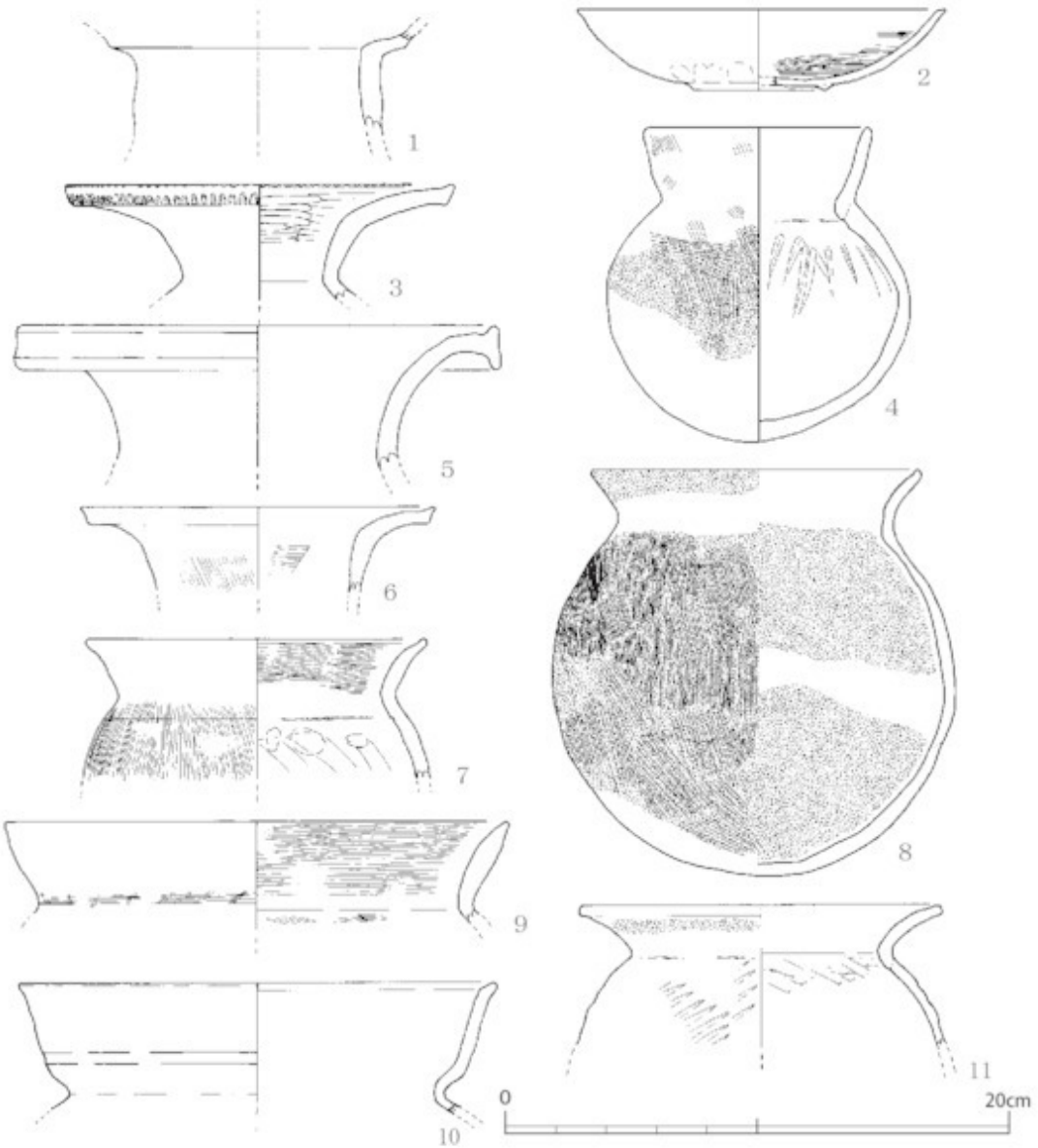


図106　第1遺構面　流路1　出土土器（1）（S.＝1/3）

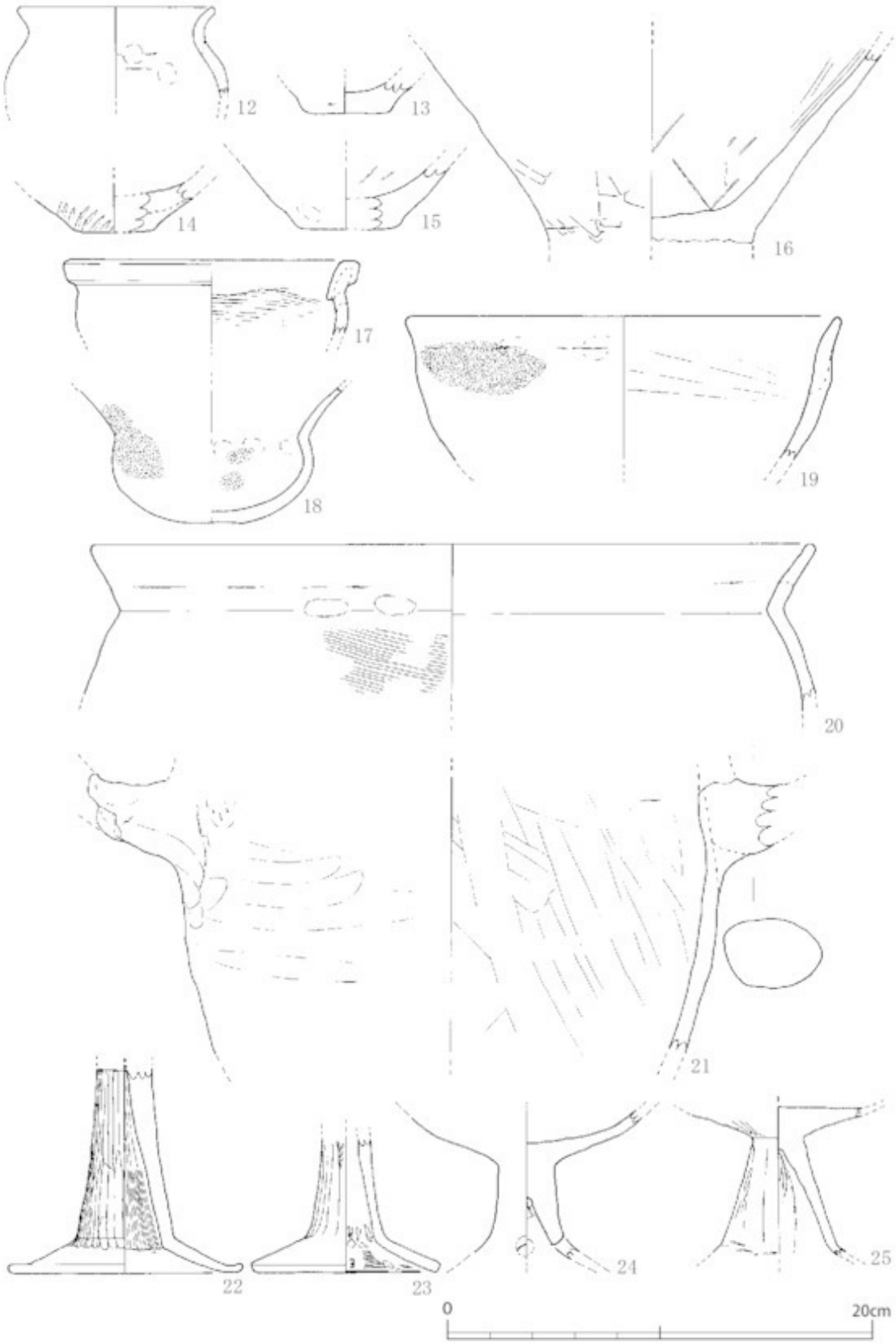


図 107　第 1 遺構面　流路 1　出土土器（2）（S.＝1/3）

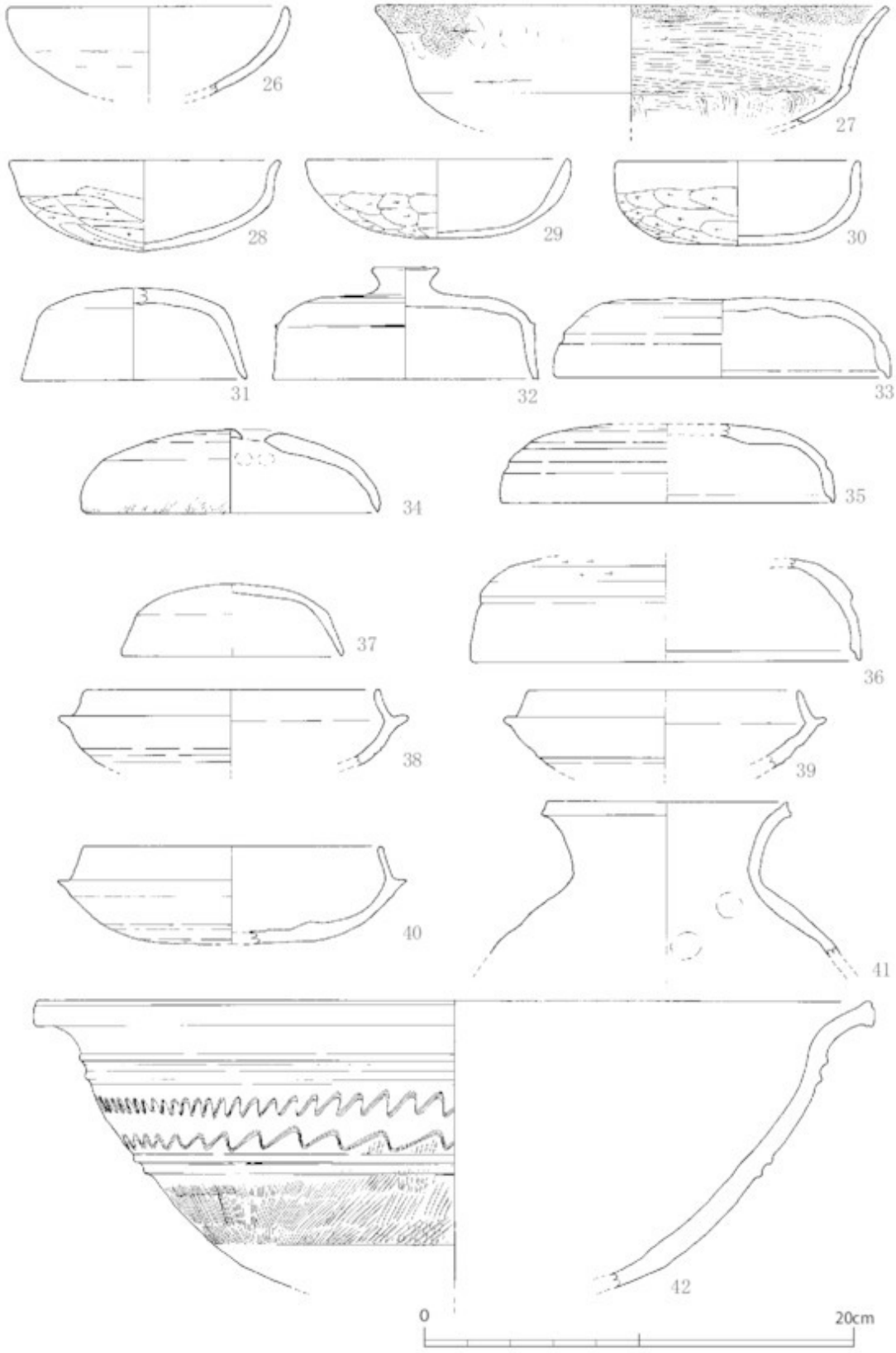


図 108　第 1 遺構面　流路 1　出土土器（3）（S.＝1/3）

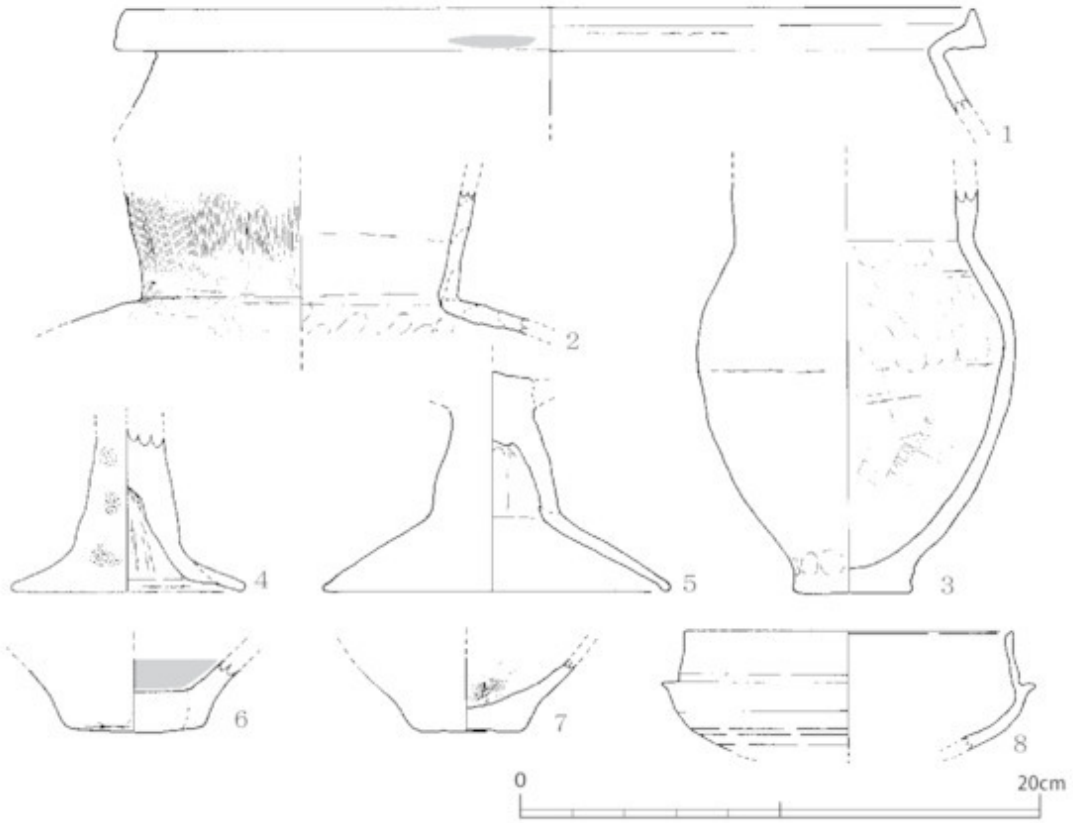


図 109　第１遺構面　流路２　出土土器　（S.＝1/3）

（109 － 3）は弥生土器長胴形の体部を呈する壺である。口縁部はほぼ垂直にのびる。わずかに肩が張り、底部に向かってすぼまっていく。底部はくびれをもつ平底である。体部内面にハケメ、全体はナデで仕上げる。体部の形態から畿内第Ⅴ様式に属する。

（109 － 4・5）は短い脚柱部に大きく開いた裾部をもつ弥生土器高杯の脚部である。（109 － 4）は脚柱部内面をナデで仕上げる。外面には煤が付着する。（109 － 5）の脚柱部内面はナデにより平滑に仕上げられる。いずれも畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（109 － 6 ・ 7）は弥生土器壺もしくは甕の底部である。いずれも平底である。（109 － 7）は内面にクモの巣状のハケメが残る。畿内第Ⅴ様式前半に属する。

（109 － 8）は須恵器の杯身である。口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がり、端部の内側に段をもつ。稜はほぼ水平に突出し、各端部はシャープに仕上げる。古墳時代中期末葉（TK23 型式）に属する。（109 － 1 ・ 6）に黒斑が認められる。

（2）石器

溝２の４区から（110 － 1）が出土した。平面形は板状の三角形を呈する結晶片岩製の砥石である。両平面、側面に擦痕が残る。

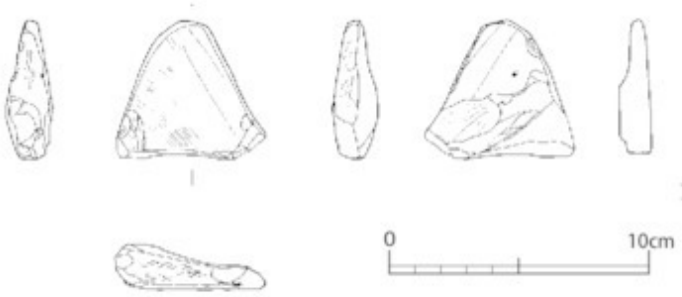


図 110　第 1 遺構面　溝 2　4 区　出土石製品　（S．＝1/3）

（3）木製品

図 111・112 に流路 1 に伴って出土した杭などの木製品について、図化可能であった 10 点を掲げた。その計測値や一部の樹種同定の結果は別表 4 としてまとめているので参照されたい。

堰 1 では、現地調査時の記録によれば 19 本の杭ないし矢板が使用されていたが、そのうち 16 点が取り上げられて整理棟に持ち帰られていた。その内訳は杭が 14 点で矢板は 2 点であった。これらの中から残存状況を鑑みて、杭 2 点と矢板 1 点を実測して図 111 に掲げた。特に矢板を見てみると、幅 7 cm、厚さ 3 cm 程度のもので、ここで出土したほかの丸太杭と比べても幅員が特に大きいものではないことがわかる。

16 点のうち樹種同定ができたものは 4 点で、杭（111 － 1・別表 4 － 6）はクスノキ科クスノキ属、杭（111 － 2・別表 4 － 5）はヒノキ科アスナロ属、矢板（111 － 3）はヒノキ科アスナロ属であった。このほか、別の杭 1 点（別表 4 － 13）はツバキ属である。この（別表 4 － 13）については、放射性炭素による年代測定を行った（別表 1 － 1）。その結果、最も高い確率の数値をとれば、暦年校正年代は、cal AD 421 － 538 となっている。

図 111 の右半には、堰 2 に使用された杭等のうち 4 点の実測図を掲げた。堰 2 では合計 40 点の杭や矢板が取り上げられていたが、その内訳は杭 36 点に対して矢板 4 点であった。図 111 右半に実測図を掲げた 4 点は任意に抽出したものである。それらについて樹種同定を行ったところ、ケヤキ（111 － 4）、クリ（111 － 5）、アカガシ亜属（111 － 7）、カヤ（111 － 6）となっており、少なくともこの中では一定の樹種に偏る傾向は見られなかった。

図 112 に杭列 2 で検出した 11 点の杭等のうち 3 点の実測図を掲げた。11 点のうち、杭は 9 点、矢板は 2 点であった。また、これら 11 点について樹種同定を行ったところ、別表 4 に示したように、カヤ、イヌマキ、ヒノキ属、ツガ属、モクレン属、エゴノキ属、シイ属などがあって、ここでも特定の樹種に偏る傾向がない。（112 － 8）はキヌマキ、（112 － 9）はヒノキ属、（112 － 10）はカヤである。

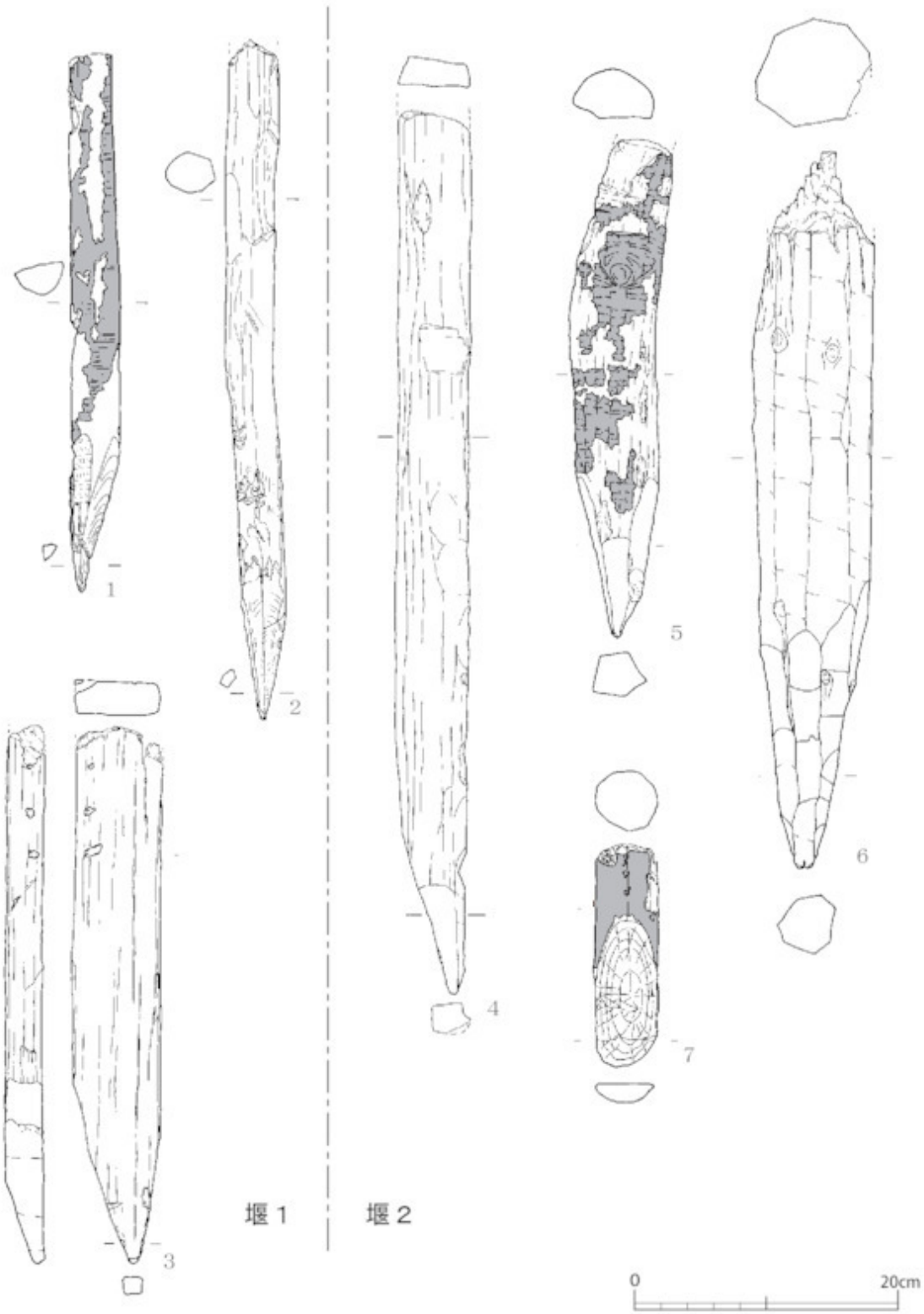


図111　第１遺構面　流路１（堰１・堰２）　出土木製品　（S.＝1/5）

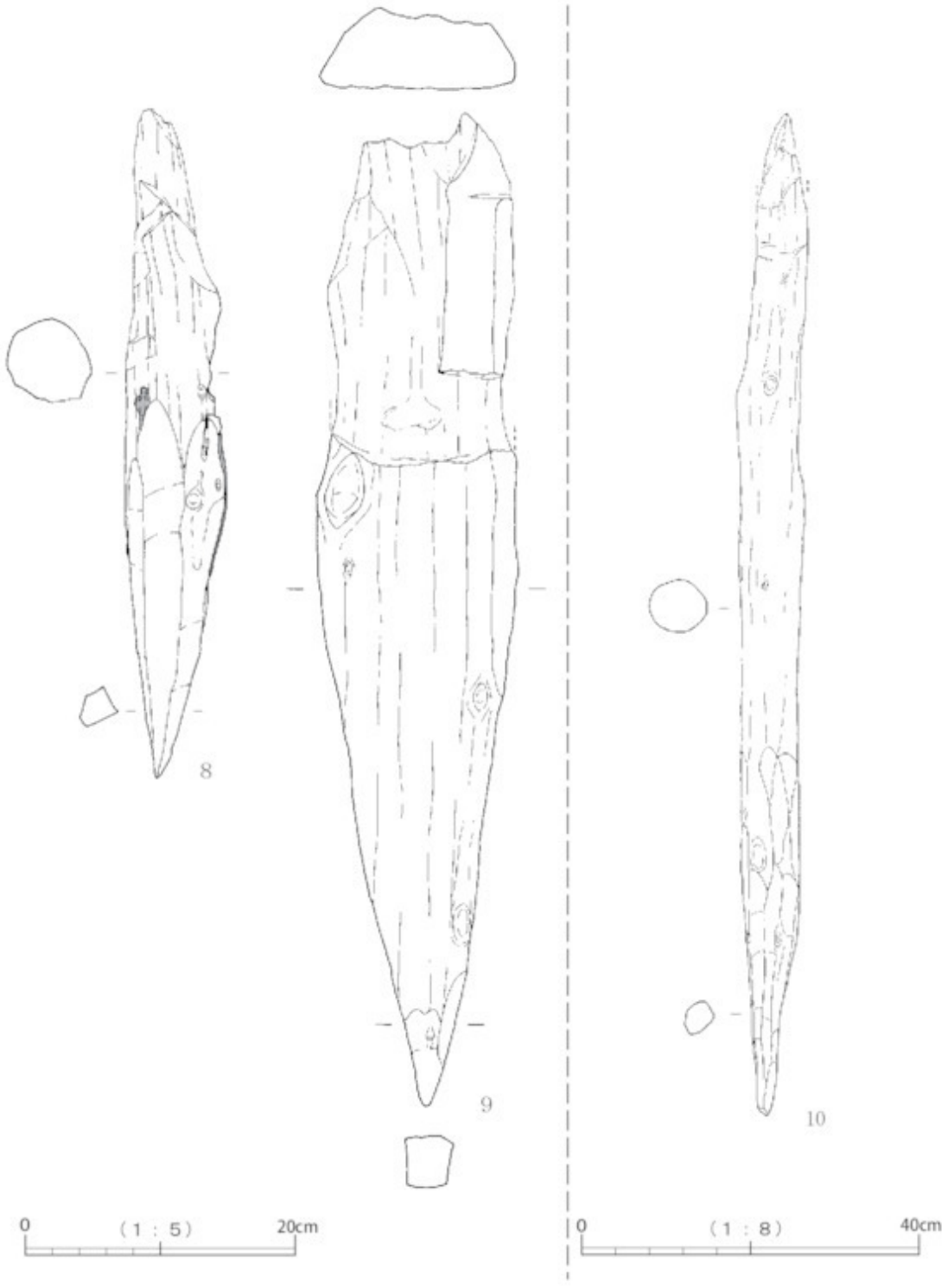


図 112　第１遺構面　流路１（杭列２）　出土木製品　（８・９；S.＝1/5, 10；S.＝1/8）

第２節　第２遺構面

第２遺構面は、基本層序の６層上面に形成された遺構面である。だだし、この６層は、図 113・114 に示したように、北１区の北東半に分布する土層で、これよりも南には存在しない。６層が存在しない地点では、より上層の土層を除去すると７層（第３遺構面の基盤層）が検出されている。既述のように、当該調査地は南西から北東に向けて緩やかに傾斜する地形に立地している。つまり、調査区の北東部は相対的に標高が低い地形になっているが、その低い部分に６層が堆積している状況である。元は、これよりも南にも６層が堆積していてそこに遺構が形成されていた可能性があるが、そうであったとしても、このような地形のために、より標高が高い地点が削平を受けてそれら共々残存していない状況であると考えられる。

第２遺構面の形成時期を決定する根拠は乏しいが、遺構面直上から出土した小形の長頸壺（117－１）の年代観から、弥生時代後期後半であると考えられる。

１．遺構

（１）水田（図 113 ～ 115）（北１区）

水田遺構は、北１区の北端部付近で検出したものである。上述のように、元より６層自体が北１区の一部以外は削平を受けているようで、加えて、この付近は、図 113 に示したように、東半は前述した第１遺構面に形成された溝１～４によって、西半は後述する流路３によって攪乱を受けている。このため、６層上面の広がりが限定的であり、かつ遺構が残存したとしてもそれ自体の残り具合が良好ではなかった。具体的には、北１区の北端付近で、流路３が分岐して中島状に取り残された部分と、その部分から流路３を挟んで南東岸側で水田区画となる畦畔の一部を検出した。

畦畔は、図 115 および図 116 に見えるように、幅約 30cm 程で、高さは５cm ほどが検出できたものである。図 116 の畦畔断面図を見ると、ｃ－ｃ'・ｄ－ｄ'・ｆ－ｆ'断面では、畦畔は明褐色粘土を盛土したものとなっている。しかし、ｈ－ｈ'断面などでは、水田の基盤層から削り出して畦畔を造っているように見える。畦畔の造成の方法については、当該遺構面では遺構の残存状態が悪いなど、条件に恵まれないため判然としない。

また、ｇ－ｇ'断面に見れるように、西が高く段をもって東が低くなっていることがわかる。この地点の平面図（図 115）を見ると、ここから東側が水田となっているが、西側は耕作地となっていない。ｇ－ｇ'断面は、このような土地利用のあり方を反映したものであるが、その際に、削り出しによって水田が造成されているらしい。

水田区画の大きさやその数についても、上記の残存状態から判然としない。コーナー部分が見えるところがあるので、それによれば、少なくとも７区画の水田が検出されている。平面形状は、残存部からも整然とした矩形ではないことが窺える。形状が歪ではあるが、大きさが一辺２～３ｍ程になる小区画水田である。

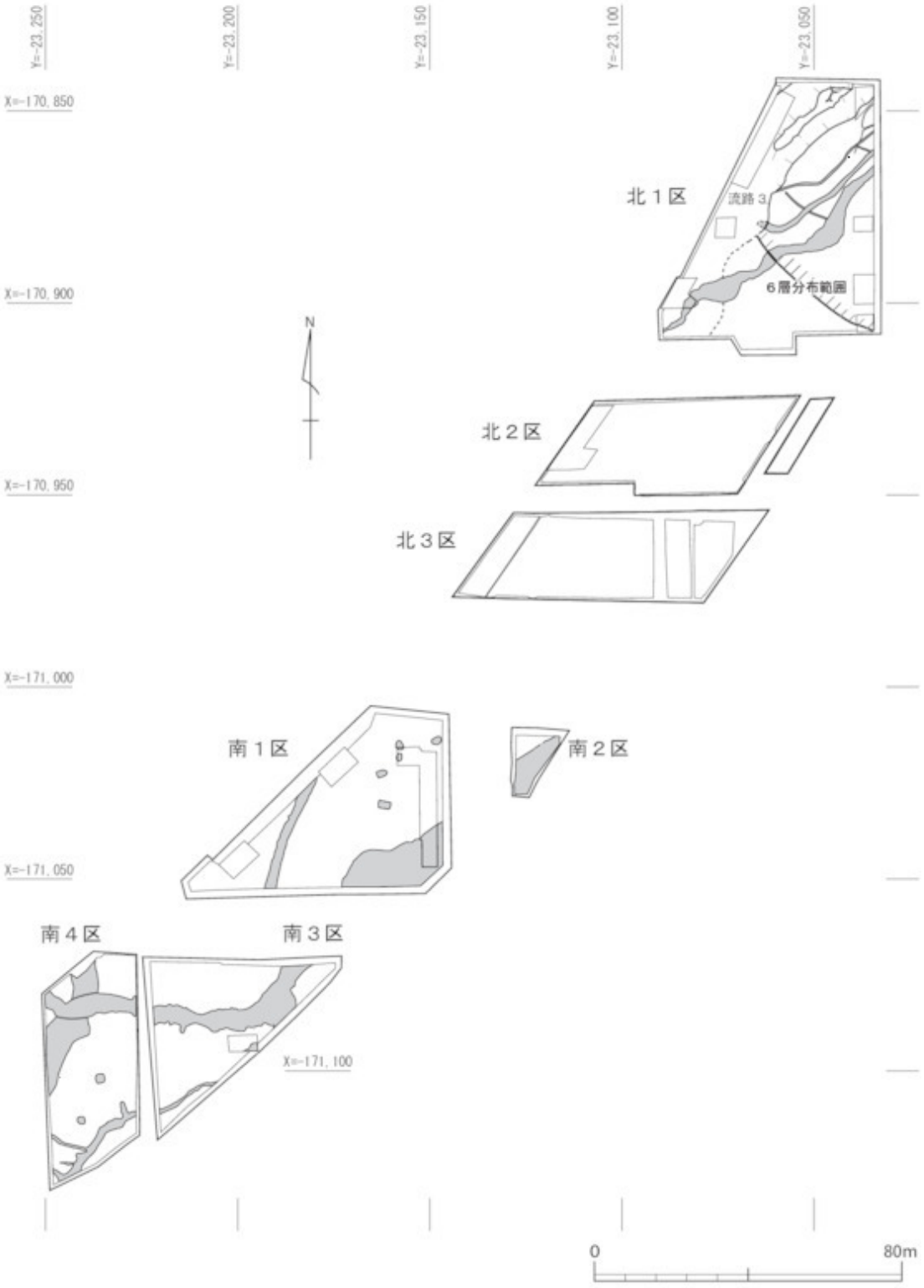


図113　第２遺構面　全体図　（S.＝1/1,700）